

昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪岡城跡 VII

浪岡町教育委員会

昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告善正誤表

頁 行	誤	正
目次	付図 ⇨	付図 (北館遺構配置図1 / 100)
4 11	専門家 ⇨	専門家
6 8	b~g2、b~h5 ⇨	b2~8、b2~7
6 8	a~h ⇨	2~8
6 9	i~k ⇨	9~11
44 1	(森本岩太郎) ⇨	(森本岩太郎)」
48	Fig. 41の下段の3を6に訂正	
50	Fig. 42の上段右212を12に訂正	
73	V表-2、No.4-ST12内出土遺物欄の『小、』は『小柄』に訂正	
74	V表-2、No.52-ST104内出土遺物欄の空欄は、『髻、』に訂正	
75	V表-2、No.63-ST121内出土遺物欄の空欄は、『鐺、』に訂正	
87 3	教育委員 ⇨	教育委員会
140	計測値 ⇨	計測値 (CM)

昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪岡城跡 VII

浪岡町教育委員会

発刊にあたって

史跡浪岡城跡の発掘調査は、昭和52年から始まりましたが、本年度で九年目を終了しましたので、昭和58年度において調査した結果の報告書を発刊することになりました。

当初から浪岡城跡の主館と考えられていた北館は、昭和58年度の調査でほぼ全容を現わし、今回の報告書は北館発掘調査の総集編とでも言うべき内容で編集することにしました。ここに至るまでの発掘成果は、県内はもとより東日本の中世城館研究において、数々の問題点と新事実を提起することになりました。その意味で、浪岡町・浪岡町教育委員会は、本調査を文化財保護行政と考古学的学術成果の両面をもって進めてきた事に、少なからず自負の念を有しています。

今回、報告書の執筆にあたって、聖マリアンナ医科大学・森本岩太郎氏、金沢大学・佐々木達夫氏、八戸工業大学・高島成侑氏、浪岡高等学校・三浦貞栄治氏、常盤小学校・葛西善一氏、藤崎園芸高等学校・奈良岡洋一氏、さらに弘前大学・村越潔氏の各位には御多忙にもかかわらず貴重な研究成果を載せていただき、深く感謝いたします。

浪岡城跡は、「浪岡町の顔」として「史跡公園」化を計画しておりますが、文化財保護に関係する各位には、今後とも御指導、御助言をお願いする次第であります。

昭和60年3月30日

浪岡町教育委員会

教育長 蝦名俊吉

例 言

1. 本書は昭和58年度および昭和59年度で一部調査した浪岡城跡北館の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国（50%）・県（8%）の補助を受け、浪岡町（町長・工藤善弘）・浪岡町教育委員会（教育長・蝦名俊吉）が総額1,200万円で実施した。
3. 発掘調査は、昭和58年6月1日から同11月23日、昭和59年5月15日から6月15日が野外調査、昭和58年11月24日から昭和59年3月31日、昭和59年12月1日から昭和60年3月15日までが屋内整理作業として実施した。
4. 本書の編集は工藤清泰がおこない、年度別報告とともに昭和53年度から始まった浪岡城跡北館の総集編的性格も付加するように努めた。執筆者は以下の通りである。

I 調査に至る経緯	工藤 清泰
II 調査の経過	〃
III 検出遺構	〃
IV 出土遺物	〃
V 浪岡城跡北館の概略	〃
VI 浪岡城出土の人骨について	森本岩太郎
VII 浪岡城跡出土の陶磁器	佐々木達夫
VIII 浪岡城跡北館の掘立柱建物跡について	高島 成侑
IX 浪岡城跡北館出土の生活用具について	三浦貞栄治
X 浪岡城跡北館出土の銅関係遺物について	工藤 清泰
XI 浪岡城跡出土の木製具について	葛西 善一
XII 浪岡城跡北館出土の須恵器・土師器について	奈良岡洋一
XIII まとめ	村越 潔・工藤 清泰

5. 本書は、本文13項目、写真図版(PL.)23枚、挿図(Fig.)82枚、表(Ch.)84枚、付図4枚で構成し、主として昭和58年度調査資料を掲載したが、一部は昭和53~57年度・昭和59年度分も載せている。
6. 遺構の略称は以下の通りである。

S B 掘立柱建物跡	S T 竪穴遺構	S E 井戸跡	S K 土壇墓
S F 焼土遺構	S D 溝跡	S A 土塁・土居跡	S X 性格不明遺構
7. 遺物の略称は以下の通りである。

P 陶磁器・土器類	F 鉄・銅製品	C 銭貨	M 木製品	S 石製品
N R 自然遺物	B 骨類			
8. 遺構の土層注記にあたっては、「新版標準土色帖」小山正忠・竹原秀雄編著（1976.9）を参考にした。
9. 本報告書を作製するにあたり、実測・トレース・浄書等は下記の方々の手になる所が多かった。記して感謝申し上げる次第である。

武田嘉彦、佐々木忠義、斎藤とも子、伊藤圭子、坂本里見、成田和佳子、有馬千枝子、工藤馨、能登谷宣康

目 次

発刊にあたって

例言

I 調査に至る経緯	1
II 調査の経過(調査日誌より)	3
III 検出遺構	6
IV 出土遺物	45
V 浪岡城跡北館の概略	71
VI 浪岡城跡出土の人骨について	87
VII 浪岡城跡出土の陶磁器	92
VIII 浪岡城跡北館の掘立柱建物跡について	98
IX 浪岡城跡北館出土の生活用具について	124
X 浪岡城跡北館出土の銅関係遺物について	132
XI 浪岡城跡出土の木製具について	141
XII 浪岡城跡北館出土の須恵器・土師器について	147
XIII まとめ	159
付表	163
写真図版	213
付図	

I 調査に至る経緯

本年度の調査は、浪岡城跡の主郭（館）と推定された北館（平場面積15,450m²）の最終調査であり、昭和53年度から開始した北館平場の残存部を中心に実施した。昭和53年度からの調査区とその面積は挿図（Fig.2）に示したので参照されたい。以下、調査要項を述べる。

昭和58年度史跡浪岡城跡発掘調査要項

1. 調査の目的

浪岡城跡は、北畠氏居館として浪岡町民の精神的柱石となっている中世城館である。浪岡町では、将来「史跡公園」として環境整備する計画であり、昭和53年から発掘調査を継続、環境整備における基礎資料を得るための調査である。

2. 調査期間

事前調査 昭和58年4月1日～同5月31日

発掘作業 昭和58年6月1日～同11月23日

整理作業 昭和58年11月24日～昭和59年3月31日

3. 調査対象区域と面積

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所地内（浪岡城跡北館）

対象面積 2,900 m²

4. 調査員等

調査顧問 村越 潔 弘前大学教育学部教授

〃 佐々木達夫 金沢大学文学部助教授

〃 高島 成侑 八戸工業大学助教授

調査員 宇野 栄二 浪岡町文化財審議委員長

〃 葛西 善一 常盤小学校教諭

〃 佐藤 仁 弘前高等学校教諭

〃 三浦貞栄治 浪岡高等学校教諭

〃 奈良岡洋一 藤崎園芸高等学校実習講師

5. 調査協力員等

調査協力員 仙北和美、矢島敬之、平野陽児、辻佳伸、三浦孝仁、津幡享、増尾知彦、木村浩一、浜中鶴美、宮城恵美、田中裕征、下山信昭、阿部禎子、間山祐司、大川仁志、小笠原一之、島田誠、佐藤英明（以上弘前大学学生）

調査補助員 唐牛芳光、坂本里見、有馬千枝子、斉藤とも子、成田和佳子、常田紀子、伊藤圭子、対馬圭子

調査作業員 工藤初江、木村栄子、工藤ツツ、奈良岡きぬ、村岡せい子、奈良岡昭江、三浦秋子、常田節子、奈良岡英子、田川テツ、鎌田アサ、佐藤ヒサ、石沢ムツ、山内ヤエ、津川百合子、古村光子、長谷川ちよ、小笠原昭子

6. 調査主体者

浪岡町（町長 工藤善弘） 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村 101 の 1

7. 調査担当者（事務局）

浪岡町教育委員会

教育長 村上良民（現在、蝦名俊吉）

社会教育課長 中畑康一（現在、鎌田静治）

社会教育係長 木村鐵雄

主 事 工藤清泰（主担）

〃 成田和子

〃 楯引顕芳

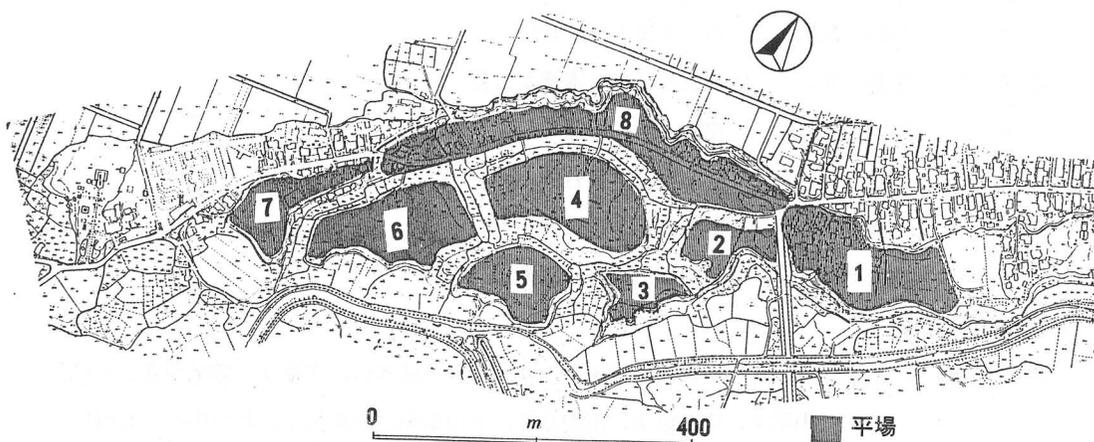
8. 調査方法

平場はグリッド方式による平面調査とし、遺構の検出・遺物の把握に努める。

9. 報告書の刊行

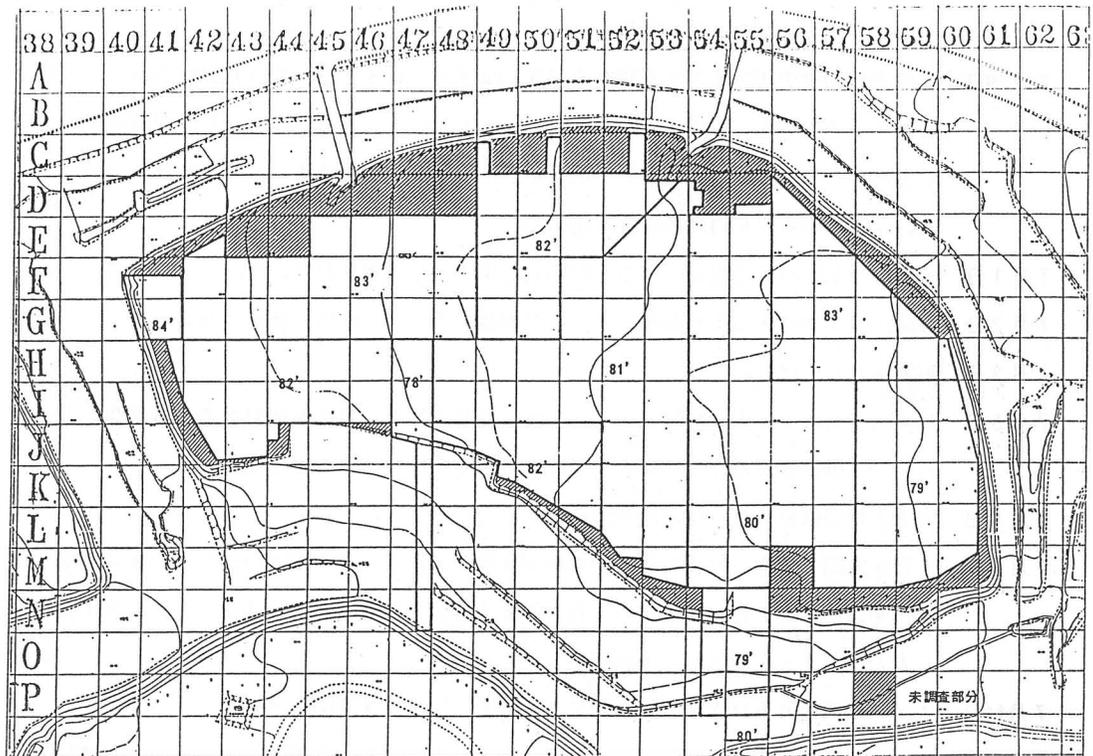
浪岡町教育委員会が作製し、昭和60年3月末日までに刊行する。

Fig.1 浪岡城跡全体図



史跡指定地面積	215,800 m ²	1. 新 館	15,480 m ²	5. 内 館	7,890 m ²
		2. 東 館	5,400 m ²	6. 西 館	13,830 m ²
公有地面積	188,300 m ²	3. 猿楽館	3,750 m ²	7. 検校館	8,550 m ²
		4. 北 館	15,450 m ²	8. 舞名の館	22,250 m ²

Fig. 2 北館グリッド配置図と調査年



Ⅱ 調査の経過（調査日誌より）

昭和58年

- 5月25日 調査員等の打ち合せ会を開催。
- 6月1日 発掘作業を開始。A区の試掘グリッドから掘り下げを始める。B区のグリッドを設定する。
- 6月3日 A区試掘グリッドにて昭和54・55年度の調査区と合致するようグリッド設定のズレを調整し、遺構確認面までの掘り下げを進める。
- 6月4日 津軽新報取材
- 6月6日 G58区Ⅰ層より分銅状銅製品が出土。
- 6月7日 岩手古文書研究会々長・佐島直三郎氏見学。
- 6月8日 F58区を北側に1m幅で掘の落ち込み部分まで試掘した結果、土塁状の遺構を確認する。
- 6月9日 E57区Ⅲ層上面から直径3cm前後の銅皿が出土。内部に金の糸らしいものが付着していた。
- 6月11日 F57区を中心に大型の竪穴遺構が検出される。（ST201）
- 6月16日 G57区から掘立柱建物跡の柱穴と推定される並びを検出。その範囲内から青磁・瀬戸の皿および銅製香炉か盤の脚が出土する。
- 6月17日 G・H56、H57、G58区を遺構確認面まで掘り下げる。
- 6月20日 G58区Ⅱ層下から鋳型と坩堝が多数出土する。後でST210の覆土と確認する。

- 6月27日** A区遺構確認面までの掘り下げをほぼ終了し、遺構の掘り下げを開始する。S T 200・201・202・203・207、S F 28等。
- 6月29日** 弘前大学の歴史研究室と地学研究室学生約50名見学。S T 200では播鉢状の灰の分布がみられる。その中から馬骨と思われる骨が出土している。S T 201は大形の竪穴遺構となるであろう。S T 202は覆土東側に粘土が貼られた痕跡をしめす。S X 152は井戸跡になるという予想からS E 71に名称を変更する。
- 7月1日** S E 71を125 cmまで掘り下げると川原石が集中して廃棄されていた。
- 7月2日** G56区S T 207床面より麻紐で連なった銅銭が出土。159枚と推定される。
- 7月3日** 銅銭を取り上げる。
- 7月5日** D56区S K 01より人骨が出土する。午後、警察に連絡し対応を検討する。城館期の土塚墓らしいと推定されるところから、専門家に鑑定を依頼することにした。
- 7月6日** 出土人骨の供養をし、報道機関に連絡、取材を受ける。
- 7月8日** 人骨を実測するも、乾燥が激しいため現状保存が困難と考え露出面にパラフィンを塗り固定化をはかる。人骨の鑑定を森本岩太郎先生に依頼することとし連絡をとる。S T 203から太刀金具、S T 205から土鈴が出土した。
- 7月11日** A区の遺構掘り下げ作業と併行してB区の表土除去作業を開始する。
- 7月15日** 森本岩太郎先生来訪。人骨の鑑定と取り上げをおこなう。人骨は中世のもので屈葬状態に埋葬された若い女性のものであるという結果を得た。
- 7月18日** A区では遺構の精査が佳境に入り、B区では遺構確認面までの掘り下げを終了し竪穴遺構12基、井戸跡3基の検出がみられた。
- 7月20日** 弘前大学学生が調査に参加。
- 7月23日** G56区S E 71の集石部分を除去すると湧水が激しくなり、曲物等の遺物が出土し始める。S E 73の掘り下げも順調に進み木杵検出の期待が高まる。
- 7月27日～29日** 児童の発掘調査教室を実施する。対象となる児童は町内各小学校の5・6年生であり、3日間でのべ112人の参加を得られた。特別参加として平内町歴史民俗資料館で募集した平内町の児童も27日だけ参加し発掘作業に汗を流した。
- 8月1日** G58区S T 210から坩堝、鋳型等の出土が多く、覆土下層に多量の炭化物が分布していた。製銅に関連する遺構であろうか？
- 8月8日** 猛暑が続く中での調査となる。A区ではS T 210の焼土・炭の分布が明らかになり、S E 73では木杵の存在が濃厚になった。
- 8月10日** S E 73より4本の隅柱と東・西・北側の横棧が検出される。
- 8月13日～16日** お盆休みのため作業中止。
- 8月17日** S E 73の木杵を写真撮影し、実測作業に入る。

- 8月20日 G・H56・57区から検出した柱穴の配列からS B30が明確になる。規模は当初5×7間ほどと考えられたが、東側に下屋の部分が伸びそうである。
- 8月24日 A区は掘り下げ終了の遺構から実測作業に入る。明の星高校学生130人見学。
- 9月1日 B区の調査に主力を移動する。
- 9月2日 東北大学助教授・須藤隆氏来訪。
- 9月7日 G44区Ⅲ層上面から古銭13枚出土。黒石市教育委員会で発掘現場を見学。
- 9月8日～10日 工藤が名古屋で開催された「新安沖出土文物」の国際シンポジウム参加。
- 9月14日 B区検出の竪穴遺構の掘り下げ順調に進む。G43区Ⅲ層から藁縄に連なった古銭が52枚出土する。
- 9月19日 金木町文化財審議委員が発掘現場見学。
- 9月22日 S T 225 は井戸跡であることが判明、壁面の崩壊が激しいため早急な掘り下げが必要である。
- 9月27日 S T 225 井戸跡から多量の木材を検出。深さ約300cmであった。
- 9月28日 S E77から木杵が検出されたが、隅柱・側板の倒壊が激しいため、実測は不可能と判断し、写真撮影ののち取り上げ作業をおこなう。
- 10月6日 E47区S X 181 から底に「吉」らしい文字を朱筆で書いた青磁皿が出土する。
- 10月13日 G45区S X 182 の西側ピットから、紐に連なったと思われる古銭が出土し、その枚数は900枚前後と推定された。同15日までに実測を済ませ取り上げる。
- 10月18日 B区西端のF42区（昭和57年一部調査）やS T 234（昭和57年度一部調査）を再度確認しながら調査を進める。
- 10月22日 現場説明会開催。
- 10月27日 A区の平面実測もほぼ終了し、B区についてもほとんどの遺構が掘り上がる。
- 10月31日 B区の実測作業を進める。
- 11月8日 掘り残しのS T 240 床面より完形の石臼が出土する。
- 11月9日 F・G40・41区からSH10を検出。館と館を結ぶ連絡路のような遺構のため明年度本格的に調査することとし、トレンチのみの調査で終了。
- 11月23日 B区の実測作業を終了し、整理作業に入る。

※発掘調査において作製した図面類および出土遺物は、浪岡町教育委員会で保管している。

Ⅲ 検出遺構

昭和58年度の調査で検出した遺構数は、掘立柱建物跡7棟、竪穴遺構40基、井戸跡10基、性格不明遺構40基、土坑墓1基、銭貨埋設遺構1基、溝跡6基、焼土遺構7基、冢形遺構1基、土居状遺構1基である。なお、発掘調査区が2～3ケ年に渡った部分もあるため、S T 192、S T 234、S H10などは、昭和58年度分に一括して報告する。

1. 掘立柱建物跡

S B 30 (PL.2、Fig.3、Ch.1)— F・G・H57・58区検出。長軸9間、短軸5間の母屋の東側に2間×1間の張り出しを有し、北・西・南側に庇が存在する。短軸方向はN-10°Wである。柱穴は、母屋中央部にあたるb～g 2、b～h 5が一辺60cm前後の方形で深さ70cmと大形であり、a～hまでは比較的しっかりした掘り方をしている。しかしi～kは柱穴が径40cmの円形で深さも50cm以下のものが多く、母屋中央部と比較すると貧弱な規模であるため、下屋的な機能も考慮しなければならないであろう。出土遺物には、柱穴覆土から、青磁碗、青磁皿、白磁皿、褐釉陶器(呂宋壺)、瓦器手焙り、播鉢、埴塼、鉄釘6、判読不能銭2などがある。重複する遺構としては、S B 54・56、S E 71・72、S T 204、S D 70・72、S X 164・165・166・167・168・169があるけれども、新旧関係は明確でない。

S B 32 (PL.2、Fig.4、Ch.2)— D・E 46・47区検出。調査時間の関係で南側の一部だけしか調査していない。長軸6間、短軸2間+αの規模で、短軸方向はN-17°Wである。現出している南側には庇があり東側へも伸びそうである。柱穴は一辺60cm以上の方形、深さ70～80cm前後でしっかりした掘り方をしている。重複する遺構にはS B 58とS X 189があるけれども新旧関係は不明である。出土遺物としてはa 4柱穴覆土から永楽通宝を下限とする銭貨8枚があり他の覆土から瓦器手焙り、染付皿、不明鉄製品、鉄釘、砥石がそれぞれ1片ずつ出土している。

S B 54 (Fig.5、Ch.4)— G・H56・57区検出。長軸7間、短軸2間の規模で、短軸方向はN-16°～18°Wである。柱穴は方形基調で一辺40cm前後の掘り方をしたものが多い。重複する遺構としてはS B 30・S B 56・S X 169・S D 70があり、S D 70(旧)以外は新旧不明である。柱穴覆土からの出土遺物としては、青磁、播鉢、瓦器、鉄釘、銅滓などがある。

S B 55 (Fig.6、Ch.6)— H57区検出。長軸2間、短軸2間の規模で、短軸方向はN-16°Wであるが、やや変形した柱穴配置を呈する。柱穴の掘り方も不整で規格性はない。柱穴覆土からの出土遺物には石臼片と鉄釘がある。S D 70(旧)と重複している。

S B 56 (Fig.5、Ch.5)— G・H56・57区検出。長軸6間、短軸1間の規模で、短軸方向はN-21°Wである。柱穴は方形基調で一辺35cmぐらいの掘り方が多く、S B 54とやや軸を違えて構築している。重複する遺構としては、S B 30・S B 54・S X 169・S D 70がありS D 70(旧)以外は新旧不明である。柱穴覆土から洪武通宝(背文・銭)が一枚出土している。

Fig. 3 SB30実測図

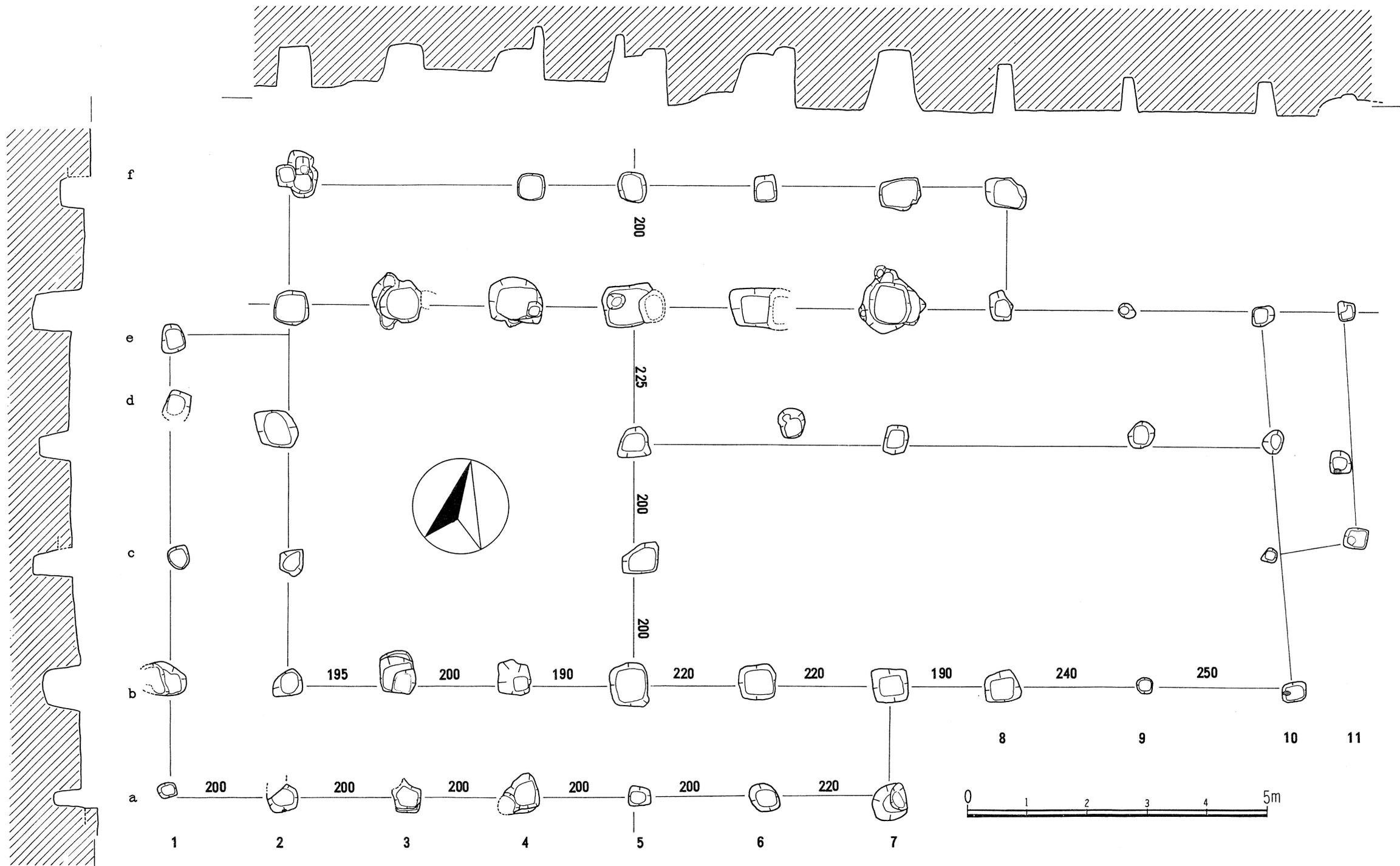
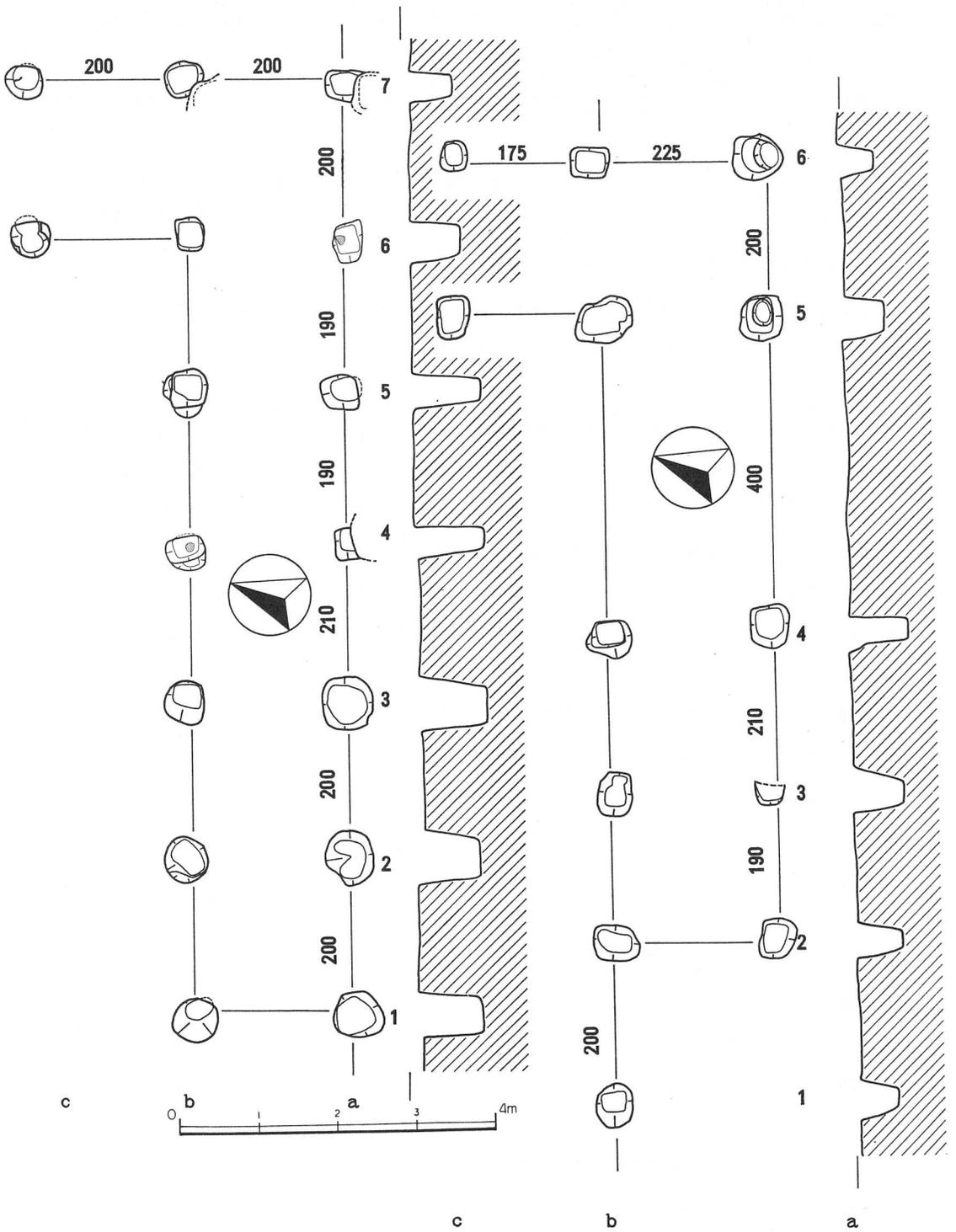


Fig. 4 (1) SB32実測図 (2) SB58実測図



S B 57 (PL.14、Fig.37、Ch.52)—— F・G41区検出。同地区から検出された枅形遺構に伴う二脚門の跡と推定される。Fig.37のP1とP2がこれであり、径約100cm深さ160～180cmの柱穴が9尺(272cm)から10尺(303cm)の幅で配置され、枅形のスロープ中間に位置している。柱穴からの出土遺物はなかったが、枅形遺構自体が城館期全時期の遺物を出土することから、本遺構も城館期全般にわたって使用されたと考えられる。

S B 58 (PL.2、Fig.4、Ch.3)—— E46・47区検出。長軸6間、短軸2間+ α で北側部分が未調査のため全体規模はわからない。短軸方向はN-17°-18°-Wであり、重複するS B 32と主軸方向を同じくして構築されている。柱穴は、1辺40cm前後の方形基調のものが多く柱間も6.6尺を基準に比較的安定した配置を呈する。南側と東側は庇がめぐると考えられる。柱穴からの出土遺物はなかった。

以上が昭和58年度の調査で検出された掘立柱建物跡である。

[追加資料]

浪岡城跡北館の調査は昭和53年度から継続されており、単年度の整理では掘立柱建物跡の精査が充分になされなかった面がある。今回、新たに掘立柱建物跡として追加する資料は、昭和60年1月までにおいて、調査顧問・高島と社会教育課主事・工藤が検討した結果の資料であり、調査現場が2ケ年にまたがる地域や、重複が激しいため図面上で整理したものが大部分である。

S B 11 (Fig.7、Ch.9)—— L・M57区検出。長軸6間、短軸2間、長軸方向はN-17°-Wである。柱穴は、方形基調で一辺40cm以下のものが多い。柱穴の配置、柱間もやや規格性にかける部分はあるが、北側に塀状の張り出しを有するなど、小さな部屋割りをとする建物跡である。

S B 16 (Fig.8、Ch.11)—— J 57区検出。3×3間の母屋で北側に1間×2間の張り出しを有する。張り出しの向く方向がN-30°-Wであり、これが桁行方向にあたると思われる。柱穴は方形基調で一辺60cm～35cmの掘り方を呈し、配置・柱間も規格性にかける。出土遺物としては染付と鉄釘が各1点あった。

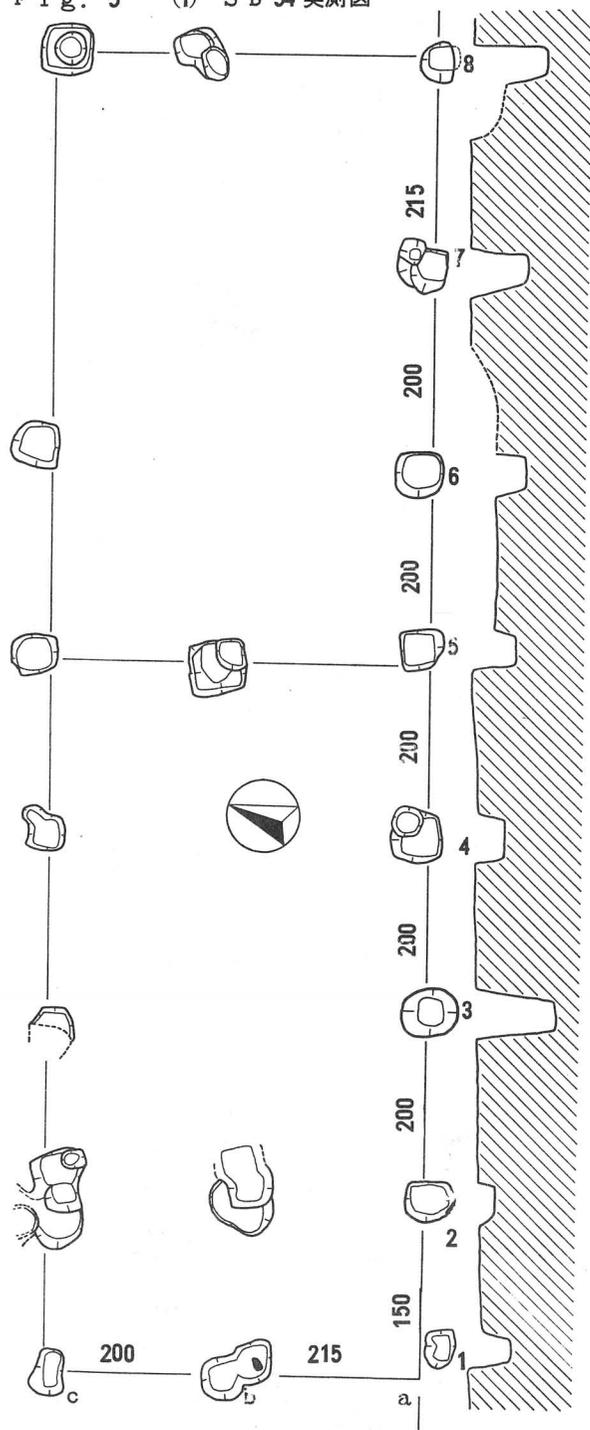
S B 22 (Fig.8、Ch.10)—— I・J 55区検出。長軸4.5間、短軸2間、長軸方向はN-18.5°-Wである。柱穴の掘り方は方形・丸形各種あって一定せず、最大径50cmから最小径25cmと不揃いな点もある。出土遺物には青磁、美濃灰釉、埴塀があり、重複するS B 02よりは古い時期の構築と考えられる。

S B 28 (Fig.8、Ch.12)—— I・J 55区検出。長軸3間、短軸2間、長軸方向はN-22°-Wである。柱穴の掘り方・配置・柱間も一定しない小規模な建物跡である。柱穴から青磁と埴塀が出土している。

S B 29 (Fig.6、Ch.7)—— I・J 53区検出。長軸4間、短軸2間、長軸方向はN-12°-Wである。柱穴の掘り方、配置、柱間は不揃いで、梁行は北側が広く南側が狭い状態となっている。柱穴からの出土遺物としては、白磁、朝鮮皿、鉄釘があった。

S B 31 (Fig.9、Ch.13)—— F・G53・54区検出。長軸7間、短軸5間の規模で、長軸方向はN-12.5°-Wである。柱穴の掘り方、配置は不揃いな部分が多いけれど、桁行方向西側の柱間だけは比較的規則的に並んでいる。東側部分は柱穴配置の不整合が著しく、部屋割りも明確でない。柱穴からは、

Fig. 5 (1) SB 54 実測図



(2) SB 56 実測図

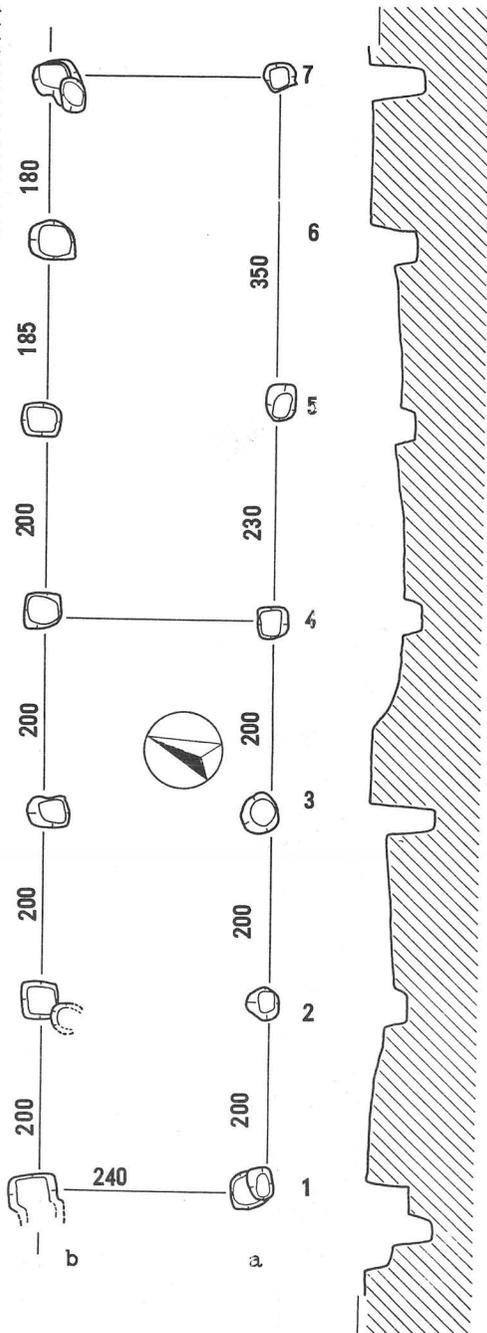
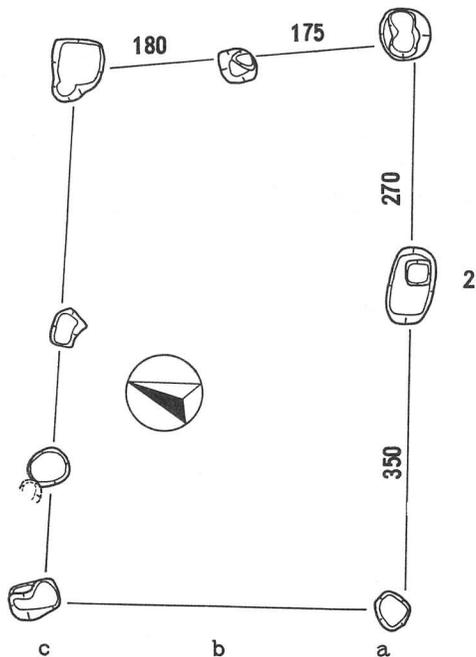
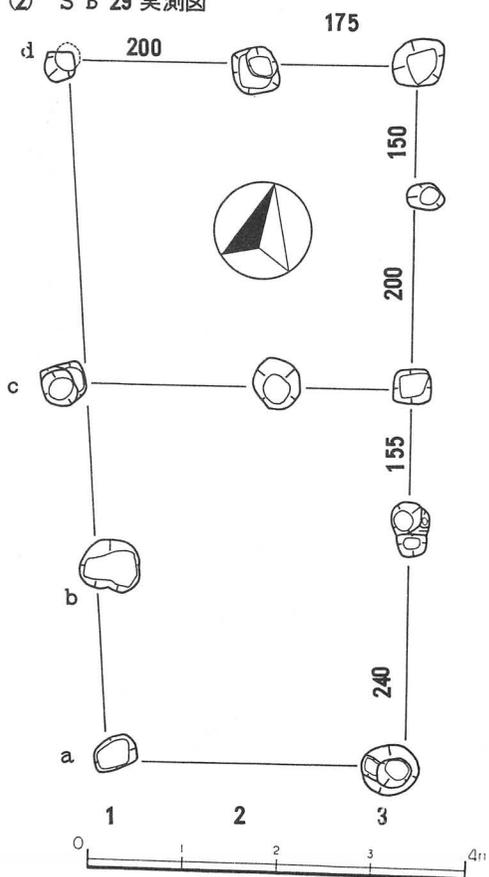


Fig. 6

(1) SB 55 実測図



(2) SB 29 実測図



(3) SB 50 実測図

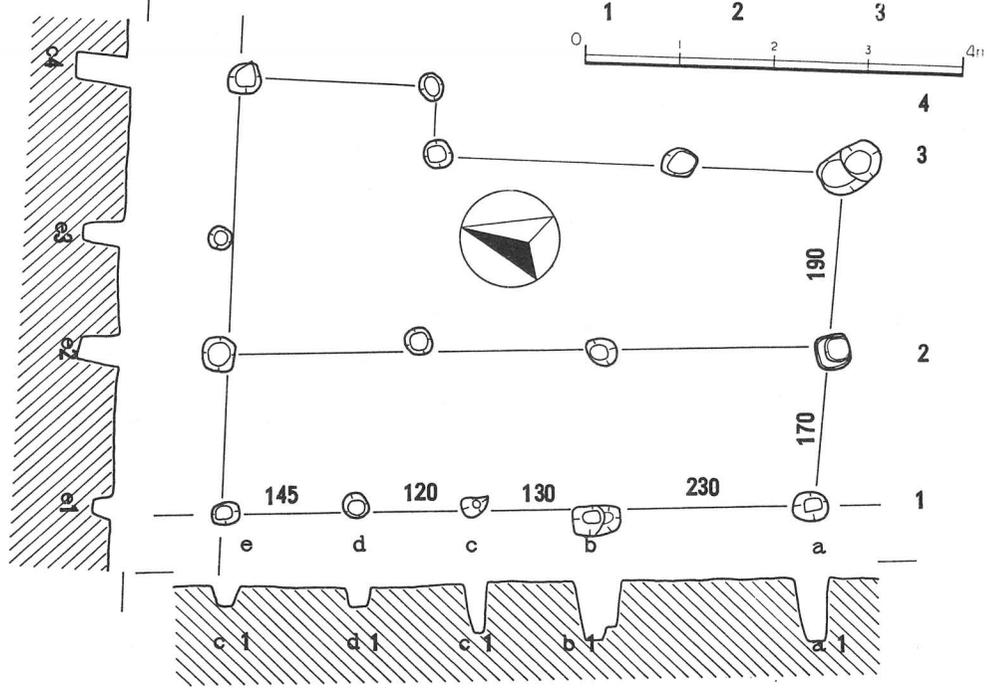


Fig. 7 SB11実測図

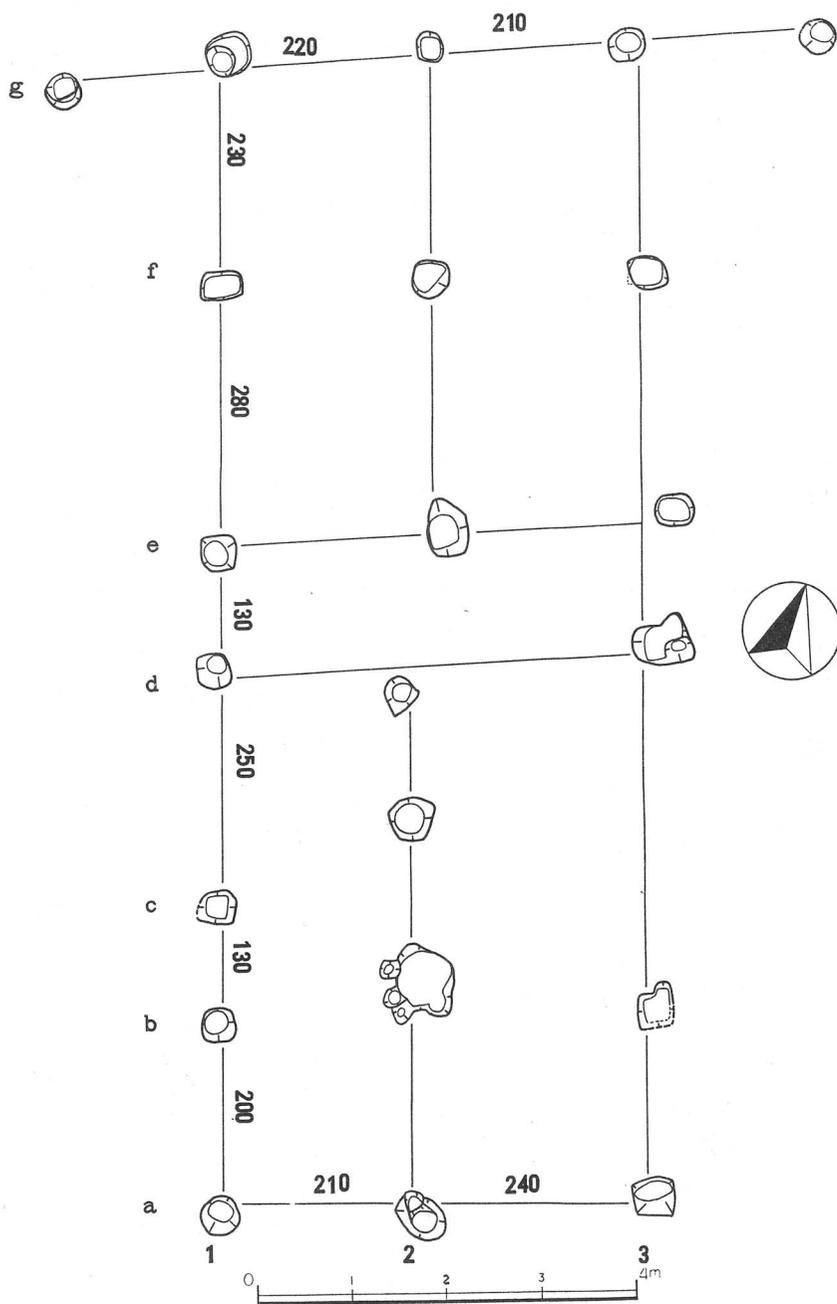
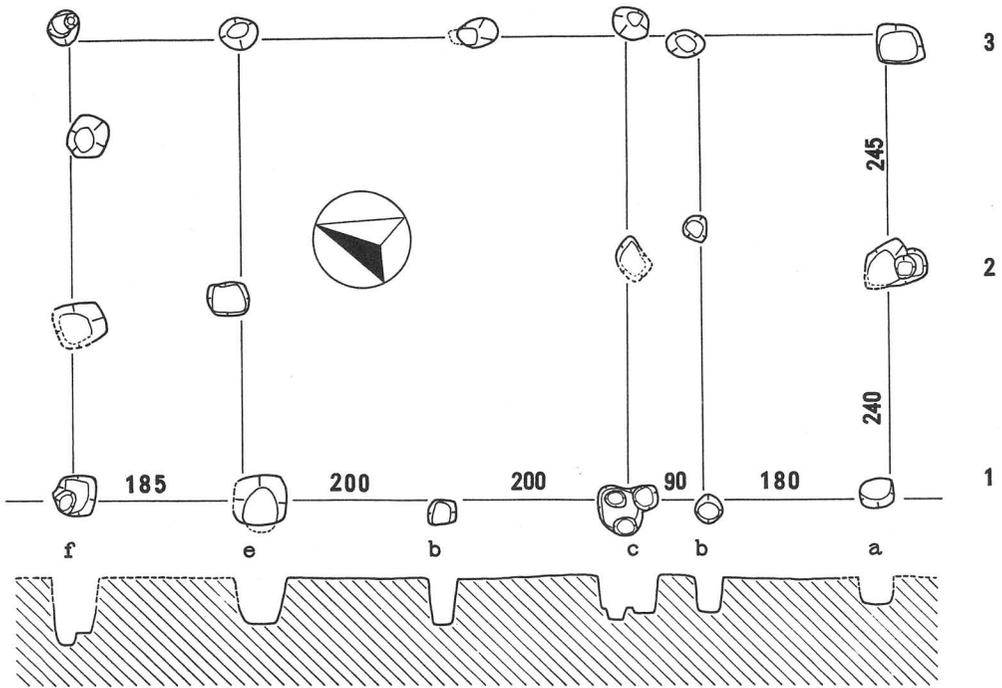
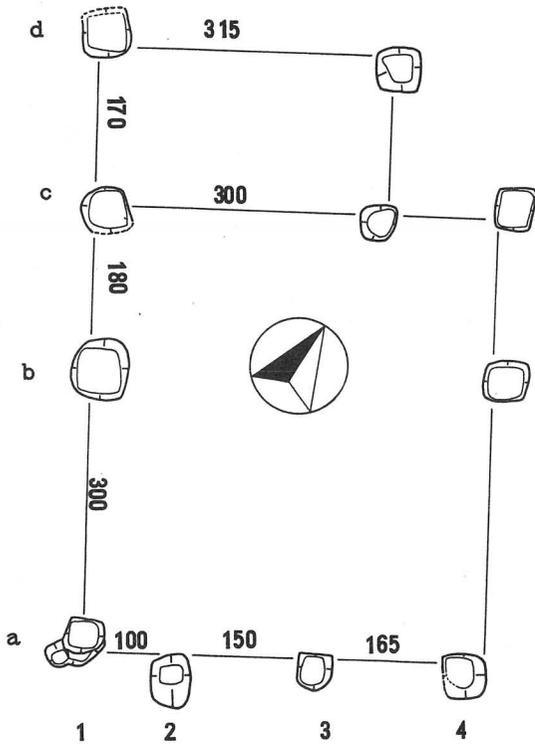


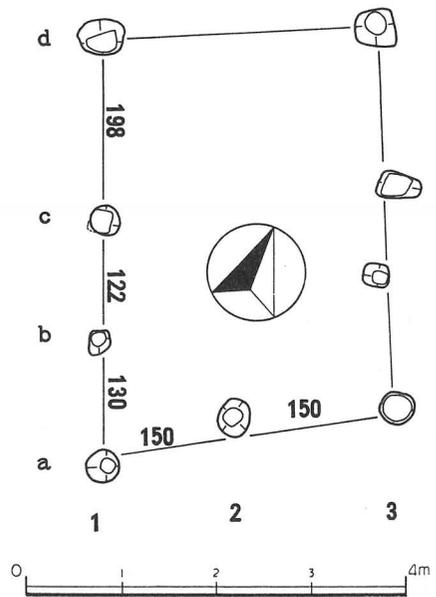
Fig. 8 (1) SB22实测图



(2) SB16实测图



(3) SB28实测图



青磁、白磁、播鉢片が出土している。

S B 50 (Fig.6、Ch.8)—— E52区検出。長軸4間、短軸2間、北東部分に張り出し状の部分が存在する。長軸方向は $N-14^{\circ}W$ であり、重複するS B12の梁行方向と一致している。柱穴の配置は西側と東側で相違がみられ、柱間も規則的ではない。柱穴からの出土遺物はなかった。

S B 51 (Fig.10、Ch.14)—— E・F49・50区検出。3間×3間の母屋の南西に1間×1間の張り出しを有する。張り出しが出る方向(桁行)は $N-19^{\circ}W$ であり、西側1間が庇の部分らしい。柱穴の掘り方、配置、柱間は東側ほど不揃いになり、出土遺物としては染付が1点ある。

S B 52 (Fig.11、Ch.15)—— H・I44・45区検出。母屋5間×5間で東側に1間×1間の張り出しを有する。南北方向の主軸は $N-24.5^{\circ}W$ でありこれが梁行方向と考えられる。柱穴は方形基調の掘り方で一辺40cm前後のものが多く、配置は歪んだ部分が多く部屋割りの線も複雑な様相を呈している。柱間も桁と梁では相違があるようで、桁より梁の柱間が全体に短い。出土遺物としては、染付、銭貨、炭化米がある。

S B 53 (Fig.12、Ch.16)—— H43・44区検出。長軸4間、短軸3間、短軸方向は $N-28^{\circ}W$ であり柱穴配置は各方向で相違がみられる。柱穴の掘り方も一定せず、柱間は配置と同様に任意的である。出土遺物としては青磁15片、越前甕・播鉢などがある。

〔注1〕上記の掘立柱建物跡に関する記述の中で、柱間や部屋の配置については、本報告書『Ⅷ浪岡城北館の掘立柱建物跡について』で詳細に説明しているため、省略した部分が多い。

Fig. 9 SB 31 実測図

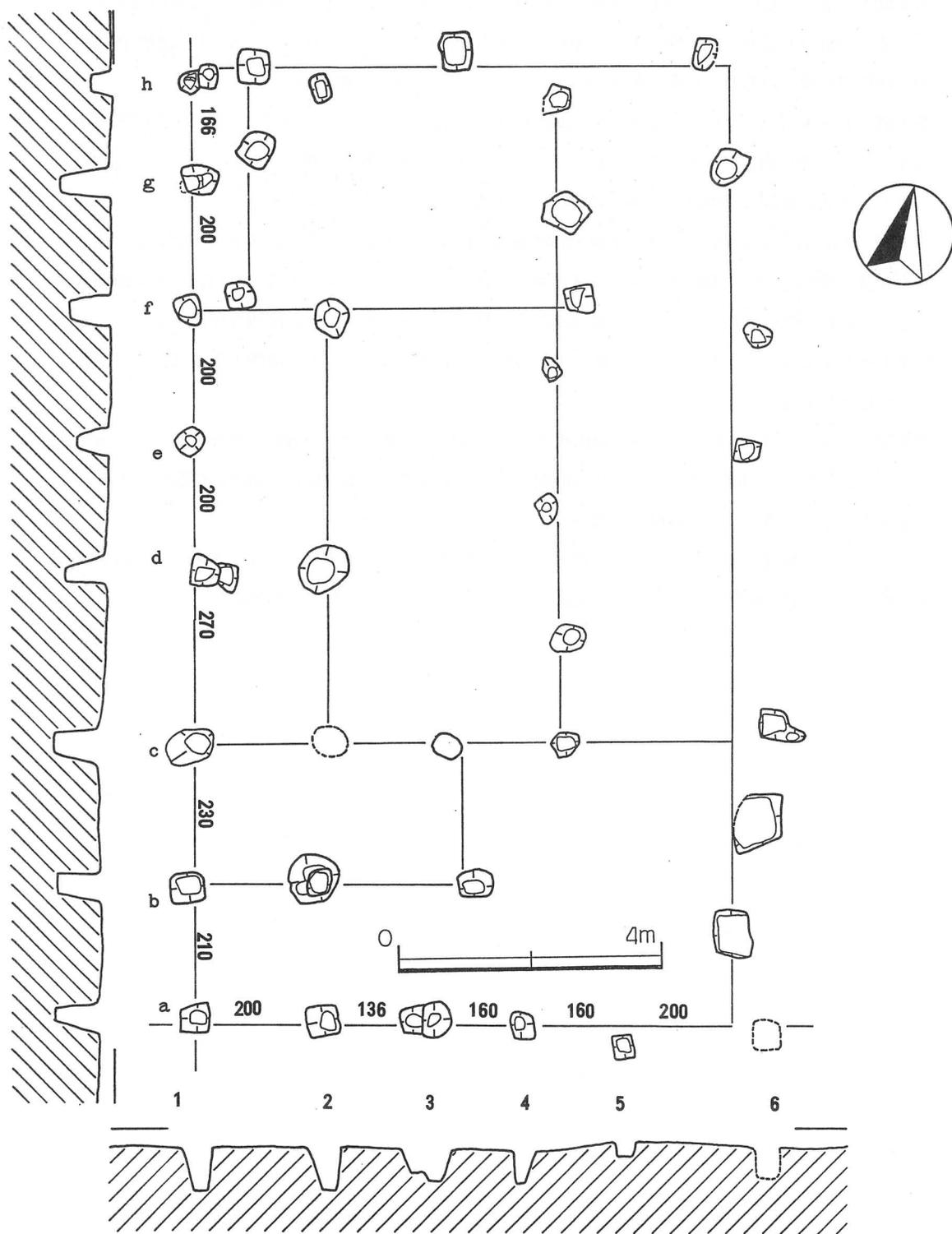


Fig. 10 SB51実測図

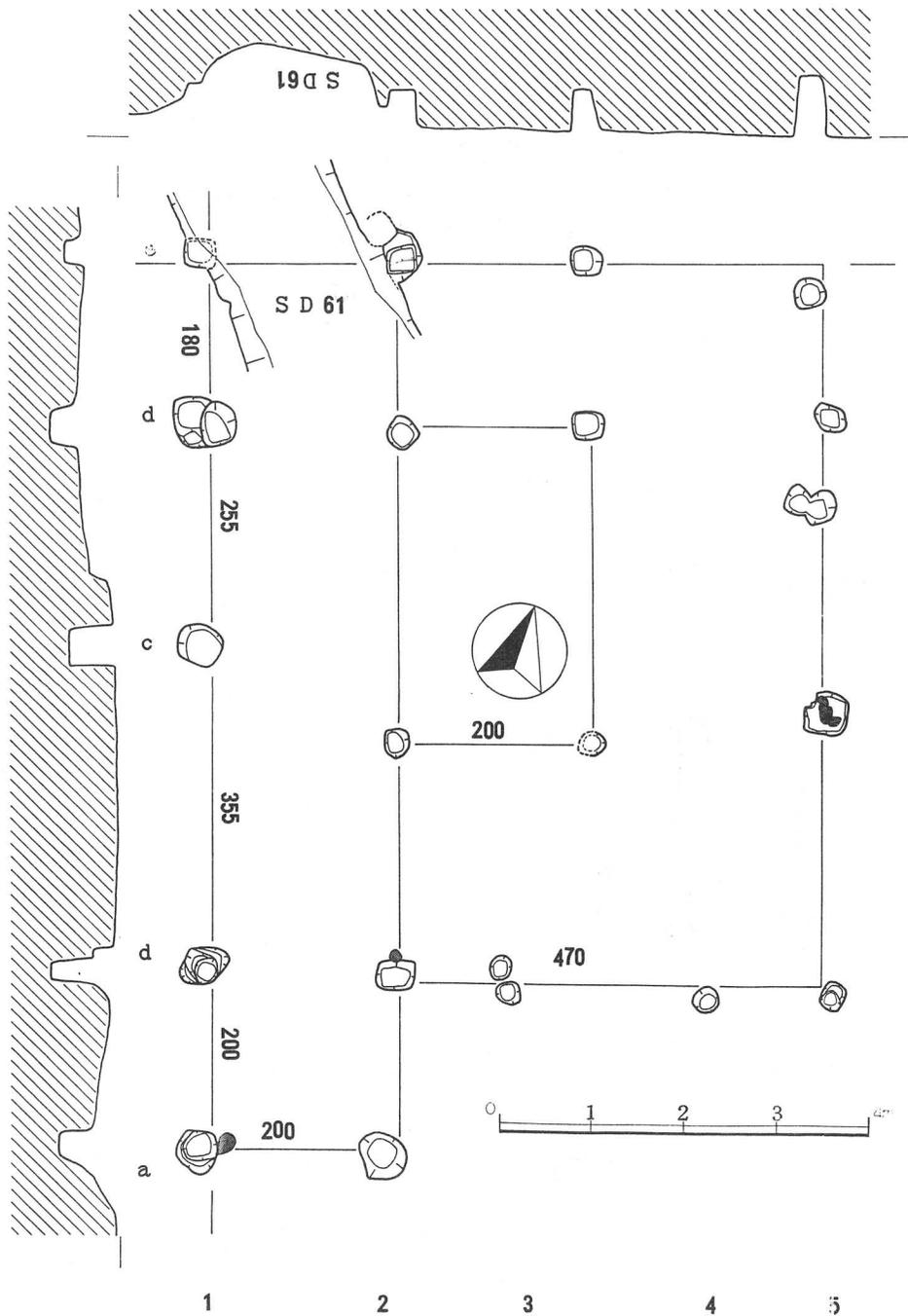


Fig. 11 SB52実測図

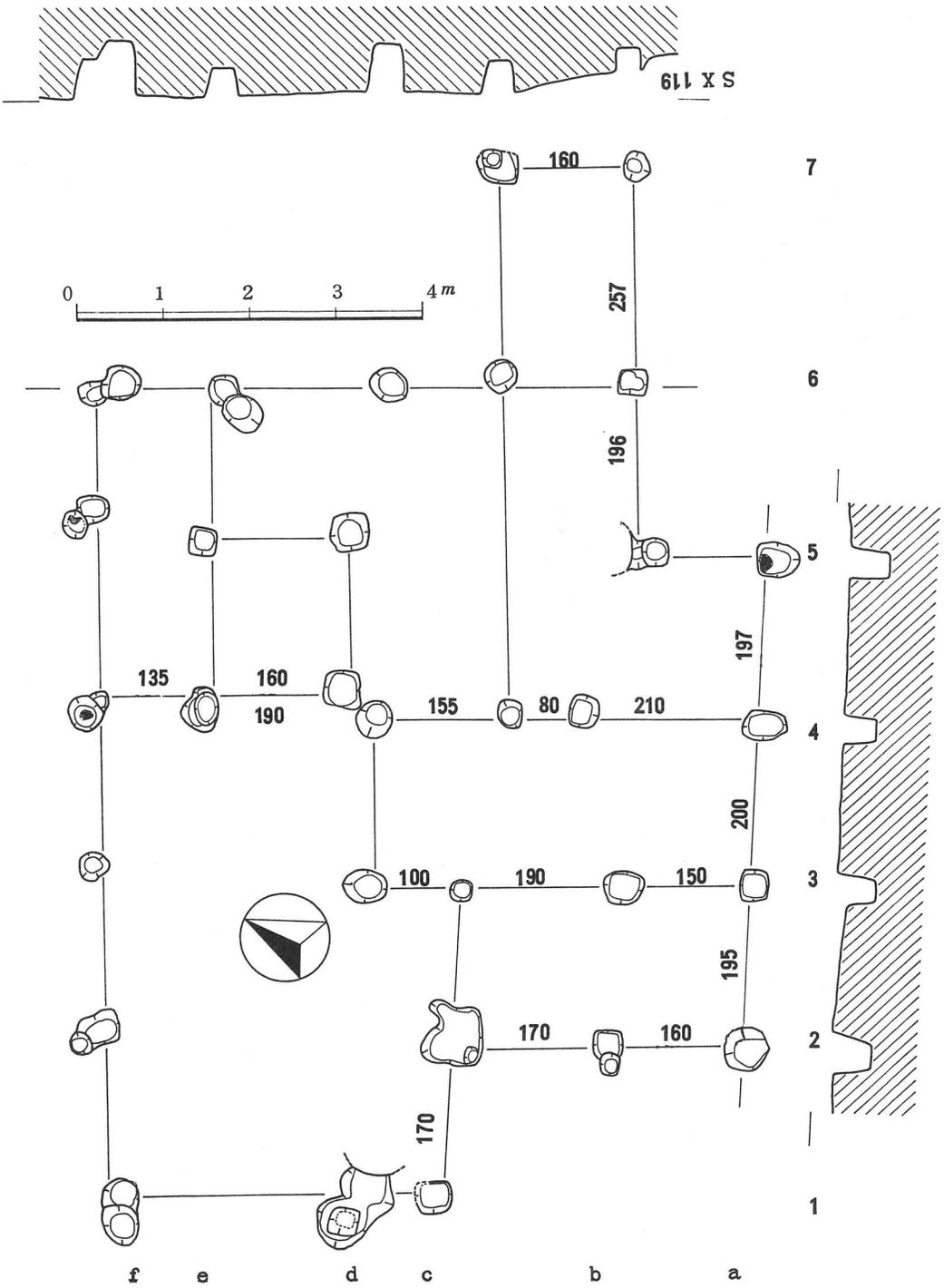
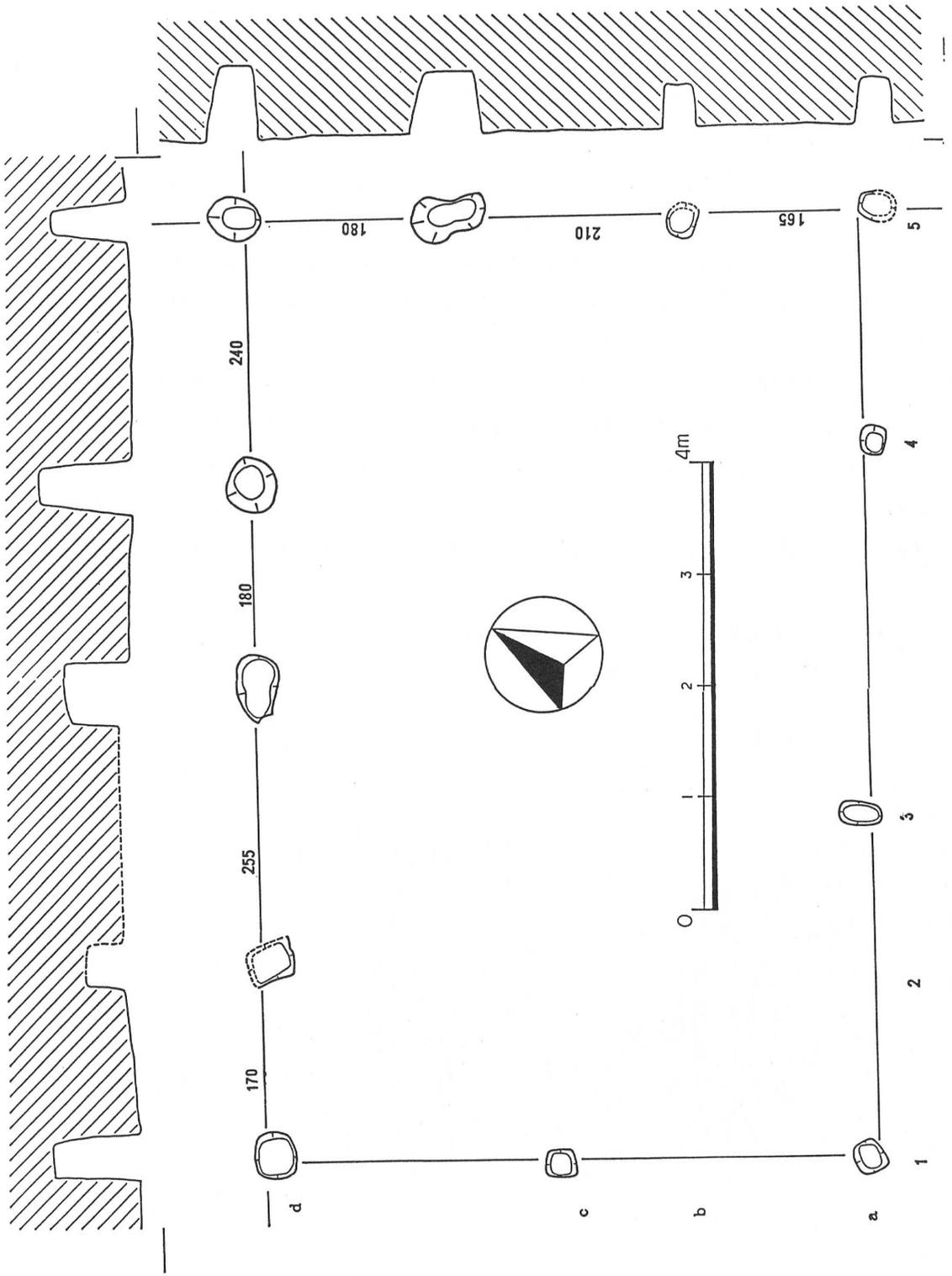


Fig. 12 SB53 探测图



2. 竪穴遺構

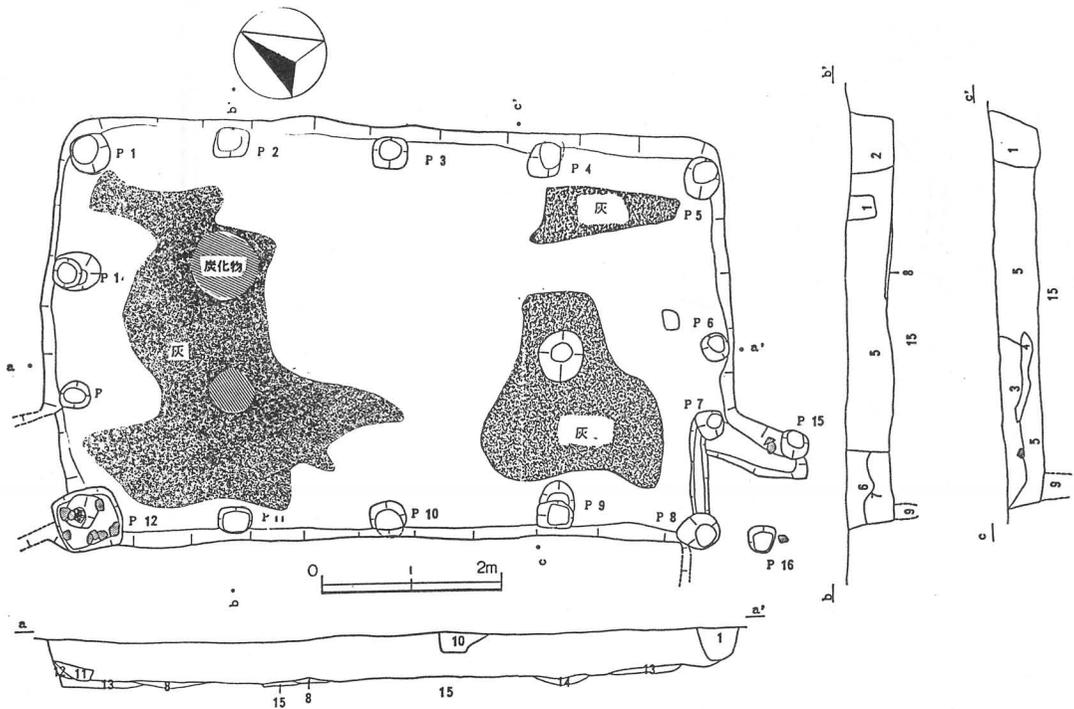
竪穴遺構としたものの中には、床面に柱穴の配置があって明確に上部構造が推定できるものと柱穴等がみられず上部構造が存在したかどうかは疑問なもの二種類が存在する。前者は竪穴遺構と言うべきよりも竪穴(式)建物跡と言った方が遺構の性格を充分説明できると考えている。以下、それぞれの特徴を述べる。

2-a 竪穴建物跡

S T 192 (PL.3、Fig.13、Ch.17) —— (昭和57・59年度調査)H・G41区検出。長軸750cm、短軸460cm、深さ48cm。出入口は南壁西側にあり方向はS-18°Eである。柱穴は長軸4間、短軸3間で壁面に接する状態で配置され、長軸方向の1間は約180cm(6尺)間隔で並んでいる。床面には中央部を除いて灰と炭化物の分布がみられ、それらの直上から出土する遺物が特徴的である。床面直上出土の遺物としては、火箸(Fig.46-2)、鋼状鉄製品(Fig.46-6・7)、銅製香炉(Fig.48-1)、銅製盤あるいは香炉の脚(Fig.48-5)、鉄釘(角釘で2.5寸くらいの長さが多い)が72本ほど鉄塊のようになったものなどがある。他に覆土からの出土遺物としては、青磁、染付、越前、瓦器等の陶磁器類、元豊通宝、嘉祐元宝、洪武通宝、祥符通宝等の銭貨、上記以外の鉄釘73本、埴塼、炭化米などがある。

S T 200 (PL.3、Fig.14、Ch.18) —— E56区検出。長軸442cm、短軸355cm、深さ90cm。出入口

Fig. 13 S T 192 実測図



は東壁南側にあり、方向はE-10°N、細長い舌状スロープの形状を呈している。覆土堆積は、中央部深さ40cmぐらいまで暗褐色土が搗鉢状の落ち込みを呈し、その下に薄い灰層と粘土層が互層となっていた。その互層になっている部分から馬骨が出土している。柱穴は、Pit 1～Pit 8までが本遺構に付属すると考えられ、長軸・短軸ともに壁面に接して2間×2間の配置である。特に北・西・南壁直下には幅20cm弱の周溝（壁溝）が存在し、側板があった可能性を強くしている。出土遺物はすべて覆土からのものであり、青磁、白磁、中国製褐釉壺（呂宋壺）、朝鮮、美濃灰釉、鉄釉、瓦器、埴塙等の陶磁器類、鉄釘、小札等の鉄製品、用途不明銅製品、洪武通宝等の銭貨、石鉢、馬骨があった。重複する遺構としてはS X 155（旧）がある。

ST 201（PL.3、Fig.15、Ch.19）—— E・F57区検出。長軸630cm、短軸500cm、深さ104cm。出入口は東壁北側にあったと思われるST 206と重複しているため明瞭に検出できなかった。柱穴位置から推定するとその方向はE-3°Nである。柱穴は長軸3間、短軸2間で壁面近くに配置されている。Pit 1～Pit 10までがそれであり、Pit 11、Pit 12は出入口に付属する柱穴と考えられる。床面直上には広く灰の分布がみられたが、灰とともに出土した遺物は朝鮮碗（Fig.42-2）や瓦器、埴塙の破片だけであり、ほとんどの遺物は覆土からの出土である。主な出土遺物としては、青磁、白磁、朝鮮、美濃灰釉、瓦器、搗鉢、埴塙等の陶磁器類、鉄釘、火箸、苧引金、鍋等の鉄製品、銅錘（Fig.48-3）鉾状の銅釘（Fig.48-12）等の銅製品、祥符通宝、天禧通宝等の銭貨、茶臼の上臼（Fig.49

Fig. 14 ST 200 実測図

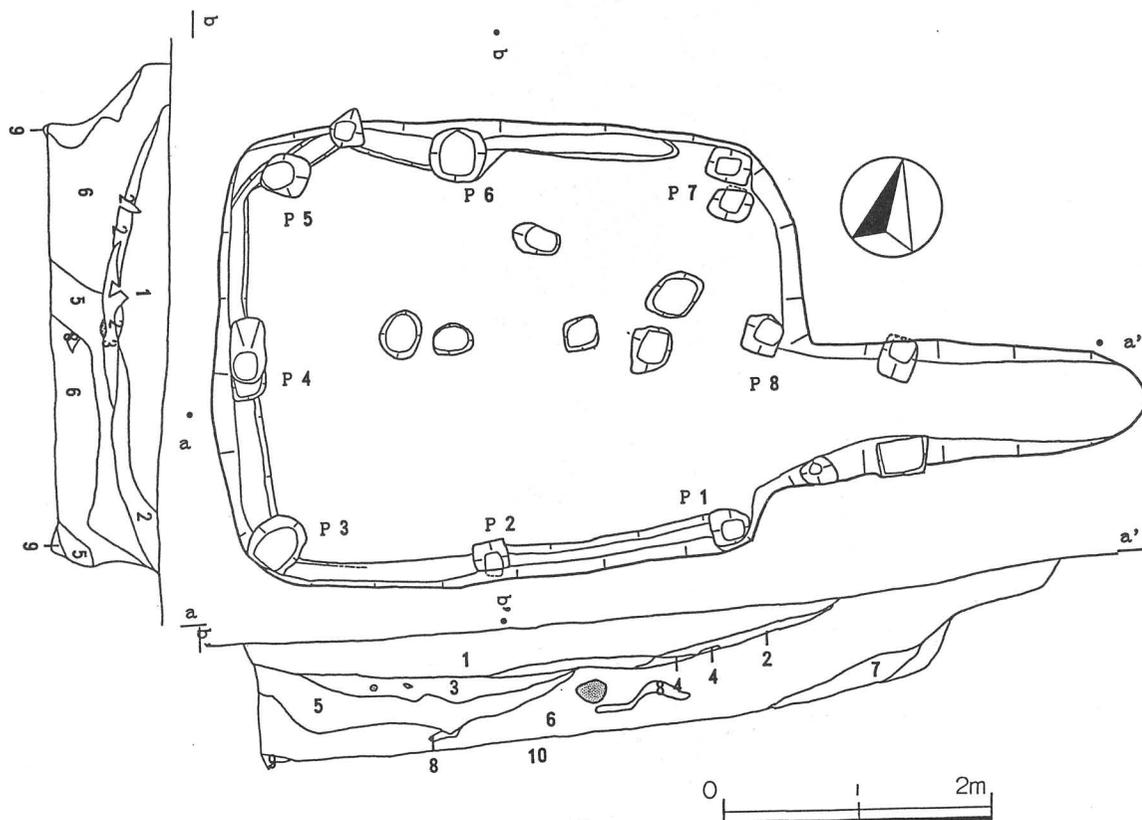
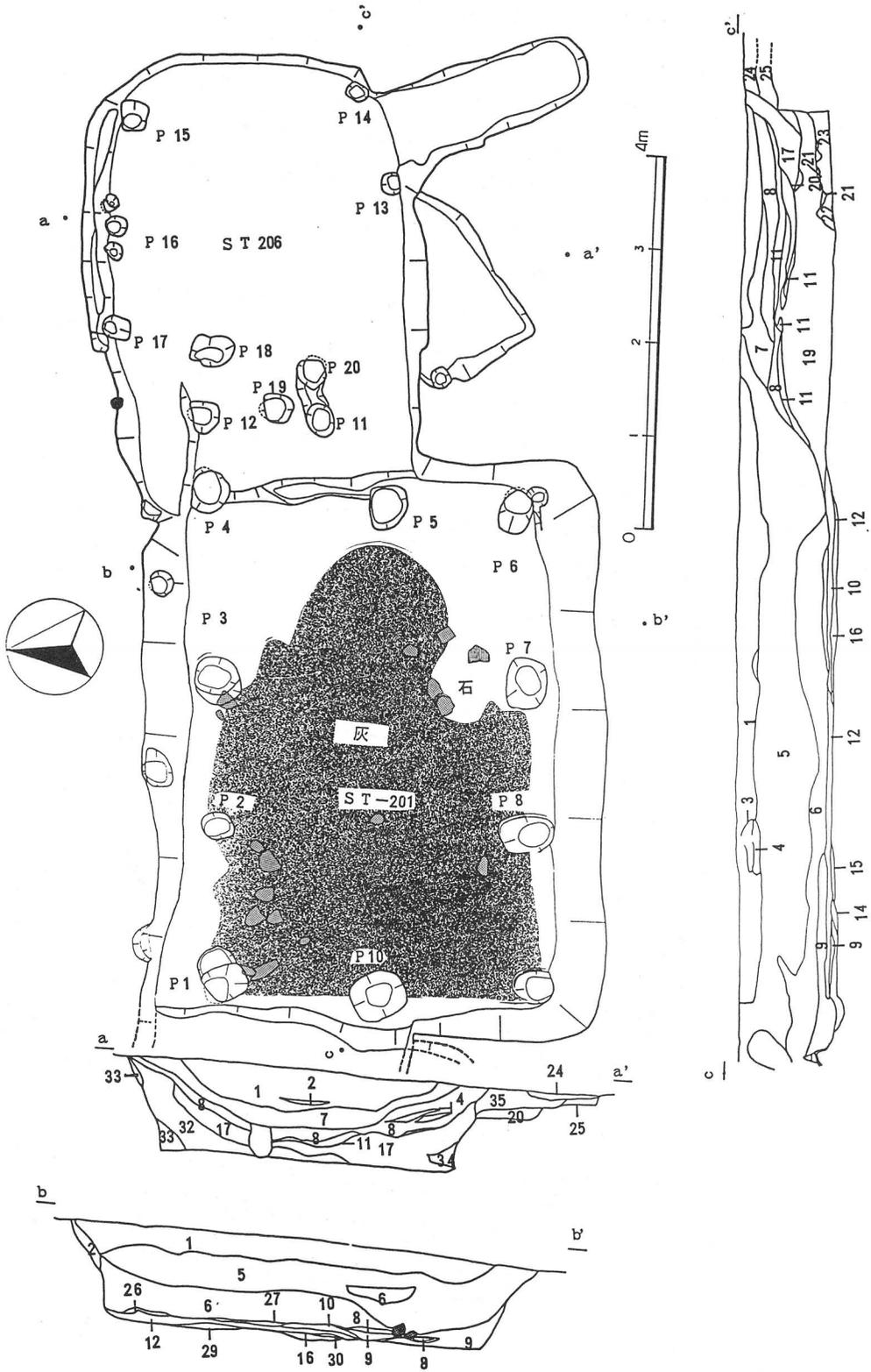


Fig. 15 ST 201 • 206実測図



— 4)、硯、砥石等の石製品、くるみなどがある。S T 206 と重複しているが層序図 (Fig.15 - C) より S T 201 が新しいと考えられた。

S T 202 (PL.4、Fig.16、Ch.20) — E・F56区検出。長軸 580 cm、短軸 455 cm、深さ 78 cm。出入口部分はみられない。付属する柱穴は Pit1 から Pit11 までと考えられ、北側で長軸方向 3 間、短軸方向 1 間に南側へ 2 間×1 間の張り出しがある形態と思われる。出土遺物には、床面直上から白磁皿の破片がある他、覆土から青磁、白磁、染付、美濃灰釉・同鉄釉、瓦器、播鉢、坩堝等の陶磁器類、鉄釘、鉄鍋等の鉄製品、洪武通宝、皇宋通宝等の銭貨、砥石、白、硯等の石製品、馬骨および漆器被膜がある。重複する遺構としては、S T 212 (新)、S X 160・S X 161・S X 155 (旧) がある。

S T 203 (PL.4、Fig.17、Ch.21) — F・G56区検出。長軸 670 cm、短軸 450 cm、深さ 50 cm。東北コーナーの部分に S T 211 とした遺構が重複していたため、出入口と考えられた部分は明確に検出できなかった。柱穴の配置は長軸 4 間、短軸 3 間で Pit1 から Pit14 までそれぞれである。また Pit15、Pit16 も関係する可能性がある。出土遺物としては、床面直上から鉈刀とでも言うべき鉄製品 (PL.4-3、Fig.45 - 18) が出土している他、覆土から太刀の足金具 (PL.19 - 1、Fig.48 - 2) と青磁、白磁、染付、中国褐釉壺、瓦器、播鉢、美濃灰釉等の陶磁器類、火箸、釘等の鉄製品、政和通宝、永楽通宝、淳化元宝、開元通宝等の銭貨が出土している。

Fig. 16 S T 202・S T 212・S X 160 実測図

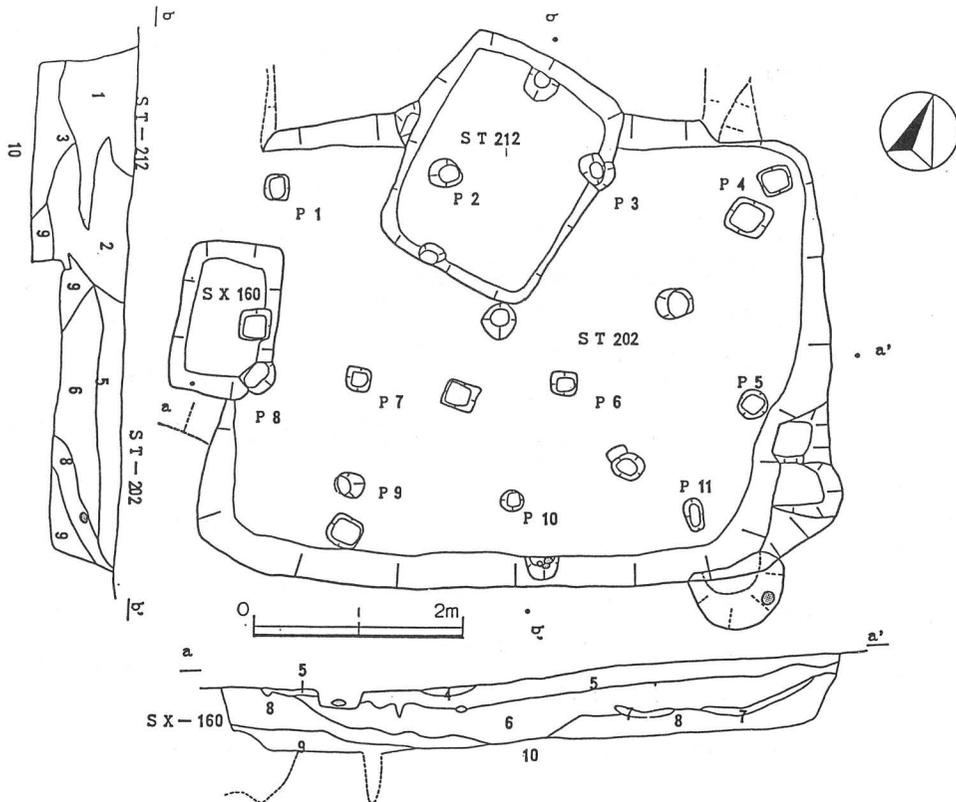
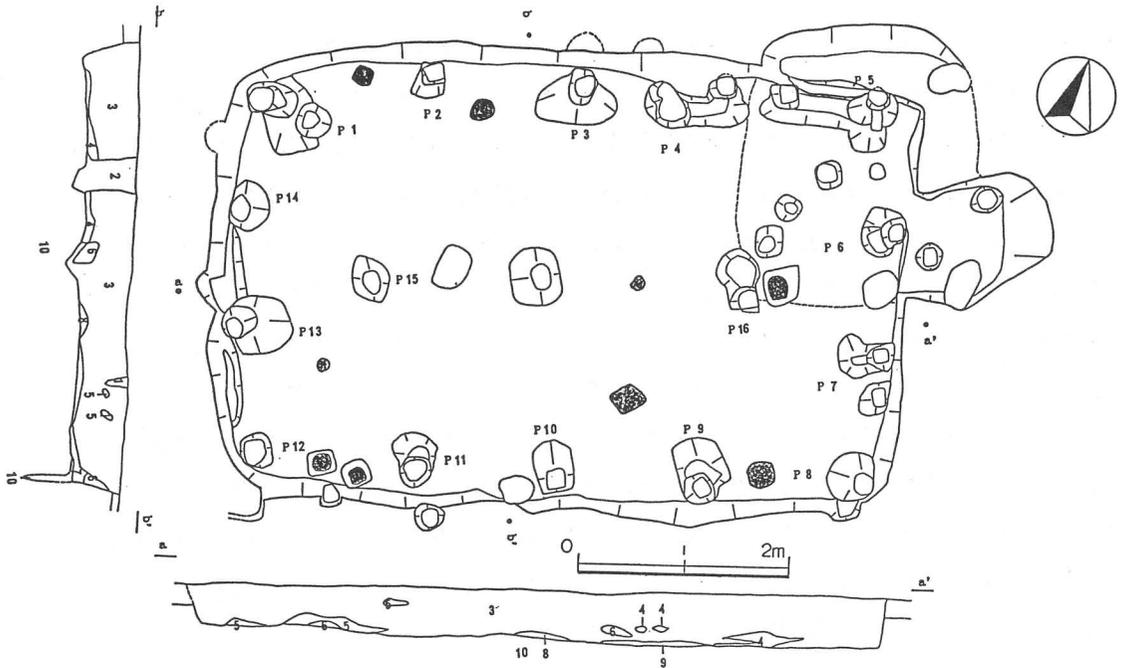


Fig. 17 S.T 203 実測図

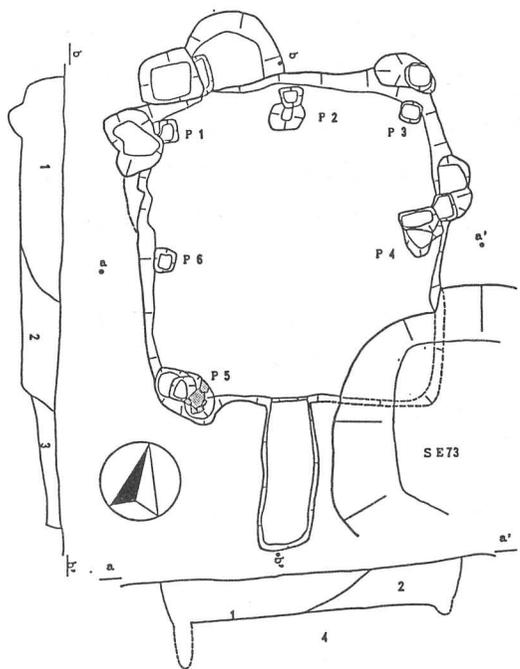


S T 204 (PL.4、 Fig.18、 Ch.22)——H57・58区検出。長軸 310 cm、短軸 300 cm、深さ 44cm。出入口部は未確認。柱穴は長・短軸ともに 2 間の配置と考えられるが、南東隅と南壁中央部は不明瞭であった。出土遺物としては、覆土から、青磁、中国褐釉壺、瓦器、染付、羽口、播鉢、坩堝、鉄釘、鉄鍋、鋸銭、砥石等があった。南東部で S E 73 (旧) と重複している。

S T 205 (PL.5、 Fig.18、 Ch.23)——長軸 324 cm、短軸 300 cm、深さ 50cm。南壁西側に舌状スロープの出入口があり、S - 21° E の方向を向く。柱穴配置は、長・短軸ともに 2 間と思われるが長軸 (南北) 東壁側中央の柱穴は検出されなかった。Pit1 ~ Pit7 までが付属する柱穴である。出土遺物としては、床面直上から土鈴 (Fig.44 - 4) が出土している他、覆土から青磁、美濃灰釉、天目、白磁、染付、瓦器、坩堝、鉄釘、輪状鉄製品 (Fig.47 - 5)、鋸銭、石臼等がある。北側で S D 72 (旧) と重複している。

S T 206 (PL.5、 Fig.15、 Ch.19)——長軸 480 cm、短軸 312 cm、深さ 103 cm。出入口は南壁西側隅に位置し、細長いスロープ状を呈し S - 14° E の方向を向く。柱穴配置は明確でないが、出入口部の Pit13、Pit14 の他、Pit15 から Pit20 が関連すると思われる。出土遺物には、青磁、染付、朝鮮、瓦器、坩堝、鉄釘、熙寧元宝、砥石、くるみがある。西側で S T 201 (新) と重複しているため長軸方向の規模は推定で記載している。

Fig. 18 (1) ST 204 実測図



(2) ST 205 実測図

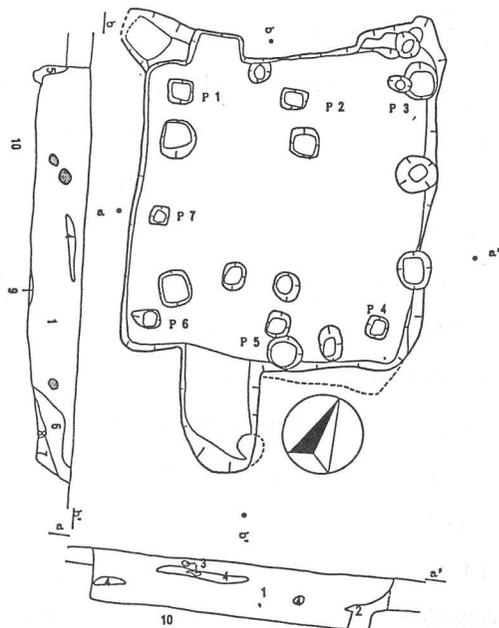
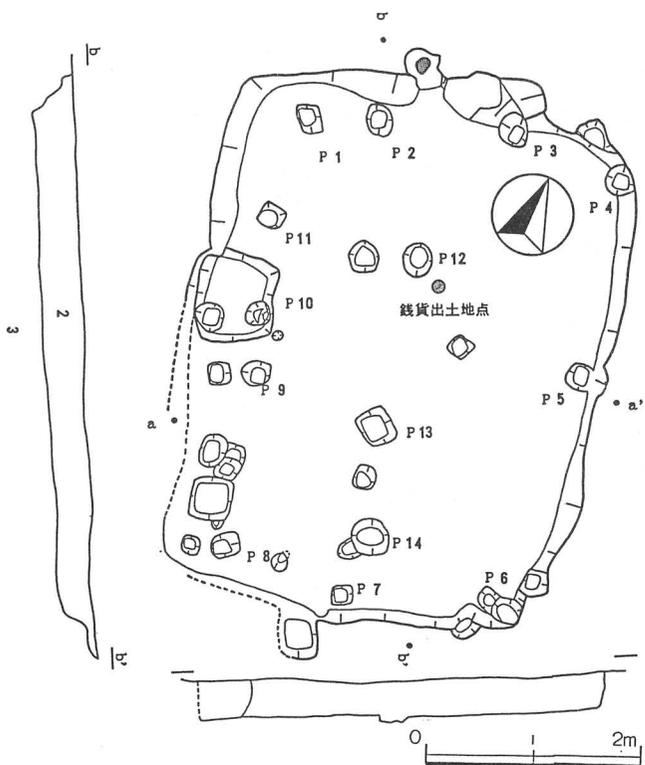
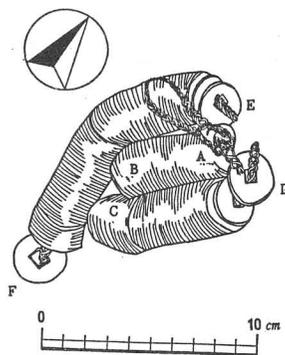


Fig. 19 (1) ST 207 実測図



(2) ST 207 出土銭貨実測図



ST 207 (PL.5、Fig.19、Ch.24) — G
 55・56区検出。長軸496cm、短軸398cm、
 深さ40cm。出入口部は検出されなかった。
 柱穴配置は明確でなく、長軸2間(東壁側)
 と3間(西壁側)、短軸3間(北壁側)と
 2間(南壁側)と考えられ、Pit1からPit
 11までがそれにあたる。またPit12・13も

棟通りを支える柱穴の可能性ある。出土遺物には、床面直上から麻紐に連なった銭貨が159枚出土しており、出土時は藁に全体を覆われ一部に靱が付着していた。(PL.5-4、Fig.19-2)麻紐は三つ編みで、最初の結び目(A)から一枚の銭貨を止め状に使っている最後の部分(F)までA-B-C-D-E-Fと一連の状態出土した。(残存状態が良好なため、この銭貨は出土時の状態で保存しており、どのような銭貨があったかは未調査である。)覆土からの出土遺物としては、青磁、染付、白磁、唐津、美濃灰釉、越前、瓦器、埴塼、鉄釘、銅滓、馬骨、くるみ、縄文時代の石斧(Fig.49-12)がある。

ST 208 (PL.6、Fig.20、Ch.25)——F・G58区検出。長軸500cm、短軸432cm、深さ58cm。出入口は北壁東側に位置し、N-30°Eの方向で階段状を呈する。柱穴配置は長・短軸とも2間×2間で、さらに遺構中央にも1個存在し(Pit9)、出入口部にも一対のもの(Pit10・11)がある。出土遺物は、床面直上から青磁稜花皿片がある他、覆土から、青磁、瓦器、播鉢、天目、染付、埴塼、鉄釘、斧、皇宋通宝、漆器被膜、くるみ等が出土している。Fig.20-1は出土した瓦器壺、Fig.20-2は銅製斧である。

ST 210 (PL.6、Fig.21、Ch.26)——G58・59区検出。長軸620cm、短軸400cm、深さ55cm、出入口部は明確に検出されなかったが、他の遺構と重複していた東壁南側に存在した可能性が高い。柱穴配置は壁に接して長軸3間、短軸2間で位置し、壁溝が四周をめぐる。西壁北側部に180×65cmの

Fig. 20 (1) ST 208 実測図

(2) ST 208 出土遺物実測図

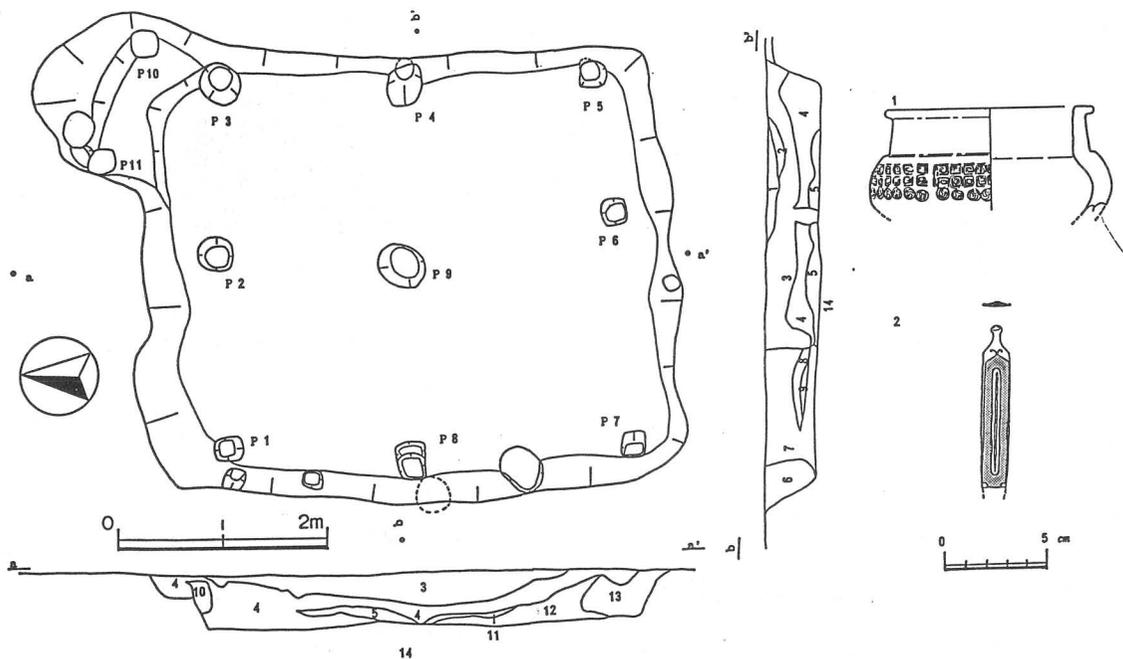
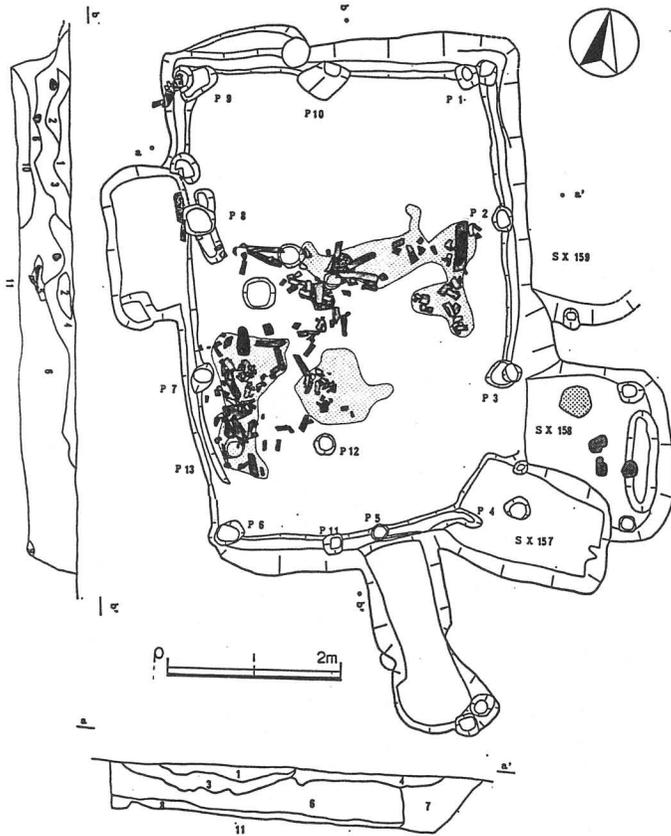


Fig. 21 ST 210 実測図



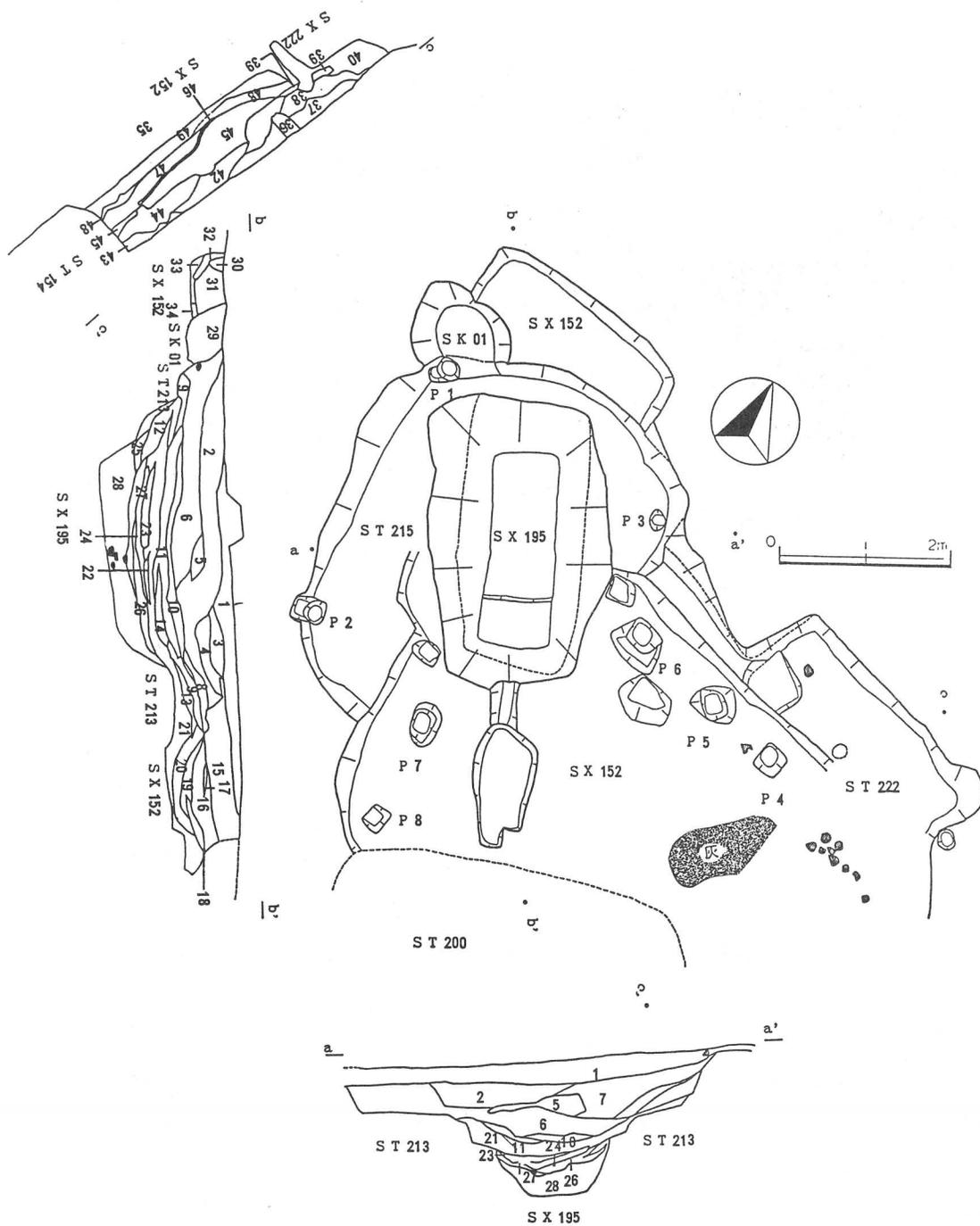
方形の張り出しを有し、南壁中央部には幅87cm、長さ224cm、深さ44cmの煙道状の掘り込みが存在している。覆土から床面全般にかけて炭化物と焼土の分布がみられ、特に中央部から南側にかけて濃厚にみられた。出土遺物としては、銅製鑄を鑄造するために使用したと思われる土製鑄型が60片以上、坩堝片が200片以上があり、床面出土のものもみられることから本遺構の性格を決める重要点と考えられる。それ以外の遺物には瓦器、播鉢、青磁、美濃灰釉、白磁、羽口 (Fig.44-11)、染付、鉄釘、小札 (Fig.45-14)、鋏 (Fig.46-12)、小刀、火箸、鍋の鉞 (Fig.46-1) (床面出土)、苧引金、切羽、硯 (Fig.49-5)、茶臼 (Fig.49-4)、砥石、永樂通宝、洪武通宝、開元通宝、周通元宝、朝鮮通宝等の銭貨、漆器被膜、く

るみ等多種・多量の出土遺物がある。これらの遺物の出土状態をみると、床面出土の遺物と覆土出土の遺物に大異はないため遺構廃絶と同時に廃棄されたものと考えられる。重複する遺構としては、S X 157 (新)、S X 158 (旧)、S X 159 (旧)、S D72 (旧)がある。

ST 213 (PL.7、Fig.22、Ch.27) — D・E56区検出。長軸430cm、短軸370cm、深さ68cm。S X 195とS X 154と重複しているため中央・南東部は残存していなかった。柱穴配置は、長・短軸ともに1間で各コーナーに位置するらしいが南東コーナーに明確でない。出土遺物には瓦器、播鉢、不明鉄製品等がある。

ST 215 (PL.7、Fig.23、Ch.28) — F47区検出。長軸308cm、短軸260cm、深さ48cm。出入口部は東壁南側に位置し、E-20°Nの方向に舌状スロープを呈していた。柱穴配置は長・短軸とも2間で壁面からやや離れた位置にある。Pit1からPit8までがそれである。出土遺物には白磁、青磁、信楽、染付、美濃、鉄釘、漆器被膜等がある。本遺構の南側にはS X 178 (旧)が重複していた。

Fig. 22 ST 213 · ST 222 · SX 152 · SX 195 · SK 01 実測図



ST 216 (PL.8、Fig.24、Ch.29) — F
47区検出。長軸 320 cm、短軸 310 cm、深さ 36
cm。出入口部は検出されなかった。柱穴配置
は、Pit1 から Pit6 までの長軸 2 間、短軸 1
間であるが短軸東壁側が 2 間となる可能性も
ある。出土遺物としては、染付、白磁、青磁、
鉄釘、鉄砲玉 (PL.19-16、Fig.48-22)、
砥石等がある。

ST 217 (PL.8、Fig.25、Ch.30) — F
47区検出。長軸 340 cm、短軸 310 cm、深さ 28
cm。東壁南側に出入口状の張り出しがあった
ようであるが、SF 34 (新) と重複している
ため明瞭に検出されていない。柱穴配置は、
Pit1・Pit2・Pit3・Pit13・Pit19・Pit
20・Pit14・Pit10 のものと、Pit5・Pit9・
Pit13・Pit18・Pit15・Pit11 のものが考
えられ、建て替えがあったらしい。前者は長

Fig 24 ST 216・ST 230 実測図

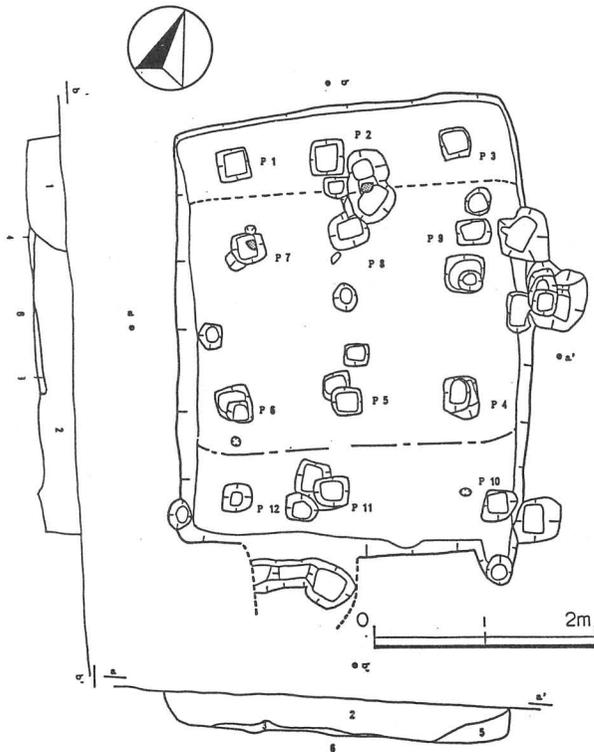


Fig. 23 ST215・SX 178 実測図

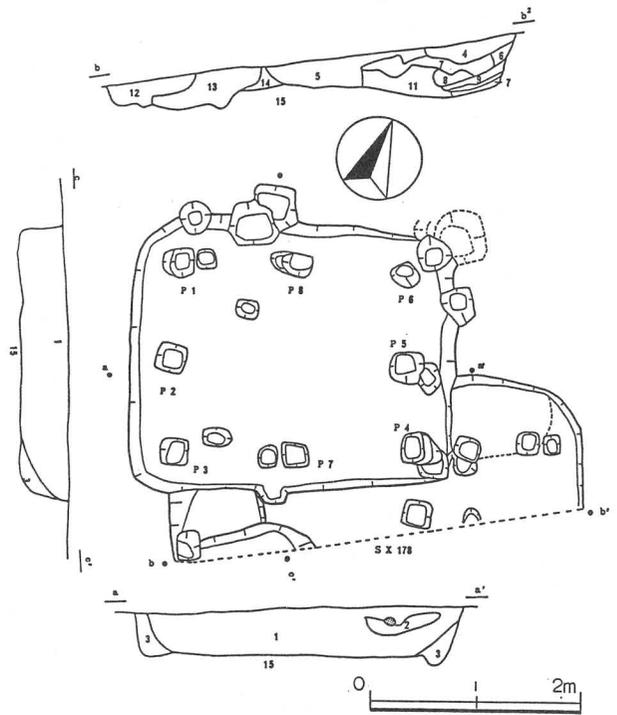
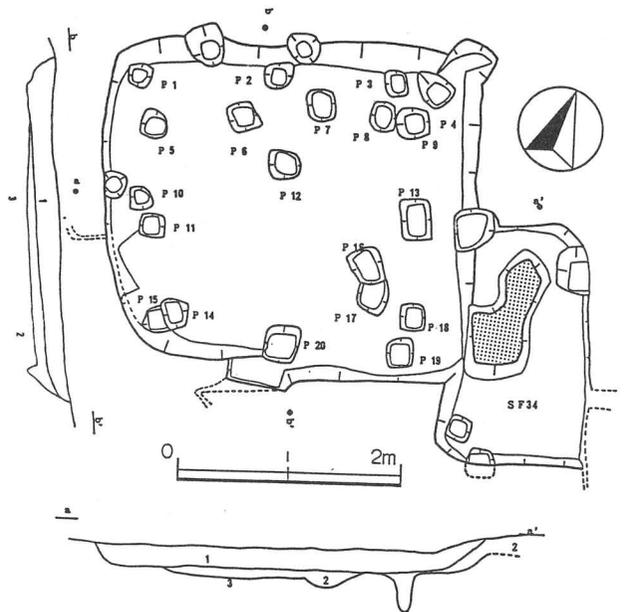


Fig 25 ST 217 実測図



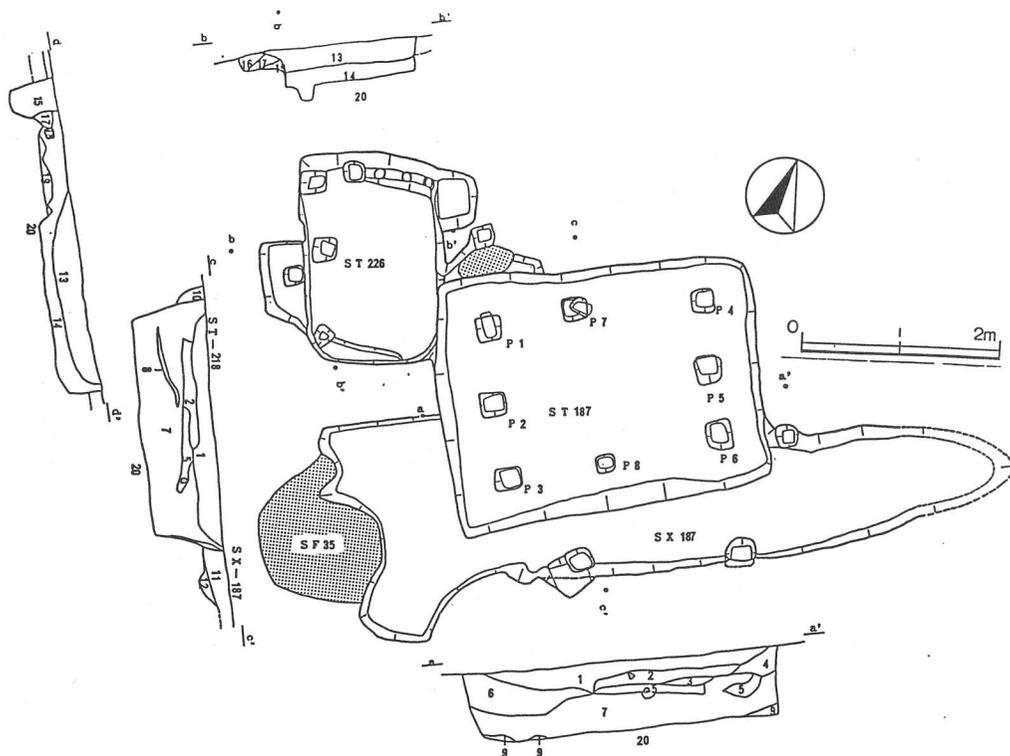
・短軸2間、後者は長軸1間、短軸2間である。出土遺物には美濃灰釉皿、播鉢、鉄釘、小柄（Fig. 48-25）等がある。

S T 218（PL.8、Fig.26、Ch.31）—— F・G47区検出。長軸340cm、短軸248cm、深さ73cm。出入口部は検出されていない。柱穴配置は、長・短軸2間で壁面から離れた位置におかれている。Pit1からPit8がそれである。出土遺物としては、染付碁笥底皿（Fig.41-13）、青磁、白磁、美濃灰釉、同鉄釉、唐津、瓦器、鉄釘、輪状鉄製品、石臼、鋸銭などがある。重複している遺構には、S T 226（新）、S X 187（旧）があり、西側には焼土の分布がみられる。（S F 35など）

S X 155（PL.9、Fig.27、Ch.32）—— E・F 56・57区検出。長軸550cm、短軸510cm、深さ70cm。出入口部は検出されていない。東側にS T 201（新旧不明）、S T 221（新）、西側にS T 202（新）が重複しているため壁面は不鮮明な所が多い。柱穴配置は、長軸・短軸ともに3間×3間の配置を呈し（Pit1～Pit12）、深さもすべて45cm以上と安定している。出土遺物には、青磁、中国褐釉壺、瓦器、播鉢、羽口、鉄鍋、鉄釘、判読不能銭などがある。

S T 224（PL.10、Fig.28、Ch.33）—— E48区検出。北側半分を調査していないが、現状で長軸200+ α cm、短軸260cm、深さ55cm。出入口部はS-20°Eの方向で舌状スローブを呈する。柱穴配置もおそらく2間×2間であったと思われるが、Pit1からPit5までの南側半分しか検出されておらず、出入口部のPit6・Pit7も付属する柱穴と考えられる。出土遺物としては、青磁、染付、美濃灰釉、

Fig. 26 S T 218・S T 226・S X 187実測図



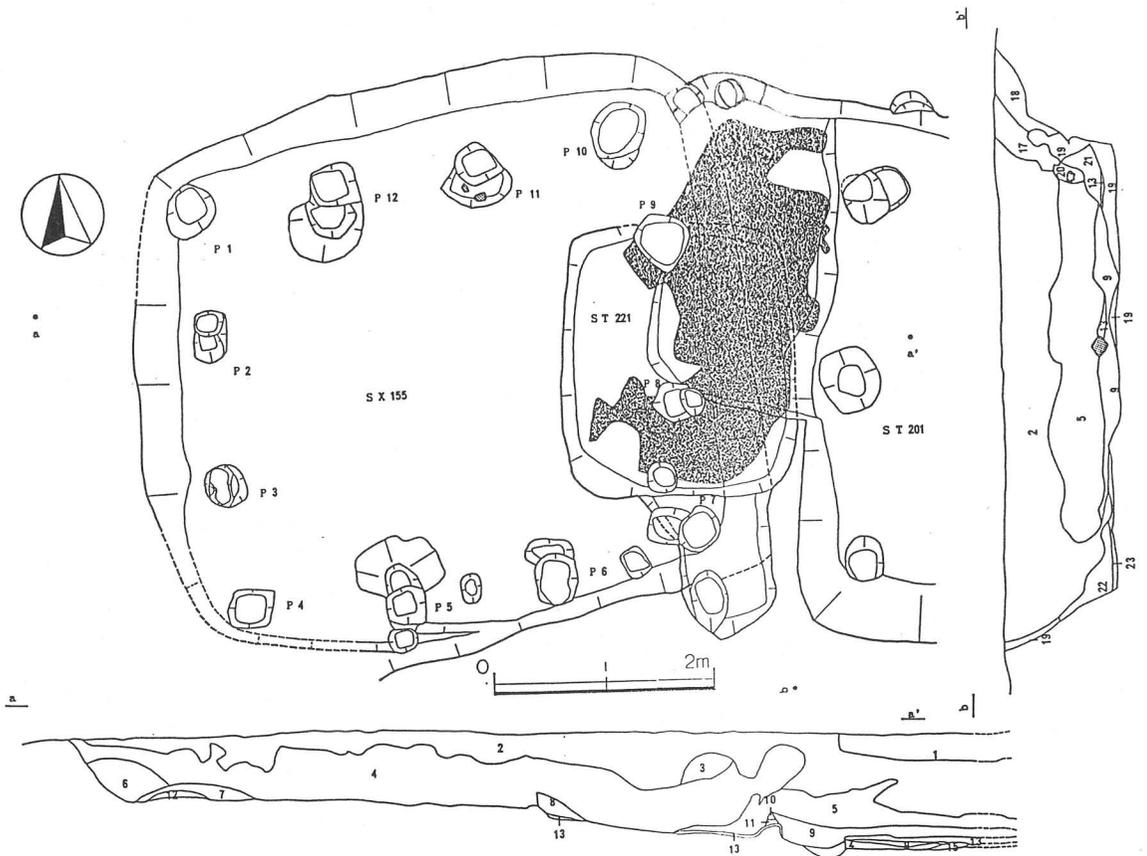
鉄釘、埴埴、鉄滓、熙寧元宝などがある。

S T 228 (PL.9、Fig.28、Ch.34)—— F 46区検出。長軸 252 cm、短軸 240 cm、深さ 63 cm。東壁南側に急峻なスロープを呈する出入口があり、S-22°-Eの方向を向く。柱穴配置は、壁面に接した状態で2間×2間であり、東南隅のPit8・Pit9のうちPit8は出入口部に関連したものであろうか。床面中央には径60 cm、深さ76 cmのピットが存在するが本遺構に付属するものではないらしい。出土遺物には、染付、越前、砥石、炭化米、熙寧元宝などがある。

S T 234 (PL.9、Fig.29、Ch.36)—— G 42・43区検出。長軸 500 cm、短軸 490 cm、深さ 92 cm。東壁北側に舌状スロープの出入口があり、N-64°-Eの方向を向く。柱穴配置は、長軸方向3間、短軸方向2間であり(Pit1~Pit10)、抜き取り痕のみられる柱穴(Pit3、Pit7、Pit8、Pit9)や出入口に関連する柱穴(Pit11、Pit12)もある。出土遺物には、染付碁笥底皿(Fig.29)が床面直上から出土している他、青磁、越前、美濃灰釉、天目、火箸、鉄釘、判読不能銭、キセル(Fig.48-29)、炭化米などがある。なお、昭和57年度に一部調査しているため、セクション図の中に埋土がみられる。

以上が竪穴建物跡である。

Fig. 27 S X 155・S T 221 実測図



2-b 竪穴遺構

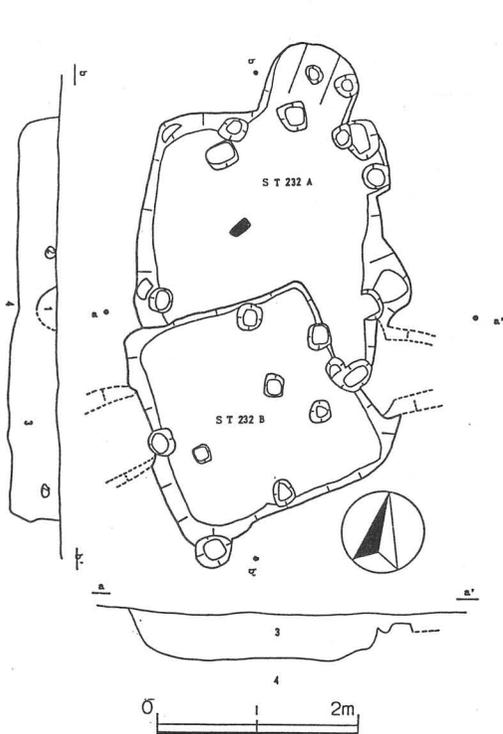
ST 209 (Fig.30、Ch.37) — G58区検出。長軸 230 cm、短軸 160 cm、深さ 38cm。遺構に付属する柱穴はなく、床面検出の柱穴は新しいものである。出土遺物は、埴塼、鑄型、播鉢、染付、瓦器、美濃、鉄釘、銅滓、獣骨などがある。

ST 212 (PL.4、Fig.16、Ch.20) — E・F56区検出。長軸 230 cm、短軸 190 cm、深さ 98cm。ST 202 (旧)と重複しており南側半分の壁面は明瞭でない。付属するかどうか明確でないが短軸壁側中央に 1 個ずつ柱穴を有している。出土遺物には、装飾を施した銀メッキ状の銅製品 (Fig.48-20)、染付、白磁、天目、埴塼、鑄型、鉄釘、小札、鉄鍋、水晶などがある。

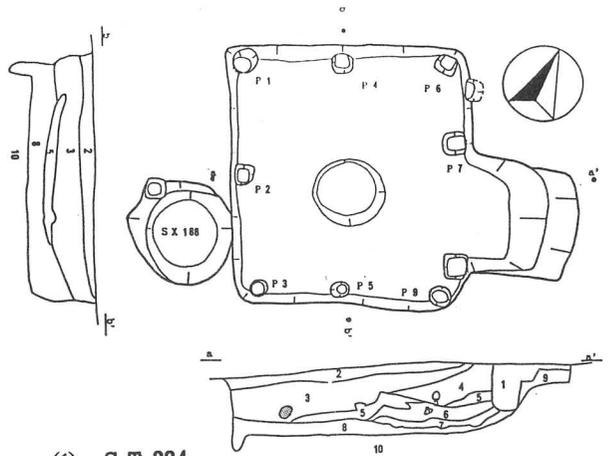
ST 214 (PL.7、Fig.30、Ch.38) — F48区検出。長軸 280 cm、短軸 253 cm、深さ 54cm。南壁西側に舌状スロープの張り出しを有するが、床面からは柱穴が検出されず、短軸壁の中央に上端から掘り込む状態で柱穴がみられる。出土遺物には、美濃、瓦器、播鉢、青磁、鉄鏃 (Fig.45-6)、鉄釘、元祐通宝などが出土している。

ST 221 (PL.9、Fig.27、Ch.32) — E・F57区検出。長軸 240 cm、短軸 210 cm、深さ 60cm。南壁東側に舌状スロープの張り出しを有し、床面直上には灰の分布もみられるが重複する ST 201・SX 155 (新旧不明)と交錯しているため本遺構に伴うかは判然としない。床面の柱穴も SX 155 Pit9 に切られていると推測すれば、短軸壁中央に 1 個ずつ存在することになる。出土遺物としては瓦器、

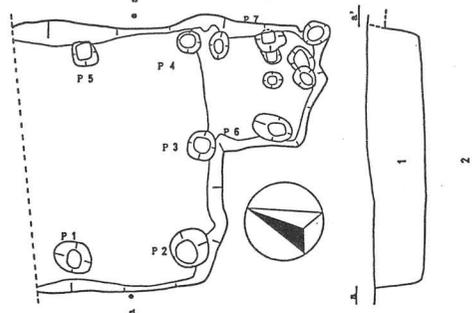
Fig. 28 (3) ST 232



(2) ST 228



(1) ST 224



青磁、播鉢、元祐通宝、永樂通宝、炭化米などがある。

S T 222 (Fig.22、Ch.27) — E 56・57区検出。長軸300cm、短軸245cm、深さ45cm。南側半分はS X 154(旧)と重複しているため明確に壁面を検出できなかった。床面から付属する柱穴は発見できなかった。出土遺物には青磁と判読不能銭がある。

S T 223 (PL.10、Fig.30、Ch.39) — E48区検出。長軸245cm、短軸225cm、深さ65cm。重複する遺構や付属する柱穴はみられず、青磁、染付、釘、不明銅製品、漆器被膜の出土遺物がある。

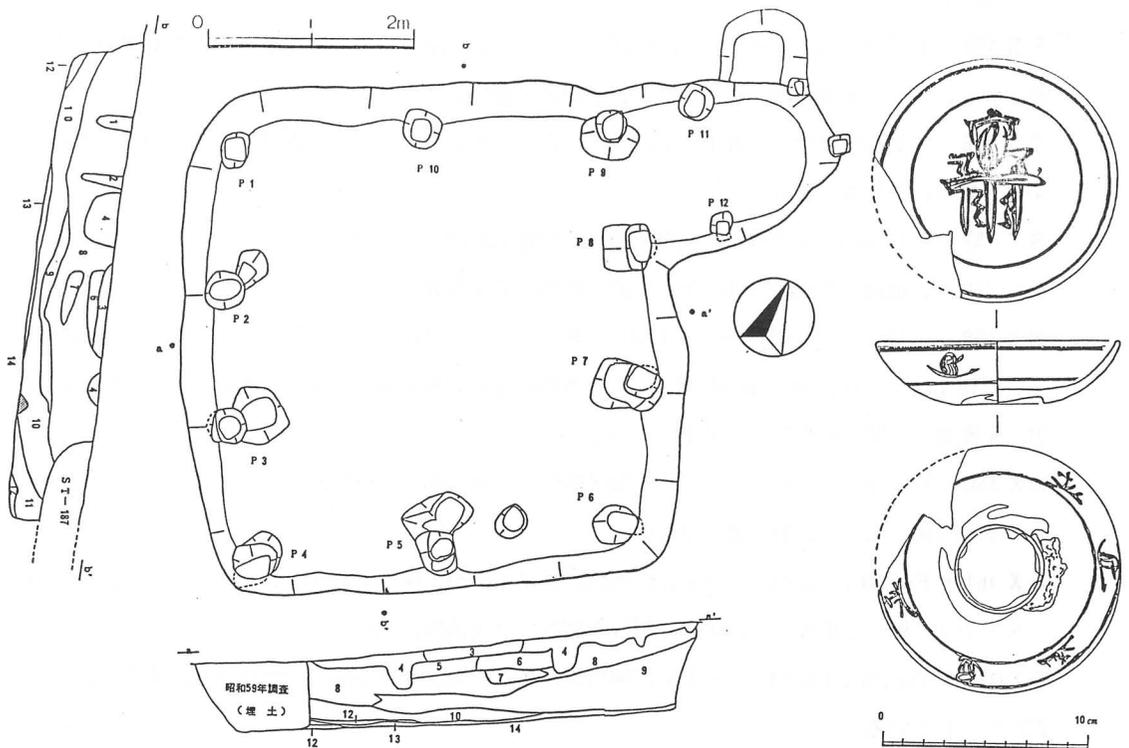
S T 226 (Fig.26、Ch.31) — F47区検出。長軸220cm、短軸143cm、深さ40cm。S T 218の西北部に接する状態で位置し、西壁部に3個の柱穴がみられるけれども対応する柱穴はない。出土遺物には青磁、天目、小札、鉄鍋、不明鉄製品、くるみ等がある。

S T 227 (PL.10、Fig.30、Ch.41) — E 46・47区検出。長軸270cm、短軸233cm、深さ51cm。南壁東側に舌状スロープの張り出しを有する。床面から遺構に付属する柱穴は検出されていないが、四方の壁に接する状態で中央部に1個ずつ柱穴が存在する。しかし、それらの柱穴から上部構造を推定することは若干無理があると思われ、竪穴建物跡としては扱わなかった。出土遺物には、青磁、白磁、染付、播鉢、鉄釘、埴塀、小柄、判読不能銭などがある。

S T 231 (PL.10、Fig.30、Ch.40) — G46区検出。長軸292cm、短軸248cm、深さ42cm。付属する柱穴等は認められず、青磁、美濃灰釉、埴塀、白磁、鉄釘等の遺物が出土している。

Fig. 29 (1) S T 234 実測図

(2) S T 234 出土染付皿実測図



S T 232 (PL.10、Fig.28、Ch.35) — G45区検出。二つの遺構が重複していたため任意にAとBに分けた。S T 232 Aは、長軸 270 cm、短軸 230 cm、深さ45cmで北壁東側に舌状スロープの張り出しを有する。S T 232 Bは、長軸 220 cm、短軸 203 cm、深さ53cmで張り出しはない。A・Bともに明確な柱穴配置は認められず、相方の新旧関係も明確でない。出土遺物としては染付、白磁、天目、唐津、瓦器、苧引金、鉄釘、砥石がある。

S T 235 — G・H48区検出。南側が未調査のため全形は測れないが東西 310 cm、深さ63cmであった。S T 236 (新)と重複しており、青磁、白磁、播鉢、瓦器、漆器被膜等が出土している。

S T 236 — G47区検出。S T 235と同様に南側は未調査であり、東西 190 cm、深さ 110 cmであった。出土遺物としては、播鉢、鉄釘がある。

S T 238 — G 44・45区検出。南側が未調査であり全形を知ることはできない。

S T 239 (Fig.31) — G46区検出。長軸 220 cm、短軸 194 cm、深さ71cm。出土遺物には鎌 (Fig.47-4)、染付、判読不能銭がある。

S T 240 (PL.10、Fig.30) — G 45・46区検出。長軸 288 cm、短軸 276 cm、深さ45cm。西壁北側に舌状の張り出しを有するが、明確な柱穴配置はみられない。出土遺物には床面から出土した石臼 (Fig.49-2)と染付、開元通宝、無文銭がある。

S X 152 (PL.7、Fig.22、Ch.27) — D56区検出。S K01、S T 213、S X 195と重複しているため北壁以外は明確に検出されていない。北壁長は 270 cm、深さ40cm、付属する柱穴等は認められず、出土遺物も播鉢が1点あっただけである。

S X 153 (Fig.15、Ch.19) — F57区検出。S T 206と重複しているため規模は不明確であるが、覆土から、青磁、美濃灰釉、瓦器、鉄釘、茶臼等の遺物が出土している。

S X 156 — F56区検出。S X 155 (旧)と大幅に重複していたため規模は明確でない。出土遺物に染付、坩堝、鉄釘等がある。

S X 157 — G 58・59区検出。長軸 176 cm、短軸 128 cm、深さ64cm。S T 210 (旧)の南東部と重複しており、播鉢、瓦器、景德元宝、判読不能銭、漆器被膜の出土があった。

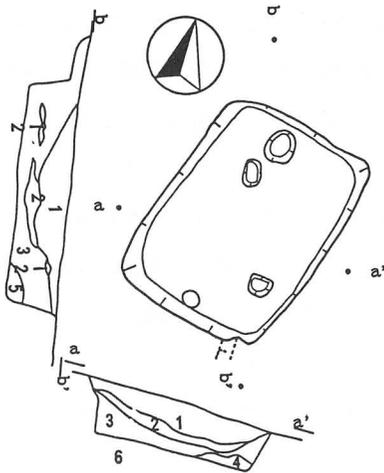
S X 158 — G 58・59区検出。S T 210 (新)の東壁と重複しており規模は明確でないが、長軸208 cm、短軸 134 cm + α 、深さ31cmを測る。出土遺物には、青磁、瓦器、播鉢、鉄釘、淳熙元宝、朝鮮通宝、元豊通宝、開元通宝などが出土している。

S X 160 (Fig.31、Ch.44) — E・F56区検出。長軸 135 cm、短軸95cm、深さ110cm。S T 202 (新)の西壁と重複しており、出土遺物はない。

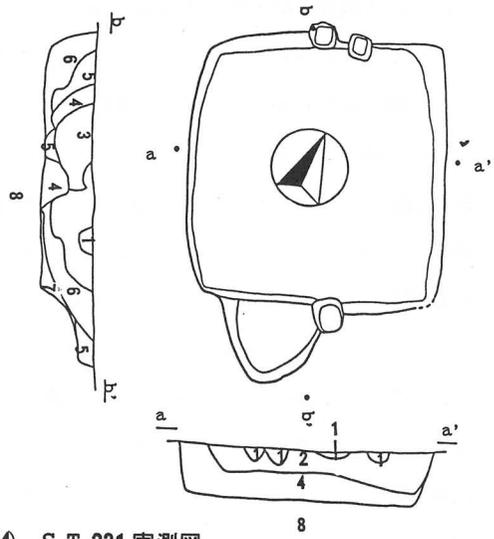
S X 161 (Fig.31、Ch.44) — E56区検出。長軸 167 cm、深さ 126 cm。S T 202 (新)、S X 160・S X 162 (旧)と重複し、西側の一部は未調査で出土遺物はない。

S X 162 (Fig.31、Ch.44) — E56区検出。長軸 180 cm、深さ 100 cmで播鉢状を呈する。羽口と鉄釘が出土している。

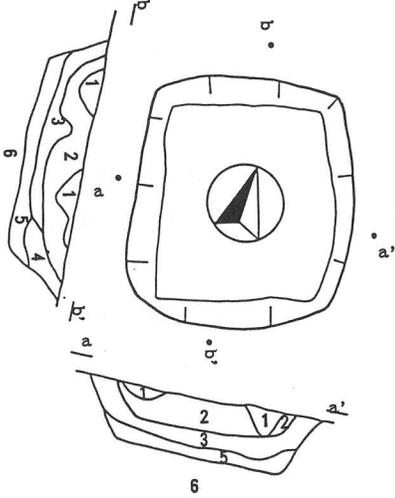
Fig. 30 (1) ST 209 実測図



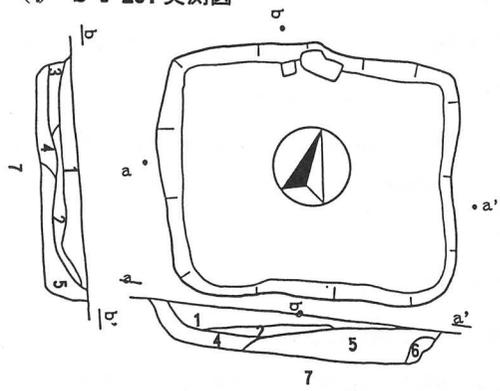
(2) ST 214 実測図



(3) ST 223 実測図



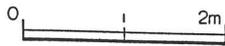
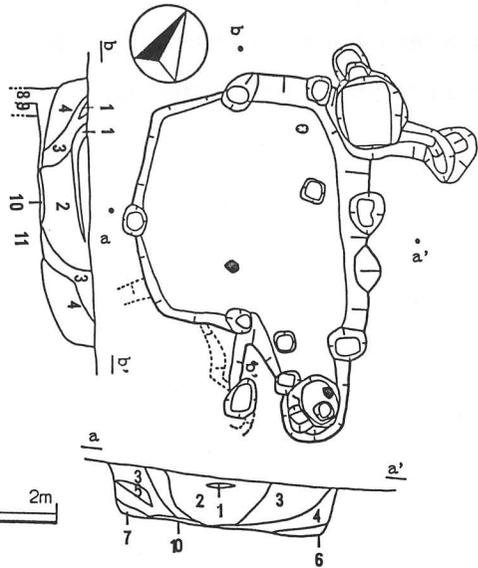
(4) ST 231 実測図



(5) ST 240 実測図



(6) ST 227 実測図



S X 164・S X 166・S X 167・S X 169 — F・G 56・57区検出。これらの遺構は相互に重複しているため規模・範囲等は不明確であるが、S B 30の範囲と重複していることから掘立柱建物跡構築時の地業と関連があるかもしれない。出土遺物としては、青磁、白磁、染付、美濃灰釉、同鉄釉、瓦器、埴塼、鋳型、銅滓、羽口、鉄釘、苧引金、鉄滓、不明鉄製品、不明銅製品、判読不能銭、皇宋通宝、無文銭などがある。

S X 168 — G 57区検出。長軸 260 cm、短軸 110 cm、深さ 50 cm。四隅に小柱穴を有し西・南壁側に壁溝状の溝が存在する。出土遺物には天目、瓦器、青磁、鉄釘、判読不能銭、無文銭、漆器被膜がある。

S X 170 (Fig. 31、Ch. 43) — G 45区検出。長軸 245 cm。短軸 220 cm、深さ 12 cm。北壁に若干の張り出し部分があり、四隅近くに柱穴が存在する。出土遺物は砥石が 1 点だけである。

S X 171 (Fig. 31) — G 45区検出。長軸 355 cm、短軸 150 cm、深さ 24 cm。不整形を呈し、染付、永楽通宝、不明骨の出土遺物があった。

S X 178 (Fig. 23、Ch. 28) — F 47区検出。南側が未調査のため明確な規模は不明で、ST 215(新)と重複している。出土遺物は美濃灰釉 1 点だけである。

S X 181 — E 46・47区検出。長軸 86 cm、短軸 73 cm、深さ 58 cm。底に「吉」らしい朱筆の文字の書かれた青磁皿 (Fig. 40 - 8) が出土している。

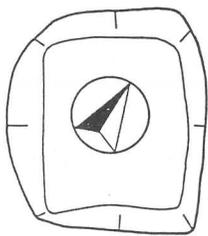
S X 184 (Fig. 31) — F 42区検出。長軸 197 cm、短軸 190 cm、深さ 55 cm。南西隅に張り出しを有し、北壁・南壁中央に 1 個ずつ柱穴が存在する。出土遺物としては、染付、青磁、鉄釘、不明銅製品がある。

S X 187 (Fig. 26、Ch. 31) — F・G 47・48区検出。溝状の遺構であるが明確な規模・範囲は不明で、出土遺物は土師器だけであることから、平安時代の遺構らしい。

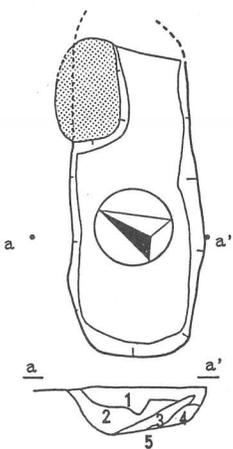
S X 190 (Fig. 31) — 長軸 244 cm、短軸 228 cm、深さ 30 cm。東・西壁の中央に一個ずつの柱穴を検出したが、遺物の出土はなかった。

S X 191 (Fig. 31) — F 42区検出。長軸 245 cm、短軸 220 cm、深さ 27 cm。北・南壁の中央に一個ずつの柱穴を検出したが出土遺物はなかった。

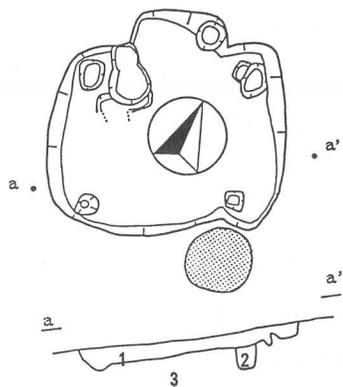
Fig. 31 (1) ST 239 実測図



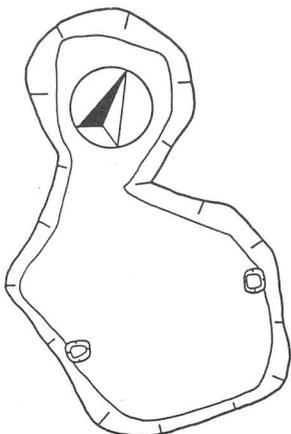
(2) ST 233 実測図



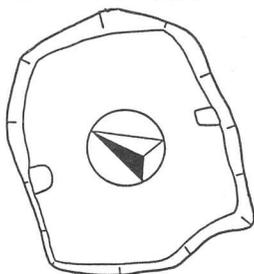
(3) SX 170 実測図



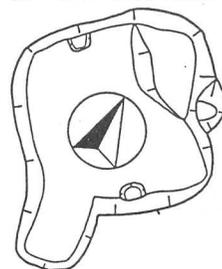
(4) SX 190 実測図



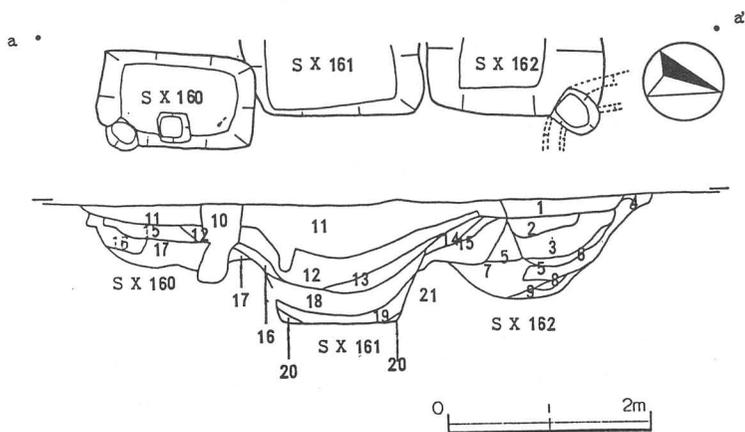
(5) SX 191 実測図



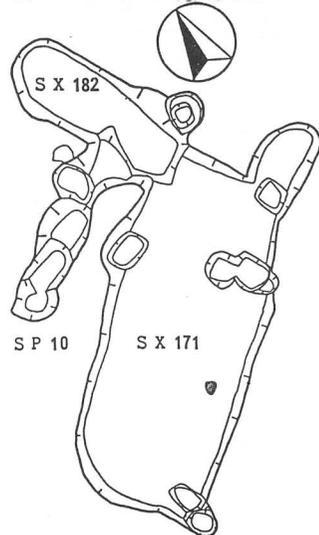
(6) SX 184 実測図



(7) SX 160・161・162 実測図



(8) SP 10・SX 171・182 実測図



3. 井戸跡

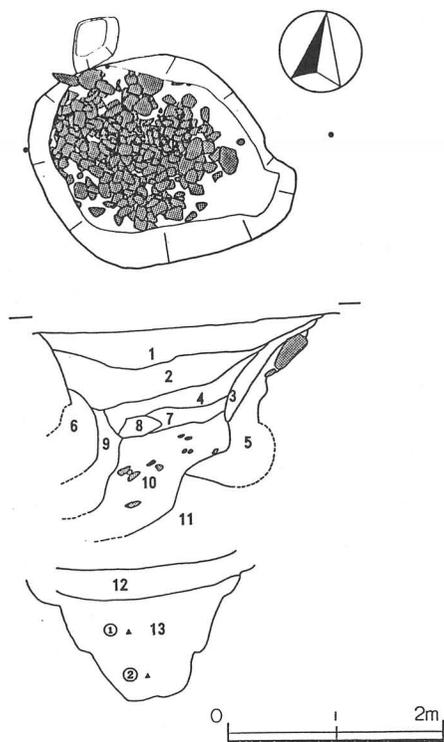
井戸跡は10基検出され、木枠を有したものが2基、他は素掘りのものであった。

S E71 (PL.11、Fig.32、Ch.45) —— G56区検出。上端径 236 cm × 190 cm の不整円プランで深さは 350 cm であった。覆土中段から下段にかけて多量の川原石が廃棄されており、遺物も川原石と共に伴する状態で出土している。主な出土遺物には、唐津皿 (Fig.32(2) - 1) や曲物 (Fig.32(2) - 2) の他、中国褐釉壺 (Fig.42-1)、唐津鉢 (Fig.43-1)、青磁、染付、白磁、美濃灰釉、同鉄釉天目、瓦器、搦鉢、羽口、鉄釘、鉄鍋、鉄砲玉、鉄滓、銅滓、銅線、刀子、無文銭、判読不能銭、洪武通宝、砥石、石臼、箸、漆器、不明木製品、くるみがあった。Fig.32(1) の層序図の中で①は唐津皿、②は曲物の出土地点である。

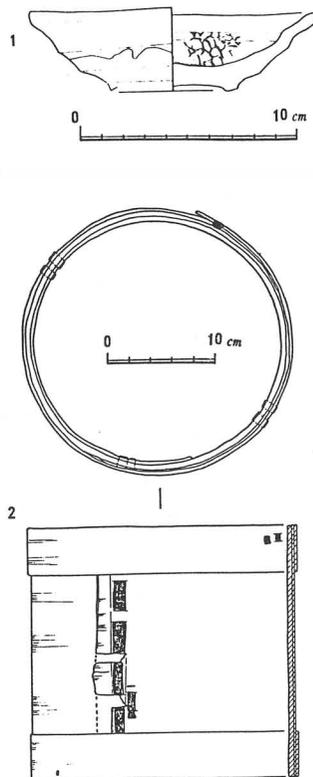
S E72 (PL.11、Fig.34、Ch.47) —— G57・58区検出。上端径 230 cm × 224 cm の円形プランで深さは 260 cm までしか掘り下げていない。出土遺物には、青磁、美濃灰釉、白磁、天目、瓦器、埴塼、染付、搦鉢、羽口、鉄釘、銅製香炉、無文銭、洪武通宝、元豊通宝などがある。

S E73 (PL.12、Fig.33、Ch.46) —— H57・58区検出。上端径 293 cm × 287 cm の不整方形プランを呈し深さ 445 cm である。覆土中間には40個前後の川原石が廃棄され、深さ 200 cm ~ 250 cm の所で木枠が検出された。木枠は隅柱横棧型 (PL.12(1)) であり、横棧は上下二段にわたって残っていた。隅柱はそれぞれ四角に整形されており上端は腐蝕のため先細になっている。下端は直接井戸底に置く

Fig. 32 (1) S E71実測図

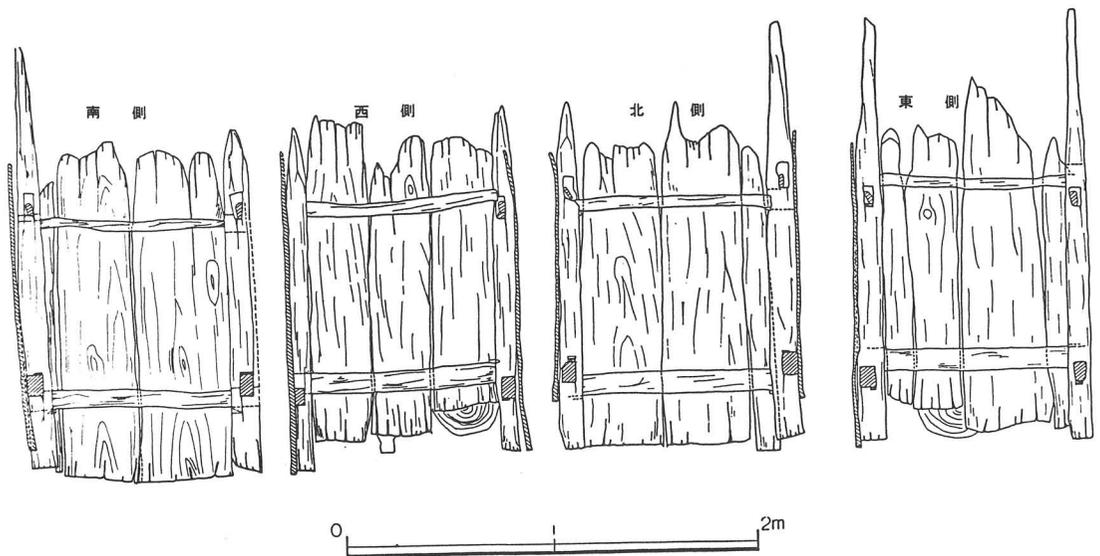
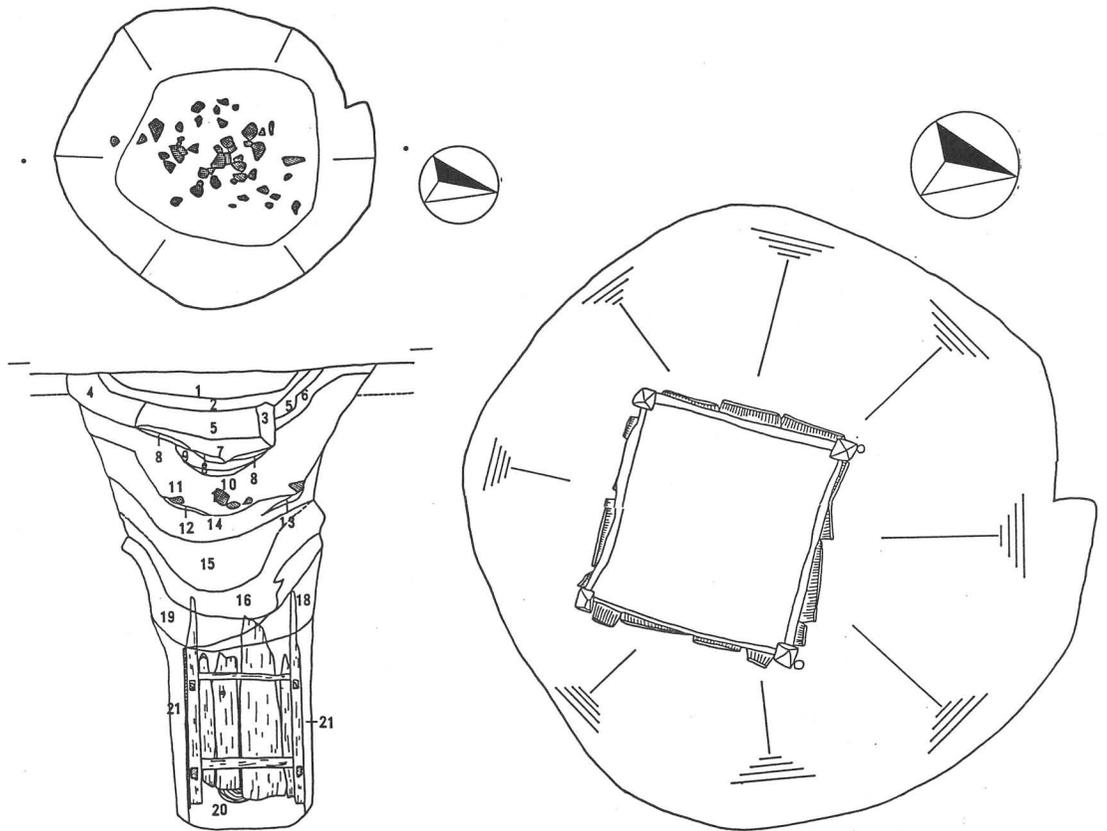


(2) S E71出土遺物実測図



状態で設置され、枘穴は交錯する高さに合わせて穿たれている。側板は、南・西・北・東壁ともに2~3枚の厚さ 3.5 cm 前後の板によって囲まれ、表面にはチョウナの痕跡が明瞭に残っている。側板は外から土圧によって固定されていたと考えられ、隅柱と横棧を組み合わせた後に入れられたのであろう。木枠の一辺 (隅柱間の長さ) はほぼ

Fig. 33 SE73 実測図



100 cmであり、横棧と隅柱の枿・枿穴には楔でもってしっかり固定しているものが多かった。(PL.12 (2)(3)(4))出土遺物としては、瓦器火鉢 (Fig.43-8)、かすがい (Fig.46-13)、笄 (Fig.48-21)、石臼 (Fig.49-1)、輪状石製品 (Fig.49-9) の他、埴塙、染付、青磁、播鉢、白磁、美濃灰釉、鉄釘、洪武通宝、開元通宝、判読不能銭、砥石、曲物底、不明木製品などがある。

S E 74 (PL.11、Fig.34、Ch.48) —— E48区検出。上端径 245 cm×260 cmの円形プランで深さ 245 cmまで掘り下げた。出土遺物としては、青磁碗 (Fig.40-3)、白磁、染付、鉄釘、不明鉄製品、洪武通宝、埴塙、漆器、砥石などがある。

S E 75 (Fig.34、Ch.49) —— E 47・48区検出。上端径 173 cm×160 cmの円形プラン、深さ70cmまで掘り下げた。出土遺物には、播鉢、小柄 (Fig.48-24)、漆器被膜があった。

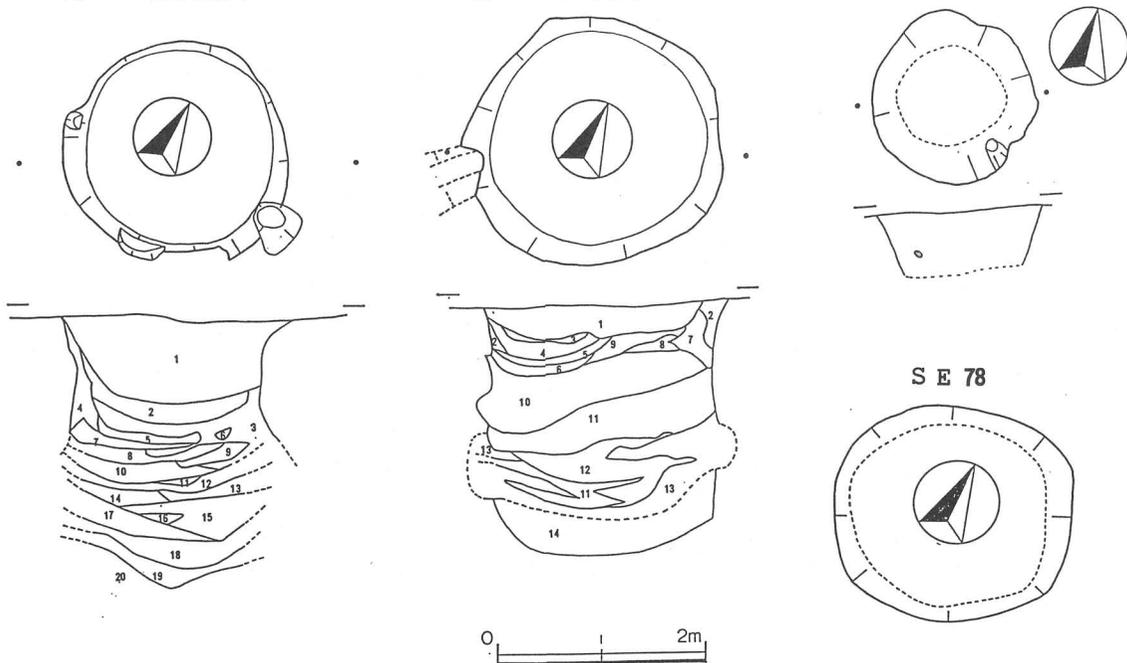
S E 76 —— H58区検出。上端径 157 cm×141 cmの円形プラン、深さ77cmまで掘り下げた。出土遺物には、青磁、美濃灰釉、鑄型、環状鉄製品 (Fig.47-7)、洪武通宝などがある。

S E 77 (PL.11、Fig.35、Ch.50) —— G48区検出。上端径 340 cm×320 cm、深さ 370 cmである。深さ 250 cm前後の所から隅柱横棧型の木杵が検出されたが、西側からの壁面の崩壊による破損が激しく明確な状態では把握できなかった。隅柱も、北西隅と北東隅だけに残り、横棧が側板の内外面にみられることから、S E 73の木杵と相違し変則的な構築形態だったと考えられる。それは、30cmから10cm前後の幅が狭い側板を四周に囲み、横棧を内・外の両側から挟み込む形で構築されていたのではない

Fig. 34

(1) S E 72実測図

(2) S E 74実測図



かという推測である。西側・北側の部分は上記の推測に類似した側板・横棧の関係が認められたが、東側と南側についてはあまりに残存状況が悪く判断の材料とはならなかった。出土遺物には、染付皿 (Fig.41-11)、赤絵皿 (PL.20-13)、美濃瀬戸鉄釉燭台? (Fig.42-12)、埴塙 (Fig.44-9)、耳かき (Fig.48-18)、鋏 (Fig.46-11) の他、青磁、美濃灰釉、播鉢、瓦器、唐津、鉄釘、宣徳通宝、皇宋通宝、判読不能銭、漆器などがある。

S E 78 (Fig.34) — E43区検出。上端径 223 cm × 220 cm、深さ67cmまで掘り下げたが、覆土堆積から近年に構築された井戸跡と確認された。出土遺物はなかった。

S E 79 (PL.11、Fig.36、Ch.51) — F58区検出。上端径 340 cm × 357 cm の円形プランで深さ 400 cm まで掘り下げた。掘り方は、フラスコ状の形態を有し 250 cm 前後の深さで湧水が多くなり、木製品の出土が顕著であった。(PL.11 (7)(8)) Fig.36 層序図のスクリーン部分には木製品が集中していた部分である。出土遺物には、美濃瀬戸灰釉皿 (Fig.42-8)、唐津、白磁、染付、青磁、美濃鉄釉天目、埴塙、播鉢、小札、鉄釘、鉄鍋、鉄鏝、越前、石臼などがある。

S X 165 — G57区検出。上端径 174 cm × 140 cm で深さ 105 cm まで掘り下げた。天目、染付、鉄釘、鉄滓、不明鉄製品などの出土遺物がある。

S X 189 — E 46・47区検出。上端径 140 cm × 137 cm、深さ 107 cm まで掘り下げ 100 cm 前後の所に灰の分布がみられた。出土遺物はない。

Fig. 35 S E 77実測図

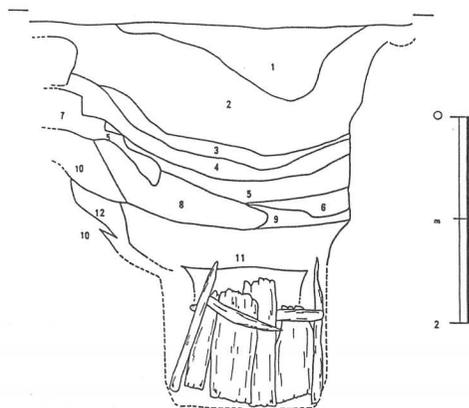
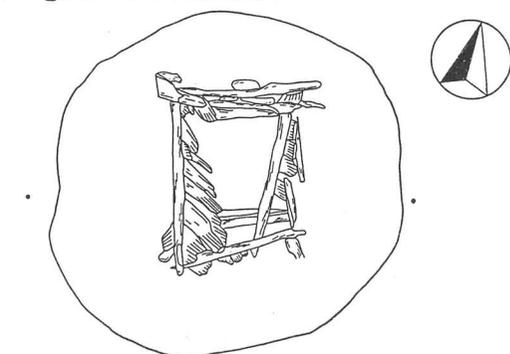


Fig. 36 S E 79実測図

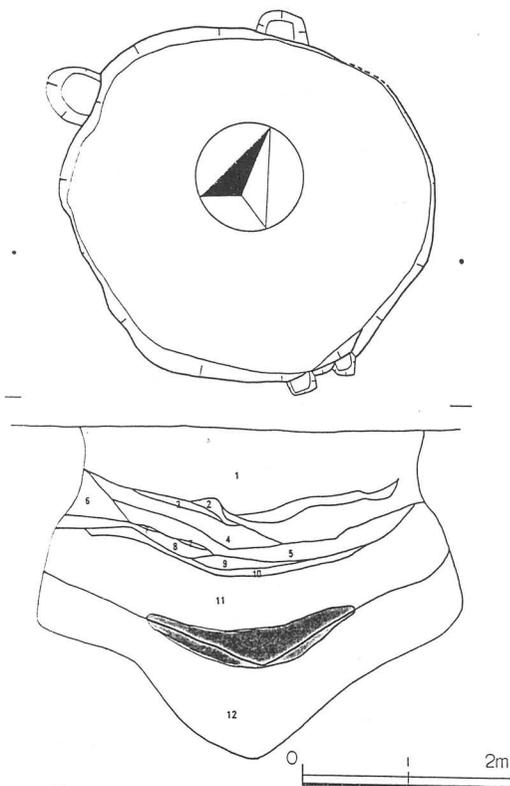
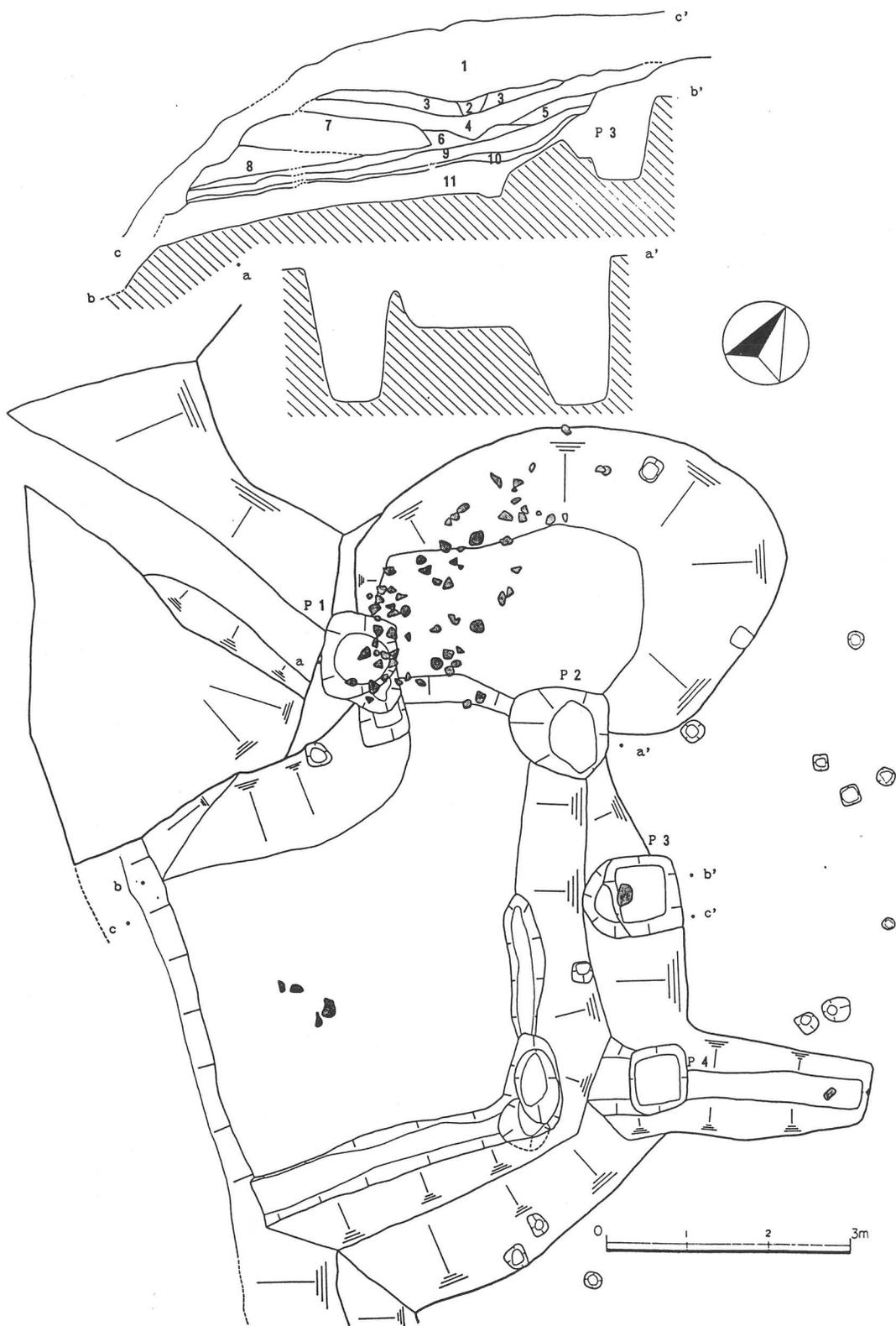


Fig. 37 SB57(門 跡)・SH10(樹形遺構)実測図



4. その他の遺構

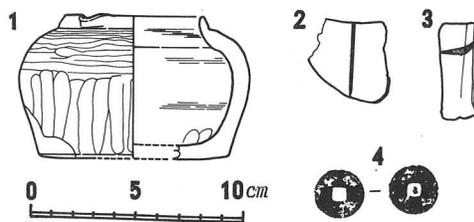
4-a 樹形遺構 (PL.14、Fig.37、Ch.52) [SH10・SB57]

昭和57年度・同58年度の2ケ年にわたって調査した。F・G 40・41 区の検出で北館の北西端に位置する。北館と西館に存在する二重堀に向けて構築されており、北館側から見た場合緩いスロープを下りて左手に折れ、その部分に門跡 (SB57) と考えられる柱穴が2個並列している。(PL.14(2)、Fig.37 Pit1・Pit2) 門跡の幅は9尺から10尺で、その部分がやや階段状を呈して下段のテラス部分に降りてゆく。テラス部分は、400 cm × 400 cm で約16㎡の面積を有し西館方向の堀跡に開いている。テラス部分の東・南側には溝が存在しており板壁状の施設があった可能性もある。また、東側壁面の上端には一辺70 cm以上の柱穴が2個並列しており (Fig.37 Pit3・Pit4)、橋梁等の施設等に利用したのであろうか。門跡の部分から上方にかけては川原石が敷きつめられた状態で検出され、常時通路として使用されたことを思わせる。出土遺物としては、青磁、白磁、染付 (Fig.41-18)、美濃瀬戸水注 (Fig.42-3)、同皿 (Fig.42-11)、鎌 (Fig.47-3)、砥石 (Fig.49-8)、唐津、瓦器、越前、硯、鉄釘、小札、無文銭などがあり、時期的には15世紀後半から16世紀末のものまでであり、本遺構は全時期にわたって使用されたと思われる。さらに、まだ鑑定を受けていないが伊万里と思われる破片も出土しており、17世紀以後も何らかの形で本遺構が残っていた可能性もある。

Fig. 38 (1) SKOI - 人骨実測図



(2) SKOI 出土遺物



4-b 土塚墓 (PL.13、Fig.22、Fig.38、Ch.27、Ch.53)

D56区検出。南側をSX 195に重複していたため規模は明確でないが、径110 cm、深さ55 cmの播鉢状を呈する土塚と推定される。人骨は北頭位仰臥屈位の状態で検出され、頭蓋骨以外は残存状況が悪く、骨粉状になった部分が多い。土塚内からの出土遺物には、瓦器片口壺 (1)、不明鉄製品 (2・3)、無文銭があり、埋葬時期は16世紀と

考えてよいと思われる。なお、詳細は、「Ⅵ浪岡城跡出土の人骨について（森本岩太郎）を参照願いたい。

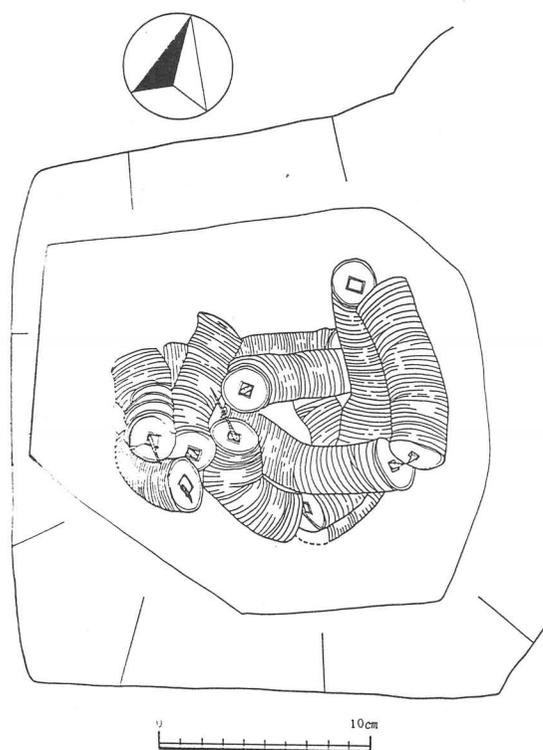
4-c 舟底型遺構

S X 195 (PL.7、Fig.22、Ch.27) — D・E56区検出。長軸 350 cm、短軸 220 cm の長方形プランを呈し、深さ 110 cm 以上の舟底型形態を示す遺構である。覆土は自然堆積の状況を呈するが、灰を含む層が厚く堆積し、その中から多量の遺物が出土している。主なものをあげると、白磁八角小碗 (Fig.41-3)、中国褐釉壺 (Fig.42-1)、朝鮮碗 (PL.20-8)、瓦器火鉢 (Fig.43-7、Fig.44-3)、同壺 (Fig.44-1)、漆附着の不明鉄製品 (Fig.45-19)、火箸 (Fig.46-4)、筥引金 (Fig.46-10) の他、青磁、搦鉢、羽口、鉄釘、小札、小刀、鉄滓、砥石、硯、石鉢、判読不能銭、洪武通宝、景德元宝、永樂通宝、元符通宝、開元通宝、元豊通宝、朝鮮通宝、大平通宝、祥符通宝、元祐通宝、皇宋通宝、聖宋通宝、淳化元宝、炭化米、くるみなどである。本遺構の性格としては、遺物の出土状況から骨類は検出されていないが土塚墓も考える必要があろう。

4-d 備蓄銭遺構

S P 10 (PL.22、Fig.31、Fig.39) — G45区検出。一辺 23 cm 前後の方形のピットで深さは 40 cm であった。その覆土全般に、縄紐 (?) で連なった銭貨が埋設されており、総数 903 枚を数えた。周辺の遺構には、性格不明の竪穴遺構と若干の柱穴がみられるだけで、本遺構が建物跡などに伴うものではなく単独で存在した可能性が高い。S T 207 で検出された銭貨 (Fig.19) が、竪穴建物跡に伴う点と

Fig. 39 S P 10 銭貨出土状態実測図



は異なる。なお、名称・出土数については、Ⅶ-5 銭貨の項目を参照されたい。

4-e 溝跡

昭和58年度調査で検出した溝跡には、S D 70 (G・H56・57区)、S D 72 (G・H58区)、S D 73 (E47・48区) などがあり、いずれも城館期以前の構築であり、覆土からは土師器・須恵器しか出土していない。

4-f 焼土遺構

焼土遺構は、遺構確認面から上部に浮いた状態で検出され、かまど、いろり、落成時の焼失に伴うものか判然としない。特に顕著な出土例としては、H56区 S B 30 南側、F 47区 S T 218 周辺、F・G48区 S E 77 北側などにみられるが、遺構に伴うかどうかは不明である。

IV 出土遺物

昭和58年度の調査によって出土した遺物の数は、陶磁器類約2,700、鉄・銅製品約1,050、石製品約240、木製品約55、銭貨約1,570、自然遺物30、骨類約40、土師器・須恵器片平箱10であり、すべてを報告することは紙数の都合で無理があるため、主要なものに限り報告する。

1. 陶磁器類

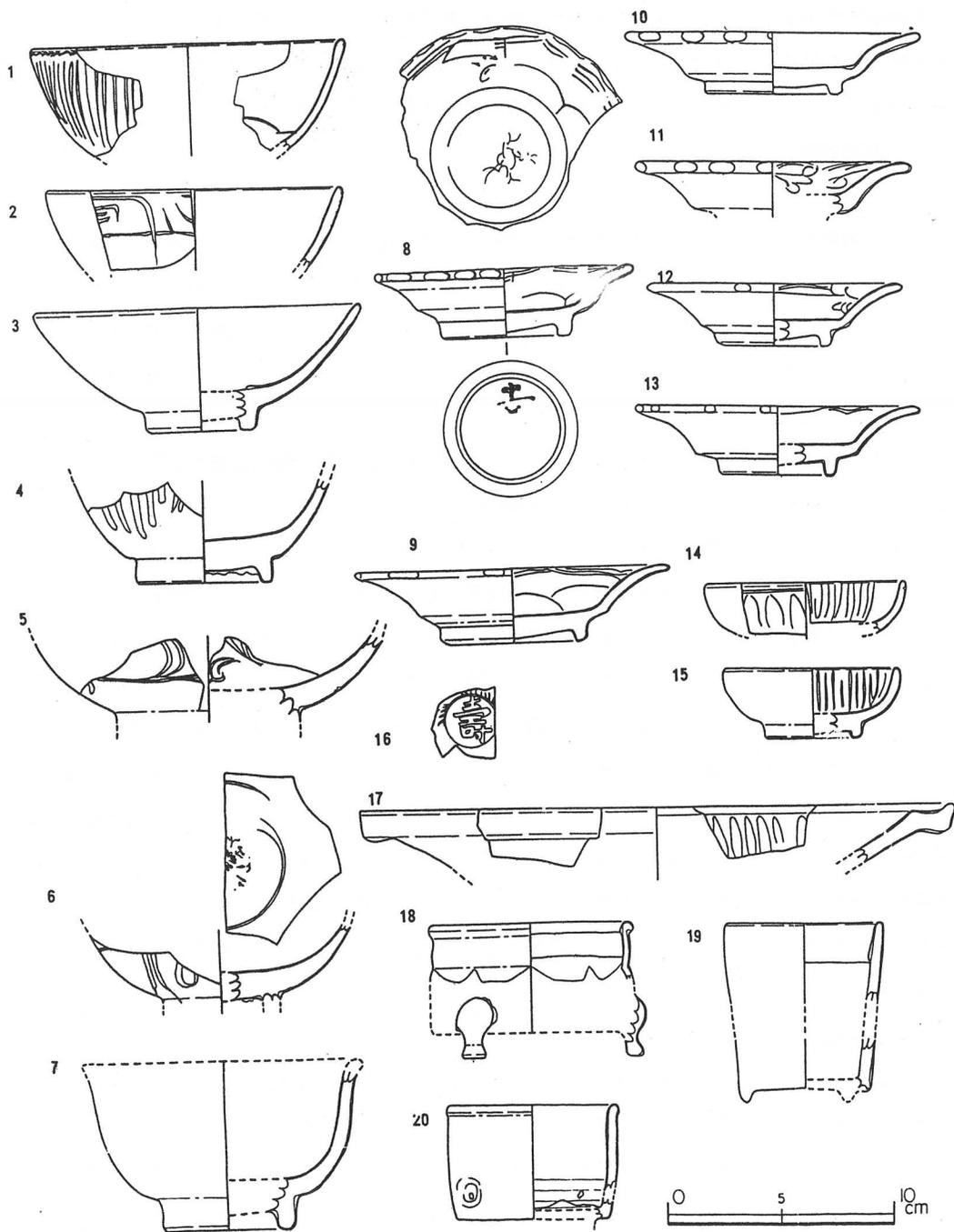
A 青磁(PL.15、Fig.40、Ch.54)

青磁の器形としては、碗、皿、小皿、盤、香炉がある。碗の中では外面胴部に蓮弁文を省略した線描のもの(Fig.40-1)が多く、外面口縁部にくずれた篋描雷文帯を有するもの(Fig.40-2)、内外面に片刃彫りの劃線文を有するもの(Fig.40-5・6)、無文で口縁が直線的に開くもの(Fig.40-3)と口縁が外反気味に開くもの(Fig.40-7)がある。見込の部分では、蛇の目状あるいはそれに近い状態で施釉がなされないもの(Fig.40-3)、印花状の文様がみられるもの(Fig.40-6)、「寿」という文字を刻したもの(Fig.40-16)などがあり、高台部の施釉は畳付の部分までのものが多い。皿は、いわゆる稜花皿といわれる口径10~14cmぐらいのものが9割以上を占める。内面口縁部に流水状の櫛目文と劃線文がみられるもの(Fig.40-8・9・11・12・13)と文様のみられないもの(Fig.40-10)がある。見込には印花文を施す例(Fig.40-8・9・10)と全面施釉がなされるものが多いのに対し、重ね焼きのためか見込中央部の釉を丸く剥ぎ取った例も2~3みられた。Fig.40-8は底の一部に朱筆で「吉」と推定される文字を書き入れている。また、8~9cmの口縁が内湾気味に立ち上がる小皿がある。外面に小さな鎬状の蓮弁文を有し、内面に縦位の劃線を入れているもの(Fig.40-14)と内面の劃線だけのもの(Fig.40-14)とがある。盤としては、口縁が折れ縁状に立ち上がり内面胴部に菊花状のケズリを回しているもの(Fig.40-17)があり、他の青磁と違って透明感の強い釉色を呈している。香炉には、図上復原できるものとして3例あり、口縁がやや玉縁状になり胴部下半がふらんで脚に連なるもの(Fig.40-18)、直線的に短筒状の形をとり内面口縁直下で釉止りが認められるもの(Fig.40-19)と同様の形で内面底部近くまで施釉されるもの(Fig.40-20)などがある。

B 白磁(PL.16、Fig.41、Ch.55)

白磁の器形としては、皿、碗あるいは小碗がある。皿には薄手に成形され口縁が外反するタイプとやや肉厚に成形され口縁が内湾ぎみに立ち上がるタイプがある。前者は、色調・胎土ともに白色のもの(Fig.41-1)と黄白色で高台畳付部の外面を斜めに削るもの(Fig.41-2)がある。後者には高台部を重ね焼きのために四ヶ所ケズリを入れ、四足状に成形したもの(Fig.41-4)が多く、本例は高台部および底まで全面施釉している。碗あるいは小碗と考えられるものは、高台部を四ヶ所ケズリ、胴部を八面に面取りした例(Fig.41-3)がある。

Fig. 40 青磁突測図



C 染付 (PL.16、Fig.41、Ch.56)

染付の器形としては、碗、皿がある。碗の中には、底部が饅頭型で見込に人物画文、底に「大明年造」銘が書かれたもの (Fig.41-5)、口縁が外反し内面口縁部に雷文帯、外面に牡丹唐草文を描いたもの (Fig.41-6)、口縁部内・外面に一条の圈線だけをめぐらす器高の低いもの (Fig.41-7)、口縁部内面に二条の圈線、外面に一条の圈線と唐草文 (?) を施すもの (Fig.41-8) などがある。皿は三つのタイプに分類できる。ひとつは、高台を有し口縁が外反する例で、胴部外面に牡丹唐草文を描き、見込に玉取獅子文 (Fig.41-9・10) や羯磨文 (Fig.41-11) を描くものが多い。ふたつめは、口縁が内湾して立ち上がり底が碁笥底を呈する例で、口縁部外面に列点状に省略した波涛文帯を有し (Fig.41-12・13)、下半に芭蕉葉文、見込に花卉状文を有するもの (Fig.41-12)、下半は圈線だけで釉止りがみられ、見込は無釉となっているもの (Fig.41-13) がある。また、外面胴部に芭蕉葉文、見込に捻花文を有するもの (Fig.41-14)、外面胴部に簡略化した字のような文様、見込に吉祥文を描くもの (Fig.41-15) があり、焼成状態が軟質な類 (Fig.41-12・13) と硬質な類 (Fig.41-14・15) に分けることができる。最後は、高台を有し口縁が内湾ぎみに立ち上がる例であり、内面口縁部に四方禪文 (Fig.41-16)、内面胴部に花鳥文 (Fig.41-17・18)、見込に花卉文 (Fig.41-19) を描くものなどがあり、釉調・呉須の発色が前記二タイプより彩かな濃紺色を呈するものが多い。

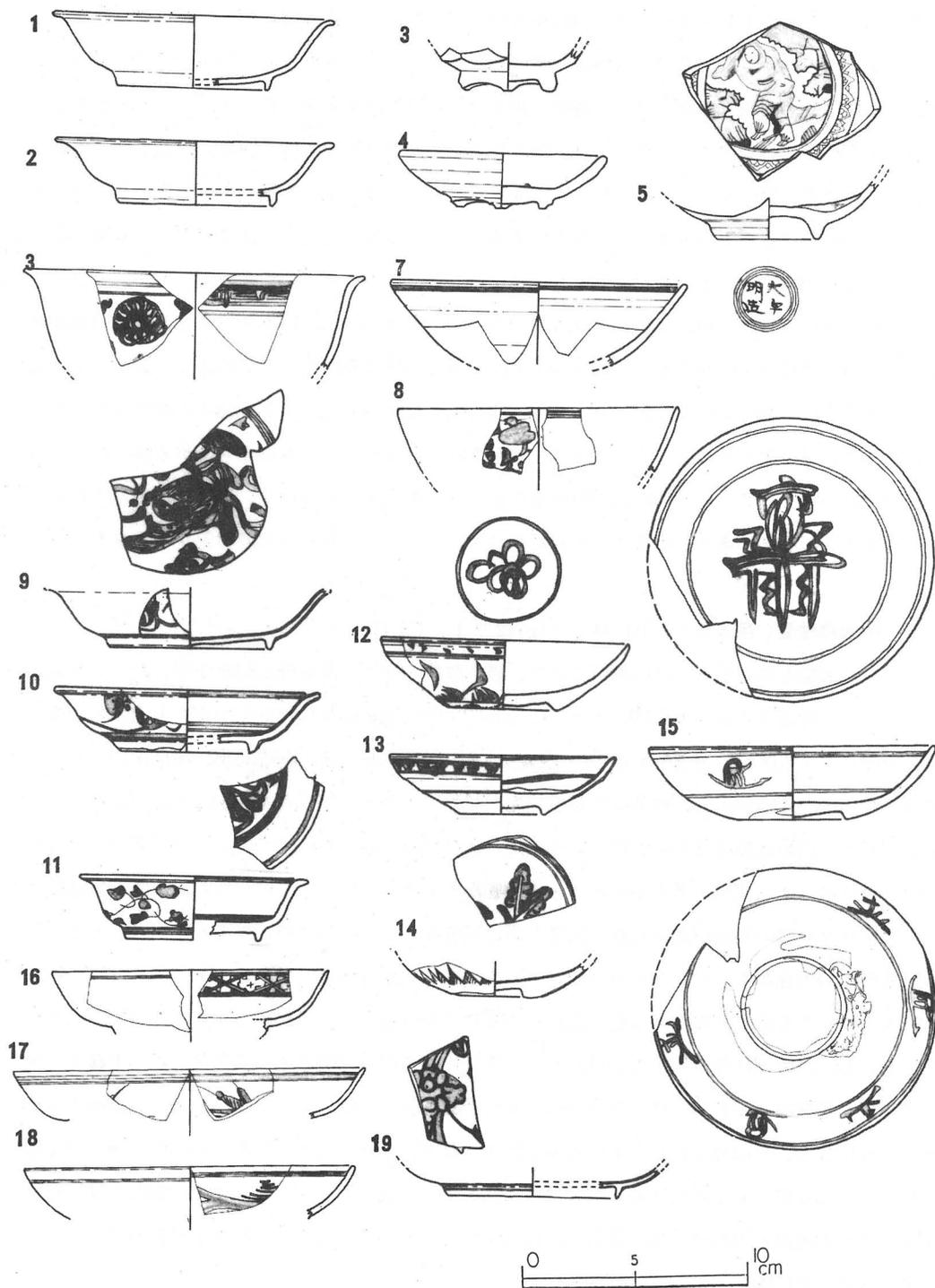
D 中国褐釉壺〔呂宋壺〕 (PL.19、Fig.42-1、Ch.57)

いわゆる呂宋壺と称される一群の陶器であり、破片数約60片から復原推定図を作製した。(Fig.42-1) 出土区は後述するように〔XIII. まとめの項参照〕最大130m離れた地点からも出土しているがE56区を中心とする区域、遺構覆土から出土している。器高35cm前後、胴幅30cm、頸部径12.5cm、底径15cmぐらいの計測値があり、釉調は黄褐色で光沢が強く、外面は底から4~5cmぐらいの所で釉止りが認められ、内面は頸部に若干と胴部に斑点状および底部にかなりの釉の流れ込みが認められる。成形は、全体にロクロ成形と考えられるが、内面底部上半に刷毛目状の痕跡が残り、胴部下半は指ナゲのためかロクロ痕の消滅が認められ、胴部上半は明確なロクロ痕が認められることから、上半と下半では成形上の相違があったかもしれない。胎土の一般的色調は黄白色であるが部分的に(特に内面)暗灰色を呈する所もあり、多数の気泡も認められることから緻密とは言いがたく、また微細な石英も混入している。口縁部は残存片がないけれども、頸部立ち上がりの観察では上部にむかって緩く外反するようで、頸部のくびれ部分には段状の高まりが認められる。胴の張り出しは、底から20cmぐらいの所で最大になり、その部分から上半は器厚が増す。耳部は頸部立ち上がり部分から約1cm下方に横位に付着しており接合は粗雑な状態である。残存状況から四耳と考えられる。また、胴部上半・頸部下に重ね焼きの痕跡と思われる粘土付着物が輪状に廻っている。底は薄手で平底と思われる。

E 赤絵 (PL.20、Ch.58)

北館の発掘調査では9片の出土があり、昭和58年度は皿あるいは碗の口縁部片が1点出土している。

Fig. 41 白磁・染付実測図



(PL.20-13) 口縁の外反度はきつく、内面に赤色の圏線一条と不明文様、外面に圏線一条と牡丹文状の文様があり、口唇部に緑色の釉が点状に落ちている。

F 朝鮮 (PL.20、Fig.42、Ch.59)

北館の発掘調査では29片の出土があり、昭和58年度は11片の出土である。E 56・F 56・F 58区だけで9片の出土をみた。器形としては碗と皿があり、推定口径15cm、器高8cmを測る碗 (Fig.42-2) を復元実測した。朝鮮で製作されたと考えた陶器の胎土は、暗灰色の色調で白色砂が多量に含まれる特徴があり、表面も光沢のある透明釉のもの (PL.20-4・5・6・7) からくすんだ灰白色 (PL.20-1、Fig.42-2)、くすんだ暗灰色のもの (PL.20-2・3・8・9)、黄灰色の透明釉 (PL.20-10) など各種存在する。

G 美濃・瀬戸 (PL.17、Fig.42、Ch.60)

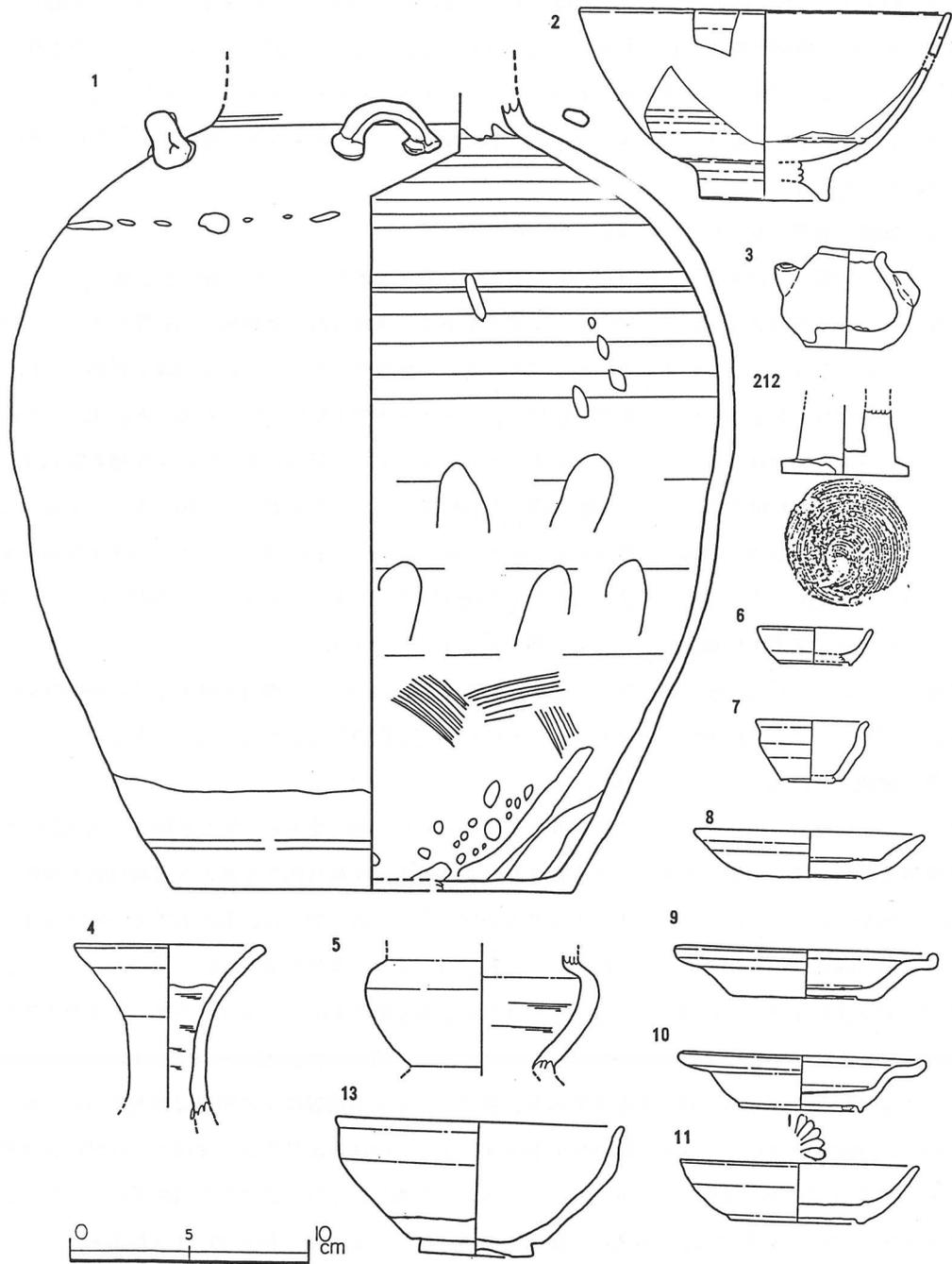
美濃・瀬戸の製品には灰釉系と鉄釉系のものがある。前者の器形としては、碗、皿、壺、水注、浅鉢、後者には碗 (天目茶碗)、皿、燭台 (?) などがある。灰釉の碗には胴部の内湾度が著しい口縁部片 (PL.17-7)、壺にはいずれも表面が二次加熱のため釉面が凹凸している口縁・頸部片 (Fig.42-4) と胴部片 (Fig.42-5) がある。皿には、口径4.8cmの小型紅皿状のもの (Fig.42-6) から、口径10cm前後の見込の釉を丸くふきとるもの (Fig.42-8)、見込に菊の印花文を施すもの (Fig.42-11)、口縁が折り縁状を呈し見込と底に輪ドチ痕が残るもの (Fig.42-9・10) などがある。浅鉢としては口径30cm前後、施釉が内外面ともに胴部で止まるもの (PL.17-1) と、口径4.5cm前後、天目茶碗を小型化したような器形を呈するもの (Fig.42-7) がある。水注は1点の出土があり、底は糸切痕が残る胴部下半で釉止りがみられる例 (Fig.42-3) である。

鉄釉のものには、口縁が緩やかに外反する天目茶碗 (Fig.42-13)、燭台と推定される糸切痕を残す円筒状底部片 (Fig.42-12)、他にFig.42-8の灰釉皿に類似した器形の皿などがある。

H 唐津 (PL.18、Fig.43、Ch.61)

唐津の出土状態は、出土区によってかなりの相違がみられ (XIII. まとめ、図2参照) 浪岡城跡への搬入時期も16世紀後半以降と考えられるところから、遺構等の構築時期等を推定する時は有力な資料となる。器形としては、皿、鉢、壺と考えられる袋物などがある。皿には、胴部上半で一度すばまり口縁が内湾気味に立ち上がるもの (PL.18-1、Fig.32-1)、器厚が薄く口縁が内湾して立ち上がるもの (Fig.43-2)、高台暈付部が広く整形されているもの (Fig.43-3) があり、いずれも施釉は胴部下半で止めている。重ね焼きの痕跡としては、胎土目積み (Fig.32-1、Fig.43-3) と砂目積み (Fig.43-2) が認められ、現在までの所、層位的、出土遺構等による相違は顕著でない。鉢には、口径35cm前後の大皿タイプの口縁部片 (Fig.43-1)、見込および底部全体にタール状の付着物が認められる底径8cmの底部片 (Fig.43-5) がある。袋物としては、底にやや高台状の凸を整形し、外面底部上半に砂の付着物および窯印状の篋書き痕が認められる器片 (Fig.43-4) がある。内面に施釉がなされていないため壺状のものと考えられるが器厚が薄く底径も比較的大きいことから深鉢状

Fig. 42 中国褐釉壺・朝鮮・美濃瀬戸実測図



の器形になるのでしょうか。

I 越前

器形としては甕、浅鉢、擂鉢が認められるが、すべて小破片のため図示できなかった。甕には口径50cm以上と推定される大甕の類と20cm前後の中型の甕がある。胎土は硬緻な明灰色を呈し、外面は光沢のある緑褐色の釉調、内面は渋い赤褐色の色調を呈するものが多い。胎土の中に大粒の白色石英砂が含まれた一群の甕片があり、越前か信楽か筆者には区別しがたい。浅鉢は口径20cm、器高6cm前後のもので明確な施釉は認められない。擂鉢は後述。

J 瓦器 (Fig.43・44、Ch.62)

瓦器という名称については、「中世土師質土器」・「瓦質土器」と呼称されている一群の土器の中で器形が火鉢・火舎・壺・行火等に限定されるものを言っている。昭和58年度に出土したのものから主な製品を述べると、火鉢としては平面形が方形を呈し、口縁が逆L字状になり口縁外面の2条の隆帯間に四菱状のスタンプ文を廻らす例 (Fig.43-6) がある。口径は約40cmの大型の製品で、脚が付くかどうかは不明である。また、平面形が円形を呈するものとしては、Fig.43-6と同じ断面形を有し、口縁部および胴部中央に波状形の隆帯文を貼り付け、口縁部下半に五弁花状の貼り付け文をみせるもの (Fig.44-3) がある。本製品は、須恵器質の焼き上がりを呈し、薄手に成形されているものの製作技法的には瓦器の中に含めてさしつかえないと考えられる。口径32cm前後である。以上が比較的大型の火鉢であるのに対し、口径15cm前後の小型の火鉢も存在する。胴部くびれに算木状の文様と丸に十字を四方に分割したようなスタンプ文を有するもの (Fig.43-7)、三脚を有し底部上面にU字で指文状のスタンプ文を有するもの (Fig.43-8)、胴部くびれに八菱状のスタンプ文を有するもの (Fig.44-2) などである。いずれも平面形は円形である。壺形の器形としては、広口壺で胴部上半に2例の雷文スタンプ文と一列の三つ巴文スタンプ文を廻らすもの (Fig.43-9) と無文で胴部上半は横位のナデ、下半は縦位のナデ痕が認められる片口を有するもの (Fig.44-1) がある。どちらも部分的に黒色研磨処理をした部分がある。他の器形としては、破片だけのためよくわからないが、燭台などの台付底と考えられる雷文スタンプと劃線文を有するもの (Fig.43-10)、行火等に付属する取手と考えられる破片 (Fig.43-11) などがある。

K 擂鉢 (表1)

浪岡城跡から出土する城館期の擂鉢を大別すると、I 備前系、II 唐津系、III 珠洲系、IV 越前系、V 産地不詳系、と五分類でき、近世から現代にいたる施釉系擂鉢を加えると、出土擂鉢の概略が把握できる。昭和58年度出土のものには、全形を理解できる良好な資料がなかったため、実測図・写真等は省略し、昭和53年から同58年まで出土したものを別表のように分類してみた。

L 土器・土製品 (Fig.44、Ch.63・Ch.64・Ch.65)

土器質のものとしては、鋳型、坩堝、羽口等のいわゆる鋳造関係品がある。鋳型は、S T 210より大量に出土し (PL.6 - (3))、「X. 浪岡城跡北館出土の鋳銅関係遺物について」の項目で詳細な報

Fig. 43 唐津・瓦器実測図

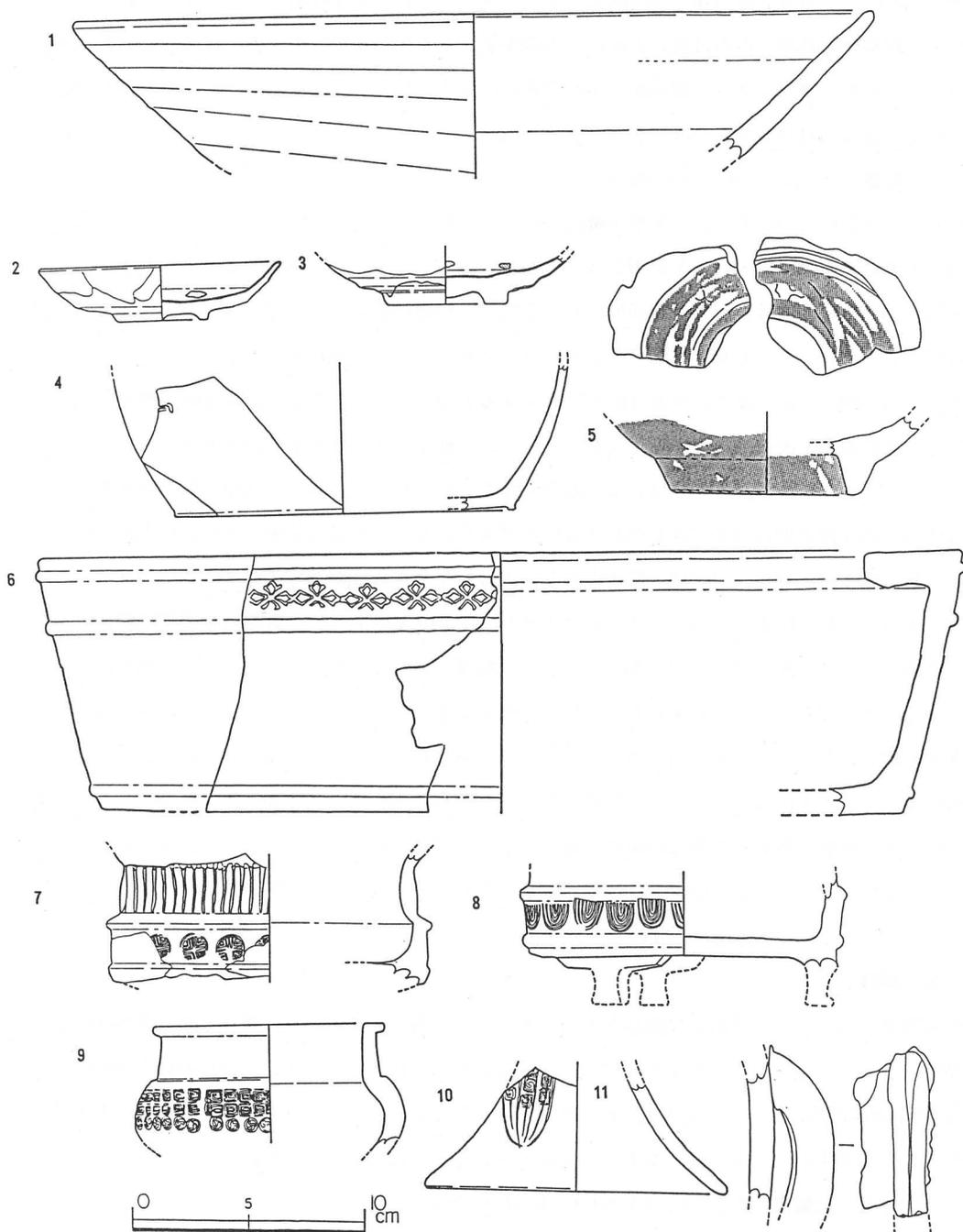
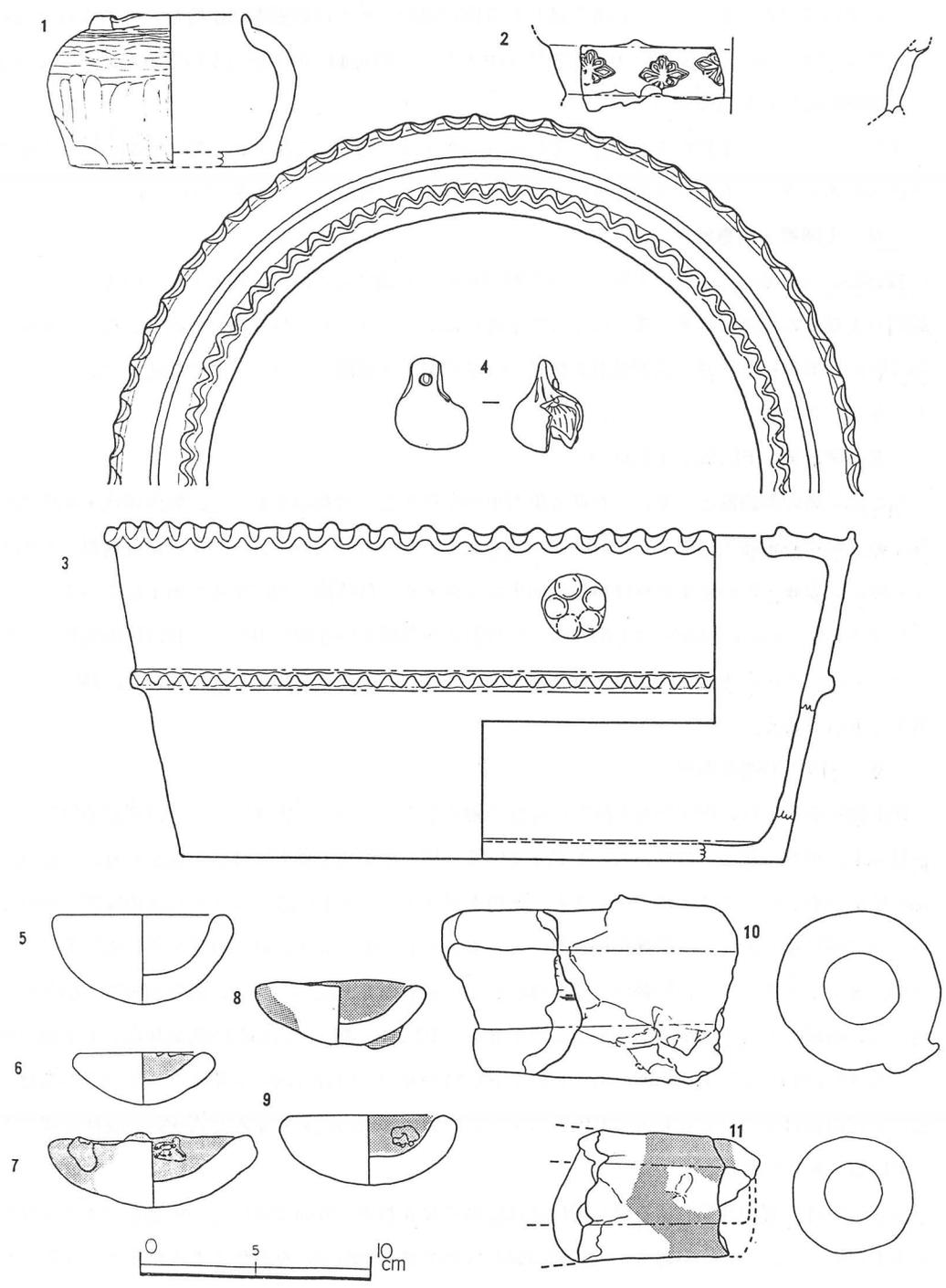


表1 播鉢分類表

	系	細分類	器形の特徴				卸目の特徴		工具の特徴	成形上の特徴	備考		
			口縁	胴部	底部	色調	胎土	本数				施文の方向	
I	備前系	Ia	直行して逆くの字状に立ち上がる	ろくろ指などで	—	赤褐色	赤褐色で石英質の白砂が多量混入	7(本)	左回転施文	幅5mm前後の櫛目でV字状の櫛目	ろくろ使用	軟質酸化状態	
		Ib	外面に3段、内面に大きなえぐり有	—	内面の櫛目文を不規則に施文	くすんだ褐色	小さい白砂を斑点状に含む	不明	不明	先丸の櫛目	櫛目を斜め方向から入れる	炆器質	
		Ic	外面の立ち上がりは3.5cmほどの高い立ち上がり	外面は暗緑色	—	口縁外面から内面にかけてはあずき色、胴部外面は暗緑色	石英と白砂を多量に含む	9本以上	—	—	幅3mm前後のV字状の櫛目	口縁部外面直下に重ね焼きの痕跡	—
		Id	外面の幅4.3cmで外面に4段、内面に1段を有する	—	—	赤褐色	白砂を多量に含む	不明	—	—	先丸の櫛目	—	片口
		Ie	外面は溝の深い3段、内面は外反している	—	—	暗褐色で口縁の一部に灰釉がみられる	2mm前後へ白砂と石英を多量に含む	5	左回転施文	—	幅4~5mm前後のV字状の櫛目	—	—
II	唐津系	IIa	外面に折り曲げ、玉縁状に成形、外面は無釉	外面にあずき色の釉を施し内面に青海波の叩目があり、その上に櫛目を入れている	底に胎土目トチ有、一部灰釉がみられる	外面はあずき色、内面は黄灰緑色	細かい石英と白砂、黒砂を含む	5	左回転施文の後無作為に施文	先丸で幅7mm前後の櫛目	口縁部外面は下から施釉	青海波の叩目及び胎土目のトチから唐津系と考えられる	
III	珠洲系	IIIa	内面に波状櫛目文	ろくろ未使用、輪積み	静止糸切り底のものもある	暗灰色	石英と白砂及び小石を多量に含む	7	左回転施文が多い	幅3~5mmのV字状の櫛目	—	珠洲第V期の痕跡有	
		IIIb	—	—	—	—	—	—	—	先丸の櫛目	—	—	
		IIIc	直行きみにきれる	内面の櫛目に直行するものと波状を呈するものがある	—	—	—	—	不明	—	幅2mm前後のV字状の櫛目	輪積みの後、ろくろびき	—
IV	越前系	IVa	内面に段、あるいは内湾きみな胴部からの立ち上がりが見られる	内外面にハケ目痕がみられる	比較的底部の立ち上がりは未調整なものが多い底は切り放しではなく設置状態のままである	基本は黄白色だが赤褐色~黒色部分まで焼成箇所によって違いがみられる	0.5mm前後の白砂を多量に含むが比較的精選された粘土を用いている	8~10	左回転施文	幅4mm前後でV字状~凹状の櫛目	部分的に赤褐色の化粧土をぬっている可能性がある	—	
		IVb	内面2cm下に一条のくぼみを有する	—	—	暗灰色	白砂が多量に含まれている	10~13	—	幅2.5mmでV字状~凹状の櫛目	内外面ともハケ目で整えられている	IVaよりも若干硬質である	
		IVc	やや内湾きみに一条の段を呈する	—	—	暗緑灰色	—	9	—	幅3.3mm前後でV字状~凹状の櫛目	—	IVbよりもさらに硬質である	
		IVd	IVbと同じ	—	—	赤褐色	—	—	不明	—	—	—	—
		IVe	内面2cm下に一条の沈線を有する	—	—	黄赤白色	白砂よりも石英が多く含まれる	5~7	—	—	—	—	IVaよりも軟質である
V	産地不詳系	Va	直行して立ち上がり、内面に波状櫛目文を施している、外面は横位の調整	外面は無作為調整及び篋削り痕有	—	黒色~赤褐色	細かい石英と白砂を多量に含む	6	左回転施文	幅3~4mmのV字状の櫛目	櫛目は縦方向の後、口縁の横位方向に施している	—	
		Vb	丸く削った直行の立ち上がりで内面に波状櫛目文を施している	口縁に近い部分は横位の調整、他は無作為調整	据置輪積痕有	表面黒色、胎土赤褐色	—	9	—	幅3mm強のV字状の櫛目	—	—	
		Vc	直行して立ち上がり、外面は横位の調整	外面は無作為調整	—	黒色~赤褐色	—	5~7	—	—	幅4mm強のV字状の櫛目	左からゆるい弧を描く様に櫛目を施している	—
		Vd	外反し、内面に3.3cm幅で同心円状の沈線を6本入れている	—	—	黒色~灰色	—	7	—	—	幅4~5mmのV字状の櫛目	縦方向の櫛目に一部カーブを入れている	—
		Ve	直行して立ち上がり外面は横位調整	—	縦方向にハケ目痕、篋削り痕有	黒色、灰色、赤褐色、黄灰色	—	6~7	—	—	先丸で幅広(4.6mm)の櫛目	焼成部分によっては須恵器質に近い焼き上がりだが全体的には酸化状態と還元状態が混ってみられる	—
		Vf	直行しやや丸みを持つ、外面は横位の調整	外面は横位調整もみられるが部分的なものである	—	黒色、灰色、赤褐色	若干の石英と細かい白砂を含む	9	—	—	幅3mm前後のV字で深めの櫛目	口縁において櫛目と櫛目の間が4~6cmほど幅広に施こされている	—
		Vg	やや外反で外面は横位調整	外面は無作為調整	据置	黒色、灰色、黄灰色	細かい石英と白砂を含む	5~6	不明	—	幅4mm前後のV字状の櫛目	—	—
		Vh	—	—	—	黒色、暗灰色、赤褐色	石英、白砂を多量に含む	6	—	—	幅6mmの先丸の櫛目	—	—
		Vi	内湾きみで内面に一条の段を呈する	外面は横位調整	据置輪積痕有	赤褐色~灰色	若干の石英と多量の白砂を含む	8	左回転施文	—	幅4mm弱のV字状の櫛目	縦位の櫛目を間隔をとらず全体的に施こしている	—
		Vj	直行し内、外面とも横位調整	外面は無作為調整	—	黄灰色	不純物の少ない良質の白色粘土を使用している	6	—	—	幅4.6mmのV字状の櫛目	櫛目の入れ方が左に対して強めに施こされている	—
		Vk	若干、横位調整	外面は篋削り痕が明瞭にみられる(縦位)	—	暗灰色	若干白砂を含む良質の粘土を使用している	5 8	不明 無作為	—	幅6mmの先丸の櫛目 幅3mm弱のV字状の櫛目	—	—
VI	施釉部	(省略)											

Fig. 44 瓦器・土鈴・埴塼・羽口実測図



告があるため参照願いたい。埴埴は、すべて浅いU字状の器形を呈するもの（Fig.44-5）から、口径6cmの小型のもの（Fig.44-6）や口径7～9cmの中型のもの（Fig.44-7・8・9）で内面に銅を主成分と考えられる溶解物が付着している例が存在する。〔Ⅹ図-2〕でみられる通り、発掘区全域に分布している。羽口も前述した2例の遺物とともに鑄銅等に使用したと考えられるもので、外径7cmのもの（Fig.44-10）や外径5cmのもの（Fig.44-11）が出土しており、一端に高温による溶解物の付着が認められる。

土製品としては、土鈴が1点出土している。高さ4cm、幅3cmを測り、上端に一孔があり下部に切り込みがあるけれども一部欠損しているため丸（がん）はなかった。（Fig.44-4）

M 土師器・須恵器

城館期以前の遺物として、土師器・須恵器があり、平箱にして10箱程度出土している。しかし、城館期およびそれ以降の地業・攪乱によって小破片にて出土するものが大部分である。なお、昭和53～58年度の一括資料を「ⅩⅦ. 浪岡城跡北館出土の須恵器・土師器について」にて詳述しているため、そちらを参照されたい。

N 伊万里（PL.21、Ch.66）

城館期以後の陶磁器として、いわゆる伊万里が存在する。当初の発掘では、製作年代・産地等が不明であったため未報告資料として収蔵庫に埋もれていたものであるが、1984年春に佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏の鑑定を受け17世紀前半から幕末まで各時期の肥前陶磁が出土しているという指摘がなされた。特に17世紀の出土品については浪岡城落城という歴史事実とそれ以後の城館跡の使用・活用という点から重要な問題点をはらんでいる。今回、主要な遺物を写真で紹介し、諸氏の参考に供するものである。

N-（1） 17世紀前半

肥前陶磁の中では、唐津陶器と伊万里染付の搬入があるとされ、唐津については窯詰め技法の中で砂目のものが本時期とされている。（Fig.43-2）伊万里染付の器形には皿・壺があり、皿には高台部に砂が付着し見込文様の呉須がくすんだ発色を呈するもの（PL.21-1）、高台の成形が肉厚で見込文様ににじんだような草花葉が描かれているもの（PL.21-2）、高台畳付が鉄分の付着によって赤褐色を呈し見込にぼかしの強い文様が描かれているもの（PL.21-4）、内外面の貫入が著しく見込に暗い紺緑の発色を呈する文様がみられるもの（PL.21-5）、口縁が内湾気味に立ち上がり内面に暗青灰色の発色を呈する文様があるもの（PL.21-6）、口縁が内湾気味に立ち上がり内面に蛇行したX状の網目文を有するもの（PL.21-7）、内面に施釉のためくすんだ青灰色の文様を描くもの（PL.21-8）がある。

壺としては、底が碁笥底状を呈し畳付には施釉がなされず、外面に青白色の色調を呈する文様を有するもの（PL.21-3）がある。本時期の製品は釉下に多量の気泡を有するものが多く、全般にくすんだ呉須の発色を呈する。

N - (2) 17世紀後半

器形としては碗があり、外面に濃紺色の竹あるいは松の文様を施すもの(PL.21-9)と外面に一重の網目文を有するもの(PL.21-10・11・12)で、呉須の発色も灰緑色(PL.21-10)、淡青色(PL.21-11)、青灰色(PL.21-12)がある。

N - (3) 18世紀

器形としては、碗、皿、小鉢状のものがある。碗としては、外面に二重の網目文を有するもの(PL.21-14)、内面に一重の網目文外面に二重の網目文を有するもの(PL.21-19)、外面に杉枝状の意象を描いたもの(PL.21-21)、内面口縁帯に四方禪文、外面に繊細な線書きとぼかしを施した文様を有するもの(PL.21-18)がある。

皿には、見込が蛇の目を呈し内面に二重のX字状文様を施したもの(PL.21-16)、見込に梅花状の文様を施したもの(PL.21-17)があり、前者の呉須は青灰色、後者は濃紺色の発色を呈している。

鉢状の器形には、口縁が内湾気味に立ち上がる深皿とでもいうべきものと円筒状の器形を有するものがある。前者は内面に笹竹や松葉状の意象、外面に連鎖状の筆描文を施すもの(PL.21-13・20)、外面に梅花状の文様が施される例(PL.21-23)があり、後者には外面に交錯する網目文(PL.21-22)、雲堂文を簡略化したような文様(PL.21-24)を施すものがあり、畳付に砂が付着しているもので底に銘らしい文字がみられる例(PL.21-15)もある。

以上が浪岡城跡から出土している伊万里染付の一部であるが、これらの遺物は遺構に伴って出土することが稀で表土に近いⅠ層・Ⅱ層から出土しているものが多い。

〔陶磁器類小結〕

昭和58年度に出土した陶磁器類の中で、城館期に伴うものは2178点の出土があり、舶載品が43.7%、国産品が56.6%と例年の出土率とは若干の相違が認められる。これは瓦器の出土率が高かったための結果と思われ、調査地域によって器種の増減が認められる結果となった。以下、通年の総計と昭和58年度出土陶磁器類の破片数を表に示しておく。

表2 陶磁器類出土表

発掘年	産地												本										計					
	中						国						朝		日													
	青		磁		白		磁		染		付		赤		黒褐釉		志野		唐津		播			瓦		越前		
	碗	皿	他	他	皿	小环	他	碗	皿	他	碗	皿	他	碗	皿	他	碗	皿	他	皿	皿	鉢		鉢	鉢	鉢	鉢	鉢
1978	44	23	5	1	1	1	17	61	1	0	0	0	0	0	0	53	6	8	0	6	3	1	0	52	1	5	1	304
1979	102	74	14	9	0	2	6	144	2	0	0	0	0	0	0	104	7	35	0	0	3	29	0	60	58	0	0	651
1980	173	109	13	123	3	1	39	149	4	2	0	0	0	0	0	161	15	32	24	0	1	27	0	111	163	0	3	1153
1981	209	145	32	167	10	39	26	274	26	6	0	1	1	1	1	276	23	39	32	4	4	71	4	149	57	37	3	1634
1982	218	193	35	104	4	13	72	265	6	2	8	4	4	4	4	285	19	59	13	5	12	140	13	125	52	186	3	1836
1983	261	210	23	130	1	27	70	154	2	1	55	15	15	15	15	208	61	42	23	1	6	46	9	274	466	93	0	2178
計	1007	754	122	548	19	83	230	1047	41	11	63	22	22	22	1087	131	215	92	16	29	314	26	771	797	321	10	7756	
%	13.0	9.7	1.6	7.1	0.2	1.1	3.0	13.5	0.5							14.0	1.7	2.8	1.2	0.2	0.4	4.0	0.3					
	24.3		8.4		50.6		17.0		0.1		0.8		0.3		20.3		4.3		49.0		9.9		10.3		4.1		0.1	

昭和58年(1983)抜粋

発掘年	産地												本										計					
	中						国						朝		日													
	青		磁		白		磁		染		付		赤		黒褐釉		志野		唐津		播			瓦		越前		
	碗	皿	他	他	皿	小环	他	碗	皿	他	碗	皿	他	碗	皿	他	碗	皿	他	皿	皿	鉢		鉢	鉢	鉢	鉢	鉢
1978	261	210	23	130	1	27	70	154	2	1	55	15	15	15	15	208	61	42	23	1	6	46	9	274	466	93	0	2178
1979	120	9.6	1.1	6.0	0.1	1.2	3.2	7.1	0.1							9.6	2.8	1.9	1.1	0.1	2.1	0.4						
1980	173	109	13	123	3	1	39	149	4	2	0	0	0	0	0	161	15	32	24	0	1	27	0	111	163	0	3	1153
1981	209	145	32	167	10	39	26	274	26	6	0	1	1	1	1	276	23	39	32	4	4	71	4	149	57	37	3	1634
1982	218	193	35	104	4	13	72	265	6	2	8	4	4	4	4	285	19	59	13	5	12	140	13	125	52	186	3	1836
1983	261	210	23	130	1	27	70	154	2	1	55	15	15	15	15	208	61	42	23	1	6	46	9	274	466	93	0	2178
計	1007	754	122	548	19	83	230	1047	41	11	63	22	22	22	1087	131	215	92	16	29	314	26	771	797	321	10	7756	
%	13.0	9.7	1.6	7.1	0.2	1.1	3.0	13.5	0.5							14.0	1.7	2.8	1.2	0.2	0.4	4.0	0.3					
	22.7		7.3		43.0		10.4		0.1		2.5		0.7		12.4		3.1		0.3		2.5		12.6		21.4		4.3	
					56.6										49.0						9.9		10.3		4.1		0.1	

2. 鉄製品

鉄製品は約870点ほどの出土があり、機能的にみると武具・農具・建築具・生活用具等がみられる。しかし、鉄製品の中で60%近くは釘であり、建物跡を構築する際は十分に鉄釘を使用していたことが感知できる。以下項目別に述べる。

2-a 武具

武具には、小柄小刀・小札・鉄鎌・打根がある。

小柄小刀は、古代における刀子を幅狭にしたような小刀で、15点の出土をみているがすべて破損品であり、刃部10.5cm、茎7.5~8.0cmを測る例（Fig.45-1）だけを図示した。

鉄鎌は、根が鑿状を呈するもの（Fig.45-4）、錆尾状を呈するもの（Fig.45-3）、剣先状を呈し篋被が円形の断面を呈するもの（Fig.45-6）と篋被が扁平形を呈するもの（Fig.45-7）および篋被が四角形の断面を呈するもの（Fig.45-4）などがある。

打根は、円錐形の根に木製の柄などを装着して使用するものと考えられ、長さ6.9cmのもの（Fig.45-2）と長さ12.5cm前後の二例が確認されている。

また、断面形が四角を呈し先が二股を呈する製品（Fig.45-9）があり、武具の中でも鎌や棒状の先に装着して使用したものであろうか。

小札は23点の出土があり、頭部が斜めに切られた形態と長方形の形態に分けることができ、欠損はしているものの漆が附着する三目札（Fig.45-17）も1点存在する。頭部が斜めに切られた形態には短辺6個、長辺7個の穿孔が2列に並び、幅が2.0cm（Fig.45-10・14）、2.1cm（Fig.45-11-13）、2.6cm（Fig.45-12）のものがある。また長方形の形態は7個の穿孔が2列に並び、幅は2.7cm（Fig.45-15・16）のものである。

2-b 農工具

農工具の中には、鎌、苧引金、環状鉄製品、くさびなどがあり、武具か農具かわからない鉈状の刀も存在する。

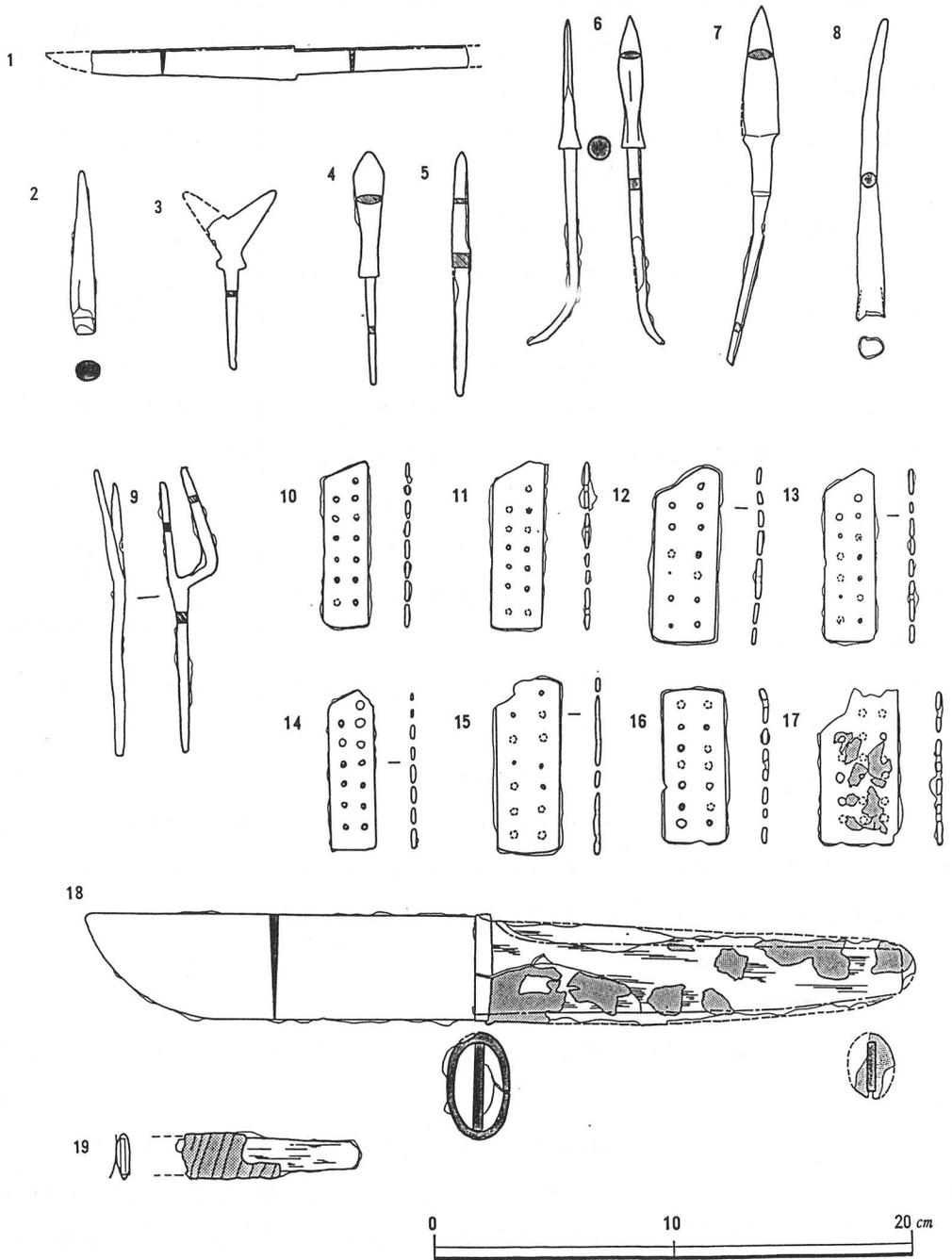
鉈刀（Fig.45-18）としたものはS T 203の床面直上から出土したもので竪穴遺構に伴うものであることは確実である。長さ35.8cm、刃部長 cm、柄長 cmを測り柄には木部と漆状の被膜が存在している。茎柄の部分に鉄輪状の止めを付けており、振り降す時の衝撃に耐えうように造作し、刃部の幅も cmと幅広であるため、鉈のような機能を有して木器加工等に当たっていたと考えられる。

苧引金は、苧を引く面の幅が9.3cm、厚さ0.3cm前後を測り、木部に装着部分の突起は左右の形状が違う状態である。（Fig.46-10）

表3 鉄製品出土数一覧表

武具	小柄小刀	15
	小札	23
	鉄鎌	12
	打根	2
農工具	鎌	4
	苧引金	4
	環状鉄製品	9
	くさび	6
建築具	鉈刀	1
	釘	521
生活用具	かすがい	9
	鉄皿	2
	灯明皿	1
	鉄鍋	25
	鉋	1
	火箸	8
	鉄	4
火打金	2	
他	鉄滓	28
	不明鉄製品	194

Fig. 45 鉄製品実測図(I)



鎌は、4点の出土があり刃部はいずれも両刃である。柄が装着していたと思われる部分に、木目痕が残存しているもの（Fig.47-3）があり、刃部幅6.7cm、刃部長16.8cm、刃部と柄の角度が106°を測る。また、刃部がやや湾曲し、刃部幅5.0cm、刃部長15.3cm、刃部と柄の角度が155°と前者より広がったもの（Fig.47-4）もあり、刈り取るものによって使い分けていたものであろう。

環状鉄製品は、鎌や鉞などの柄を強化するために使用したものと考えられ、径3.5cm（Fig.47-5）、径4.1cm（Fig.47-6）、径3.9cm（Fig.47-7）のものがある。

2-C 建築具

釘は断面形四角を呈する和釘であり、長さ15cm〔約5寸〕（Fig.47-1）のものから長さ10cm〔3寸5分〕（Fig.47-2）や1寸・2寸のものまで各種みられ、521点と多く出土している。頭部の観察では一度叩いた。使用後のものが大部分である。

かすがいは、木部に打ち込む部分の長さが3.3cm、幅5.1cmを測るもの（Fig.46-14）とやや変形しているもの（Fig.46-13）があり、表面に見える部分の断面形が幅広の長方形を呈するものが多い。

2-d 生活用具

生活用具には、鍋・火箸等の炊事用具が多く出土し、灯明皿や火打金、鋏などもある。

鍋には吊手の鍋と肉耳の鍋の二種類が存在し、小破片だけのため図示はしていない。

鍋の鉸と思われるものは、幅31cm、高さ25.5cmを測り接合部が幅広にU字形を呈するものがある。（Fig.46-1）

火箸には、二本一対でS T 192床面から出土した長さ38.5cmのもの（Fig.46-2）、一方に輪を造りねじりを加えた長さ19.7cmのもの（Fig.46-3）、中央部から一方にだけねじりを加えた長さ21.8cmのもの（Fig.46-4）があり、いずれも断面形は角状を呈する。

鉄皿の中で、内側に突起を付けたもの（Fig.46-5）があり、その突起に芯を付着したとすれば灯明皿のような機能が推定できる。仙台市の今泉城跡より類似した鉄皿が出土している。

鋏は、いわゆる握り鋏であり、長さ14.5cm、刃長6.2cmのもの（Fig.46-11）と長さ13.1cm、刃長推定6.8cmのもの（Fig.46-12）がある。

火打金は、山形の形状で1個の孔が穿たれた携帯用のものだけが出土しており、頭部が丸味を有するもの（Fig.46-8）と三角形を呈するもの（Fig.46-9）があり厚さ0.3～0.4cmである。

2-e その他

不明鉄製品の中では、S T 192の覆土から出土した綱状鉄製品が2点ある。（Fig.46-6・7）当初は刀の茎が折れたものかと考えたが、2点の形状がほぼ同形であり欠損痕も顕著に認められないことから、本資料だけで完結した製品と考えられ、機能としては丸木を割ったり、石材を割ったりするための綱などが推定される。

鉄製品の上に漆を塗った皮革を巻いた製品がある。（Fig.45-19）皮革の下には若干の木質部も残存しており、小刀の柄の部分かとも推定されるが明確でない。

Fig. 46 鉄製品実測図(I)

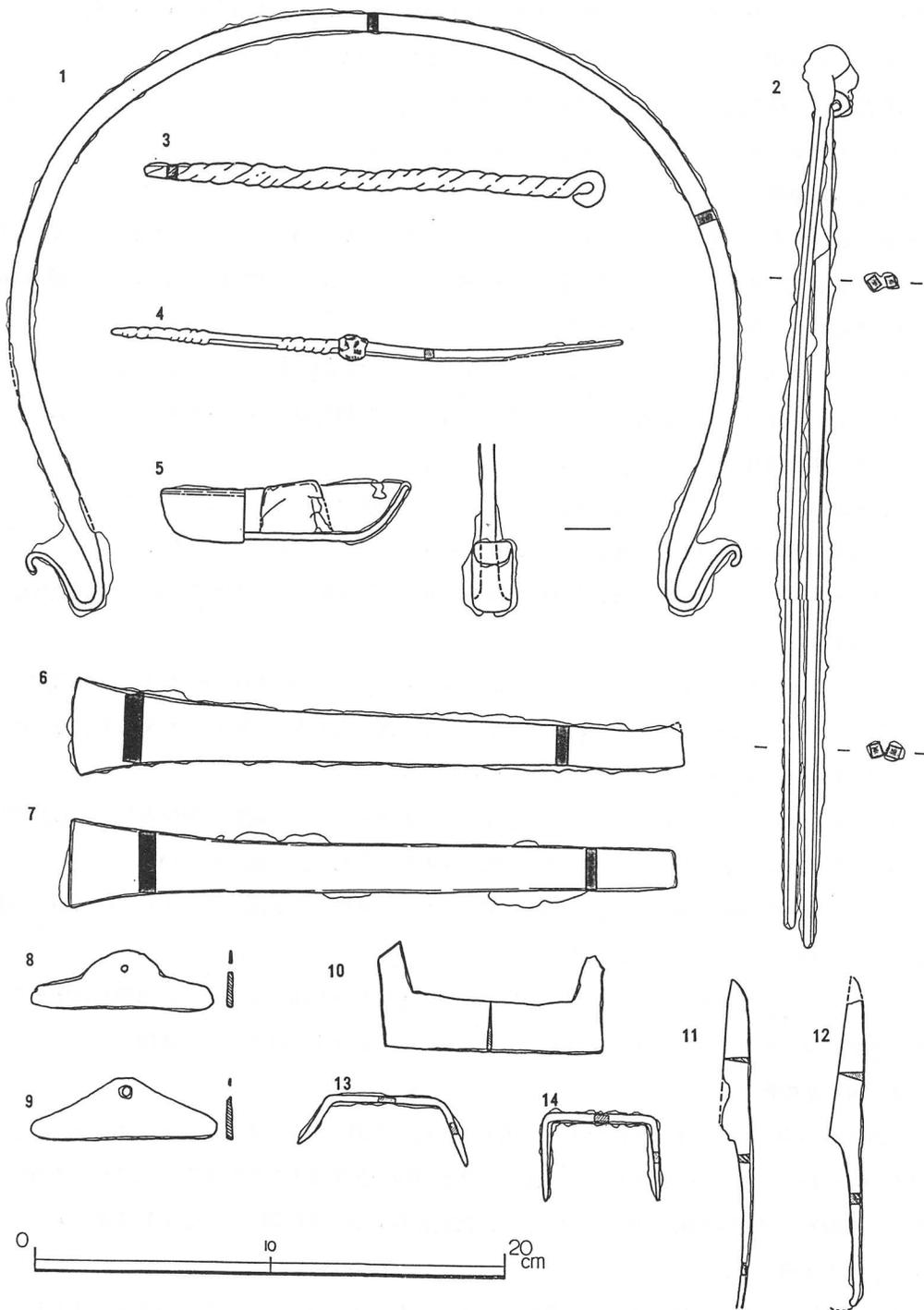
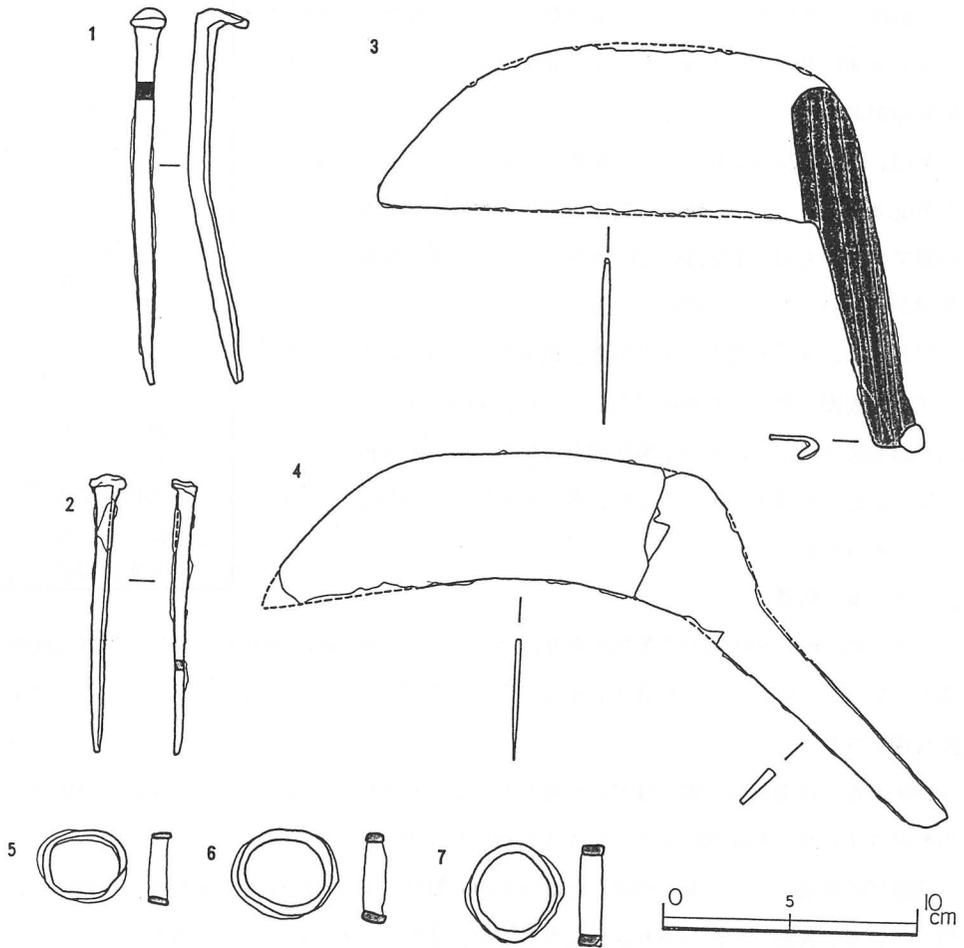


Fig. 47 鉄製品実測図(Ⅲ)



鉄製品は紙数の都合で少例しか図示できなかったが、ほぼ例年と同程度の製品が出土しており、生活用具については「Ⅸ. 浪岡城跡北館出土の生活用具について——特に鉄製品・銅製品について」(三浦貞栄治)を参照ねがいたい。

3. 銅製品 (PL.19、Fig.48、Ch.68)

銅製品には、武具、仏具、生活用具等がある。

3-a 武具

小柄は3点が出土しているが、装飾を施したものはなく、長さ8.9 cm (Fig.48-24)、9.5 cm (Fig.48-25)、8.5 cm (Fig.48-26)のものがある。

笄は、蕨手が付き地板に七七五をまいて紋が中央に凹を有する例 (Fig.20-2) と肉厚であるが腐蝕が激しいため蕨手・地板装飾を確認できないもの (Fig.48-21)がある。どちらも木瓜形を有する部分から折れ、下部が欠損している。

足金具は、太刀の鞘を吊す部品で、頂部にめがね状の小孔が穿たれており表面の鑄造りも明確である。(Fig.48-2)

鉄砲玉には、径1.2 cmの不整形をしたものがある。(Fig.48-22)

武具かどうかは不明確であるが、鏃の先端部らしい製品 (Fig.48-10) もみられる。

3-b 仏具

六器の高台部と考えられる製品があり、高さ1.2 cm、径6.88 cmを測り、薄手に良好な成形である。また、かなり破損していたが底径6.4 cmを測る高台付の皿 (Fig.48-8) があり、仏具に関連したものと推定される。

香炉あるいは金剛盤の脚と推定されるものが2例出土している。どちらも人面状の装飾が施されており高さ4.6 cm (Fig.48-5) と高さ3.9 cm (Fig.48-6) を測る。

花瓶状の器形で、一輪挿しの破片と推定される製品 (Fig.48-17) があり鑄造時の接合痕が明瞭に残っている。表面は光沢があり、かなり良好な鑄造がなされているようである。

3-c 生活用具

鉾状の製品としては、長さ5.6 cm、頭部が傘形を呈するもの (Fig.48-12) がある。釘あるいは調度品のかんぬき等に使用したと思われる頭部をL字形に折った断面形丸の棒状製品も2例出土し、どちらも径0.4前後である (Fig.48-13・14)

小型皿としては、径4.2 cm、高さ0.8 cmのもの (Fig.48-15) があり、内部に金糸による織物らしい付着物が認められた。昭和56年度出土品の中に径4.0 cmで三ヶ所に孔のみられる同型の皿があったが、今回出土のものに孔は確認できなかった。

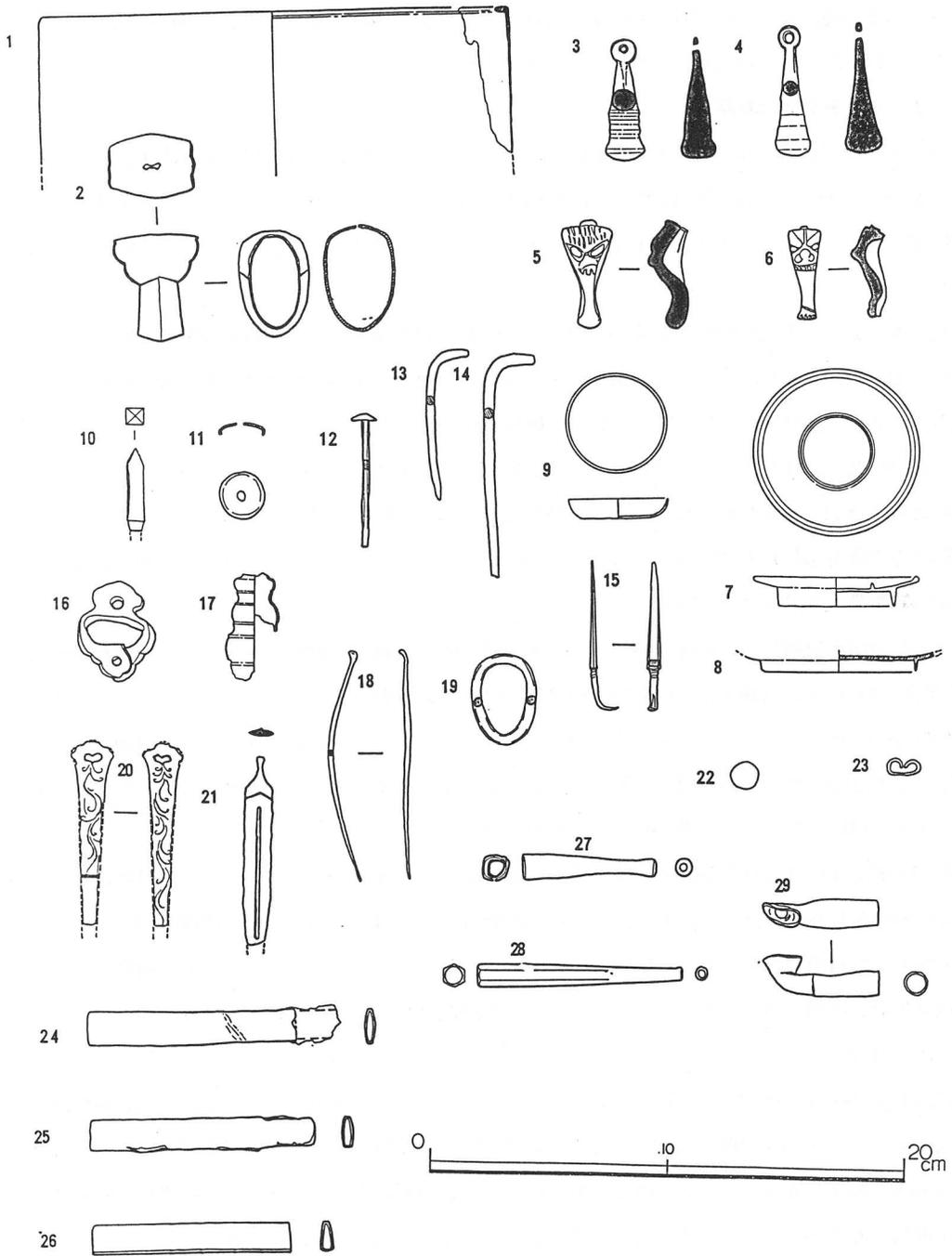
耳かきは、長さ10 cmで片方に耳かきの部分を付け、反対は先細に成形したもの (Fig.48-18) がある。表面は腐蝕が激しく凹凸している。

銅錘は、円錐形を呈し頭部に紐等を通す一孔のみられるものが2例出土している。高さ5.1 cm、底

表4 銅製品出土数一覧

武具	小柄	3
	足金具	1
	笄	2
	切羽	1
		1
	三双金具	1
仏具	鉄砲玉	2
	六器	2
	香炉	3
	脚	1 (+1)
生活用具	花瓶	1
	鉾	1
	銅皿	1
	耳かき	1
	銅錘	2
他	キセル	3
	環状銅製品	1
	銅滓	46
	不明鉄製品	94

Fig. 48 銅製品実測図



径1.6cm、重量33gのもの（Fig.48-3）と高さ5.4cm、底径1.5cm、重量26gのもの（Fig.48-4）である。尺貫法に換算すると前者は8.8匁、後者は6.9匁となる。

キセルは、長さ4.9cmの雁首（Fig.48-29）と煙管部分が残存している長さ5.6cmの吸い口（Fig.48-27）および六角に面取りされた長さ8.6cmの吸い口がある。

3-d その他の製品

Fig.48-11は、径1.9cmで中央に3mmの孔が穿たれている。釘隠し等に使用したものであろうか。

Fig.48-16は、つまみの部分と着装部分が認められ、つまみの部分に径0.5cmの一孔がある。昭和56年度出土品（Fig.74-344）の中にも同型のものであり、調度品の取手などに使用されたものであろうか。

Fig.48-15は、下部が耳かき状を呈し上部は扁平な六角断面を呈する円錐状の製品である。

Fig.48-19は、卵形を呈する環状製品で長径3.9cm、短径2.7cm、厚さ径0.4cmの成形良好なものである。武具・仏具等の部品と考えられるが具体的例を知らない。

Fig.48-23は、径0.2cmの細かい銅棒をめがね状に折り曲げた製品である。

Fig.48-20は、一見かんざしのようにも見えるが、頭部に猪目状の一孔を有し、表裏に草枝あるいは蕨状の文様を刻したものであり、表面は白銀状の光沢を有している。使用目的は不明である。

4. 石製品（Fig.49、Ch.69）

石製品の出土遺物には、粉挽き臼15、茶臼35、砥石62、石鉢8、硯49、火打石3、環状石製品1、縄文時代の石斧6、石鏃1などの点数（破片数）があり、主要なものを述べてみたい。

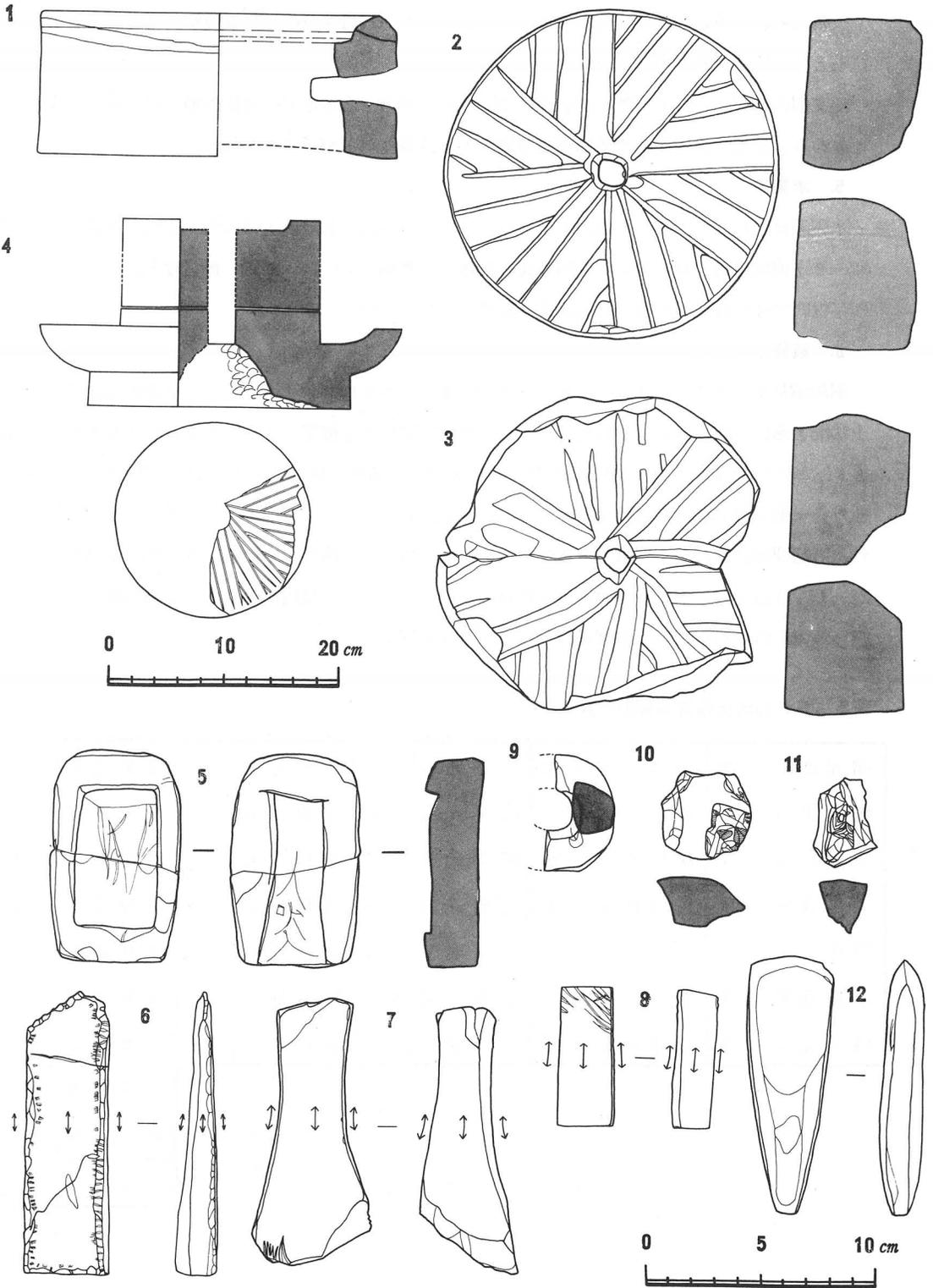
粉挽き臼では、横位に（ひきぎ）孔がある上臼（Fig.49-1）と、逆目の主溝8分画、副溝3本の下臼（Fig.49-2）、正常目の主溝8分画、副溝4本と考えられるかなり変形した目を有し、Fig.49-1・3は暗灰色で気泡の多い砂岩系で腐蝕が激しい。

茶臼（Fig.49-4）は各部位の破片を集めて推定復原したものである。上臼は径17.1cm、くぼみの深さ0.8cmを測り表面は光沢を有するくらいに研磨されている。下臼の受け皿径は31.4cm、高さ8.5cmを測り、底は荒けずりの痕跡が明瞭に残っている。受皿部および外面は光沢のある研磨がなされ、目は16区画、副溝3本のパターンと考えられるが残存部が少ない上、主溝の角度が一律でないことから明確ではない。

硯はFig.49-5を除いて、小破片か剥片の状態出土したものが多い。Fig.49-5は、鋳型等が大量に出土したST210の覆土から出土したもので、硯らしからぬ砂岩系の石質で製作されている。長径9.0cm、短径5.5cm、厚さ2.1cmの小型の硯であり、成形にあたっては削りの痕跡が各所に認められ粗雑な造りである。底に「人吠入」とでも読めそうな刻文字があり注意される。

砥石は、農具等の刃や武具等の刃あるいは他の金属器を砥ぐために各種の形態を有するようであるが、一般的には砥面が4面で中央部が凹む状態の砂岩質のもの（Fig.49-7）が多い。しかし、砥面が水平に近く長方形に成形されたものもあり、長さ12.2cm（Fig.49-6）、長さ6.0cm（Fig.49-8）

Fig. 49 石製品実測図



などは刀の刃などを砥ぐために使用したのであろうか。

用途は不明であるが、径 5.3 cm ほどに一孔を穿った環状製品 (Fig.49-9) があり砂岩系である。

火打石は、石英質の石材を使用するが、Fig.49-10・11は部分的に打撃痕が認められることから火打石として使用された可能性が高い。

縄文期の石製品として石斧 (Fig.49-12) や石鏃があり、城館期の遺構の覆土などから出土することもあり、地業による攪乱や遺構廃棄の埋土の無作為性などが認められる。

5. 木製品

木製品はすべて井戸跡からの出土であり、図示したのは S E 71 出土の曲物 1 点だけである。(Fig. 32-2) 他には箸、桶あるいは曲物の底、折敷、漆器碗 (PL.11-8)、板材などが出土しているが、残存状態の良好な資料がないため記述を割愛させていただく。

6. 銭貨 (PL.22)

昭和58年度に出土した銭貨のうち、S T 207 床面、S P 10 等から出土した一括資料は従来の銭貨出土状況と違い、紐に連なった状況で出土し備蓄銭的な機能を推定できる。S T 207 床面出土のものは (PL.22-1) は三つ編みの麻紐 (PL.22-4) を蝶結びの状態 (PL.22-2) で一方を結び、他方を一個の銭貨に結び付け (PL.22-3) て止めの作用をしている。出土枚数は 159 枚と推定され、麻紐等の状態が良く理解できるため全形を出土時のまま保存している。S P 10 出土のものは (PL.22-5) は小ピットに一連の銭貨を埋設した状態で出土し、縄紐状の部分は腐蝕が激しく若干の残存しかみられなかった。出土銭貨は以下の通り 903 枚である。

表 5 S P 10 出土銭貨名称別一覧表

開元通宝	28	景德元宝	2	嘉祐通宝	2	聖宋元宝	5	淳祐元宝	5
乾元重宝	1	祥符元宝	35	治平元宝	6	大觀通宝	4	皇宋元宝	1
宋通元宝	1	祥符通宝	29	熙寧元宝	10	政和通宝	8	景定通宝	1
太平通宝	4	天禧通宝	16	元豐通宝	19	宣和通宝	3	咸淳元宝	1
淳化元宝	1	天聖元宝	7	元祐通宝	15	正隆元宝	2	洪武通宝	275
至道元宝	1	明道元宝	1	紹聖元宝	13	慶元通宝	1	朝鮮通宝	3
咸平元宝	5	皇宋通宝	16	元符通宝	2	嘉定通宝	1	永樂通宝	2
								判読不能	120
								無文銭	257
								計	903 枚

出土銭の中では、洪武通宝が275枚（30%）と最も多く、寛永通宝等の17世紀以後の貨銭が入っていないため城館期の埋設と考えられる。

また、G43区のⅢ層からは明確に埋設状態とは言えないが、縄紐に連なった銭貨（PL.22-（7））やそれと同じ状態の銭貨（PL.22-（8））が約56枚出土している。

以下、昭和53年度から昭和59年度まで北館の調査で出土した銭貨を一覧表で示しておく。

表6 浪岡城跡北館出土銭貨一覧表

	銭貨名	初鑄造年	年 度 別 個 体 数							計（枚）	出土率（%）
			昭和59年度	昭和58年度	昭和57年度	昭和56年度	昭和55年度	昭和54年度	昭和53年度		
1	開元通宝	621		58	9	14	21	9	2	113	3.95
2	貞元重宝	759		2	1		1			4	0.14
3	周通元宝	955		2						2	0.07
4	唐国通宝	958					1			1	0.03
5	宋通元宝	960		1						1	0.03
6	太平通宝	976		8	1	1			3	13	0.45
7	淳化元宝	990		4	1	1	1			7	0.24
8	至道元宝	995		12	1	3	2	2		20	0.70
9	咸平元宝	998		5	2	7	1	2		17	0.59
10	景德元宝	1004		5	4	6	6	1	1	23	0.80
11	祥符元宝	1008	1	49	4	3	2		2	61	2.13
12	祥符通宝	1009	1	36	2	1	3			43	1.50
13	天禧通宝	1017		26	4	6	8	1	3	48	1.68
14	天聖元宝	1023		25	3	4		3		35	1.22
15	天聖通宝	1023				1	12			13	0.45
16	明道元宝	1023		1			1			2	0.07
17	景祐元宝	1034		3	1	1	1			6	0.21
18	皇宋通宝	1039		63	6	12	10	7		98	3.43
19	至和元宝	1054		2	3	3	2			10	0.35
20	至和通宝	1054		1						1	0.03
21	嘉祐元宝	1056	1	3	1	1	3			9	0.31
22	嘉祐通宝	1056		8		1	1	2		12	0.42
23	治平元宝	1064		11	4	2		2		19	0.66
24	治平通宝	1064					1			1	0.03
25	熙寧元宝	1068		36	4	11	19	3	2	75	2.62
26	熙寧通宝	1068				1				1	0.03
27	元豊通宝	1078	1	39	11	8	17	4	1	81	2.83
28	元祐通宝	1086		49	9	7	11	2		78	2.73
29	紹聖元宝	1094		24	1	7	5	5		42	1.47
30	元符通宝	1098		6	1	2	4	2	2	17	0.59
31	聖宋元宝	1101		11	4	5	9			29	1.01
32	大觀通宝	1107		4		1	1	2		8	0.28

	銭貨名	初鑄 造年	年 度 別 個 体 数						計(枚)	出土率(%)		
			昭和59 年 度	昭和58 年 度	昭和57 年 度	昭和56 年 度	昭和55 年 度	昭和54 年 度			昭和53 年 度	
33	政和通宝	1111		12	2	7	8	6	1	36	1.26	
34	宣和通宝	1119		4						4	0.14	
35	正隆元宝	1158		3						3	0.10	
36	大定通宝	1178		1	1					2	0.07	
37	淳熙元宝	1174		4			1			5	0.17	
38	紹熙元宝	1190		1			1			2	0.07	
39	慶元通宝	1195		2						2	0.07	
40	嘉定通宝	1208				1				1	0.03	
41	紹定通宝	1228		1						1	0.03	
42	淳祐元宝	1241		5	1					6	0.21	
43	皇宋元宝	1253		2		2				4	0.14	
44	景定元宝	1260		3						3	0.10	
45	咸淳元宝	1266		1						1	0.03	
46	至大通宝	1310		1	2	3	1			7	0.24	
47	大中通宝	1361				1			1	2	0.07	
48	洪武通宝	1362	1	310	27	37	49	8	9	441	15.44	
49	永樂通宝	1408	1	40	6	14	24	4	3	92	3.22	
50	朝鮮通宝	1423		15	1	2	2			20	0.70	
51	宣德通宝	1433		1			1			2	0.07	
52	紹平通宝	1434		1						1	0.03	
53	洪徳通宝	1470					1			1	0.03	
54	寛永通宝	1626		2	3	7	7	6		25	0.87	
55	五 厘						1			1	0.03	
56	半 銭			1		1				2	0.07	
57	一 銭			1	3	2				6	0.21	
58	二 銭					1				1	0.03	
59	五 銭			1		1				2	0.07	
60	十 銭				1	1		2		4	0.14	
61	五 十 銭			1	1					2	0.07	
62	鉄 銭			1	1	1	1			4	0.14	
63	無 文 銭			2	318	118	71	131	35	9	684	23.95
64	判読不能			2	184	99	124	165	15	9	598	20.94
	総 計			10	1,410	343	385	536	126	45	2,855枚	≒100.00%

(総計の中には昭和58年度S T 207 で出土した159枚は含まれていない。)

V 浪岡城跡北館の概略

浪岡城跡は、東側から新館・東館・猿楽館・北館・内館・西館・検校館・無名の館の基本となる八館から構成され、それぞれ水堀とみられる幅10m以上の堀によって区分されている。その中にあって北館は城跡の中央に平場面積だけで15,450㎡の面積を有して位置し、北・西側の堀跡は中間に土塁を配する二重堀、東・南側は二ないし三重堀の形態であり、浪岡城跡全体からみた場合最も堅固な館であるといえよう。当時、築城にあたって本丸・二の丸・三の丸というような概念があったかどうか疑問であるが、浪岡城の場合内館を扇の要の位置にみたとすれば本丸的と言え、北館は二の丸的に日常生活の中心的活動の場であったと考えることができる。

北館の発掘調査は、昭和53年度から始まり昭和59年度の6月まで約7年の年月を費して実施し、未調査部分も少なからず残っているもののほぼ平場内における全体像を把握することが可能となった。この間、検出遺構・出土遺物は膨大な数にのぼり、十分に整理できないまま今日に至っている。しかし、今後調査が内館・猿楽館・西館等の各館に及ぶことを考えれば、現在まで明らかになった点をある程度まとめておくことが必要であると痛感するに至り、本稿を草したもののである。

1. 検出遺構

北館平場内で検出した遺構としては、掘立柱建物跡・竪穴遺構・井戸跡・溝跡・土居跡・焼土遺構・枳形遺構・蓄銭遺構・土塚墓・石敷き遺構・性格不明竪穴遺構等がある。以下、個別に紹介する。

a 掘立柱建物跡

城館内における基本的住居跡であり、現在までに38棟を確認している。

V表-1 北館の掘立柱建物跡一覧表

No	遺構名	検出区	規模(母屋)	張り出し・庇	桁行方向	1間の平均値(cm)	柱穴からの主な出土遺物
1	SB02	I J 54・55・56	6間×5間		E-18°-N	181.9	青磁、美濃、角釘、釘
2	SB03	FG54・55	6間×5間		N-13°-W	192.1	青磁、瓦器、不明陶器、埴塼、鍋、釘、銭貨、石臼他
3	SB04	FG55	4間×2間	南に1間の庇	N-22.5°-W	桁 142.5 梁 160.0	なし
4	SB05	KLM53・54	8間×5間	四面庇	E-12°-N	205.5	なし
5	SB06	J 56・57	2間×3間		E-20°-N	200.0	青磁、小札、鍋
6	SB07	I J 56・57	2間×4間		N-19°-W	桁 190.0 梁 200.0	青磁
7	SB08	KL 53・54	7間×5間	北2間×2間の張り出し	N-10°-W	桁 142.9 梁 160.0	なし
8	SB09	FG54	2間×3間		N-14°-W	200.0	なし
9	SB10	KLM52・53	10間×4間	東5間×4間 北1間×1間の張り出し	N-2.5°-W	201.7	なし
10	SB11	LM57	6間×2間	北塼	N-17°-W	桁 206.7 梁 230.0	白磁

No.	遺構名	検出区	規模(母屋)	張り出し・此	桁行方向	1間の平均値(cm)	柱穴からの主な出土遺物
11	SB12	EF51・52	7間×6間	南3間×1間の張り出し	N-14°-W	198.9	染付、美濃瀬戸、角釘、鉄鍋
12	SB13	J53	3間×2間	西1間×1間の張り出し	E-4°-N	203.2	なし
13	SB14	HI51・52・53	5間×4間	東2間×1間 西3間×1間の張り出し	E-16°-N	200.6	角釘
14	SB15	FG52・53	5間×2間		N-21°-W	202.3	銭貨
15	SB16	J57	3間×3間	北1間×2間の張り出し	N-30°-W	桁 160.0 梁 143.3	染付、角釘
16	SB17	HI49	6間×1間	東1間×4間の此	N-8°-W	140.0	播鉢、磁器(瓶子)他
17	SB18	HI48・49	6間×5間	東2間×2間の張り出し	N-14°-W	203.9	青磁、染付、埴塼、鑄型、茶臼他
18	SB19	HI J48 HI49	6間×5間	西・北・東に此 西2間×4間の張り出し	N-14°-W	197.2	銭貨
19	SB20	EF49・50・51	7間×6間		E-17°-N	201.8	埴塼、鑄型、不明銅、銭貨他
20	SB21	JK51	2間×4間		N-5°-W	210.8	角釘
21	SB22	I J55	4間×3間		N-18.5°-W	桁 230.0 梁 166.7	青磁、美濃、溶解物付着土器
22	SB23	HI J42・43	7間×5間	西・南・東に此	N-20°-W	195.0	青磁、染付、角釘、銅製品、銅滓、銭貨
23	SB24	I J43・44	4間×5間	北2間×1間 西2間×1間の張り出し	E-28°-N	196.8	なし
24	SB25	I44	5間×4間	東2間×1間と1間×1間 西1間×1間の張り出し 西一部付属	E-35°-N	197.5	鉄砲玉、銭貨
25	SB26	HI43・44	7間×5間		N-30°-W	197.8	青磁、美濃、唐津、角釘、石臼他
26	SB27	HI45	2間×4間		N-24°-W	198.1	青磁
27	SB28	I J55	2間×3間		N-22°-W	150.0	青磁、溶解物付着土器、溶解物
28	SB29	I J53	4間×2間		N-12°-W	桁 187.5 梁 175.0	白磁、朝鮮、釘
29	SB30	F56・57 GH56・57・58	9間×5間	東2間×1間の張り出し 庇北西・南	E-10°-N	桁 206.3 梁 213.3	青磁、瓦器、播鉢、埴塼、角釘他
30	SB31	FG53・54	7間×5間		N-12.5°-W	205.0	播鉢、青磁、白磁
31	SB32	(D)E46・47	6間×2間+α		E-17°-N	195.0	銭貨、瓦器、染付、鉄製品、角釘、磁石
32	SB50	E52	3間×4間		N-14°-W	桁 157.5 梁 155.0	なし
33	SB51	EF49・50	3間×4間	南1間×1間の張り出し	N-19°-W	桁 266.7 梁 170.0	染付
34	SB52	HI44・45	5間×5間	東1間×1間の張り出し	E-24.5°-N	桁 188.0 梁 156.0	染付、炭化米、銭貨
35	SB53	H43・44	3間×4間		E-27~28°-N	桁 210.0 梁 181.7	青磁、播鉢、鉄製品他
36	SB54	GH56・57	7間×2間		E-16~19°-N	203.0	角釘、銅滓、不明陶器、青磁、瓦器他
37	SB55	H57	2間×2間		E-16°-N	桁 200.0 梁 175.0	石臼、角釘
38	SB56	GH56・57	1間×6間		E-21°-N	桁 196.7 梁 240.0	銭貨
39	SB57	FG41	1間		-	280.0	なし
40	SB58	(D)E46・47	6間×2間+α		E-17.5~18°-N	200.0	なし

なお、掘立柱建物跡についてはⅧの項目で高島成侑先生の詳細な説明があるため参照されたい。

b 竪穴遺構

ここで言う竪穴遺構の概念を以下の如く規定し、性格不明竪穴遺構とは一線を画しておきたい。さらに、名称については「中世竪穴遺構」「中世竪穴建物跡」とでも言うべきで、縄文時代から平安時代まで連続と営まれた竪穴住居跡の系譜に続く中世の竪穴形態の構造物であることを明確にすべきと考えている。

1. 構築方法は方形基調である。
2. 床面に上部構造を推定せしめる柱穴（あるいはそれに相当するもの）等が存在する。
3. 覆土および床面からの出土遺物が中世までのものであり、近世以降のものが存在しない。つまり、構築から廃棄までの時間が中世という時間内に包括される。
4. 構造上の特徴として、基本的に遺構内には炉・かまどを造らず、出入口部分は張り出しを用いることが多い。

以上の4点を竪穴遺構の基礎概念とした場合、これまでに北館から検出された竪穴遺構は以下の通り128基にも及ぶ。

V表-2 北館の中世竪穴建物跡一覧表

No	遺構名	検出区	規模(長軸×短軸×深さ)cm	張り出し方向	柱穴配置	主な出土遺物	備考
1	ST08	H47	468 × 450 × 60	-	I類	青磁、白磁、染付、美濃灰釉、銭貨	
2	ST09	L・M58	330 × 320 × 51	W-36°-S	I	染付、美濃灰釉、鉄釘、鉄鍋、銭貨	
3	ST10	L・M59	270 × 260 × 54	W-26°-S	II	青磁、鉄釘、小札	
4	ST12	K・L59	440 × 435 × 39	N-20°-W	VI	染付、播鉢、小札、鉄釘、鉄鉢、銭貨	
5	ST13A	L・M59・60	540 × 360 × 64	W-26°-S	III	青磁、染付、美濃灰釉、播鉢、漆器 火箸、小札、銭貨	
6	ST13B	〃	430 × 270 × 70	W-27°-S	III		
7	ST13C	〃	430 × 270 × 68	W-30°-S	III		
8	ST13D	〃	520 × 330 × 70	N-30°-W	III		
9	ST14A	K60	340 × 340 × 30	-	I	青磁、鉄釘、小札、銭貨	
10	ST14B	〃	470 × 350 × 20	-	I		
11	ST15	K・L60	533 × 455 × 67	N-35°-W	V	青磁、美濃灰釉、瓦器、鉄釘、銭貨	
12	ST16	K・L58	360 × 325 × 25	W-15°-S	II	青磁、染付、不明鉄製品	
13	ST17	M60	590 × (450) × 22	N-26°-W	I?	播鉢	未完掘
14	ST18	J59	430 × 265 × 25	-	V	銭貨	
15	ST19	I59	270 + a × 255 × 50	-	II	播鉢、鉄釘、小札	
16	ST20	I・J58	310 × 275 × 74	W-20°-S N-15°-W	VIII	青磁、鉄釘、鉄鍋、火箸	
17	ST21	J58	340 × 320 × 32	W-10°-S	I	染付、美濃灰釉、瓦器、鉄釘	

No	遺構名	検出区	規模(長軸×短軸×深さ)cm	張り出し方向	柱穴配置	主な出土遺物	備考
18	ST23	J60	450 × 378 × 18	W - 10° - S	V類	施釉陶器	
19	ST24	I・J59	295 × 280 × 37	-	I	美濃灰釉、火箸	
20	ST25	J58	305 × 295 × 65	-	II	青磁、染付、美濃灰釉、銅製角細棒	
21	ST26	J59	395 × 280 × 40	W - 20° - S	II	青磁、播鉢、瓦器、鉄釘、	
22	ST28	K58	305 × 240 × 53	-	II	鉄釘、鉄鍋、銭貨	
23	ST30A	K58	355 × 350 × 45	N - 110° - W	II	青磁、染付、美濃、播鉢、瓦器、	
24	ST30B	K58	355 × 350 × 45	N - 110° - W	I	小柄、銭貨	
25	ST32	L・M58	445 × 320 × 60	-	V	青磁、染付、天目、播鉢、鉄釘、砥石	
26	ST34	M58	235 × 205 × 90	-	II	染付、美濃、毛拔、鉄鍋、小札、銭貨	
27	ST35	〃	(350) × (350) × 40	W - 26° - S	I	青磁、染付、瀬戸天目、砥石、鉄釘	
28	ST36	〃	240 × 170 × 88	-	II	美濃灰釉、瓦器、鉄釘、小札、銭貨	
29	ST38	I・J59	420 × 360 × 40	-	I	不明鉄製品	
30	ST51	L51	552 × 324 × 62	-	III	青磁、染付、天目、播鉢、銭貨、石臼	
31	ST54	M57	190 × 174 × 56	-	VI	天目、美濃灰釉、銭貨、不明鉄製品	
32	ST55	〃	216 × 180 × 38	-	VIII	染付、天目、鎌、銭貨	
33	ST58	L56・57	(290) × 260 × 30	S - 18° - E	I	鉄釘、火打石、硯、銭貨	
34	ST60	J・K56	370 × 320 × 76	-	VIII	青磁、播鉢、越前、銭貨、鉄釘	
35	ST62	J57	352 × 334 × 60	-	I	赤絵、染付、青磁、白磁、銅製品	
36	ST66	I55	320 × 300 × 64	-	VI	銅製装飾品、小柄、打根、石斧、青磁	
37	ST67	〃	380 × 360 × 58	-	VIII	白磁、美濃灰釉、青磁、播鉢、銭貨	
38	ST68	I54・55	400 × 380 × 40	-	V	天目、羽口、染付、美濃灰釉、銭貨	
39	ST71	G55	266 × 232 × 59	W - 10° - S	I	瓦器、白磁、播鉢、鉄釘、鉄滓	
40	ST72	F55	276 × 250 × 50	N - 118° - W	I	青磁、瓦器、天目、美濃灰釉、白磁	
41	ST75	D・E55	310 × 270 × 116	S - 5° - W	I	美濃灰釉、不明銅製品、青磁、白磁	
42	ST77	F54	320 × 320 × 32	-	I	青磁、染付、銅鈴、不明鉄製品、白磁	
43	ST78	L・M56	400 + a × 388 × 25	-	III	美濃灰釉、天目、播鉢、鉄釘、硯	未完掘
44	ST81A	I・J56・57	350 × 350 × 60	-	III	銅鏡、瓦器、美濃灰釉、唐津	
45	ST81B	〃	450 × 370 × 32	N - 67° - E	I'	青磁、播鉢、染付、天目、美濃灰釉	
46	ST82	I56・57	310 × 218 × 86	-	VI	青磁、瓦器、鉄釘、小刀	
47	ST84	I56	(390) × 340 × 46	-	II	鉄鏃、鉄釘、銭貨	
48	ST100	M53	285 × 275 × 54	N - 85° - E	II	青磁、白磁、唐津、美濃灰釉	
49	ST101	L53・54	480 × 420 × 66	N - 87° - E	V	青磁、白磁、美濃灰釉、美濃鉄釉天目	
50	ST102	I52・53	740 × 450 × 88	N - 69° - E	IV	刀、青磁、染付、唐津、美濃灰釉、金剛盤	
51	ST103	EF53	(625) × 387 × 64	N - 81° - E	V'	轆、青磁、白磁、染付、鉄釘、銭貨	
52	ST104	D52・53	310 × 289 × 91	N - 69° - E	II	筭、染付、天目、埴塼	
53	ST105	D53・54	360 × 304 × 66	S - 13° - E	I	美濃灰釉、青磁、鋳型、埴塼	
54	ST106	D・E53	450 × - × 30	N - 75° - E	V	染付、鉄鍋、砥石、土師器	
55	ST107	D52・53	335 × 310 × 45	S - 1° - E	I	白磁、染付、唐津、鉄釘、溶解物	

No.	遺構名	検出区	規模(長軸×短軸×深さ)cm	張り出し方向	柱穴配置	主な出土遺物	備考
56	ST108	D53	190 × 158 × 59	S - 18° - E	Ⅷ類	染付、美濃灰釉、銭貨	
57	ST111	E53	568 × 388 × 88	E - 17° - S	Ⅳ	瀬戸系瓶子、青磁、白磁、播鉢、鋳型	
58	ST117A	F53	270 × 225 × 125	-	I	青磁、埴塙、鋳型、羽口、銭貨	
59	ST117B	F53	(200+a)×240 × 45	N - 10° - W	Ⅱ	青磁、埴塙、羽口、鉄釘、美濃	
60	ST118	F・G53	265 × 260 × 50	S - 16° - E	I	青磁、染付、瓦器、播鉢、鋳型	
61	ST119	F・G52	337 × 302 × 64	W - 8° - S	I	青磁、染付、美濃灰釉、羽口、鉄釘	
62	ST120	G53	317 × 277 × 50	S - 15° - E	Ⅱ	青磁、美濃灰釉、埴塙、鉄釘	
63	ST121	H・I52	318 × 302 × 60	S - 16° - E	I	、筭、鉄釘、小札、銭貨、美濃灰釉	
64	ST124	J51・52	(285) × 280 × 53	N - 5° - W	I	刀、青磁、美濃灰釉、羽口、銭貨	
65	ST125	I52	303 × 281 × 44	S - 25° - E	I	青磁、染付、美濃灰釉、埴塙、鉄釘	
66	ST132	L・M52	658 × 435 × 47	N - 11° - W	Ⅷ	青磁、白磁、染付、瓦器、内耳鉄鍋	
67	ST133	H・I51	355 × 304 × 44	S - 22° - E	Ⅷ	青磁、埴塙、鉄釘、銭貨、象眼	
68	ST135	I50	316 × 279 × 65	N - 15° - W	Ⅱ	青磁、埴塙、播鉢、火打石、磁器	
69	ST138	L51・52	580 + a × 445 × 53	N - 7° - W	Ⅷ	青磁、染付、美濃灰釉、唐津、天目	
70	ST139	H50	326 × 285 × 44	S - 22° - E	Ⅱ	青磁、播鉢、埴塙、焼米、鉄釘	
71	ST140	H51	364 × 232 × 53	N - 20° - W	I	青磁、美濃灰釉、瓦器、小柄、弓引金	
72	ST141	H51	290 × 200 × 50	E - 14° - N	Ⅷ	青磁、赤絵、埴塙、鉄釘、銭貨	
73	ST144	G51	276 × 240 × 48	E - 26° - N	Ⅷ	白磁、染付、唐津、打根、鉄釘	
74	ST145	I48	326 × 323 × 61	E - 11° - N	Ⅱ	白磁、染付、志野、唐津、鉄釘、銭貨	
75	ST146	H・I50	380 × 310 × -	-	Ⅱ	青磁、染付、石臼、砥石、銭貨	
76	ST148	I48	270 × (253) × 35	S - 5° - E	I	白磁、埴塙、鉄釘	
77	ST151	I48	385 × 365 × 15	E - 3° - N	I	青磁、天目、唐津、埴塙、播鉢	
78	ST153	J51	307 × 282 × 51	-	Ⅱ	青磁、染付、白磁、唐津、鉄鏝	
79	ST155	K51	333 × 322 × 66	-	I	染付、美濃灰釉・褐釉、唐津、鎌、鉄	
80	ST156	J・K50	246 × 240 × 55	-	Ⅵ	青磁、染付、美濃灰釉、鉄釘、鉄滓	
81	ST157	J48・49	552 × 465 × 77	S - 6° - E	Ⅳ	青磁、白磁、染付、美濃灰釉、唐津	
82	ST158	J49	195 × 185 × 54	-	I	石臼、鉄釘、白磁	
83	ST160	D51	380 × 360 × -	-	I	青磁、染付美濃灰釉、播鉢、鉄滓	
84	ST161A	E50	335 × 273 × 54	E - 8° - N	Ⅲ	青磁、染付、美濃灰釉、播鉢、越前	
85	ST161B	E50	292 × (262) × 40	-	I	瓦器、埴塙、鉄釘、鉄滓	
86	ST164	D50	234 × 214 × 74	S - 37° - E	Ⅷ	青磁、唐津、美濃灰釉、播鉢、鉄釘	
87	ST166	E49	344 × 296 × 49	S - 20° - E	I	青磁、唐津、美濃灰釉、播鉢、染付	
88	ST170A	I43	265 × 265 × 45	N - 56° - E	Ⅱ	青磁、白磁、染付、美濃灰釉、鉄釘	
89	ST170B	I43	318 × 265 × 45	N - 56° - E	Ⅱ	小札、硯、銭貨	
90	ST171	H43	270 × 270 × 41	N - 62° - E	I	青磁、染付、瓦器、越前、鉄釘、火箸	
91	ST173	H43	(275) × (272) × 42	-	Ⅵ	青磁、白磁、染付、美濃灰釉・褐釉	
92	ST176	H45	293 × 265 × 62	S - 30° - E	Ⅱ	青磁、染付、美濃灰釉、瓦器、鉄釘	
93	ST177	E50	282 × 246 × 62	S - 40° - E	Ⅷ	青磁、播鉢、瓦器、埴塙、鉄釘	

No	遺構名	検出区	規模(長軸×短軸×深さ)cm	張り出し方向	柱穴配置	主な出土遺物	備考
94	ST179	H43	292 × 290 + a × 33	-	I類	越前	
95	ST180	I45・46	574 × 434 + a × 60	-	VII	青磁、白磁、美濃褐釉、唐津、銭貨	未完掘
96	ST181	I46	263 × 254 × 41	E - 12° - N	II	白磁、染付、瓦器、鉄釘、砥石、銭貨	
97	ST182	I・J46	353 × 165 + a × 50	-	I	瓦器、播鉢、銅製盤、銭貨	未完掘
98	ST183	H42	710 × 512 × 34	S - 25° - E	III	青磁、越前、染付、鉄釘、銭貨	
99	ST184A	H・I41・42	480 × 440 × 42	N - 50° - E	IV'	青磁、白磁、染付、美濃灰釉、越前	
100	ST184B	H・I41・42	440 × 430 × 42	E - 20° - N	I'	瓦器、鉄釘、小刀、銭貨、火打石	
101	ST185	I45・46	323 × 298 × 34	-	I	青磁、美濃灰釉、染付、越前、硯	
102	ST186	H・I46	395 × 366 × 24	-	II	染付、青磁、播鉢、鎌、銭貨	
103	ST190	I46・47	303 × (200) × 74	S - 0°	II	播鉢、美濃灰釉、鉄釘、不明鉄	
104	ST192	G・H41・42	750 × 460 × 45	-	VII	不明鉄(刀の茎?)、火箸、銅製品、鉄釘	
105	ST200	E56	442 × 355 × 90		I	青磁、唐津、不明鉄・銅、美濃瀬戸瓶子	
106	ST201	EF57	630 × 500 × 104		III	瓦器、埴塀、青磁、美濃灰釉、播鉢	
107	ST202	EF56	580 × 455 × 78	-	III'	瓦器、青磁、播鉢、白磁、鉄釘、銭貨	
108	ST203	FG56	670 × 450 × 50	-	VII	瓦器、青磁、播鉢、鉄釘、銭貨	
109	ST204	H57・58	310 × 300 × 44		II	羽口、播鉢、青磁、瓦器、鉄釘、砥石	
110	ST205	H58	324 × 300 × 50		II	青磁、埴塀、美濃灰釉、天目、土鈴	
111	ST206	F57・58	510 × 375 × 103		VIII	瓦器、青磁、染付、鉄釘、埴塀	
112	ST207	G55・56	996 × 398 × 40	-	V	瓦器、埴塀、唐津、美濃灰釉、鉄釘	
113	ST208	FG58	500 × 432 × 58		II	瓦器、青磁、播鉢、埴塀、鉄釘	
114	ST210	G58・59	620 × 400 × 55		III	鋳型、瓦器、播鉢、青磁、白磁	
115	ST215	F47	308 × 260 × 48		I	青磁、白磁、染付、美濃灰釉、鉄釘	
116	ST216	E47	320 × (320) × 36	-	II	青磁、白磁、染付、鉄釘、鉄滓	
117	ST217	F47	340 × 310 × 28		I	播鉢、美濃灰釉、鉄釘、小柄、銭貨	
118	ST218	FG47	340 × 248 × 73	-	I	染付、美濃灰釉、唐津、天目、石臼	
119	ST224	D・E48	200+(60)×260×55		I	染付、美濃灰釉、青磁、埴塀、鉄滓	未完掘
120	ST227	E46・47	270 × 233 × 51		VIII	青磁、白磁、染付、播鉢、埴塀、小柄	
121	ST228	F46	240 × 252 × 63		I	埴塀、染付、砥石、炭化米、銭貨	
122	ST230	EF47	320 × 320 × 34		II	-	
123	ST234	G42・43	490 × 500 × 92		III'	染付、青磁、赤絵、天目、越前	
124	SX155	EF56・57	550 × 510 × 70	-	IV'	瓦器、播鉢、青磁、羽口、火箸	
125	SX100	JK49・50	240 × 231 × 34		II	染付、不明銅製品	
126	SX67	I51	260 × 260 × 49	N - 16° - W	I	美濃灰釉、埴塀	
127	SX120	H・I43	335 × 238 × 76	-	III	小柄小刀、苧引金、唐津、染付、銭貨	
128	SX121	H42・43	237 × 195 × 130	-	VI	瓦器、鉄、漆器、銅製品、染付	

以上の中世竪穴建物跡を柱穴の配置パターンからみると、Ⅰ類44基、Ⅱ類32基、Ⅲ類14基、Ⅳ類5基、Ⅴ類9基、Ⅵ類7基、Ⅶ類3基、Ⅷ類14基となる。以前（昭和57年度報告書P 133・134）にも検討した通り、Ⅰ類とⅡ類が同一の構築意識に包含されるとすれば、その総数76基は全体の60%近くに達し、浪岡城跡北館における中世竪穴建物跡の基本的な形態であると言える。

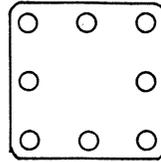
しかしながら、Ⅰ・Ⅱ類に関しては中世竪穴建物跡の性格等を吟味する明瞭な遺物を出土することはまれで、Ⅲ類・Ⅳ類等の比較的大型の遺構から出土することが多いように思う。

たとえば、Ⅲ類の中でS T 13の漆器、S T 51灰層からの陶磁器・銭貨、S T 78の角釘、S T 81の銅鏡、S T 183の炭化物・焼米・越前甕、S T 201の陶磁器や鉄・銅製品・石製品・土製品・銭貨など各種各様の遺物、S T 210の鋳型・埴塼、S X 120の銅製品など、またⅣ類の中ではS T 102床面の刀、S T 157の銅滓・中国鉄釉壺など、さらにⅤ類の中でもS T 103床面から出土した轡などは注目してよい資料である。

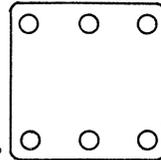
一覧表で示した遺構間の重複関係をみると三期以内のものしかなく、構築・使用時期を大きく区分して三期とみることができ。これは、Ⅷで述べる掘立柱建物跡の時期区分とも良好に対応し、北館における大規模な地業が三回はおこなわれたと推定できる根拠となるものである。ただし、現状の整理経過では本遺構に関する時代区分のポイントとなる部分が明確でない。床面出土の遺物が少なく、覆土とともに廃棄された遺物も城館使用期間とみられる100～150年の幅では伝世の可能性が充分にあるため、一概に時期決定はできない。今後さらに検討を要するところである。

よって、遺構配置の状態も早断すべき状況ではないが、Ⅰ・Ⅱ類の中で出入口部を有するものは、館内東側に位置するものは西方向、北側および中央に位置するものは南方向、西側に位置するものは東方向と、ある程度の規則性を有して配置されているような印象を受ける。おそらく、掘立柱建物跡との相互配置の他に、館内における防禦機能等を考えた結果

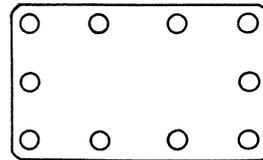
Ⅴ・図-1 中世竪穴建物跡
柱穴配置形態分類図



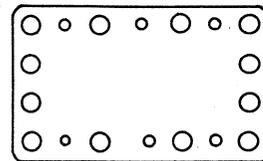
Ⅰ類



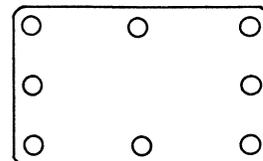
Ⅱ類



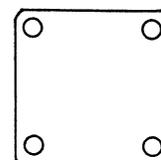
Ⅲ類



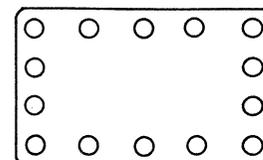
Ⅳ類



Ⅴ類



Ⅵ類



Ⅶ類

その他

Ⅷ類

と思われる。

C 井戸跡

井戸跡あるいは井戸跡であったと推定される遺構は69基あり、その中で木杵が発見されたものは10基である。7基のうち1基が木杵を有することになるが、逆に言えば素掘りの井戸が大多数を占めていたということになり、壁面崩壊等によって使用不可能となる場合が多かったためこのような数で構築をくり返さなければならなかったと考えることができる。

井戸跡の検出分布をみると、中央部から南側にかけて多く、西側および北縁部は比較的少ない。しかし、木杵を有する井戸跡となると南北中央線から南側に多く、平均的間隔を有して配置されている。この事は、5×6間以上の大形掘立柱建物跡との位置関係を考慮したとも考えられ、木杵を有する井戸がある程度長期間にわたって使用された結果と思われる。

井戸跡の周囲に焼土遺構が分布する傾向がある。S E 22の東側、S E 50の東側、S E 43の東側、S E 77の北側、S E 79の東側などにみられるもので、井戸に近接した地点で炊事がおこなわれたことを推測させる。

また、井戸跡はしばしば遺物の廃棄場所として使われることがある。おそらく、井戸の機能が終了した時点で埋め戻した覆土と一緒に当時の使用用具を捨てたものと考えられる。その代表例としては、S E 20、S E 33、S E 43、S E 50、S E 61、S E 71、S E 79などがある。S E 20は覆土に炭化物・灰を含む層が互層となり、青磁細線文碗・同稜花皿（酸化青磁）・染付唐草文皿、白磁端反り皿、瀬戸瓶子、馬骨、漆器椀、埴塼、火箸などが出土している。S E 33は、木杵が廃棄された状態であり、底面から桶底・木材片とともに唐津皿（胎土目）、覆土から青磁碗、白磁皿、染付皿、美濃灰釉皿、播鉢、砥石などが出土している。S E 50は、径400cm以上の大きな掘り方をした井戸で、美濃の天目碗、灰釉折縁皿、褐釉皿、黄瀬戸手大皿と唐津の灰釉碗、灰釉皿（胎土目）、絵付皿、播鉢、備前系播鉢、および染付皿・青白磁小坏が出土し、一括して廃棄された様相を示した。S E 61は、楔状木製品・木製柄の他、口径19.3cmの染付皿が木杵に接する状態で8片の破片で出土、壊れたため井戸に廃棄したと考えられた。S E 71は覆土全体に集石が認められ、その中から中国褐釉壺、染付、青磁、唐津などの陶磁器の他底面近くから曲物が出土した。S E 79はS E 33と同じように、木杵が破壊された状態で検出され、青磁、白磁、染付、美濃灰釉、美濃鉄釉、唐津、越前等の各種陶磁器が出土している。

このように井戸の廃棄は、ある意味で短時間におこなわれることから、出土遺物が遺構の時期を決定できる可能性を有している。

以下、検出された井戸跡の一覧表を載せておく。

V・表-3 北館の井戸跡一覧表

No	遺構名	検出区	規模(長径×短径×深さ)cm	木枠の有無	主な出土遺物	備考
1	SE 06	I 47	180×150×210+α	-	青磁、美濃灰釉、鉄釘	
2	SE 07	H 47	238×230×100+α	-	白磁、美濃灰釉、志野、不明陶器	
3	SE 08	K 60	190×185×100+α	-	染付	
4	SE 09	K 58	165×155×120+α	-	青磁、鉄釘	
5	SE 10	I 58	290×260×340	-	青磁、染付、美濃灰釉、搦鉢、鉄鍬	
6	SE 11	O 54・55	175×170×120+α	隅柱横棧型	白磁、青磁、染付、天目、不明陶器、漆器	
7	SE 12	L 59	130×128×100+α	-	鉄鍋、銭貨	
8	SE 13	K 58	140×135×50+α	-	染付、鉄釘	
9	SE 14	O 54	× × 140+α	-	下駄、箸、桶底、漆器	
10	SE 15	J K 58	180×160×100+α	-	青磁、染付、美濃灰釉、搦鉢、鉄釘	
11	SE 16	M 58	220×210×50+α	-	青磁、染付、鉄釘、鉄鍬、小札、かえし	
12	SE 17	M 58	170×110×90+α	-		後付No.
13	SE 20	K 54・55	235×230×300+α	-	青磁、瀬戸瓶子、染付、馬歯、鉄鍋	
14	SE 21	I 54	150×144×222	-	火箸、かえし、唐津、美濃灰釉、鉄釘、銭貨	
15	SE 22	K 56・57	230×215×380	隅柱横棧型	曲物、美濃灰釉、搦鉢、鉄鍬、銭貨	
16	SE 23	L 56	180×160×225	-	美濃灰釉、珠州系陶器、瓦器、鉄釘	
17	SE 24	I 57	(290)×190×290	-	青磁、美濃瀬戸系灰釉、唐津、瓦器、硯	
18	SE 25	E 54	160×160×178+α	-	瓦器、搦鉢、埴塀、銭貨、硯	
19	SE 26	K 54	162×154×195+α	-	青磁、搦鉢、天目、鉄釘	
20	SE 27	I 53	130×130×-	-	美濃灰釉、染付、青磁、越前、志野	
21	SE 28	J 54	130×120×278	-	白磁、染付、天目、搦鉢、芋引金、火等、小刀	
22	SE 29	J 54	180×160×262	-	漆器	
23	SE 30	E・F 54	182×172×211+α	-	染付、瓦器、美濃灰釉、埴塀、鉄釘	
24	SE 31	H 54	192×164×435	隅柱横棧型	青磁、染付、埴塀、桶底、曲物、篋	
25	SE 32	J・K 54	180×170×357	隅柱横棧型	青磁、唐津、瓦器、鏡状銅製品、曲物	
26	SE 33	F・G 54	164×164×300	-	青磁、白磁、唐津、美濃灰釉、砥石	
27	SE 34	G 54	140×130×230	-	青磁、漆器	
28	SE 40	F 52	160×150×120+α	-	青磁、搦鉢、鉄釘、銭貨	
29	SE 41	G・H 53	305×283×200+α	-	青磁、美濃灰釉、搦鉢、埴塀、銭貨	
30	SE 42	I 50	177×170×350	隅柱横棧型	美濃灰釉、染付、埴塀、鉄釘	
31	SE 43	I 52	365×356×200+α	-	美濃灰釉、搦鉢、埴塀、白磁、染付	
32	SE 44	J 53	210×195×110+α	-	青磁、瓦器、美濃灰釉・褐釉、銭貨	
33	SE 45	H 52	140×130×60+α	-	美濃灰釉、搦鉢、埴塀、羽口	
34	SE 46	J・K 53	170×125×80+α	-	搦鉢、溶解物、銭貨	
35	SE 47	H・I 50	-	-	搦鉢	現代

No	遺構名	検出区	規模(長径×短径×深さ)cm	木枠の有無	主な出土遺物	備考
36	S E 48	G 51	240 × 235 × 180 + α	-	青磁、美濃灰釉、染付、白磁、鉄釘、銭貨	
37	S E 49	J 48	240 × 210 × -	-	青磁、染付、銅滓、鉄釘、砥石、溶解物	
38	S E 50	F・G51	410 × 400 × 350 + α	-	播鉢、唐津、青磁、美濃灰釉・褐釉、天目	
39	S E 51	I 48	175 × 150 × 275	側板組合せ型	青磁、唐津、白磁、志野、越前、下駄	
40	S E 52	I 51・52	200 × 180 × 80 + α	-	青磁、染付、美濃灰釉	
41	S E 53	J 52	175 × 170 × -	-	-	
42	S E 54	K 52	140 × 130 × 130 + α	-	-	
43	S E 55	F 52	200 × 180 × 248	-	坩堝	
44	S E 56	F 56	240 × 225 × 40 + α	-	青磁	
45	S E 57	G 53	200 × 195 × 60 + α	-	青磁、天目、染付、火箸、不明鉄、銭貨	
46	S E 58	K 52	185 × 180 × 150	-	-	
47	S E 59	K 52・53	150 × 130 × 120	-	-	
48	S E 60	K 50・51	250 × 228 × 252	-	青磁、唐津、染付、美濃灰釉、鉄釘	
49	S E 61	K 51	220 × 205 × 360 ~ 370	隅柱横棧型	染付、青磁、白磁、瀬戸褐釉、播鉢	
50	S E 63	K 51	150 × 140 × -	-	-	
51	S E 65	D・E50	370 × 300 × 230 + α	-	青磁、染付、天目、瓦器、志野、銭貨	
52	S E 66	H 44	200 × 200 × 200 + α	-	青磁、唐津、白磁、染付、天目、石臼	
53	S E 67	I 44	260 × 245 × 332	隅柱横棧型	播鉢、青磁、染付、天目、朝鮮、石臼	
54	S E 68	F・G58	455 × 410 × 260 + α	-	唐津、青磁、美濃褐釉・鉄釉、赤絵	
55	S E 69	I・J45	320 × 300 × -	-	-	
56	S E 71	G 56	236 × 190 × 436	-	唐津、青磁、染付、美濃灰釉、瓦器	
57	S E 72	G 57・58	230 × 224 × -	-	青磁、美濃灰釉、白磁、天目、瓦器	
58	S E 73	H 57・58	293 × 287 × 300 + α	隅柱横棧型	青磁、瓦器、坩堝、播鉢、白磁、鉄釘	
59	S E 74	E 48	245 × 260 × -	-	青磁、白磁、染付、坩堝、漆器、砥石	
60	S E 75	E 47・48	173 × 160 × 70 + α	-	播鉢、小柄、漆器	
61	S E 76	H 58	157 × 141 × 77 + α	-	青磁、美濃灰釉、鉄釘、鉄滓、鋳型	
62	S E 77	G 48	340 × 320 × -	隅柱横棧型	青磁、唐津、美濃灰釉・瀬戸、播鉢	
63	S E 79	F 48	340 × 357 × 320	-	青磁、唐津、白磁、美濃灰釉、播鉢	
64	S X 165	G 57	174 × 140 × 105 + α	-	染付、天目、鉄釘、鉄滓、不明鉄製品	
65	S X 28	I 55	100 × 100 × -	-	美濃灰釉、坩堝、砥石、石鉢、不明銅	
66	S X 124	E 49	126 × 120 × 140 + α	-	染付、美濃灰釉、唐津、不明陶器、銭貨	
67	S X 189	E 46・47	140 × 137 × 107 + α	-	-	
68	S X 140	H 45	152 × 150 × 100 + α	-	美濃灰釉、染付、播鉢、不明銅製品、銭貨	
69	S X 122	I・J43	200 × 200 × 180 + α	-	青磁、唐津、白磁、瓦器、播鉢、砥石	

d 溝跡

溝跡は、城館期のもとの土師器・須恵器だけを出土する平安時代のものに分けることができる。前者は、比較的幅も狭く深さも浅いもので井戸跡から伸びる場合が多い。S D 60、S D 59、S D 36などであるが、これらの溝は同一方向に平行してもう一本の溝が伸びることがあり、屋敷を区画する時の通路等に用いられた可能性もある。後者は、南にひらく馬蹄形を呈するS D 16、S D 40 (S X 81)、S D 10 (S X 21)、S D 63、S D 70 と、無作為方向に走るS D 07、S D 09、S D 32 (S D 61)などがみられる。

しかし、溝跡の検出は他の遺構との重複が激しかったり、城館期の遺構を優先的に精査したためか十分に規模を把握するまでには至らなかった。北館調査の反省すべき点である。

e 土居跡

平場内における土居跡は、東縁および北縁の一部で確認されている。東縁部は最大幅5 m、最小幅2 mで遺構確認面から60cmほどの比高を有していた。下層に粘土質の層を敷きその上に黒色土や砂質土を突き固めて構築していた。北縁部でも同様の構築であったが、削平されている部分が多かったため部分的にしか検出されていない。C52区で検出されたS A 05では三和土状の部分に柱穴も残っており、土居に伴う柵列があった可能性も高い。西縁・南縁は後世の攪乱が激しいためか土居らしい遺構を検出することは困難であった。

f 焼土遺構

焼土遺構というのは、かまどや炉などのいわゆる炊事遺構と言えるようなものでなく、焼土がある範囲をもって分布している箇所を任意に言い表わした名称である。これら焼土遺構の中には地面を掘り下げ、炉として使用しようと思えば使用可能なものも存在するが、大部分は遺構確認面から若干高いレベルで検出され、遺構下層から柱穴や竪穴遺構・溝等の他の遺構が検出されることが多い。

当初は、落城に伴う火災痕とも考えたが、その分布はかならずしも建物跡と重複しているとは限らず、炊事等に関連した遺構廃棄の痕跡と考えるに至っている。特に、井戸跡の項目でも述べたように、井戸跡の周辺で焼土遺構が多数検出されていることは、前記の推測を肯定できる一因と思われる。

g 柵形遺構

館と館間の連絡がどのような形でおこなわれていたかという疑問は調査開始の段階からの大きな問題点であった。北館西北端から検出された柵形遺構は、城館の構造を考える上で非常に良好な遺構である。F・G 40・41区における柵形遺構は「フ」型で、北館内に入る場合は左に折れる柵形を呈し、いわゆる弓矢の使用を想定した構造である。S B 57とした二脚門跡はスロープの上の部分にやや斜行した状態で位置し、柱穴の大きさからかなりしっかりした門跡であったことが推測される。この北館における柵形遺構と対峙する西館には、対応する箇所が堀跡から一段高いテラス状を呈し、同様の遺構が存在する可能性が強い。

浪岡城跡の堀跡が当時は水堀的であったことを考えると、館間の連絡は木橋状のものでおこなわれ

ていたと推定され、各館に2～3ヶ所の出入口施設（榎形遺構）を有し木橋で結ばれていたのではないだろうか。

h 蓄銭遺構

どのくらいの銭貨をもって蓄銭とするか不明確ではあるが、S T 207 出土銭貨、S P 10 出土銭貨は蓄銭と考えて大異ないであろう。S T 207 は竪穴遺構でありその床面から麻紐に連なって159枚、S P 10 は小穴に連なった状態で903枚の銭貨が出土した。いずれも紐に連なった状態で出土していることに注目でき、ときおり柱穴等に2～3枚から10～15枚の銭貨を入れておく場合とは相違がみられる。出土銭貨の詳細は、別項（Ⅳ－5）を参照されたい。

i 土塚墓

人骨が出土した土塚墓はD56区検出のS K 01だけであるが、骨片または副葬的色彩の濃い遺物が出土している遺構にJ57区検出のS X 31、H43区検出のS X 121がある。S X 01は円形の土に年齢15～17才の女性が北頭位仰臥屈葬で埋葬されていたもので、副葬品等は見られなかった。（Ⅵ「浪岡城跡出土の人骨について」を参照の事）S X 31は、ややマウンド状になった方形の土塚で、覆土から大形の青磁皿を意図的に打ち壊した破片と銭貨27枚が、床面から槍、刀の茎、小札、鉄鏃などの鉄製品が出土し、人骨は見られないものの土塚墓的性格が強い。S X 121は方形の土で四隅に柱穴もみられたが、覆土中間にあった灰層の直下から粉末になった骨片が出土し、それに伴って「大上」「叶」という文字が描かれた漆器碗、染付・青磁・白磁などの各種陶磁器、鉢、鍋、火打金、火箸などの鉄製品および16枚の銭貨等が出土している。

現在までの調査では、墓域と思われる箇所は検出されておらず、居住区に接する状態で土塚墓が形成されていたようである。

j 石敷き遺構

北館においては、礎石建物跡や石組み井戸など石をもって構築した遺構はほとんどない。K L 52区から検出したS X 80は、石を基壇状に敷いた遺構で、一例だけの検出である。石はすべて川原石で10cm内外の小石が292個出土している。機能等は不明である。

k 性格不明竪穴遺構

文字通り、使用目的が明確でない遺構の一群であり、柱穴状の小竪穴から中世竪穴建物跡とした遺構ぐらいの大きな竪穴まで存在するが、出土遺物がまったくなかったり、建物跡とは認めがたいものなどであり、今後さらに検討の必要性がある。

2. 出土遺物

北館から出土した遺物の中で城館期に伴うものは以下の通りである。なお便宜上材質別に分類したため、使用目的が同一のものも併記している。

I 陶磁器類

I - 1 舶載品

I - 1 - a 青磁 - 碗・皿・鉢・香炉・壺の蓋

I - 1 - b 白磁 - 皿・碗・壺・小坏

I - 1 - c 染付 - 皿・碗・水滴

I - 1 - d 赤絵 - 皿・碗

I - 1 - e 褐釉 - 壺

I - 1 - f 鉄釉 - 碗・壺

I - 1 - g 朝鮮 - 皿・碗

I - 2 国産品

I - 2 - a - i 美濃・瀬戸（灰釉） - 皿・碗・瓶子・花瓶・香炉・水注

I - 2 - a - ii 美濃・瀬戸（鉄釉） - 天目碗・皿・壺

I - 2 - b 唐津 - 皿・碗・鉢・壺・搦鉢

I - 2 - c 越前 - 甕・壺・搦鉢

I - 2 - d 珠洲 - 搦鉢・甕

I - 2 - e 信楽? - 甕

I - 2 - f 備前? - 搦鉢

I - 2 - g 伊万里 - 碗・皿・壺

I - 3 国産産地不詳品

I - 3 - a 瓦質土器 - 火舎・行火・香炉・壺

I - 3 - b 無釉陶器 - 搦鉢・甕

I - 3 - c 施釉陶器

I - 4 地元産品（土器）

I - 4 - a かわらけ - 灯明皿

I - 4 - b 埴塙

I - 4 - c 鋳型

II 鉄製品

II - 1 武具

II - 1 - a 刀・刀装具 - 大刀・小刀・小柄小刀・鐔

II - 1 - b 槍 - 槍・打根

- Ⅱ - 1 - c 鎧 - 胸板・小札
- Ⅱ - 1 - d 鍬 - 鑿型・雁股型・鯖尾型
- Ⅱ - 2 農具・工具・生活用具・他
 - Ⅱ - 2 - a 鎌 - 鎌・鎌鋸
 - Ⅱ - 2 - b 芋引金
 - Ⅱ - 2 - c 釘
 - Ⅱ - 2 - d 鍋 - 吊耳鍋・内耳鍋
 - Ⅱ - 2 - e 火打金
 - Ⅱ - 2 - f かすがい
 - Ⅱ - 2 - g 火箸
 - Ⅱ - 2 - h 鍵
 - Ⅱ - 2 - i 毛抜き鋏
 - Ⅱ - 2 - j 鋏
 - Ⅱ - 2 - k 轡
 - Ⅱ - 2 - l 皿
 - Ⅱ - 2 - m 鉄滓
 - Ⅱ - 2 - n 坩堝

Ⅲ 銅製品

Ⅲ - 1 武具

- Ⅲ - 1 - a 刀装具 - 鐔・切羽・小柄・筭・鑑・足金物・返角・目貫
- Ⅲ - 1 - b 鎧・兜 - 鞆・縁金具・八幡座
- Ⅲ - 1 - c 鉄砲用具 - 火縄鋏・鉄砲玉

Ⅲ - 2 仏具

- Ⅲ - 2 - a 仏像
- Ⅲ - 2 - b 金剛盤
- Ⅲ - 2 - c 六器 - 碗・高台
- Ⅲ - 2 - d 香炉
- Ⅲ - 2 - e 花瓶
- Ⅲ - 2 - f 鈴

Ⅲ - 3 化粧具・調度具・生活用具・他

- Ⅲ - 3 - a 鏡
- Ⅲ - 3 - b 毛抜き鋏
- Ⅲ - 3 - c 耳搔き

- Ⅲ - 3 - d 分銅
- Ⅲ - 3 - e 鋌
- Ⅲ - 3 - f 取手
- Ⅲ - 3 - g 皿 - 秤皿
- Ⅲ - 3 - h 鞍
- Ⅲ - 3 - i キセル
- Ⅲ - 3 - j 錢貨
- Ⅲ - 3 - k 銅滓
- Ⅲ - 3 - l 針

Ⅳ 石製品

Ⅳ - 1 農具・工具・他

- Ⅳ - 1 - a 粉挽き臼
- Ⅳ - 1 - b 茶臼
- Ⅳ - 1 - c 砥石
- Ⅳ - 1 - d 火打石
- Ⅳ - 1 - e 鉢
- Ⅳ - 1 - f おもり

Ⅳ - 2 文具

Ⅳ - 2 硯

Ⅴ 木製品

Ⅴ - 1 饗膳具

- Ⅴ - 1 - a 漆器 - 椀・蓋・膳
- Ⅴ - 1 - b 折敷
- Ⅴ - 1 - c 箸
- Ⅴ - 1 - d 籠
- Ⅴ - 1 - e 曲物

Ⅴ - 2 貯蔵具・計量具

- Ⅴ - 2 - a 桶
- Ⅴ - 2 - b 曲物
- Ⅴ - 2 - c 取手

Ⅴ - 3 建築具

- Ⅴ - 3 - a 柱 - 井戸隅柱
- Ⅴ - 3 - b 板 - 井戸側板

V-3-c 屋根柱

V-3-d 楔-井戸横棧楔

V-3-e

V-4 祭祀・信仰具

V-4-a 形代-刀形木製品、陽物形木製品

V-4-b 塔婆

V-4-c 木簡

V-5 その他の生活用具

V-5-a 下駄-連齒下駄・露仰下駄

V-5-b 棒

V-5-c つまみ

V-5-d 櫛-馬櫛

VI 自然遺物・他

VI-1 植物

VI-1-a 穀物-炭化米・炭化粃

VI-1-b 堅果-くるみ・桃

VI-2 編物

VI-2-a 麻-布・紐

VI-2-b 縄-紐

VI-2-b

VI-3 骨

VI-3-a 人骨

VI-3-b 馬骨

VI-3-c 犬骨

VI-3-d 牛骨-牛角

VI-3-e その他(未鑑定)

VI-4 石

VI-4-a 墨書石

VI-5 皮革

VI-5-a 革札

以上の出土遺物については、各年度別の報告とともに、陶磁器は「VII 浪岡城跡出土の陶磁器について」鉄・銅製品のうち生活用具は「IX 浪岡城跡北館出土の生活用具について」、武具関係は「浪岡城跡北館出土の銅関係品について」、木製品の一部については「XI 浪岡城跡出土の木製品」をそれぞれ参照されたい。出土遺物の中でも特に自然遺物は詳細な鑑定を得ていないものも多く、今後別の機会に報告したいと考えている。

Ⅶ 浪岡城跡出土の人骨について

森 本 岩太郎

1. はじめに

昭和58年7月、浪岡城跡のD-56グリッドから16世紀に属すると思われる人骨1個体分が出土した。浪岡町教育委員からの委嘱により筆者が現場に赴き、この人骨を取り上げて鑑定した。人骨調査に際しお世話をいただいた諸賢に深く感謝の意を表する。

2. 人骨の出土状況

この人骨はD-56グリッドにある直径約110cm、深さ約55cmの円形土坑内において、北頭位仰臥屈位で発見された。頭蓋が左へ傾き、左右の肘・股・膝の各関節を強く屈曲し、両肘は各側の側腹部付近にあり、左手はオトガイ部、右手は右肩の近くに位置している。無紋様の古銭1枚のほか、土師器片や陶器片が若干伴出した。

3. 人骨所見

この人骨の保存状態は極めて不良で、わずかに頭蓋のほぼ左半分が取り上げられる程度にその強度を保っているが、頭蓋以外の部分の骨はほとんど粉末状に近く、現場で埋葬姿勢を判断するのに役立つ程度で、骨片として取り上げることが出来たものはわずかに10個余りにすぎない。この人骨は土葬されたものであり、人骨に焼けた部分は見られない。

この人骨は頭蓋の形態などから女性と判断される。手の指骨を見ると、骨端がまだ骨幹と結合を終わっていないので18歳以下と思われ、また第2大臼歯が萌出を終わって咬耗を受けているので13歳以上と思われる。これに頭蓋や上・下肢骨の大きさなどを加味して考えると、この女性の年齢は15～17歳ぐらいであると推定される。

まず頭蓋（写真1および2）であるが、ほぼ右半部分を腐蝕により失っている。発見当時、頭蓋は土坑内で左に倒れ、左側頭部を下にしていたので、地表に近い方の右半部分が腐蝕されたことになる。また、土圧により頭蓋の幅径がかなり減少して見掛け上は長頭を思わせるように変形しているので、現在の頭蓋の形をそのまま在生時の形態と見なす訳にはいかない。例えば、現在の左眼窩を見ると、眼窩幅が38mm、眼窩高が36mmで、眼窩示数が94.7を示し、著しい高眼窩型に属しているようにみえる。しかし、これは頭蓋に対する横方向からの土圧による変形の結果であり、決して生前の面影を映していないのである。したがって、この頭蓋の場合、計測値にたいした意味はないと思われるので、計測はこれを行わないこととする。

頭蓋を見ると、頭蓋冠は比較的薄く、前額は垂直に近く、眉間の突出度や鼻根部の陥凹度は小さい。頭頂隆起の発達が良いが、乳様突起および外後頭隆起は小さい。左右の内側口蓋管骨橋および鼓室骨裂孔は存在せず、左の翼棘孔骨橋・舌下神経管二分・副眼窩下孔・顎舌骨筋神経溝骨橋・頭頂切痕骨も認められない。前頭縫合・インカ骨も見られないが、左副オトガイ孔は小さなものが1個ある。歯

および歯槽の状況を次に示す。

7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7
7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7

ただし、アラビア数字は残存する永久歯を示す。智歯は上・下顎とも未萌出である。歯の咬合様式は鋏状咬合型で、咬耗度はおおむね Broca の第 1 度である。齶蝕は見られない。

椎骨（写真 3）で比較的良く残っているのは環椎・軸椎・第 3 および第 4 頸椎である。頸椎はいずれも小さい

四肢骨（写真 3）についてみると、上肢骨で残っているのは左肩甲棘の一部と左鎖骨外側半の一部のほか、左上腕骨体下半の一部、右中手骨体 1 個および手の骨片 3 個分である。上記のように、このうち手の指の基節骨底と中節骨底の骨端部はまだ骨幹と骨結合化せず、骨端が骨幹から遊離している。下肢骨で残っているのは左大腿骨体、左脛骨体および左腓骨体が主要なものである。いずれも保存状態が悪く、詳細につき記すことは出来ない。

この人骨に格別の病的所見は認められない。

4. 要約

浪岡城跡の D-56 グリッド内の円形土坑から出土の 16 世紀に属する北頭位仰臥屈葬人骨は年齢 15～17 歳の女性人骨 1 個体分であると思われる。

写真1. 頭蓋前面観

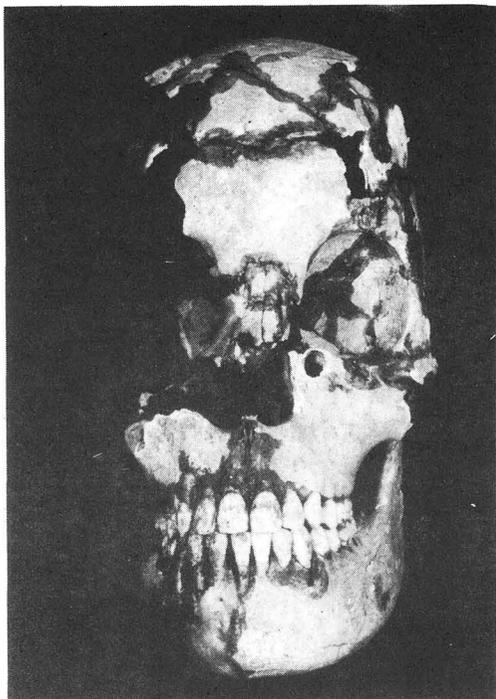


写真2. 頭蓋左側面観

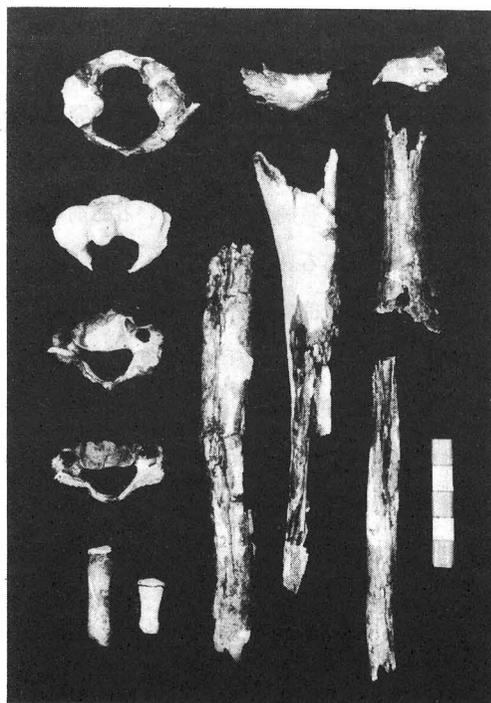
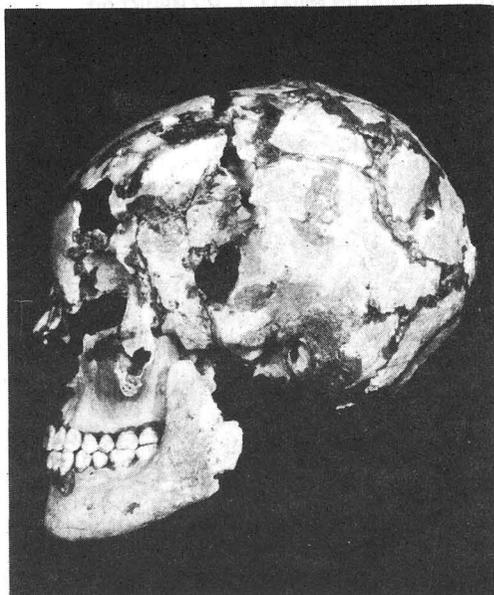


写真3. 頸椎および上・下肢骨片

Ⅶ 浪岡城跡出土の陶磁器

佐々木 達 夫

1. はじめに

東北地方において、遺跡から出土する中世の陶磁器が考古学の研究対象として脚光を浴び始めたのは、この十数年間のことである。それは、中世の城館跡の発掘が大規模化し、さらに調査が継続されていることによるのであろう。青森県内では、日本海側の代表的な港町である十三湊から、多くの中国の青磁が採集されることが、以前から知られていた。しかし、港に陸揚げされ運ばれた陶磁器を、誰が、どのような場所で、どのように使用していたかということになると、それは不明なことが多かった。しかも、いつから、どのような陶磁器がどのくらい使用されていたのかということになると、さらに分からないことばかりであった。

それが、最近の中世城館跡の発掘調査の進展によって、少しずつ明らかになってきたのである。中国陶磁器が日本海の海上交通路を運ばれてきたのは12世紀頃であることは、1976年に発掘された高館遺跡や、1981年に発掘された蓬田大館遺跡の出土品から知ることができる。また、多くの中国や日本各地の陶磁器が、盛んに使用され始めるのが14・15世紀であることは、1977～79年に発掘された尻八館遺跡から知ることができた。さらに、15・16世紀には大量の中国・日本の陶磁器が城館で使用されていることは、1977年から継続発掘されている浪岡城遺跡、1978年から継続発掘されている根城遺跡の出土品から充分にうかがえるのである。この他にも、1976・77年に発掘された堀越城遺跡や、1974年から発掘が行われている弘前城遺跡の出土品も、この地方の陶磁器のありかたを知る資料として重要である。

青森県は歴史的に東西の二地域に分けることができるが、15・16世紀の二百年間ほどは、西の浪岡城と東の根城が、この地方を支配する代表的な領主の居城であった。ともに、70年代の後半から継続的な発掘調査が行われ、そこから出土する陶磁器は、北日本地域の生活と流通を知るうえで、欠くことのできない重要な資料となっている。浪岡城遺跡の場合は、7つある館のうちの一つである北館の発掘が、昭和53年から59年にかけての7年間に行われ、一つの館の全面的な発掘がほぼ終了した段階である。そこで、これまでの『浪岡城跡発掘調査報告書』で紹介されている、出土陶磁器の全体的な状況を次に見ることにし、さらに、浪岡城跡出土の陶磁器の地域的、時代的な特徴を考えることにしよう。

2. 陶磁器の出土状況

北館の発掘によって出土した陶磁器は、破片数でおよそ9,000点ほどである。堀で囲まれた北館の平坦部の面積は、15,450㎡ほどであるから、2㎡ほどで1点の陶磁器が出土していることになる。この数量は、決して多いとは言えないものである。中世の遺構が発見される面までは、表面から50～60cmほどの2から3層に分けられる土層が堆積している。出土した陶磁器の多くは、この土層の中から

発見されており、明確に遺構に伴うものは極めて少ない。したがって、出土状態から廃棄された理由、さらに使用されていた状況を知ることは難しい。多くの陶磁器は、北館全体の発掘品として捉えればよいことが多い。

だが、中には、遺構の中から一括品として、纏まって出土する場合もある。例えば、1981年に発掘された井戸である、S E50遺構の埋土からの出土品は次のような状況であった。中国の青磁、白磁、染付は小さな破片で出土し、日本の美濃の灰釉・褐釉・黒釉の陶器、唐津の陶器、それに播鉢は、壊れているが、大きな破片で出土しているのである。これは、美濃の灰釉折縁の皿、天目皿・碗、唐津の碗と皿・鉄絵皿が、同時期に使用されていたことを示しているのである。これらは、16世紀末の組合せである。しかし、こうした一括品が、どこで、どのように使用されていたかという詳細については、出土状況からでは、まだ不明な点が多い。

3. 出土陶磁器の概要

出土した陶磁器の生産された時代と産地はどこであり、どのような種類と器種があるのであろうか。まず、生産された時代である。12世紀の製品も少しあるが、多くは15・16世紀の陶磁器である。また、生産地は中国と日本が主であり、それにわずかな量の朝鮮の陶磁器が混じっている状況である。種類は、時代と産地が変わるにつれて違いがみられるけれども、中国の青磁と白磁、染付、それに日本の施釉陶器と無釉の炆器が主である。器種は皿と碗が中心となり、播鉢や鉢、壺、甕などがみられる。

こうした陶磁器のうち、1978年から1982年までの5年間に北館から出土した、全体的な数量は次の表のようである。ただし、1978年の数量には東館出土品も含まれている。

Ⅶ・表－1 浪岡城跡北館出土陶磁器の数量概略（1978－1982年）

	中 国										朝 鮮	日 本										計			
	青 磁			白 磁			染 付			赤 絵		黒 褐 釉	美濃・瀬戸 (灰釉)		美濃・瀬戸 (褐釉)			志野	唐 津		播 鉢		瓦 器	越 前・他	か わ ら け
	碗	皿	他	皿	小 坏	他	皿	碗	他				皿	他	碗	皿	他		皿	皿					
1978	44	23	5	15	1	1	61	17	1			53	6	8		6	3	1		52	1	5	1	304	
1979	102	74	14	9		2	144	6	2		2	104	7	35			3	29		60	58			651	
1980	173	109	13	123	3	1	149	39	4	2		161	15	32	24		1	27		111	163		3	1153	
1981	209	145	32	167	10	39	274	26	26	6	1	276	23	39	32	4	4	71	4	149	57	37	3	1634	
1982	218	193	35	104	4	13	265	72	6	2	8	4	285	19	59	13	5	12	140	13	125	52	186	3	1836
計	746	544	99	418	18	56	893	160	39	10	8	7	879	70	173	69	15	23	268	17	497	331	228	10	5578
%	13.3	9.7	1.8	7.5	0.3	1.0	16.0	2.9	0.7			15.8	1.3	3.1	1.2	0.3	0.4	4.8	0.3						
	24.8			8.8			19.6			0.2	0.1	22.0					5.1		8.9	5.9	4.1	0.2			
	53.6										0.1	46.3													

（『浪岡城跡Ⅵ』1984年、135頁の表を改変）

中国の陶磁器が53.6%で過半数を占め、日本の陶磁器は46.3%で、中国陶磁器の8割ほどである。他には、朝鮮の陶器が0.1%あるにすぎない。中国陶磁器の中では、最も多いのは青磁であり、24.8%をしめて、碗と皿が主となる。ついで、染付が19.6%で皿が主である。白磁は8.8%で少ないが、皿が主となる。中国陶磁器は皿が多く、種類は染付、青磁、白磁であり、碗は青磁が主となっているのである。日本の陶磁器は美濃・瀬戸の施釉陶器が22.1%で最も多い。中でも、灰釉の皿が多く、他は天目碗などが少しの割合でみられる程度である。この他は、唐津の施釉陶器が5.1%で皿が主となり、越前や珠洲、その他の地域の播鉢が8.9%、瓦器が5.9%、越前を主とする甕や壺が4.1%となる。そして、土器は僅かに0.2%が出土しているにすぎない。

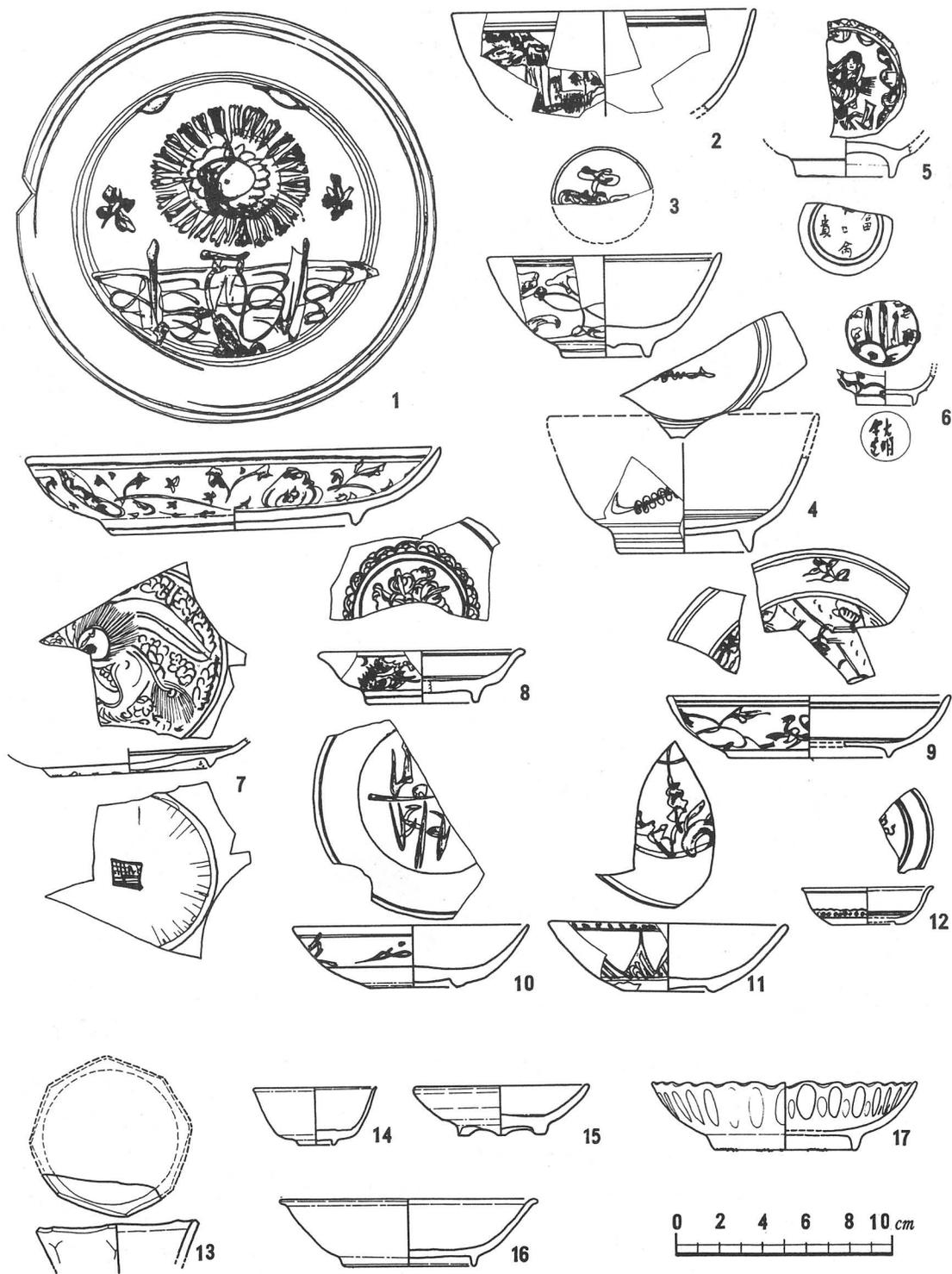
こうした出土陶磁器の比率は、浪岡城跡で使用されていた生活用品としての陶磁器を知るうえで、さらに、当時の商品流通の状態を知るうえで、重要な資料となるものである。ただし、そのためには、個々の陶磁器が使用されていた時代、あるいは、生産された時代が正確に分からなければならない。その上、生産地も正しく推定することが必要である。表1に掲載した資料は、その内容をより詳細に分析されて、歴史資料としての価値を高めることが待たれている。

これまでに出土した陶磁器の種類と器種を挙げると、次のようになる。中国の製品では、青磁の碗、皿、坏、香炉、鉢、盤、壺、白磁の皿、坏、碗、壺、染付の皿、碗、坏、鉢、赤絵の皿、碗、黒褐釉の碗、壺である。朝鮮の製品では、皿、碗がある。日本の製品では、美濃・瀬戸窯は、灰釉の皿、卸皿、碗、大皿・鉢、鉢、壺、黒褐色釉の碗、小壺、皿、壺、茶入、播鉢、天目台、志野の皿がある。

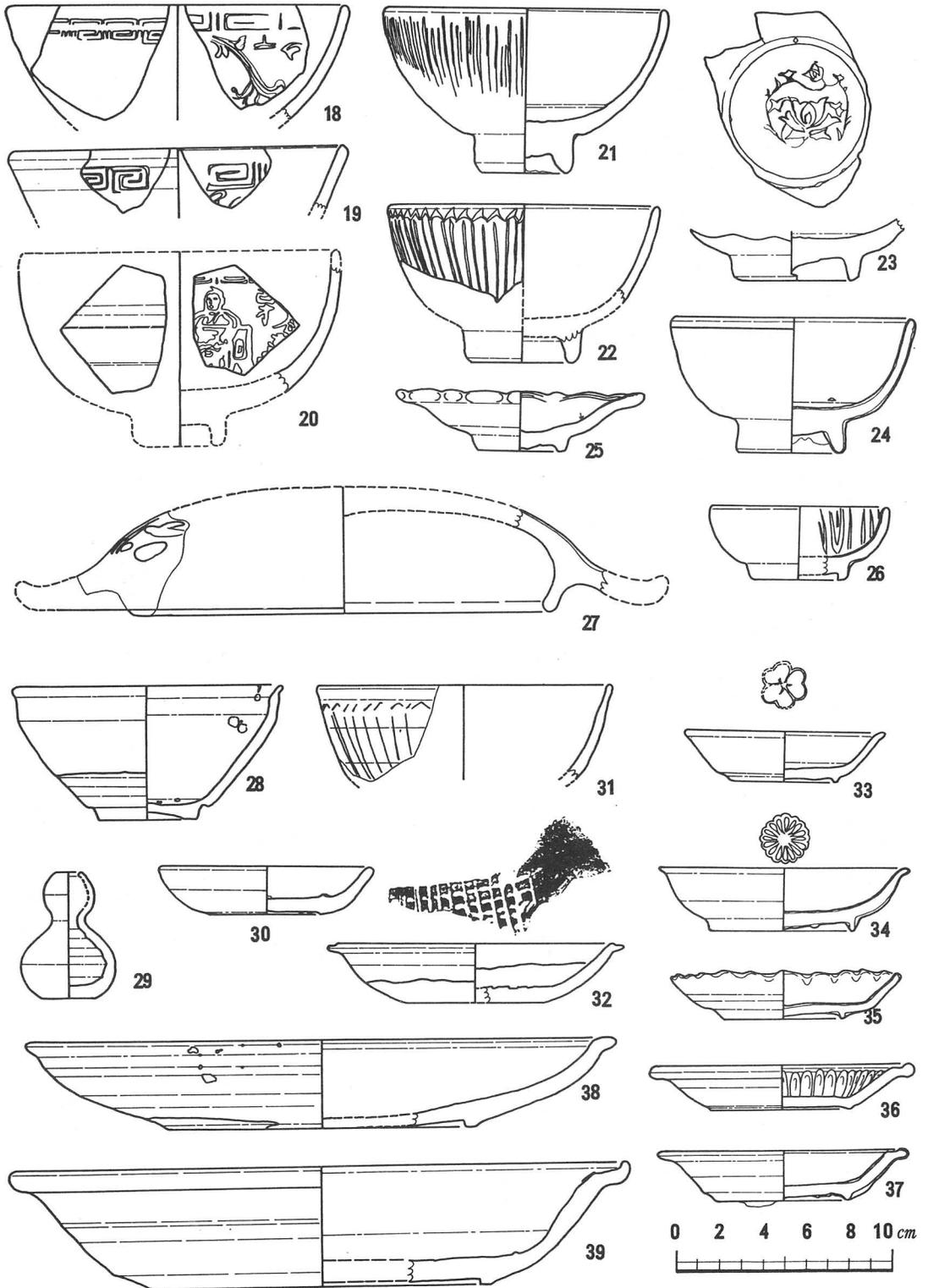
越前窯は、壺、播鉢、甕がある。珠洲窯は、播鉢と壺がある。信楽窯は壺がある。この他に、土器の類である瓦器の火鉢、手あぶり、行火、それに、土器の皿がある。こうした陶磁器には、様々な形態と文様が見られるが、詳細は出土した年次の報告書に掲載してある。

また、こうした陶磁器の中で、比較的多く出土した、あるいは、珍しい種類・器種のいくつかを図示すると、図の1から3のようなものである。図1は、中国の染付と白磁である。染付は、皿が1、7-12、碗が2-5、坏が6である。白磁は、坏が13-14、皿が15-17である。図2は、中国の青磁と、日本の美濃窯の製品である。青磁は、碗が18-24、皿が25、坏が26、酒海壺の蓋が27である。美濃は、天目碗が28、褐色釉の小壺が29、天目皿が30である。灰釉のかけられた製品は、碗が31、卸皿が32、小皿が33-37、大皿、あるいは鉢が38-39である。図3は、朝鮮と中国の陶器、日本の唐津、越前、その他の地域の陶器である。朝鮮の陶器は40の小皿である。唐津は、碗が41、皿が42-43である。中国の陶器は44-45の壺である。越前は、壺が46、播鉢が49である。47・48は火鉢の類の瓦器であるが、畿内からの搬入品の可能性が高いものである。

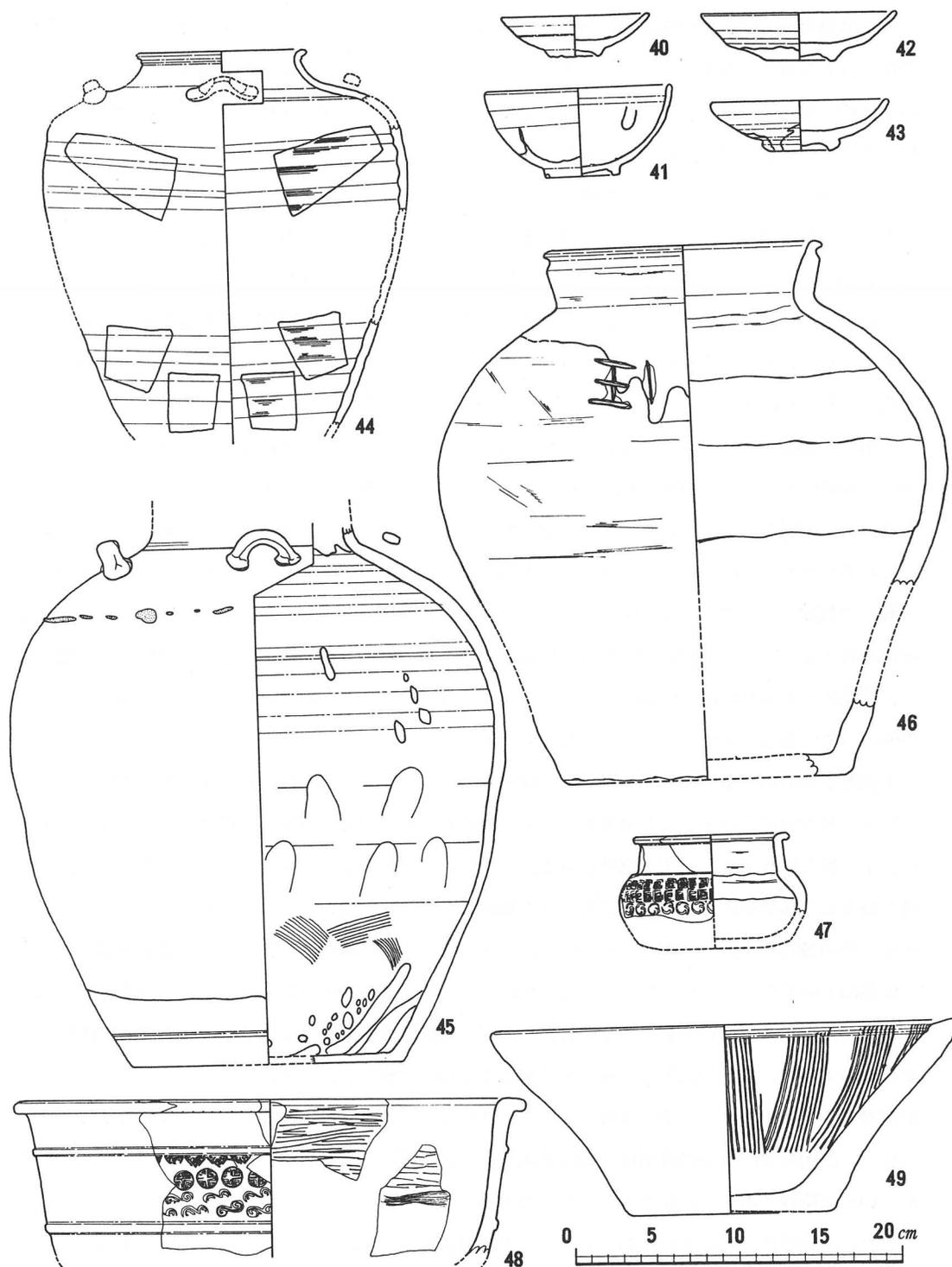
Ⅶ·图-1 染付・自磁实测图



Ⅶ・図一 2 青磁・美濃実測図



Ⅶ・図一3 朝鮮・中国壺・唐津・越前・瓦器実測図



4. 浪岡城跡出土陶磁器の特徴

浪岡城遺跡から出土した陶磁器の特徴は、次のような点にあると思われる。第一に、中世の東北地方北部の有力な城館から出土したものであること。第二に、かなり広い面積が発掘されており、出土品の全体的な組合せが探れること。第三に、中国製品と日本製品の比率を比較すると、中国陶磁器が多いこと。第四に、城館の近在で生産された陶磁器はほとんどなく、ほぼすべてが交易によって運ばれたものであること。第五に、出土陶磁器の器種をみると、皿が最も多く、次いで碗であり、さらに播鉢となること。第六に、同じような種類と器種が多く、大量に生産された貿易品が主であること。第七に、15世紀後半から16世紀末にかけての製品が主体を占めていること。以上のようなことである。

このような、浪岡城跡出土の陶磁器の特徴を、北日本の城館などの遺跡出土陶磁器との比較の中で考えてみると、どのようになるのであろうか。「遺跡出土陶磁器の研究」(『金沢大学文学部論集史学篇』2号、1982年)に述べた資料に基づいて、概観してみよう。

中国陶磁器が、北日本の地域に、日本海の海上交通路を貿易品として運ばれるのは、12世紀からである。朝鮮の陶磁器は、14世紀から発見されているが、その数量は極めて僅かなものである。日本の陶磁器も、中国陶磁器と共にかかなりの数量が運ばれている。これは、北日本では窯業生産が衰退しているためである。14 - 15世紀になると、中国の青磁と白磁が主要な製品になり、これに日本の美濃・瀬戸や越前、珠洲などの窯の製品が加わっている。16世紀に入ると、中国の染付の皿と碗が大量に発見されるようになる。青磁の碗と皿、白磁の皿もみられる。日本の陶磁器は、東海地方の施釉陶器と、北陸地方の無釉焼締め陶器が多い。そして、17世紀に入ると、肥前の陶磁器が主となって、中国や他の日本の陶磁器を駆逐することになるのである。

中国陶磁器の出土量は、13世紀までは比較的少ない。14世紀後半か15世紀には急激に増加するようになり、日本陶磁器の1.7倍もの量が出土する遺跡も現れている。16世紀の遺跡では、2.6倍、1.9倍、1.7倍という量を出土する遺跡がある。しかし、16世紀末から17世紀にかけての遺跡では、0.8倍と減少し、16世紀後半に中国陶磁器と日本陶磁器の量的な転換が起こっていることを知ることができる。浪岡城跡出土の陶磁器は、量的に優位を占めている中国陶磁器に、日本の陶磁器が逼迫していく時期のものであった。したがって、出土品は少なくとも2時期に分類されることが必要となる。

14世紀後半から16世紀中葉に至る期間に、国内の陶磁器の2倍を越える量の中国陶磁器が使用されていたのである。こうした例は、他の地域をみても極めて珍しいことである。しかも、こうした中国陶磁器を主に使用している遺跡は城館であり、農民層の住居からは中国陶磁器が出土する量は極めて少ない。浪岡城跡出土の陶磁器は、この地域の、この時代の支配者層が、日常生活で用いていたものが、いかに特殊であったかを教えてくれるのである。

また、浪岡城跡などの北日本から出土する中国陶磁器の生産地は、中国の南方地域の製品であった。北方地域の製品は、まったく見られないのである。しかも、その地域で生産されたすべての種類が運ばれているのでもなく、青磁、白磁、染付に限られているのである。これは、生活で用いられた陶磁

器は、日本の陶磁器との組合せによって、輸入される種類と器種が選択されていたからである。

北日本で出土する陶磁器全体の中で、14世紀後半から16世紀末にかけて、最も多く用いられた器種は皿である。15世紀には3割を占め、16世紀には7割に達している。14・15世紀には、皿の8割を白磁が占め、1割程度が青磁となる。最も基本的な飲食器は、中国の陶磁器が用いられているのである。16世紀前半には染付が4割ほどを占めるようになり、白磁と青磁を合せて6割となる。そして、16世紀中葉以降は、日本の皿が多くなっていくのである。

皿について多いのは、碗である。14世紀から16世紀末まで、出土する陶磁器全体の2割ほどを占めている。そのうち14・15世紀には、青磁が6割5分で、白磁と天目、染付を合せると、中国陶磁器が9割に達している。16世紀前半には、青磁が6割前後であるが、染付が少しずつ増加し、16世紀後半には青磁と染付が3割ほどで同じ量となり、次いで白磁となる。こうした中国陶磁器が、やはり碗の8割を占めているのである。

また、搦鉢や壺、甕などは、日本の陶磁器が大部分を占めている。台所用品は日本の製品で、中国から輸入される陶磁器は、小型の飲食器が主であったのである。

こうして、浪岡城跡から出土する中国陶磁器も、青磁・白磁から染付へと移り、皿と碗が主要な器種であり、日本の陶器と組合せられて用いられていたのである。こうした特徴を引き起した最大の原因は、当時の東アジアの陶磁貿易のありかたによるのであろう。そして、浪岡城跡出土の陶磁器の特徴をさらに際立たせるのは、北日本の窯業生産が衰退していたことと、日本海の海上交通路の発達によるところが大きいと思われる。

今後、さらに様々な視点から出土陶磁器の詳細な分析が必要になるであろうが、その際に、浪岡城跡出土の陶磁器が果たす役割は、極めて大きなものとなるであろう。

VIII 浪岡城跡北館の掘立柱建物跡について

高島成侑

1. はじめに

浪岡城跡北館の発掘調査は昭和53年度より始められ、昭和58年度を以て一応の終了とされ、平場のほぼ全面的な調査を終えて、その内容をとらえることができるようになった。そこで、北館に於いて検出された掘立柱建物跡を再検討し、建築史・住宅史の立場から、これ迄に判明したものを纏めてみることにしたものである。

北館に於いて、これ迄に検出された掘立柱建物は大小合せて40棟を数える。この中には、調査区域の外に延びていると見られ、建物跡として完結していないもの2棟（S B 32、58建物跡）が含まれているため、ここでの考察の対象となるものは38棟である。その殆どのものは既に報告されてはいるが、今回の再検討によって、特にその平面形に於いて、先の報告を訂正しなければならなくなったものも相当数にのぼる。それらについては、後述の際に載せる平面図によって見ていただきたい。ここでは、この38棟の掘立柱建物跡の規模や平面形式について、現段階での考察を述べるものである。

青森県内に於いては、ここ浪岡城跡と同様に、八戸市の根城跡でも環境整備を前提とした発掘調査が昭和53年度より継続して行われており、多数の掘立柱建物跡が検出されている。ほぼ同時期中世城郭跡であり、双方より検出された掘立柱建物跡の平面形式の比較は、青森県の西部と東部に於る中世文化の在り方の一端を知るものとなる。

これ迄に見られる中世城郭に関する論功の多くは、その立地論や各郭の配列に見られる形式について論じるのみであった。中世に迄さかのぼる住宅の遺構は非常に限られたものであり、更に、中世城郭内の建物の姿について知りうる資料も、若干の絵巻物などに描かれたものに過なかった。しかし、このように調査された城跡に於いては、その中に建つ建物の規模や種類について、或は、一つの郭の中のそれらの配置の在り方について迄も論じる可能性をも有しているのである。

昭和56年度より調査顧問として発掘調査に参加させていただき、今回このようにして、浪岡城跡北館の掘立柱建物跡について纏める機会を与えて下さった、浪岡町教育委員会に深く感謝するものである。この小稿は、発掘調査の現場に於いて、或は、整理室に於いて、調査担当の工藤清泰氏との度重なる検討の上で纏まったものである。また、調査顧問として参加された、弘前大学教授・村越潔氏や金沢大学助教授・佐々木達夫氏からは多くのご教示を頂いた。有益な資料のご提示を受けたことと共に、ここに記して謝意を表するものである。

2. その配置について

2-a 北館の概要

浪岡城跡北館は、城跡全体の位置関係から、主郭に準ずる館であるとの認識で調査されて来ている。北館全体を見ると、周辺部には、竪穴式建物跡が配置されており、掘立柱建物跡は中央部に或る纏まり

以て配されているようである。

東北地方北部の中世城郭跡に於いては、掘立柱建物跡と竪穴式建物跡とが相伴して検出されることが一つの特徴として挙げられる。一つの郭の中での竪穴式建物跡の配置の在り方や掘立柱建物跡との位置関係は、中世城郭跡の様相を知る上で興味ある事柄である。この竪穴式建物跡は、北館に於いて最も多く検出されたものであり、その殆どが中世に構築されたものと見られており、その規模や形態も多様である。今のところ、住居・作業場・倉庫などの機能が推定されているが、明確ではない。

掘立柱建物跡について見ると、その規模については、後に詳述するように、4間×5間以上の規模を有するものと、2間×3間程度のものに大別することができ、同じような規模の建物跡については、2～3期の建替えがなされていたことが確認されている。このことは、掘立柱建物跡の建替えが同一の場所で行われた結果と推定され、各建物跡が、或る纏まりを以て、機能別に地区割されていたことも推定されるのである。また、規模の大きなものは、20～30m程の距離をおいて配置され、棟の方向も似通ったものになっていることが注目される。これに対して小規模なものは、配置にもこれといった規則性も見られず、棟の方向も一定ではない。しかしながら、掘立柱建物跡や竪穴式建物跡・井戸跡・溝跡などの検出状況から、建物跡の相互機能をも含めて、夫々に一定の領域を以て区画されていたらしいことも推察されるようになってきている。

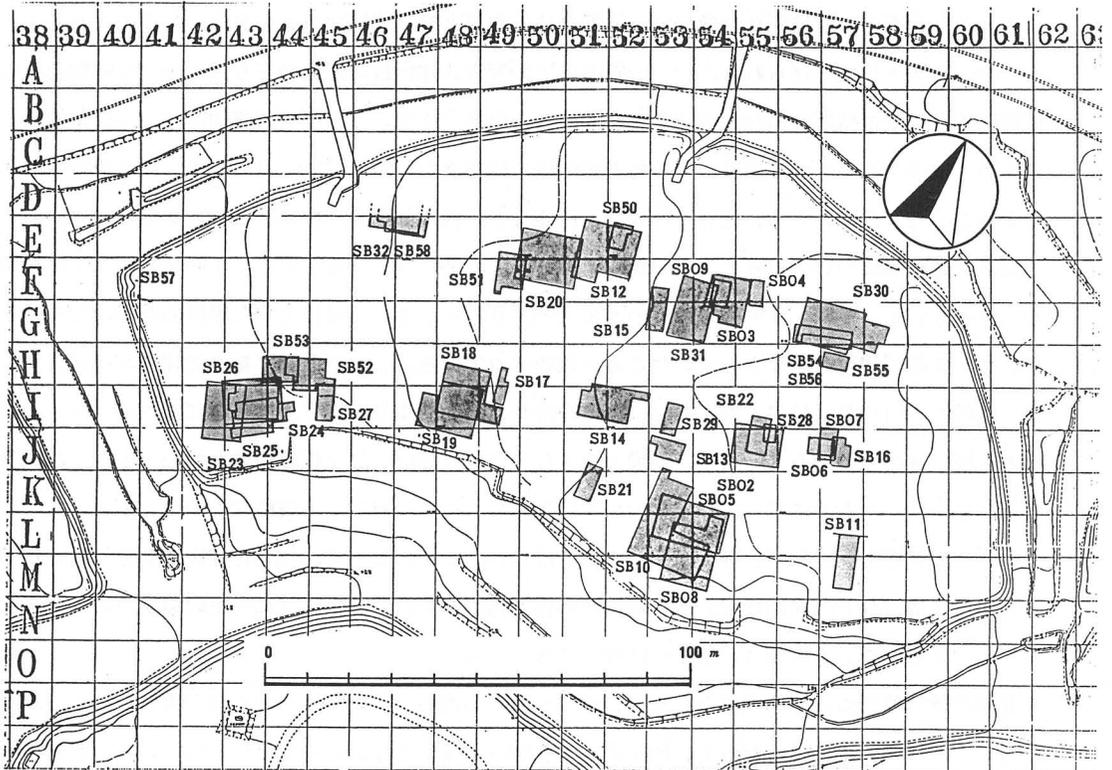
北館の外の郭との連絡通路については、唯一ヶ所その西端で、西館を向いた形で橋らしいものが架けられ、樹形状に鍵の手に折れて、門を潜って北館へ入るようなところが発見されている。北館の内部の通路については、明確な痕跡が残されていないながらも、掘立柱建物跡の配置は、明らかに、北側に並ぶ一群と南側に並ぶものに分けることができ、その間のところが主要通路ではなかったかと推定されるのであるが、そこに、井戸跡や溝跡や竪穴式建物跡などが検出されており、時期によって、かなり移動していたものであることがうかがわれる。

2-b 建物跡の重複関係

図-1に示す掘立柱建物跡の配置を見ると、北館の西端には、門と見られるS B 57建物跡があり、その南にS B 23、S B 24、S B 25、S B 26建物跡と4棟の大規模な建物跡が重複して検出されている。ここは北館の中でも重要な場所だったらしく、15世紀後葉から17世紀前葉迄という浪岡城跡の存続した全ての時期に亘って、1棟ずつ建物が建替えられて来たものようである。このすぐ北東側に、S B 27、S B 52、S B 53建物跡と3棟の中規模のものが、僅かずつ間隔をおきながら、重なり合って検出されている。出土遺物からS B 27建物跡は16世紀中葉のものと見られており、これに伴う柱穴をS B 52建物跡が切っており、更にその西側のS B 53建物跡の柱穴をも切っている。S B 53建物跡は、出土遺物から夫々16世紀中葉、17世紀前葉とされるS B 24、S B 26建物跡とは同時に存在することのできないものであり、その年代は16世紀後葉と推定されるのである。

先のところから約50m東側に大規模なS B 18建物跡とS B 19建物跡とが重なって検出されているが、出土遺物からも柱穴の切り合い関係からも、S B 19建物跡が古くて16世紀前葉と見られ、S B 18建物

Ⅷ・図-1 浪岡城跡北館建物跡配置図



跡は16世紀後葉と見られている。そのすぐ東側に小さなS B 17建物跡が一つだけある。この場所から北東へ約40mのところ、大きなS B 20・S B 12建物跡と小さなS B 50・S B 51建物跡との4棟が重複して在る。S B 51建物跡の柱穴が、16世紀中葉のS B 20建物跡に切られているところから、16世紀前葉と知られる。S B 12建物跡については、隣接する建物跡の柱穴との切り合い関係はないものの、その出土遺物より16世紀後葉と推定されている。S B 50建物跡については、現段階でその年代は不明である。

このすぐ東側に、16世紀後葉と見られているS B 15建物跡が単独で建ち、更にその東に続いて、小規模なS B 04・S B 09建物跡と、大規模なS B 03建物跡とS B 31建物跡とが重なって検出されている。ここでは、S B 04・S B 09建物跡がその出土遺物より16世紀前葉と見られており、このS B 04建物跡の柱穴をS B 03建物跡のものが切っていることもあるが、更に、これがS B 31建物跡の柱穴に切られている。即ち、S B 03建物跡はその出土遺物からも16世紀中葉と認められ、S B 31建物跡は16世紀後葉以降のものと推定されるのである。

この場所から南西に大きなS B 14建物跡と小さなS B 29・S B 13建物跡とが夫々独立してある。S B 14及びS B 13建物跡は、その出土遺物より夫々16世紀中葉と16世紀前葉と知られるが、S B 29建物跡は不明である。これらから東へ約20mのところ、S B 02・S B 22・S B 28建物跡が重なり合って検出されている。ここでの切り合い関係は、S B 02建物跡がS B 22建物跡を切っているが、

S B 28建物跡に切られているのを見ることができ、S B 02建物跡がその出土遺物より16世紀中葉とされていることから、S B 22建物跡が16世紀前葉、S B 28建物跡が16世紀後葉以降と見ることができよう。

更にその南西約30mのところ、S B 05・S B 08・S B 10建物跡という大規模な3棟の建物跡が重なり合って検出されている。ここでは、S B 05建物跡の柱穴がS B 10建物跡によって切られ、S B 10建物跡の柱穴がS B 08建物跡のものによって切られているのを見る。出土遺物より、S B 05建物跡が16世紀前葉、S B 10建物跡が16世紀中葉とされていることから、S B 08建物跡は16世紀後葉以降のものと思われるのである。この西側約25mのところ、S B 21建物跡が1棟だけあり、16世紀中葉のものが見られている。

先のS B 02建物跡のところから約15m程東で、北館の東端ともいえるところに、S B 06・S B 07・S B 16建物跡と小規模な建物跡3棟が重複して検出されている。S B 06建物跡とS B 07建物跡については、柱穴の切り合い関係からも出土遺物の面からも、S B 06建物跡が古く16世紀前葉とされ、S B 07建物跡が16世紀中葉とされているが、S B 16建物跡については、何れの関係からも検討できず、その年代は不明である。また、この南側約25mのところ、S B 11建物跡が一つだけ検出されているが、これも年代は不明である。

北館の北東端ともいえるところには、S B 30・S B 54・S B 55・S B 56建物跡と大小の建物跡が重なって検出されている。これらの中で、S B 55建物跡とS B 56建物跡とは夫々に単独で建つものであるが、遺物より16世紀中葉と見られているS B 30建物跡の柱穴がS B 54建物跡のものを切っているのを見るのである。

2-C 北館の時期区分について

このように見て来ると、浪岡城跡北館の掘立柱建物跡は、凡そ3期に区分して考えられるようである。

第1期 15世紀後半～16世紀前葉

第2期 16世紀中葉

第3期 16世紀後葉～17世紀前葉

となろう。そして第2期とした16世紀中葉頃が北館の最盛期であったと推定され、大規模な掘立柱建物跡も最も多く検出されているようである。

図-2、-3、-4は、その年代の推定できた掘立柱建物跡を、夫々の時期毎に描いて見たものである。第1期に於いては、S B 57、S B 23、S B 19、S B 51、S B 04、S B 09、S B 13、S B 22、S B 05、S B 07、S B 17、S B 15建物跡といった約12棟の掘立柱建物跡が知られるのである。続く第2期については、S B 57、S B 24、S B 27、S B 20、S B 03、S B 21、S B 14、S B 02、S B 10、S B 06、S B 30建物跡などの約11棟が存在したものと推定される。更に第3期については、S B 57、S B 25、S B 26、S B 53、S B 52、S B 18、S B 12、S B 08、S B 31、S B

28建物跡などの約10棟が知られるのである。

第1期は小規模な建物跡が多く、大きなものは3棟を数えるに過ぎないのに対して、第2期とされた10棟の内、7棟迄が大規模なものである。そして第3期に於いては、規模の大きなもの6棟を見るのである。しかしこれらは、その時期について一応の推定が成立つもののみであり、現段階で時期の不明なものが大小9棟もあり、今後の検討結果によっては、その様相が異ったものともなりうるのである。

2-d 小結

北館の配置については、掘立柱建物跡と竪穴式建物跡との関係が今一つ明らかではなく、今後の大きな検討課題である。また、塀跡や井戸跡・溝跡などの時期が確定され、一つの掘立柱建物跡と組み合わせられるものが推定されるようになると、新たな興味ある考察がなされうるのであろう。

更に、一部で検出された土塁の形状も、全体については明らかにされていない。また、外の郭との連絡通路についても、それを推定させるものが一箇所検出されただけである。北館周辺部の更なる調査が期待されるのである。

3 その規模について

ここで検出された掘立柱建物跡の中には、大規模な殿舎としての建物跡から、小規模で物置や倉庫を想わせるもの、また、門と見られるものなども含まれている。ここでは、それらを梁行の柱間数によって区別して述べてみたい。この梁行柱間数は、主屋の部分について見たものであり、下屋部分や張出し部分については考えていない。これら掘立柱建物跡を梁行柱間数で分類することは、夫々の建物跡の平面形式の考察や上屋構造の推察に、桁行柱間数で見るとよりも、より利便があると考えたためである。

梁行柱間数で分類すると、梁行のないものが1例あり、1間と見られるものが2例、2間のものが15例で最も多く、3間のものは3例、4間のものが5例、5間のものは10例、そして6間のものが2例となり、それ以上のものは見られないのである。

3-a 梁行のないもの

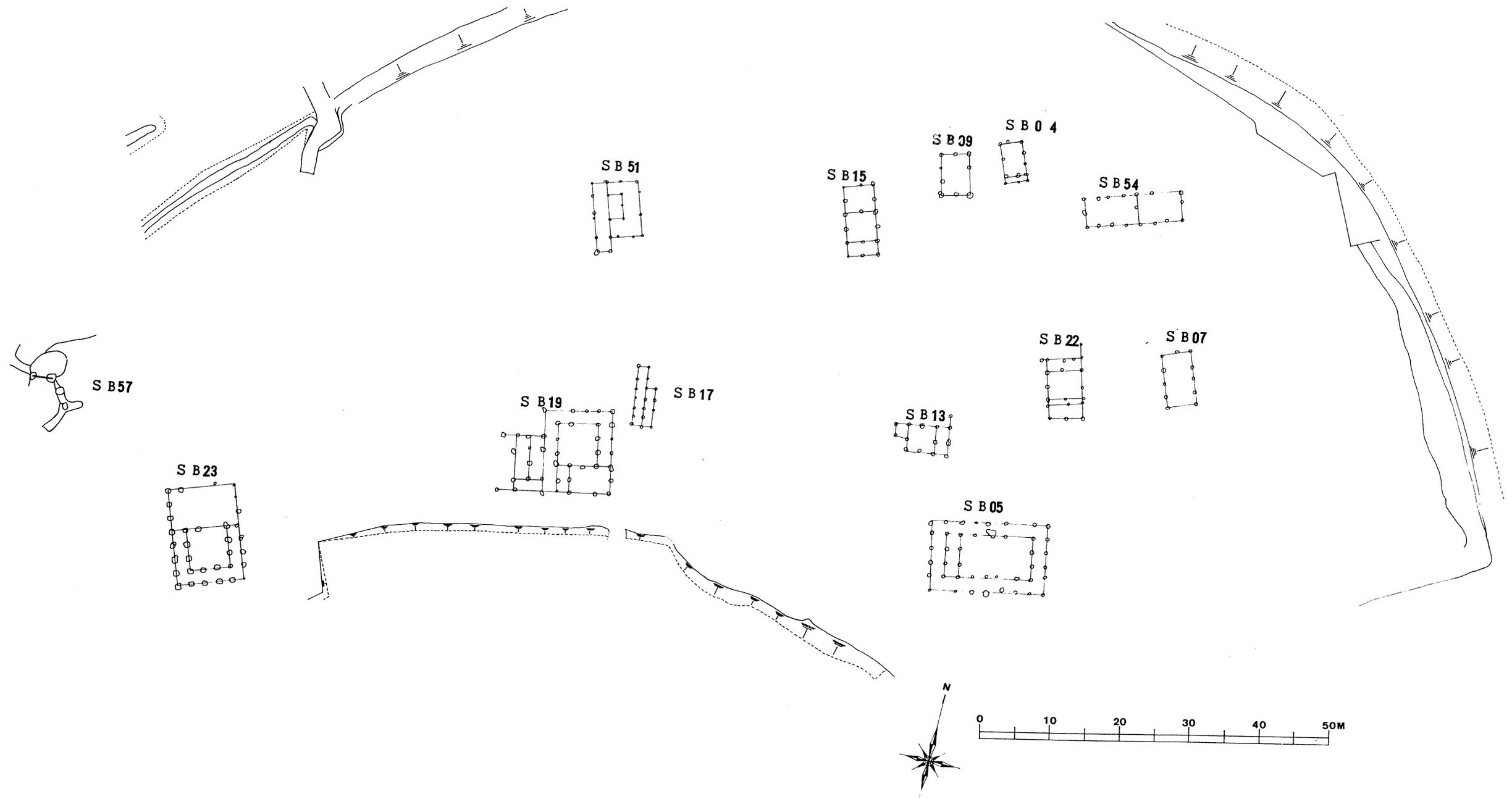
北館の西端で検出されたS B 57建物跡(図-5)がある。西館との連絡路の一部と見られ、これを潜って榊形状に鍵の手に折れて、西側の堀に向っているところであり、大きな柱穴が2個よりなる門跡と見られ、その柱間は凡そ10.0尺である。

柱が2本立つ門の形式としては、棟門或は冠木門が考えられるが、今のところ、どちらとも比定しがたい。建替えられた跡はなく、北館の早創当時からその終り迄、ここに在ったものと見られる。

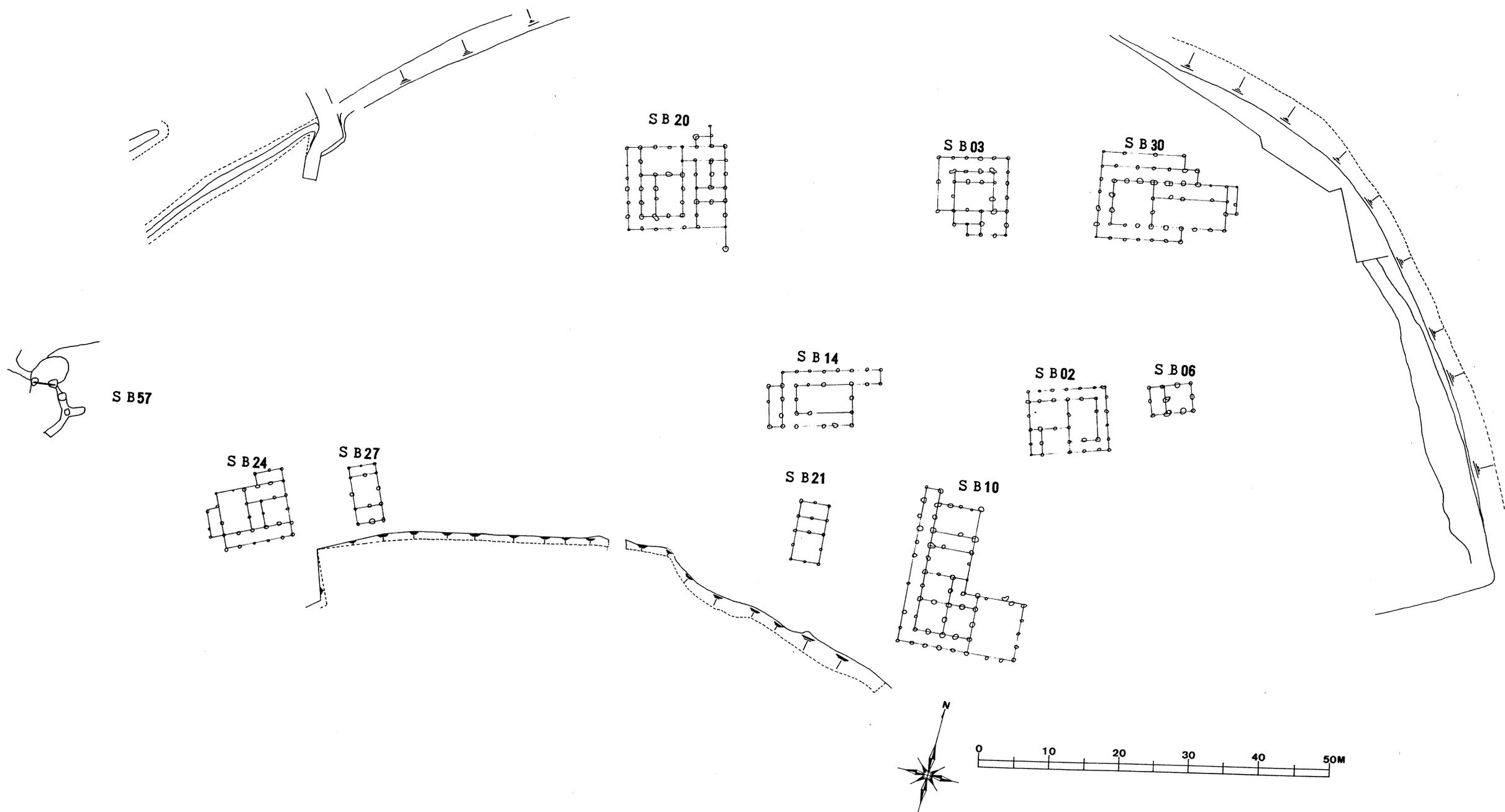
3-b 梁行1間のもの

(1) S B 17建物跡(図-6) これは中央西寄りの張り粘土を掘った形で検出された。桁行6間梁行1間のものに桁行4間分の庇の付いたものと見られる。梁行方向では4.8尺の2間9.6尺を数えるが、桁行方向はまちまちで、北から6.0・5.0・4.0・5.0・5.5・4.5尺の30.0尺となるよう

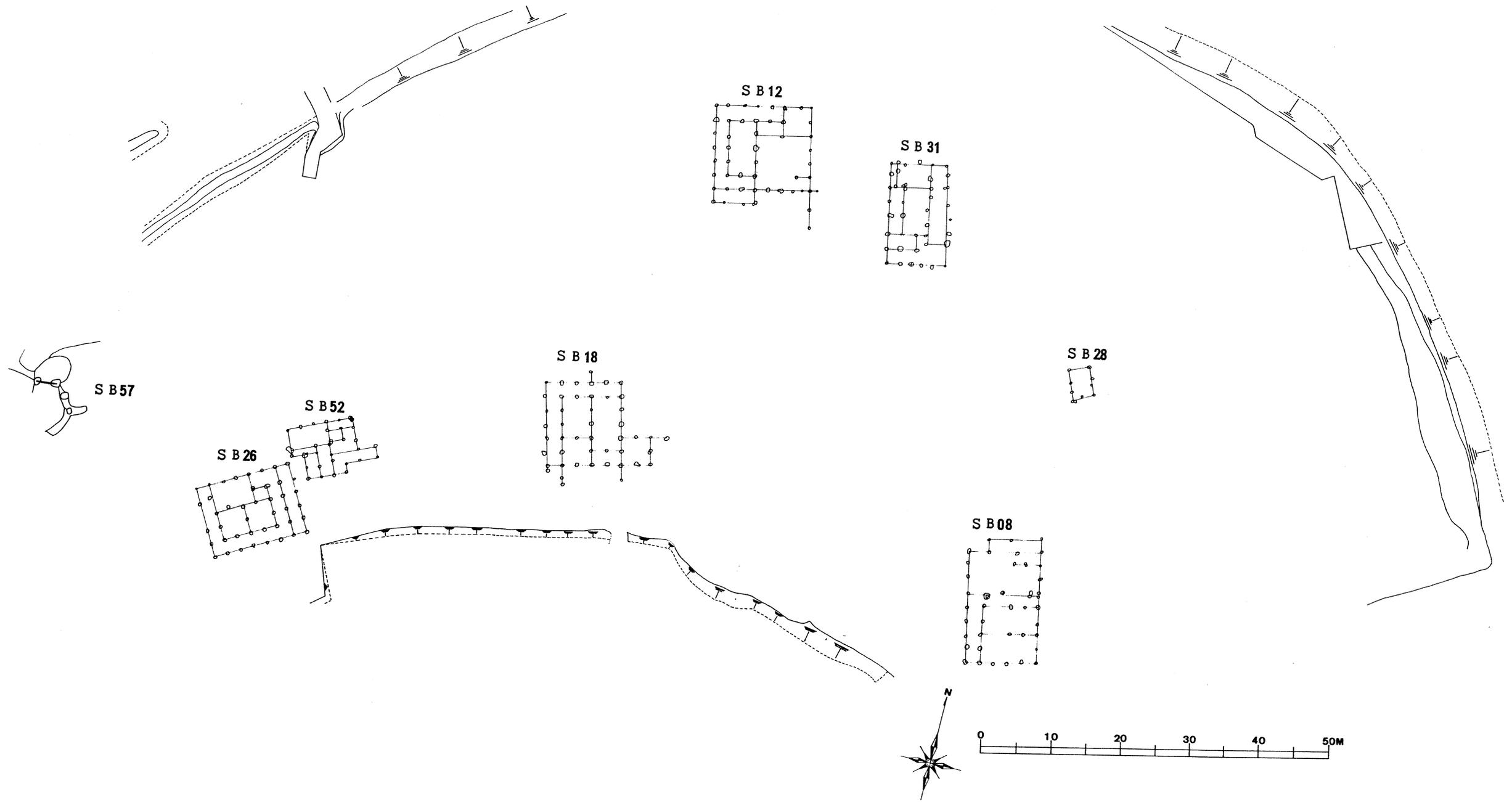
Ⅷ·图-2 第1期掘立柱建物跡配置图



Ⅷ·图-3 第2期掘立柱建筑物配置图



Ⅷ·图-4 第3期掘立柱建筑物配置图



VIII・図-5 SB57

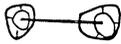
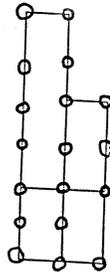
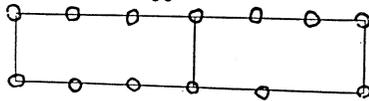


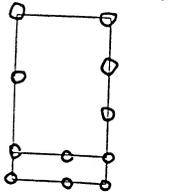
図-6 SB17



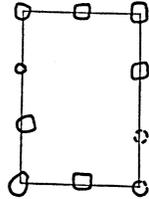
VIII・図-7 SB56



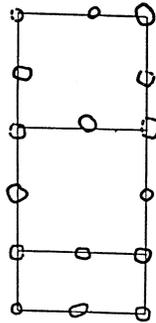
VIII・図-8 SB04



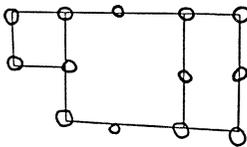
VIII・図-9 SB09



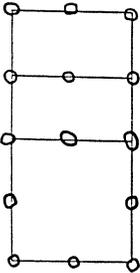
VIII・図-11 SB15



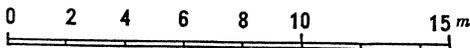
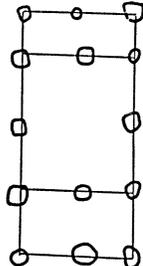
VIII・図-10 SB13



VIII・図-12 SB21



VIII・図-13 SB27



である。出土遺物から15世紀後葉から16世紀前葉と見られている。

(2) SB56建物跡(図-7) 北東隅のSB30建物跡と重複する形で検出された。桁行6間、梁行1間のものである。梁間は約8.0尺、桁行柱間は6.6尺が4間と6.0尺が2間の38.4尺である。柱穴の切り合い関係もなく、出土遺物も不明である。

3-c 梁行2間のもの

15例をも数えるということは小規模な建物跡として最も基本的なものであったと考えられるものであり、一般の建物としても、梁行2間というのは一つの基本形であったのであろう。

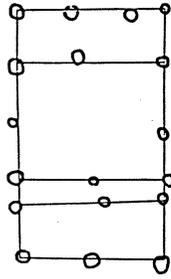
この15例の中では、16世紀前葉以前と見られるものが4例、中葉のものが2例、後葉から17世紀前葉が2例、そして現段階で時期不明のものが7例となっている。

(1) SB04建物跡(図-8) 桁行3間の身舎の南側に1間の庇の付いたものである。西側及び北側では、柱穴に不明なところもあるが、桁行が約5.3尺の3間と約3.0尺の18.9尺となり、梁行が約6.0尺と4.0尺との10.0尺の2間の規模である。

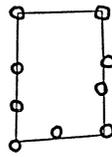
(2) SB09建物跡(図-9) 桁行3間で、柱穴は全て明瞭に並んでいる。桁行では6.6尺2間と6.0尺の19.2尺になり、梁行では6.6尺2間の13.2尺である。

(3) SB13建物跡(図-10) 全体では、桁行3間の西側に1間×1間の張出しを持っており、中央に2間×2間の室がある。桁行で6.0・7.5・6.0尺の19.5尺を測り、梁行では、6.6尺2間の13.2尺であり、西側の張出しは6.0尺四方である。

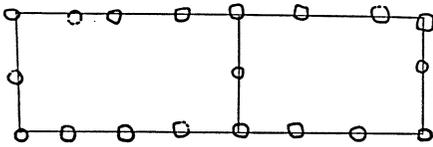
VIII・図-14 S B 22



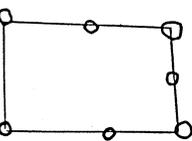
VIII・図-16 S B 28



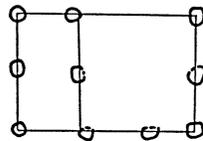
VIII・図-15 S B 54



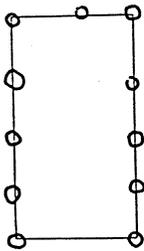
VIII・図-17 S B 55



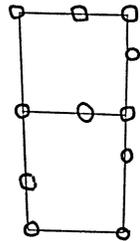
VIII・図-18 S B 0 6



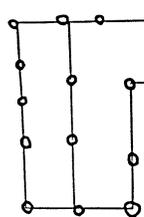
VIII・図-19 S B 0 7



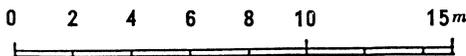
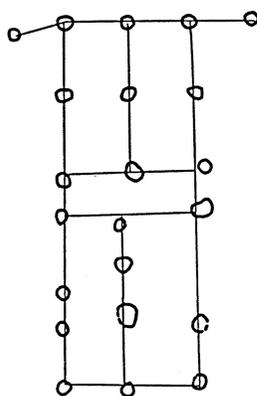
VIII・図-20 S B 29



VIII・図-21 S B 50



VIII・図-22 S B 11



(4) S B 15建物跡(図-11) 桁行6間という、この規模としては長大なものであり、内部に2間×2間の室を2室連ねている。桁行では、ほぼ等間で6.6尺の6間で39.6尺となり、梁行では約7.2尺が2間で14.4尺である。

以上の4例が16世紀前葉以前のもののみなされているものである。

(5) S B 21建物跡(図-12) 桁行4間のもので、南端に2間×2間の1室を有している。柱間寸法は、桁行で約7.0尺等間の28.0尺であり、梁行では約6.6尺の等間で13.2尺と見られる。

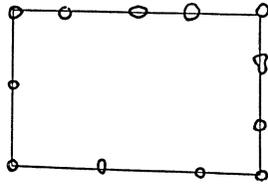
(6) S B 27建物跡(図-13) 桁行4間であり、先のS B 21建物跡とほぼ同規模であるが、ここでは中央に2間×2間の室が取られている。桁行で4.5・7.5・7.5・7.5尺の27.0尺、梁行が6.0尺の2間で12.0尺である。

この2例が16世紀中葉のものとしてされている。

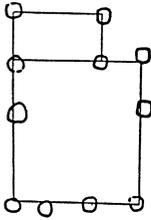
(7) S B 22建物跡(図-14) 柱穴の並びは不揃いではあるが、桁行4.5間梁行2間の1棟の建物跡と見たい。内部に2間×2間の室を持つが、これ迄のものとはその間取りが違い、複雑なものとなっている。規模も多少大きくなり、桁行で6.0・6.6・6.6・3.0・6.0尺の28.2尺となり、梁行は8.0尺2間の16.0尺である。この建物跡の柱穴は16世紀中葉とされるSB 02建物跡によって切られており、16世紀前葉頃のものとも見ることができよう。

(8) S B 54建物跡(図-15) 先例と同様に、この建物跡の柱穴は、16世紀中葉とされているS B 30建物跡によって切られていることから、16世紀前葉のものとも見ることができよう。桁行7間の長大なものであるが、4間と3間と

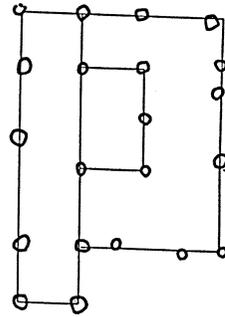
VIII・図-24 S B 53



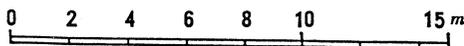
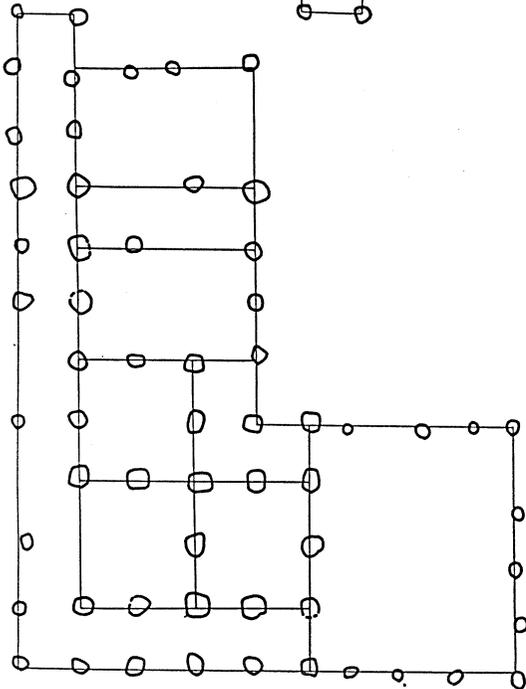
VIII・図-23 S B 16



VIII・図-25 S B 51



VIII・図-26 S B 10



に仕切られている。柱間寸法は、桁行で5.0・6.6・6.6・6.6・6.6・6.6・7.0尺の45.0尺となり、梁行では6.0・7.0尺の13.6尺と計測されるようである。

(9) S B 28建物跡(図-16) 桁行3間といっても柱間寸法が小さく、小規模な建物跡である。梁行では5.0・5.0尺の10.0尺であり、桁行でも6.6・4.0・4.0尺の14.6尺位である。

(10) S B 55建物跡(図-17) 桁行2間であるが、先の3間のS B 28建物跡よりも大きい建物跡である。桁行で10.0・9.0尺の19.0尺であり、梁行が6.0・6.0尺の12.0尺である。

(11) S B 06建物跡(図-18) 桁行3間で東側に2間×2間の室を有している。柱間寸法は、桁行で7.0・7.0・6.0尺の20.0尺となり、梁行は6.0・6.0尺の13.2尺である。

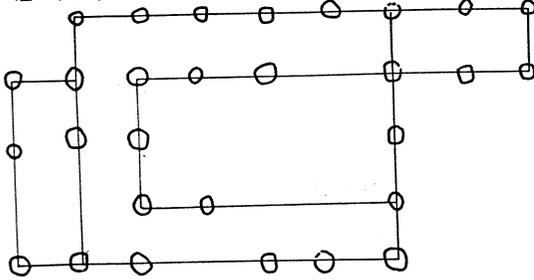
(12) S B 07建物跡(図-19) 桁行4間であるが、内部は一室である。桁行で6.6・6.6・6.6・5.0尺の24.8尺と測ることができ、梁行は8.0・5.5尺の13.5尺位である。

先のS B 06建物跡との切り合いが認められ、こちらが古いものと知られるが、その時期については確定することができなかった。

(13) S B 29建物跡(図-20) 桁行4間であるが、2間×2間の2室に仕切られている。柱間寸法は、桁行で5.0・6.0・5.0・8.0尺の24.0尺程であり、梁行では6.6・6.0尺の12.6尺と測定される。

(14) S B 50建物跡(図-21) 柱穴は不揃いであるが桁行4間とみられ、西側に4間×1間を取り、東側に2間×1間を縦横違いに配している。規模は、西側の桁行で5.0・4.0・4.3・7.5尺の20.8尺程となり、南側梁行で6.0

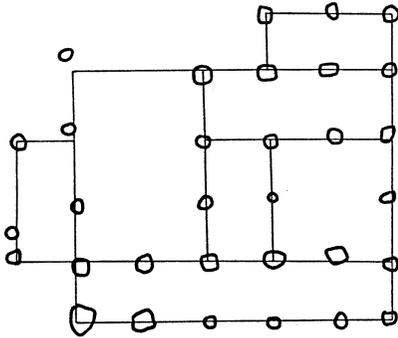
Ⅷ・図-27 S B 14



・ 6.0 尺の12.0 尺となっている。

(15) S B 11 建物跡 (図-22) 桁行 6 間と見られるが、柱穴の並びが不揃いのため、柱間寸法もまちまちであり、桁行方向に大きな寸法が見られる。中央に 2 間×1 間の横長の室を取り、その南北に縦長の室を 2 室ずつ並べている。桁行方向で 7.5・9.0・5.0・8.0・4.5・6.6 尺の 40.6 尺となり、梁行が 7.0・7.0 尺の 14.0 尺程である。

Ⅷ・図-28 S B 24



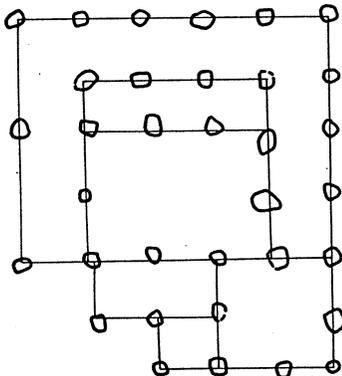
(9)から(15)に挙げた建物跡については、出土遺物よりもその時期を決定することができず、また、重複関係から見ても、S B 06 建物跡と S B 07 建物跡との切り合いより、S B 07 建物跡が古いものと推定できるのみで、他は全く不明である。

3-d 梁行 3 間のもの

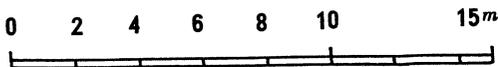
(1) S B 16 建物跡 (図-23) 3 間×2 間のものに 1 間×1 間の張出しの付いたものであるが、2 間の方が柱間寸法が大きいため、こちらを桁行方向とみて、梁行 3 間のものとして分類した。規模は、桁行方向の張出しをも含めて、5.5・6.0・10.6 尺の 22.1 尺を測り、梁行では 4.0・5.0・6.0 尺の 15.0 尺程のものである。

先に述べた S B 06 建物跡、S B 07 建物跡とこの 3 棟が重複し切り合っており、その中では最も早い時期のものではあるが、具体的には確定できなかった。

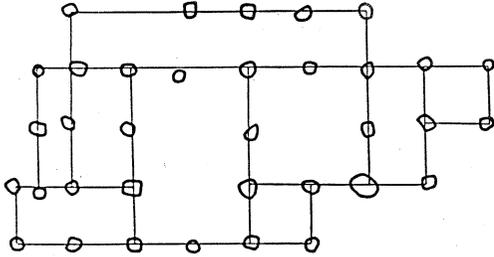
Ⅷ・図-29 S B 0 3



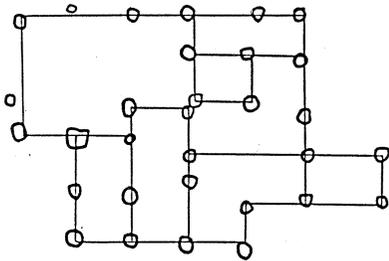
(2) S B 53 建物跡 (図-24) 桁行 4 間とみられ、内部は一室である。西側の柱割で梁行 3 間のものとした。桁行で 5.5・8.5・6.0・8.0 尺の 28.0 尺を数え、梁行では 5.5・7.0・6.0 尺の 18.5 尺を測る。前述した S B 27 建物跡



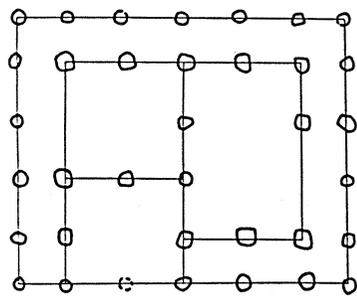
Ⅷ・図-30 S B 25



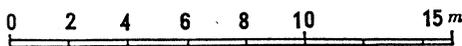
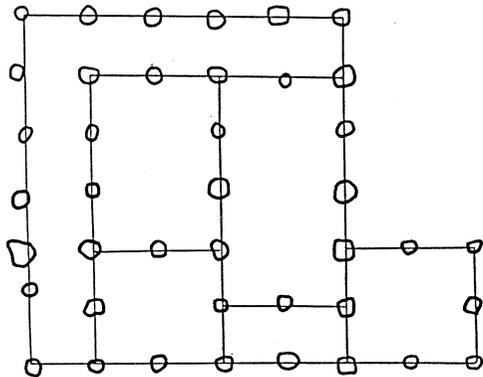
Ⅷ・図-31 S B 52



Ⅷ・図-32 S B 0 2



Ⅷ・図-33 S B 18



や後述するS B 52建物跡との柱穴の切り合いから、16世紀後葉のものともみることができる。

(3) S B 51建物跡(図-25) 西側で桁行に1間突出し、柱穴の並びも明瞭ではないが、1棟の建物跡と見ている。桁行は、西側の突出し部分で、6.0・8.5・12.0・6.6尺の33.1尺と測ることができ、梁行では6.6・6.6・9.0尺の22.2尺と見られる。後述するS B 20建物跡は、16世紀中葉頃のものとしてされており、これに切られているところから16世紀前葉以前のもものと認められる。

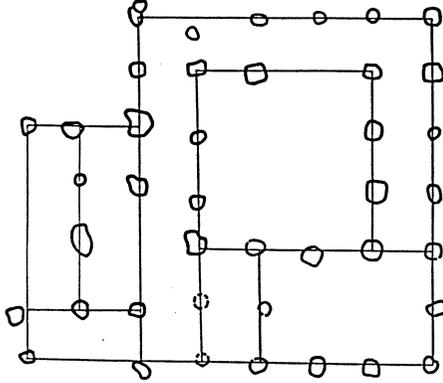
3-e 梁行4間のもの

(1) S B 10建物跡(図-26) 鍵型になり、桁行10間に更に1間の突出しがあるという大規模なものである。柱間寸法は、桁行で突出し部分も含めて7.0・6.0・7.0・7.0・6.0・6.5・6.6・6.6・6.6・7.0・7.0・7.0尺の80.3尺となり、梁行では西から東端迄6.6・6.6・6.6・6.6・6.0・5.0・5.0・6.6・7.5尺の56.5尺を測る。出土遺物より16世紀中葉頃と見られている。

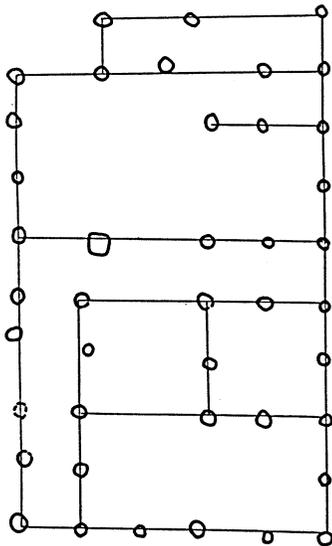
(2) S B 14建物跡(図-27) 桁行4間のものに、西側に3間×1間と、東側に2間×1間の張出しを付けている。桁行で西の張出しから6.6・6.6・6.6・6.6・6.6・6.0・7.0・7.0尺の53.0尺となり、梁行で北から6.6・6.6・6.6・6.0尺の25.8尺となっている。16世紀中葉のものとも見られている。

(3) S B 24建物跡(図-28) 桁行5間梁行4間の、西側と北側に、2間×1間の張出しを有している。規模は、桁行で西の張出しから6.0・7.0・6.6・7.0・6.6・5.5尺の38.7尺となり、梁行では、北の張出し迄南から6.5

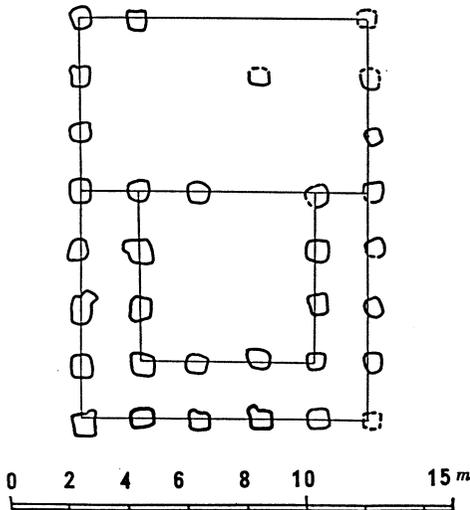
Ⅷ・図-34 S B 19



Ⅷ・図-35 S B 0 8



Ⅷ・図-36 S B 23



・6.5・6.5・7.0・6.0尺の32.5尺となっている。出土遺物からは、その時期は確定できなかったのであるが、16世紀後葉と認められるS B 25建物跡の柱穴にこの建物跡の柱穴が切られていることから、16世紀中葉頃のものと思われるのである。

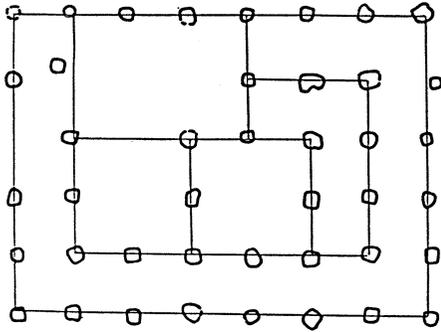
(4) S B 03建物跡(図-29) 桁行5間 梁行4間の主屋の南に4間×2間の突出しのあるものと見られる。柱間寸法は、桁行5間が6.5尺の等間で32.5尺となり、梁行が北から6.5・5.5・6.5・6.5尺の25.0尺となり、南の張出し部が6.5・5.5尺の12.0尺である。16世紀中葉頃のものと思われる。

(5) S B 25建物跡(図-30) 桁行5間のものに、西側と東側に張出しのあるものと見られる。柱間寸法は、桁行5間で西から6.6・6.6・6.6・6.6・6.0尺の32.4尺となり、西の張出し部が6.5尺、東の2間が6.6・7.0尺の13.6尺となっている。梁行は、北から6.5・6.6・6.6・6.6尺の26.3尺と測ることができる。16世紀後葉のものと思われる。

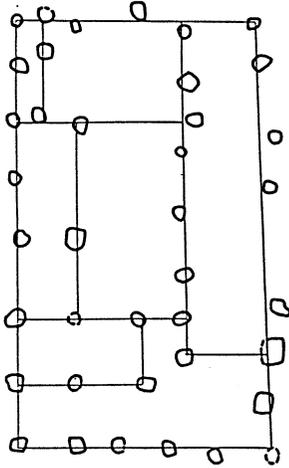
3-f 梁行5間のもの

(1) S B 52建物跡(図-31) かなり歪んではいるが、桁行5間と梁行5間の東側に1間の張出しのある1棟の建物跡と認められる。S B 27建物跡やS B 53建物跡と重複して検出されたものであり、その柱穴の切り合いから、これが17世紀前葉頃のものと思われる。柱間寸法は、桁行で西から5.5・6.5・6.6・6.5・6.5尺の31.6尺の5間を数え、東端の張出しが8.5尺となっている。梁行では、測定しにくいところもあるが、ほぼ北から4.5・6.0・8.0・7.0尺の25.5尺と測ることができそうである。

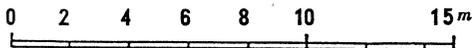
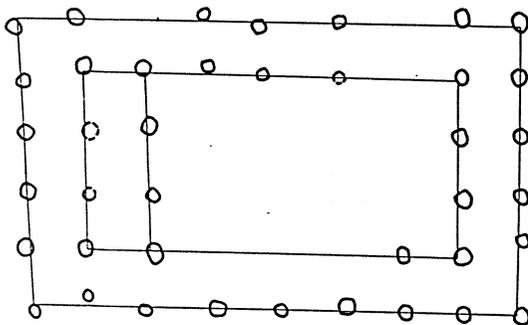
Ⅷ・図-37 S B 26



Ⅷ・図-38 S B 31



Ⅷ・図-39 S B 05



(2) S B 02建物跡(図-32) 桁行6間

の整形な建物跡である。出土遺物から16世紀中葉頃と認められている。柱の並びは明解であり、柱間寸法もきれいに整っている。桁行では5.0・6.6・6.6・6.6・6.6・5.0尺の36.4尺となり、梁行でも5.0・6.6・6.6・6.6・5.0の29.8尺となっているものである。

(3) S B 18建物跡(図-33) 桁行6間

の整形な主屋の南東隅に、2間×2間の張出しの付いたものである。柱穴の並びは明瞭であり、柱間寸法も揃っている。桁行では、北から6.6・6.6・6.6・6.6・6.0・6.6尺の39.0尺となり、梁行では、東側の張出しまで7.0尺の等間で49.0尺である。16世紀後葉のものともみられている。

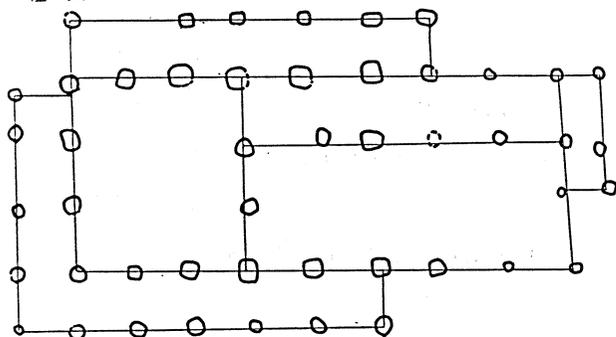
(4) S B 19建物跡(図-34) 桁行6間

の主屋の西側に4間×2間の張出しの付いたものと見られる。出土遺物からはその時期を決定しかねたのであるが、先のS B 18建物跡の柱穴との切り合い関係から、16世紀前葉から中葉のものとも認められる。柱間寸法も割りと均一であり、桁行方向で北から6.5・6.6・6.6・6.6・6.6・6.6尺の39.5尺と並び、梁行方向では、主屋の西から6.6・6.5・6.5・6.0・7.0尺の32.6尺と測ることができる。

(5) S B 08建物跡(図-35) 桁行8間

の主屋の北側に4間×1間の庇を持つものと見ることができるが、柱穴の並びは不揃いであり、不明なところもある。時期もはっきりしないが、S B 10建物跡の柱穴との切り合いから、16世紀後葉のものとも認められる。柱間寸法は、桁行が東側の側柱列で、北の庇部分より9間が6.6尺の等間で59.4尺となっており、梁行では、南側柱

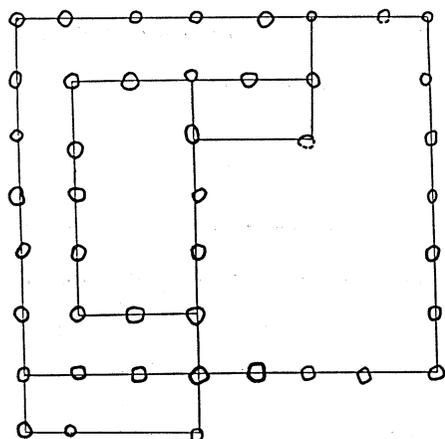
Ⅷ・図-40 S B 30



列で西より 6.6・6.6・6.6・8.0・6.6 尺の 34.4 尺と測ることができる。

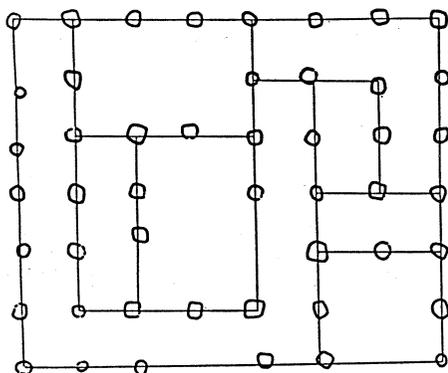
(6) S B 23 建物跡 (図-36) 桁行 7 間の整形な建物跡である。遺物の上から、16 世紀後葉と見られてはいるが、柱穴も大きく、S B 24 建物跡や S B 25 建物跡の柱穴に切られているところから、16 世紀前葉から中葉のものとも見ることができよう。柱間寸法も整っており、桁行では南から 6.6・6.5・6.6・6.5・6.5・6.6・6.5 尺の 45.8 尺となり、梁行でも 6.6・6.5・6.6 尺の 32.8 尺と測ることができる。

Ⅷ・図-41 S B 12

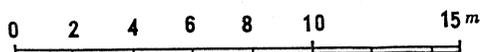


(7) S B 26 建物跡 (図-37) 柱穴に不揃いのところもあるが、桁行 7 間の整形の建物跡である。出土遺物から 17 世紀前葉頃と見られており、ここ北館では最も新しい時期に属するものである。柱間寸法は割と均一性をもち、桁行が西から 7.0・6.5・6.5・6.5・6.5・6.5・6.5 尺の 46.0 尺となり、梁行も北から 7.5・6.5・6.5・6.5 尺の 33.5 尺となっている。

Ⅷ・図-42 S B 20



(8) S B 31 建物跡 (図-38) 柱穴も不揃いで、全体も歪んでおり、内部もはっきりした間取りではないが、桁行 7 間の 1 棟の建物跡と見たい。時期については、遺物からは確認できていないが、先の S B 03 建物跡の柱穴を切って建られているところから、16 世紀後葉から 17 世紀前葉頃と認められる。柱間寸法の測定も困難であるが、桁行の西側柱列では、北から 5.5・6.6・6.6・6.6・6.6・9.0・7.5・7.0 尺の 55.4 尺と並び、梁行では南側柱列で、西から 6.6・4.5・6.0・5.0・6.6 尺の 28.7 尺と測ることができる。



(9) **S B 05建物跡** (図-39) 柱穴の並びが、明瞭でないところも多くあり、形も歪んでいるが、桁行8間のものと見ることができ、1棟の建物跡である。柱間寸法は、桁行が南の側柱列で6.0・6.0・8.0・6.6・8.0・6.5・6.5・6.6尺の54.2尺と測ることができ、梁行は西の側柱列で北から6.0・6.0・6.0・6.6・6.6尺の31.2尺と見ることができ、遺物の面から16世紀前葉のものとしてとらえられている。

(10) **S B 30建物跡** (図-40) 桁行9間の建物跡と見ることができ、建物跡に歪みもあり、不自然な形のところもあるが、1棟のものを見たい。出土遺物によって、16世紀中葉のものとしてされている。柱間寸法は、桁行では北の入側柱列で、東の突出し迄含めて6.5・6.5・6.5・6.5・7.0・7.0・7.0・7.0・7.0・4.5尺の65.5尺となり、梁行では、西の入側柱列で6.5・7.0・7.0・7.0・6.6尺の34.1尺程に測ることができ、

3-g 梁行6間のもの

(1) **S B 12建物跡** (図-41) 桁行7間の大規模な主屋の南西部に、3間×1間の張出しの付いたものであり、16世紀後葉のものとして見られている。柱間寸法は、桁行で南の側柱列に沿って6.0・6.5・6.5・6.5・6.0・6.0・8.5尺の46.0尺となり、梁行では、西の側柱列で張出し部も含めて、北より6.5・6.6・6.6・6.6・6.6・6.5・6.5尺の45.9尺と測ることができ、

(2) **S B 20建物跡** (図-42) これも大規模な桁行7間の整形な建物跡である。遺物の関係から、16世紀中葉頃のものとして認められている。柱間寸法は、桁行方向では西より6.5・6.5・6.6・6.6・6.6・7.5・6.6尺の46.9尺位、梁行では、北より7.5・6.5・6.5・6.6・6.6・6.5尺の40.2尺と測ることができ、

3-h 小結

北館にて検出された掘立柱建物跡の内、建物跡として完結していると見ている38棟について、その規模を、梁行柱間数によって分類して述べたものである。

梁行のないものから、梁行3間の小規模なもの迄が21棟を数え、その内の15棟迄が梁行2間のものである。これはまた、16世紀前葉以前のものから16世紀後葉や17世紀前葉と見られるもの迄、北館の存続した各時期に互って造られたものであったことも知られる。このことは、梁行2間の身舎だけの建物が、古代以来、最も基本的な建物の形であったことを考えると、至極、当然のことではある。

梁行が4間以上の大規模なものは、6間のもの迄、総計17棟あり、その中で、梁行5間のもものが10例を占めている。これを使われていた時期の点から見ると、16世紀前葉以前とされるものが3棟、16世紀中葉が2棟、16世紀後葉から17世紀前葉のもものが5棟となっている。

梁行5間の建物は、3間梁の大きな室の両側に庇の付いた形が基本となっているものと見られる。古代に於いては、身舎の梁間を2間とするのが通例であり、古代の建築表示法であった間面記法の前提ともなっていたのであるが、中世になり、住生活の様式が変化し、また、構造技術の発達とも合せて、身舎3間梁のもものができて来るのである。東北地方北部に於いて、この形の見られるのが何時頃

となるのかは明らかではないが、岩手県の調査例では、15世紀のものとする丸子館遺跡に於いては、この身舎梁間3間の建物跡は検出されておらず、16世紀の鹿島館遺跡に於ける大規模なものに於いてこの形を見ることができるのである。東北地方北部に於いて、3間梁の建築の造られる時期としての見当をこの辺りにおくことができるかもしれない、ここ北館の掘立柱建物跡についても、一応あてはまるのではないかと考えている。

各建物跡の柱穴に従って、柱間寸法の計測をも行ったのであるが、統一された柱間寸法が検出されたものは、極めて少ない。掘立柱の柱穴ということもあり、また、現場で直接に測定できたものも少ないためかとも考えているが、特に、小規模なものについては、柱間寸法に計画性のなかったものかとも察しられる。その中で、6.6尺(約2.00m)という寸法は、使用頻度が最も多く、注目される数値である。7.0尺ともならず、6.5尺でもないこの数値は、何処から導かれたものか不明であり、近世の古民家などに見られる6.3尺とも異なり、より古い時期のものと思われるものである。

川上貢博士の『日本中世住宅の研究』には、宝徳二年(1450)以前のもので、京都の「成就院会所・源氏間」では、会所の柱間が7.0尺であり、源氏間では6.6尺であったこと、更に、文明十七年(1485)の奈良の「仏地院主殿」に於いては、9間×6間の建物の柱間が6.6尺であったことが挙げられているが、この寸法そのものについては言及されていない。

同時期の八戸市・根城跡で検出されている掘立柱建物跡の柱間寸法との比較からも、更に検討されなければならない課題であろう。

4. その平面形式について

ここでは、梁行柱間4間以上の大きな規模のものについて、推定される建造時期に従って、その平面形式の特徴を考察するものである。建造時期によって区分すると、16世紀前葉以前のもものが3例、16世紀中葉と見られるものが7例、16世紀後葉から17世紀前葉とされるものが7例となる。

4-a 16世紀前葉以前のもの

この時期とされている建物跡の特色は、その内部に於いて、細かな間仕切りのなされていないことである。

S B05建物跡(図-39)では、その内部に5間×3間という長大な室を持ち、3間×1間の室を続きにして、これを四面庇が囲む、というものである。身舎の梁間が3間とはなっているが、古代の寝殿を想定させるような形である。このような平面形式は、ここで日常の生活がなされていたというよりも、むしろ、大きな行事や儀式のための建物であったことがうかがわれる。

他の2例、S B19建物跡(図-34)とS B23建物跡(図-36)については、一つの共通した特徴を見ることができる。それは、建物跡の内部中央に、3間×3間の室を一つ有していることである。S B19建物跡(図-34)では、この3間×3間の室の西・北・東の三方に庇が回り、この室の南に接して1間×2間と3間×2間の室が取られ、更に西側に、4間×2間の張出し部がある。また、S B23建物跡(図-36)では、この室の西・南・東に庇が回り、北に接して5間×3間の大きな室が取られて

いる。

ここに見られた3間×3間の室は、畿内中央に於いては、室町時代中期の会所や主殿に見られたものである。それらに於いて、3間×3間の室は「九間」と呼ばれ、対面座敷の主室として用いられたものであることが指摘されている（註1）。ここ浪岡城跡北館に於いても、当然、そのような使われ方が想定されるのであるが、16世紀前葉以前とされる大規模な建物跡3棟の内2棟迄がこの「九間」を有していることは注目される。

4 - b 16世紀中葉のもの

この時期になっても、S B30建物跡（図-40）のように、先の3間×3間の「九間」を持つものがあることは、或る種の接客様式として、この形式の対面座敷が必要であったことを推察させる。また、S B14建物跡（図-27）のように、身舎梁間を2間とし、南・西・北の三方に庇を回すという、住宅形式としてはより古いと見られるものも建られているのである。

S B03建物跡（図-29）では、内部中央に3間×2間の室を取り、これに接して北側に3間×1間の室を設けている。あたかもこれは、先に見た「九間」の北1間を仕切った形であり、建物の主室が、正方形のものから縦長の形に移って行く過程が示されているのかもしれない。同様のことは、S B10建物跡（図-26）の北側に於いても見ることができるのである。

S B24建物跡（図-28）、S B02建物跡（図-32）、S B20建物跡（図-42）、更にS B10建物跡（図-26）に於いては、共通して、3間×2間の室と2間×2間の室とによって、その間取りが構成されている。これらは当時は、夫々「六間」、「四間」と呼ばれていた室である。

S B24建物跡（図-28）では、主室と見られる桁行5間梁行4間の中で、西側に3間×2間の室を取り、その南東に2間×1間の室を置き、更に、2間×2間の室を設けて、この2室の北側に3間×1間の部分を取っている。そして、南側5間分に1間の庇が付いている。

S B02建物跡（図-32）に於いては、西側に2間×2間を2室取り、その東に北寄せに接して3間×2間の室を置き、周囲に庇を回している。

S B20建物跡（図-42）は、先の「九間」を「三間」と「六間」とに分割し、その北側に接して3間×2間の室を設け、この部分に庇を回し、その東側に奥部分とも見られるところを付けている。2間×2間の室を南へ置き、2間×1間の室を介して庇と接するのがこの部分である。

S B10建物跡（図-26）は、鍵型の大規模なものである。南に2間×2間の室をL字型に3室配し、その北側に3間×2間、3間×1間、3間×2間の室を並べ、南から西に庇を回し、更に、L字型3室に接して東側に4間×4間の大きな室を取っている。これ迄に見た北館の掘立柱建物跡の平面形式よりすると特異なものであるが、細かな間仕切りのなされていることや、土間と見られる部分のあることなど、日常居住用のものであった可能性が高い。

4 - c 16世紀後葉のもの

明らかにこの時期と認められるものは、4棟である。この時期のものの平面形式の特色は、4間×2

間の縦長の室が見られることである。

S B25建物跡(図-30)は、3間×2間の室の東側に接して2間×2間の室を置いて、北から西へ庇を回している。この形式は、先に見た16世紀中葉の平面形式の特徴であったものであり、後葉迄も引継がれた基本的な形式の一つでもあったのであろう。

S B08建物跡(図-35)は、南に4間×2間の「八間」と呼ばれた室を取り、その北側に2間×2間を2室続けて接し、これに、北・西の二面に庇を付している。そして更に、その北側に5間×3間の大きな室を取り、その北に4間分の庇を付けている。

S B18建物跡(図-33)に於いては、3間×2間の室と2間×2間の室とが続く形が見られるが、ここでもこの東側に接して4間×2間の縦長の室が取られている。これは、この時期になって見られる新しい形であり、この部分に北から西へ庇が回っている。

S B12建物跡(図-41)では、この「八間」の室の三方に庇を回し、これに接する形で4間×4間の大きな室を取り、その北側に2間×2間の室を置いている。全体で、桁行7間、梁行6間という大きなものであるが、4間×2間の室が独立した形で取られているのが特色である。

4-d 17世紀前葉のもの

16世紀後葉から17世紀前葉と見られるS B31建物跡(図-38)については、先にも述べたように、ここに並ぶ柱穴は不揃いであり、内部の間取りも明瞭ではない。しかしここでは、そのほぼ中央に4間×2間の縦長の室を持つことが見られ、その西側に3間×1間のもの、更に北側には3間×2間の室を置き、東側に7間×1間の長大な室を設けたものと解したい。

S B52建物跡(図-31)は、S B27建物跡(図-13)やS B53建物跡(図-24)との切り合い関係から、17世紀前葉のものであったのであるが、S B31建物跡(図-38)と同様に、柱穴の並びは今一つ明解さを欠き、間取りも難解である。北西隅に3間×2間の室のある外は、小さく間仕切りされ、食違いの仕切りのされていた様子もうかがわれ、複雑である。

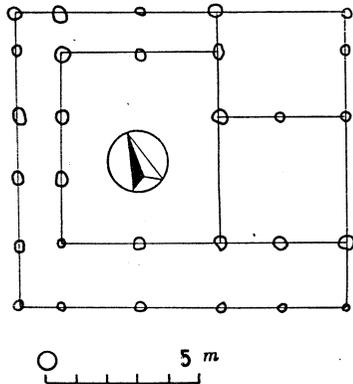
S B26建物跡(図-37)は、桁行7間、梁行5間という大規模なものであり、内部中央の南側に2間×2間の室を2室続けて置き、その北側に接して3間×2間と2間×1間の室とを続きとし、この部分に西・南・東と庇が回り、更に、東側に孫庇が付くという平面である。3間×2間と2間×2間の室の組合せの間取りは、この時期迄造られていたのである。

4-e 小結

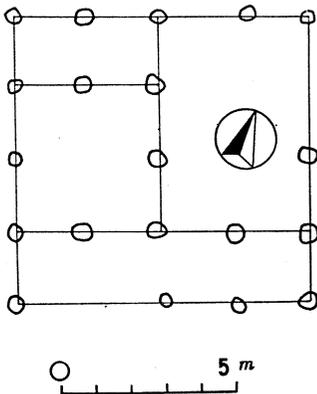
浪岡城跡北館に於いて検出された掘立柱建物跡の内、梁行柱間4間以上のものについて、その建造時期に従って、それらの平面形式の変遷を概観した。

古代の寝殿造と近世初頭に完成する書院造とは、日本住宅史の中での、二大形式としてとらえられており、寝殿造の住宅が簡略化され、武家社会の接客様式に適合するように変化し、発展する中で、書院造住宅が形成されていったものと解されている。そして、ここ浪岡城跡の時期が、丁度その過渡期に当たっているのである。

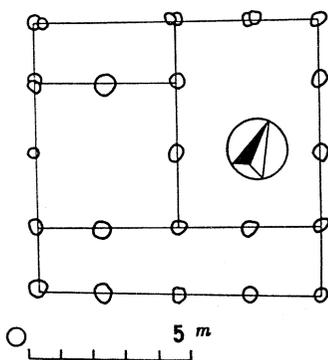
Ⅷ・図-43 大瀬川館遺跡 B d 15-1 建物跡



Ⅷ・図-44 一戸城跡 S B 0 5 建物跡



Ⅷ・図-45 一戸城跡 S B 0 6 建物跡



ここでは、16世紀前葉以前のものとされた建物跡の中に、古代の寝殿を想定させるものも在る中に、当時の武家社会の邸宅に於いて、重要なものの一つであった「会所」を推定せしめるようなものがあり、その内部中央に、接客座敷の主室としての「九間」が取られているものを見ることができるのである。

16世紀中葉になると、建物跡も多くなり、ここ北館の最盛期とでも呼びうるような様相を見せるのであるが、建物跡の平面形式に於いても変化が認められる。

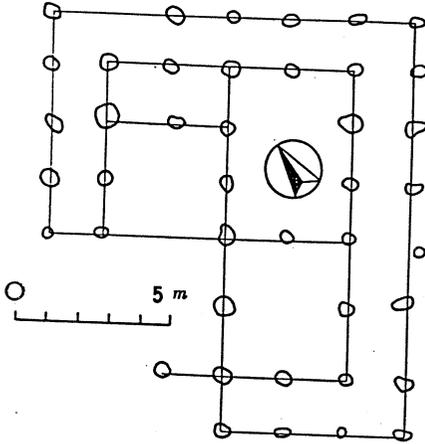
「九間」は未だ残されているが、3間×2間と3間×1間とに分割したと見られるものが現れ、更に、3間×2間と2間×2間という形の室との組合せで、その平面を構成している例が多くなっている。即ち、「主殿」或は「客殿」と見られ得るような建物跡が検出されているのである。

16世紀後葉以降に於いても、この傾向は更に強くなり、2間×2間の2室の続き間から、4間×2間の室が生まれ、これが、主室として用いられた形が見られるのが、この時期の大きな特徴である。

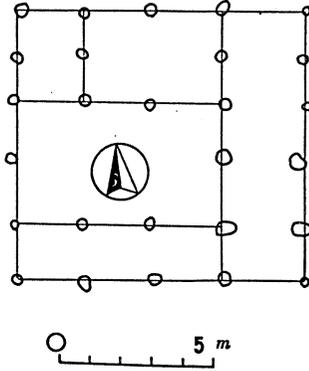
ここ北館では、S B 05建物跡(図-39)や、S B 14建物跡(図-27)のような、寝殿造系のものから、「会所」風のものや「主殿」「客殿」風のものを経て、S B 18建物跡(図-33)や、S B 26建物跡(図-37)のような書院造系の建物跡への変遷が、見て取れるのである。

同じ青森県で、ほぼ同時期中世城郭跡である八戸市・根城跡に於いても、40棟を越す掘立柱建物跡が報告されている。そこでは、桁行12間・13間といった大規模なものもあつたりする

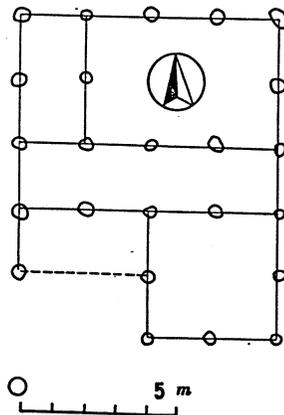
Ⅷ・図-46 興田館遺跡No.5 建物跡



Ⅷ・図-47 館コ遺跡Ⅰ 建物跡



Ⅷ・図-48 館コ遺跡Ⅱ 建物跡



が、その殆どが、室を1列にだけ配しており、2列平面とみなしうるものは、僅か1・2例である(註2)。それに対して、ここ北館の掘立柱建物跡に於いては、根城跡とは逆に、1列平面と見られるものは、2・3例だけで、他の大部分は2列平面の形を取り、中には、3列平面とみなしうるようなものも2・3例含まれているのである。

東北地方北部に於る他県の例から、この2列平面を拾って見ると、岩手県・大瀬川館遺跡Bd 15-1建物跡(図-43)が注目される。これは、浪岡城跡S B02建物跡(図-32)とよく似た間取りを持っている。その違は、東西が反転しているのと、図-43で東に庇のないことだけである。大瀬川館遺跡の出土遺物から見た年代は、16世紀半ばから後半に求められており、時期の点でもずれはないようである。外には、岩手県・一戸城跡S B05建物跡(図-44)やS B06建物跡(図-45)、岩手県・興田館遺跡No.5建物跡(図-46)があり、秋田県・館コ遺跡Ⅰ建物跡(図-47)やⅡ建物跡(図-48)を挙げることができるのであるが、ここ浪岡城跡ほど豊富に検出されているところはないようである。

古代の寝殿造が変形して行く過程の一つとして、北庇の拡張と間仕切りの発達が挙げられている(註4)。寝殿に於ける身舎や南庇、また東西の庇は、儀式や行事の際の「晴」の席として用いることのあったために、小部屋に仕切ることがなされなかったのに対して、北庇は、日常の私的生活の場として、次第に、孫庇を出すなど、その拡張も行われ、細かな間仕切りもなされ、中世には、部屋を2列に配したものが出現し、後には3列平面も見ることができるのであ

る(註5)。

ここ浪岡城跡北館の掘立柱建物跡に於いては、それらの過程をも見ることができ、これ迄、中央の資料によって綴られて来た中世住宅史に対して、ここ北東北の地から、新しい知見を提唱し得る可能性も出て来ている。

5. むすび

浪岡城跡北館より検出された掘立柱建物跡について、現段階での考察を述べたものである。ここでは、上屋構造についての考察は省いてあり、後の機会に譲りたい。

その外にも、不明な点が多く残されている。中でも、夫々の建物跡の機能や用途というものを推定し得る資料が乏しい。そして、これらの建物の機能などを推察するためにも、また、平面形式の在り方や上屋構造などを考察する場合にも、その建物跡の出入口の位置は、重要な要素となるものである。また、建物跡の内部の土間部分の有無やその位置や広がりなども知りたい項目である。これらは、現在殆ど検出されておらず、今後のより詳細な調査に待たなければならない。

これらと関連して、北館内の通路についても不明である。溝や塀が巧に配されて、夫々の空間を区切っていたことが想定され、それらについての検討も、今後なされなければならないであろう。

浪岡城跡に於いては、北館の調査を終えて、内館へ移っており、そこでも多数の掘立柱建物跡が検出されており、今後も不明な点を解明すべく、調査検討を続けてゆきたい所存である。(850131)

註

1. 川上 貢博士 「日本中世住宅の研究」
2. 拙稿 「根城跡の掘立柱建物跡について」(史跡根城跡発掘調査報告書Ⅶ)所収)
3. 拙稿 「東北地方北部の中世城郭にみられる掘立柱建物跡について」(「八戸工業大学紀要」第3巻・所収)
4. 太田博太郎博士 「日本住宅史」(「新訂・建築学大系28・独立住宅」所収)
5. 平井 聖博士 「日本の近世住宅」ほか

IX 浪岡城跡北館出土の生活用具について

——— 特に鉄製品・銅製品に関して ———

三 浦 貞栄治

1. はじめに

浪岡城跡から出土する生活用具は、その属性によって分類すると陶磁器・土器・鉄製品・銅製品・木製品・石製品等多種多様に存在するが、今回昭和53年から昭和58年まで出土した鉄製品・銅製品を中心に総括的紹介をしてみたい。

また、鉄製品・銅製品の中で紹介項目としては、炊事関係の鍋・火箸、化粧関係の毛抜き・鏡・耳かき・鉸、発火具・灯明関係の鉄皿・火打金、建築具として釘・鋸、馬具として轡・蹄鉄、農具として鎌・鋤、生産工具として芋引金、計量具として秤、裁縫具として針、いろりにかける鉤金具、宗教的色彩の濃い鈴などを取り上げる。

2. 鉄製品

a. 鍋

北館のS E10(79F 231)、S E67(82F 593)、S T27(79F 588)、S T132(81F 740)、S T184(82F 980)、S X10(80F 3)、S X95(82F 206)、J48 Pit(82F 198)その他の箇所から出土しているが、北館の南半分の遺構に多くみられる。鉄鍋の破片は、同じ覆土の中から陶磁器、火箸、硯、石臼他の生活用具と共に出土している。覆土が人為的に堆積されたものが多いが、生活舞台の激変がうかがわれる。また、総じて鉄・銅製の生活用品は短軸(南北)50より東側寄りから出土している。生活に何らかの変化があって諸道具が埋没または遺棄されて残存するにいたったものと思われる。鍋の形状は外耳、内耳の鉸鍋で、口径25cmの鍋(80F 3)〔図1-1〕も1個出土している。S X10遺構の床面から二つに割れた状態を出ている。この遺構はS T51、S T52の周囲にあって、S X11、S X12、S X13に隣接しているので炊事関係のものと考えられている。鍋(80F 3)の形は口縁上端に外耳がついて鉸をさしこむ穴が2個横に並んであいている。底部に三足を有した形状である。

内耳の鉄鍋は、耳の部分(81F 740)が出土している。図1-2に示した内耳鉄鍋は昭和59年度内館から出土した参考資料である。他に鍋の底足の破片、鍋の口縁部がくの字状にそり返った破片(79F 225)などが他の道具の破片と共に出土している。

また、伏せた鉄鍋の中に鎌、芋引金、ナワなどが入っている状態で出土しているものがあるが注目される。(昭和59年度内館調査にて出土したもの。昭和61年3月報告予定)

b. 火箸

炭火、焚火を挟む火箸の使用は古く、最初は木、竹などで作ったであろうといわれている。しかし、木製のものは腐って残ることが少なく、鉄、銅などの金属のものが比較的多く出土している。北館の

出土遺物の中にも鉄製の火箸が10数点見える。その形状は丸形、角形で一部にねじりが入ったりしている。また、頭部に木製の柄が残存しているものや漆が付着したものがある。S T13、S T34、S T81、S E21、S E28、S E20、S E57、S X 125 その他C49区の覆土から火箸が出土している。いずれも陶磁器類、鉄釘、毛抜き、鉄鍋、石臼などの生活用具と一緒に発掘されている。

S T34の火箸(79F 297)〔図1-3〕は出土した火箸のうちで最長のもので39.7cmある。上端に長さ12.5cmのねじりが入っていて角形のものである。角形はS T13(79F 536)、S E21(80F 942)、P Q・55区(80F 18)、S E57(81F 1060)他など、丸形はS T81(80F 823)、S E28(80F 914)〔図1-5〕、S E20(80F 606)〔図1-4〕他などから出土している。遺構の覆土は人為的に埋められたり、S T13(79F 536)のように新旧のわからない遺構もあるが、北館に居住した人々の使用したものと思われる。頭部を輪や鎖でつないだものは出土していないが、S T81の火箸(80F 823)は、陶磁器類や銅鏡、硯、古銭、鉄鏃、皿、小札、鉄釘他と一緒に出土しており、中心的な生活の場であったことが推測される。この火箸は手で握る柄の部分に木部が少し残っている。また、S E57の火箸(81F 1060)は長さ38.0cm、角形で手で握る部分にねじりが入っている。しかも2本一対の状態出土している。

c 苧引金

麻の素皮を取り去るのに使うのが苧引金である。麻を苧引板にのせて苧引金でこすって素皮を取るのに用いるが、麻布の着物を着用する生活にとっては大事な生活用具である。

北館から10点余り出土しているが、G~L区、51~59区の範囲に散在した形で発掘されている。手で握る木の部分が残存しているのがS T12(79F 400)、S T31(79F 223)〔図1-6〕、S E28(80F 910)〔図1-7〕の遺構から出土している。S X 120(82F 749)の竪穴遺構は自然堆積の状態であり、その覆土からは苧引金の他に陶磁器類、小柄、小刀、火箸、鉄釘、煙管、古銭など多量の遺物が出土している。当時の生活を推測させるような出土状況である。

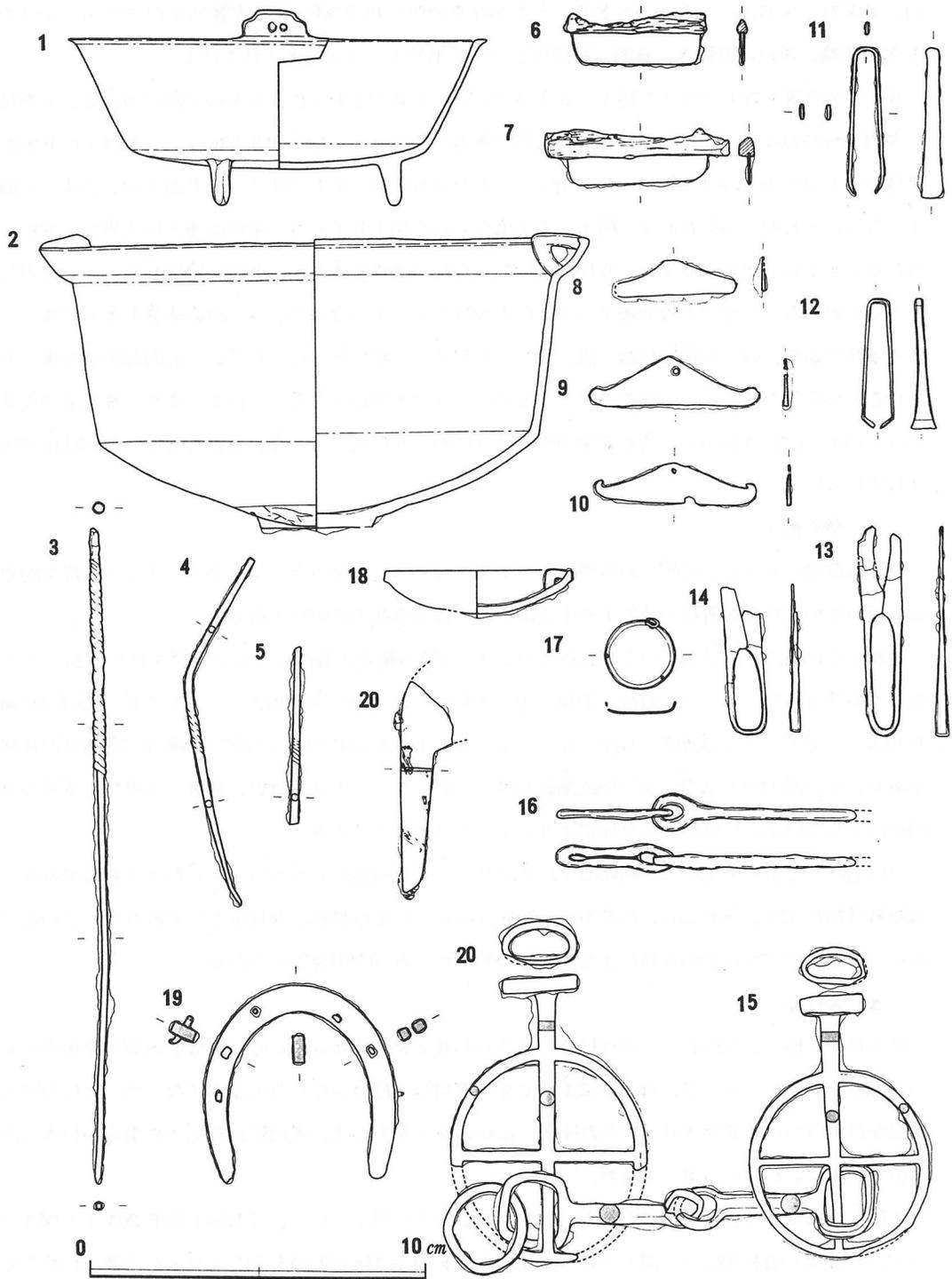
その他の苧引金も諸遺物と一緒に出土しており、いずれの場所も生活の場を思わせるものである。遺物番号79F 223、79F 276、79F 400、79F 595については最初、火打金として取り扱っているが、八戸市教育委員会から指摘されたように、その形状からみて苧引金と思われる。

d 火打金

発火具の一種で、火打石にこの火打金を打ち合わせて発火させる。古くは鎌などの破片を利用していたようであるが、その後、鍛冶屋によって発火専用の火打金が作られるようになった。火打石に火打金を打ち合わせて発火させて、それを火口に移して火をおこす。火口には朽ち木や柔らかい木、消し炭を粉末にしたものが用いられた。

北館から出土した火打金は6点あり、I 58区(79F 28)〔図1-10〕、S E10(79F 203)〔図1-9〕、S E68(82F 883)〔図1-8〕、J 49区(82F 19)、H44区(82F 517)などから散在した形で出土している。火打石も57年度の発掘で5点ほど見つかった。

Ⅸ·图-1 生活用具实测图(1)



火打金は鉄製で三角形の形状をしている。火打石に打ちつける部分を底辺とすると、相対する角の部分に小さな穴があって、携帯に用いる紐を結びつけるようになっている。79F28の遺物は三角形は高くないが、底辺の両端が折り返して上部中央に向かって鋭角をなしている。火打金が出土しているいずれの遺構も、他の多くの遺物が出土している。

e 毛抜き

S T 34 (79F 287)〔図1-11〕、S E 10 (79F 301)、S X 36 (80F 1019)、F 53 Pit (81F 784)〔図1-12〕から毛抜きが4点出土している。S T 34は人為的に堆積した覆土のようであるが、その中から完全な形のもの(79F 287)(鉄製)が採掘されている。鉄のようなU字形をして頭がかみ合うようになっている。S E 10の井戸から出た毛抜き(79F 301)は、部分的なもので毛抜きかどうか問題がある。S X 36の小さな井戸の毛抜き(80F 1019)やF 53 Pitの毛抜き(81F 784)はその形がよく残っている遺物である。

f 鋏

鋏は中世まで婦人の化粧道具、理髪に使われていたようで、一般の人々が衣服を裁つには小刀を使ったといわれている。現在のU字形の握り鋏で糸を切ったり、小さい布を切ったのは、近世以後のことのようである。

北館から4点ほど出土した報告があるが、O54区の土塁上面から発掘された遺物(79F 539)は、指1本を入れるラシャ鋏の取っ手のような形状であるが、ラシャ鋏が明治以後日本で製造され普及したことを併せ考えてみると、鋏の一部分と見るには無理がある。S X 121 (82F 774)〔図1-13〕、S T 155 (82F 87)〔図1-14〕の遺構からは沢山の遺物が出土しているが、握り鋏が各々1個ずつ出ている。二つの鋏とも握りの部分が残っていて、刃の先端が欠けている形状で、全体として細長い作りである。

g 轡

S T 103の遺構の床面中央から出土した轡(81F 230)〔図1-15〕がある。他の遺物小札、硯、古銭、鉄釘などと一緒に出土している。81F 230の轡は手綱をつける水付が欠損し、片方の鏡も半分欠けている。また噛の結合部分と搦み輪が1個欠けている。噛先は肉厚な鉄で連結されている。鏡の直径は11～13cmで、轡十文字の図柄のものである。面がいにとりつける立間輪は楕円状である。このS T 103の遺構は馬とのつながりが考えられる。PQ55区の覆土から轡状のもの(80F 50)〔図1-16〕が出土しているが、1個は噛状の鉄棒が2本連結されていて、轡の一部分と思われる。もう1個は噛状の片方だけであるが、出土状況からみて同じく轡のものと推定される。

h 鉄皿

皿は直径の長さによって大中小と分けて考えられるが、D53区(81F 169)、L52区(81F 942)〔図1-17〕、S D 61 (82F 1108)〔図1-18〕の覆土から出土したものは、いずれも小皿に該当するものである。81F 942は径4.08cmで3箇所^{たぢぎき}に穿孔がある銅製の皿である。L52区の遺構は覆土が攪乱され

ているので時代的な推測はむずかしい。82F1108の皿は径11.3cmで内側口縁部に3箇所内耳がある。皿を吊して使う場合としては油皿としての用途が考えられる。明治頃までは魚燈油を鉄皿に入れて布切れの芯をさしこんで灯をともしたこともある。その場合、皿は宙吊りにして用いる。

i 蹄鉄

蹄鉄はO55、I55区の覆土から発掘されているが、その覆土が攪乱されていることと蹄鉄の普及した時期を考えると古いものでないようである。

日本で蹄鉄が使われたのは明治頃からだというから、北館から出土した蹄鉄は明治以後のものと思われる。I55区から出土した蹄鉄(79F434)〔図1-19〕は全形が残っていて釘穴が4つ確認できる。O55区のもの(79F502)はその形状が半分位のものである。

j 鎌

鎌は鎌倉時代には刃と柄の角度が直角に近く、今日のような形のもので使用されている。江戸時代になるとイネやムギを刈り取る鋸鎌が発達して来ているが、北館のF53区の箇所から鎌のようなものが数点出土し、その中に鋸鎌が1点入っている。長さ18.5cm、幅2.0cm、厚さ0.22cmのものでイネ刈り鎌の形状をなしている。(81F141)

ST15の遺物(79F228)は形状からみると田の畔の草を切り、整地をするために用いる「タチ」のようであり、鎌と異なるものと思われる。

ST55(80F198)〔図1-20〕は深さ38cmの床面からの出土であり、その上層から陶磁器類、小札、古銭なども出ており、古い遺物のようである。ただ柄の基部だけの出土なのでどのような用途に使われた鎌なのかは不明である。他に、伏せた鉄鍋の中に入っていた鎌があるが、刃部が直線的で信州鎌の形状に似ている。同じ場所から風呂鍬の刃先、小刀などが一緒に出土している。

k 釘

和釘は古くから使われ、洋釘は明治に入ってから用いられている。北館から出土した釘は角釘の類で鉄製の和釘である。その形状は断面が四角形であり、頭部が片側に折れまがった皆折釘のものが殆どである。その出土範囲が広く、本数も多い。(53年度は35点、54年度は224点、55年度は475点、56年度は380点、57年度は460点出土している。)55年度はST77から「」字形(80F434)〔図2-1〕の遺物が出土している。恐らく折釘の一種かと思われる。56年度の報告書には計測済みの和釘が23点(長さ1寸ないし5寸位)記載されてある。そのうち4点は打ち込んだ部分の木部が付着したものである。57年度のもので計測されたものは15本である。

1 鍬

鍬は大別すると風呂鍬、金鍬、特殊鍬になるが、昭和59年度内館で出土したものは風呂鍬である。(S61.3報告予定)風呂鍬は刃床部が風呂と呼ばれる木製の台と鉄製の刃先とからできている。出土遺物は木の台がなく、鉄製の刃先だけである。その刃部は普通の鍬に比べて幅が広くて全体的にみて四角な形をしている。この鍬は、伏せた鉄鍋の中から鎌、小刀、なわ、牽引金などと一緒に出土した

ものである。

m 鉤金具

いろいろの上に吊されてあって鍋や釜をかける道具が自在鉤である。その下端に鍋の鉸をかけるL字形の鉤がある。木製のものもあるが、金属製のものが一般的である。北館S T 38の79 F 265は鉄製の鉤である。S T 38の遺構の上にS T 19、S T 24、S T 26が構築されているので、堆積状態が不明で鉤と関連ありそうな出土遺物もない。

n 鋸かすがい

角材や板を結合するために用いる和釘の一つとして鋸がある。それは丸角、長方形の断面の鉄棒で、両端が曲げられ、先がとがった金物である。

北館から出土した鋸は角鋸で、普通鋸の形状を呈している。これらは北館の中央より東側寄りの調査地区で出土している。S T 12の79 F 186〔図2-2〕(長さ7.1 cm)、S T 10の79 F 355〔図2-3〕(長さ5.9 cm)は少し変形的な鋸である。S X 17の80 F 259〔図2-4〕は長さ4.3 cm、H 51の81 F 792は長さ6.6 cm、S T 117の81 F 306は長さ5.8 cmであるが、80 F 259と81 F 792は打ち込む釘の部分が短い。81 F 306は打ち込みの部分が長い。これと似たものはS E 10の79 F 239〔図2-5〕で、長持ちなどの家具の取っ手ではないかと考えられる。

3. 銅製品

o 煙管

日本へ煙草が伝わったのは元亀、天正の頃といわれ、その頃はアシまたは細い竹を使った竹煙草であった。そして慶長頃に煙管で喫煙するのが流行したという。

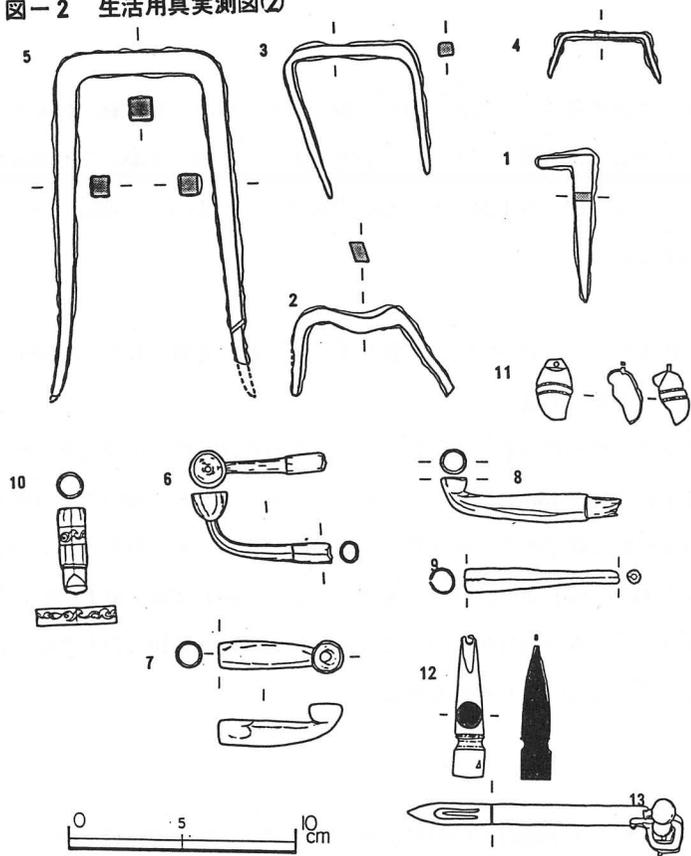
北館の遺構から出土した煙管の部分品は6点位であるが、S X 120から出土したもの(82 F 584)〔図2-6〕は雁首の脂返しが細長く、羅宇らうの部分が太くふくらんだ形状で、河骨形の煙管に似ている。K 57区の煙管(80 F 33)〔図2-7〕は雁首と羅宇の部分も銅製で吸い口まで銅で作られたものと思われる。全体的に細めの作りである。M 53区のもの(81 F 8)〔図2-8〕は羅宇の部分が一部残っている雁首である。吸い口の部分も3点位出土しているが、完全な形状のものはP Q 55区の出土物(80 F 5)〔図2-9〕である。

北館の表土採集の吸い口(82 F 1160)〔図2-10〕はㄥ字状の文様が一回り彫り込まれてある。江戸時代の初めに雁首と吸い口に唐様、雷竜の意匠が彫られるようになり、中期には和風的な花鳥に変わったともいわれているから、その流れの意匠の一つかと思われる。57年度の報告書に吸い口の部分と記載されているが、むしろ雁首と羅宇との接合部分とみられる遺物である。

p 銅鏡

S T 81の覆土から80 F 794、80 F 822の銅鏡が出土したが、菊花双雀文様のものである。80 F 794は外形9.8 cm、厚さ0.8 cmで表面は内側がややへこんで鈍い光沢を有し、部分的にワラ状のものが附着している。背面には内輪の中に20個の菊花と二羽の雀が対峙した状態で配置され、中央に亀紐があ

Ⅸ・図-2 生活用具実測図(2)



る。内輪外部は放射状に線刻され、隆帯部分に8～10個のこぶが間隔をおいてついてある。

80 F 822 は外径11.3cm、厚さ0.9cmで外側がやや丸味をもったものである。表面は光沢を失っており、ワラ状の植物繊維の付着が著しい。背面文様は内輪の中に25個の菊花と二羽の雀、および中央に亀紐がみられ、外面にも25個の菊花がついている。

q 鈴

S T 77、S T 166、E 49区の3箇所から鈴の遺物が出土している。一般的には球形の一方に切り込みをつけて、丸(がん)を中心に入れて音を出す鈴と鐘形の中心に舌(ぜつ)を下げた鈴があるが、北館の遺構からは球体の中心に球を入れたものが出土している。

S T 77から出土した鈴(80 F 339)〔図2-11〕は、下方に切り込みがあって、上面に穿孔があいている。ただ、S T 77は覆土の深さが32cm位で、現代の廃棄物も出てくるような攪乱された土層なので、この鈴を用いた生活がどの位古いものであるか判断に苦しむところである。S T 166の床面から出土した鈴(82 F 681)は、径1.4cmの球体で、中に小さい金属球のようなものが入っている。なお、昭和58年度においては土鈴も出土しており(Fig.44-4)注目される。

r 耳かき

耳かきは小さい杓子形をなしているが、PQ55区出土の銅製のもの(80 F 8)は、長さ7.5cm、幅0.3

cmで、全体に金メッキがされている。それは耳かきの部分が杓子形をしており、反対側がL字形に曲がっている。

S 針

鉄・銅製の針の使用は飛鳥、奈良時代からはじまっていて、用途によって長針、短針と使い分けている。一般的にはやがて、針を専門に製造する針屋が出てくるようになり、江戸時代には針師といわれる専門製針業者があらわれている。

北館 S X 111 出土の銅針 (82 F 444) は長さ 2.31cm、幅 0.22cm で途中で折れているため、全長は不明である。また、太さが 0.22cm であるが、唐針やメリケン針は 0.51 mm ~ 0.89 mm 位の太さであるのと比較してみると太めのものであることがわかる。頭部に糸を通すための孔が大きくあけられてある。この S X 111 の遺構は径 100 cm の中に遺物が集中して出ており、陶磁器類、小札、草札、鉄釘などと共に銅針が出土している。

t 秤

北館から出土した秤関係用具としては桿秤の分銅があり、日本でも古くから用いられているものである。その分銅は頂部が面取りされ、一つの孔があいている。全体が円錐形で、下部の方に線条が一本一回り刻み込まれてあって、三角形の彫物も一つついている。(80 F 713) [図 2-12] 重さは 46.5 g である。また、昭和 58 年度の調査で同形の分銅が 2 個出土しており、それぞれ重さ 26 g (83 F 6) [Fig.48-4] と 33 g (83 F 473) [Fig.48-3] を計る。

u 不明銅製品 (81 F 565) [図 2-13]

S T 132 は大きな遺構で、出土物も陶磁器類から鉄製、銅製のものまで多種であるが、この銅製品は網針と形状が非常によく似ている。ただ、普通は木製、竹製の網針であるが、この出土遺物は銅製品で、しかも、銅製の鉾と鉄製のらしいものが後端に付着している。後端の基部に穿孔があって鉾が接合しているので別な用途が考えられる。

v その他の不明出土遺物

次の数量のものが、用途不明として報告書に記載されている。54年度は鉄製 15 点、銅製 3 点。55年度は鉄製 7 点、銅製 7 点。56年度は鉄製 4 点、銅製 1 点。57年度は鉄製 7 点、銅製 7 点。

4. まとめ

以上、生活用具のうち鉄製品・銅製品の一部を紹介した。これらの出土遺物は、当時の人々の日常生活と不可分に結びついた遺物であり、中世という時代背景を考える場合、現代的生活実態とよく似た様相を呈している。これは、中世後半において日本の生活文化が確立してきたという生活史上の特徴をよく表現しているものであり、現存する民具・民俗芸能の原形が出土遺物の中に含まれていると言っても過言ではない。今後、生活用具の時代的発達、展開を考える上で誠に有効な資料である。

[注] 本文中の遺物 No は、発掘年 (ex. 82 → 1982 年) と台帳記載 No (ex. F 821 → 鉄・銅製品の 821 番) である。

X 浪岡城跡北館出土の鑄銅関係遺物について

工藤清泰

1. はじめに

浪岡城跡北館から出土した銅製品は、そのほとんどが鑄造されたものであり、製作方法・製作地、搬入経路、使用目的など具体的に説明できる点は少ない。一般に北館から出土する銅製品は、日常生活（この場合、一般民衆のと言った方がよいかもしれない。）から一步踏み出した使用具、つまり支配階層における当時の文化程度を知るための用具として位置づけることが可能と考えている。出土した製品を概観すると、

- I 武具 鐔、切羽、小柄、筭、鐙、足金具、火縄鉄、鉄砲玉、かぶと・鎧の部品、他
- II 仏具・宗教具 六器、金剛盤、香炉、花瓶、鈴、鏡
- III 交易関係 銭貨、おもり（分銅）
- IV 装身・化粧具 鏡、耳搔き、毛抜き鉄
- V 建築具調度具 銅釘、留具
- VI その他 銅滓

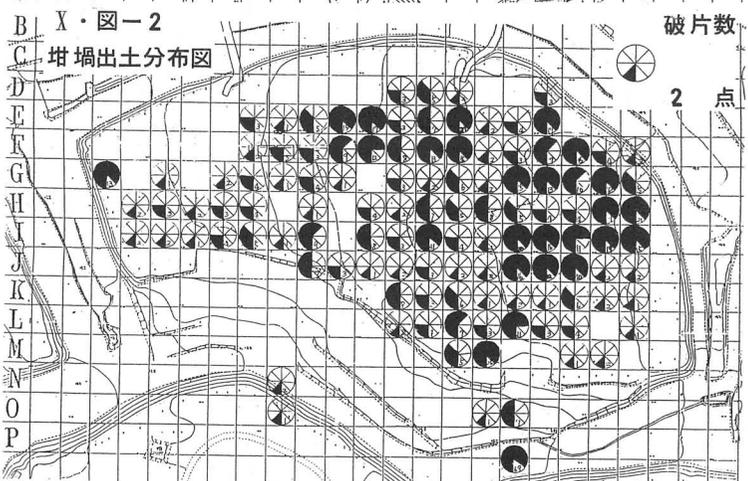
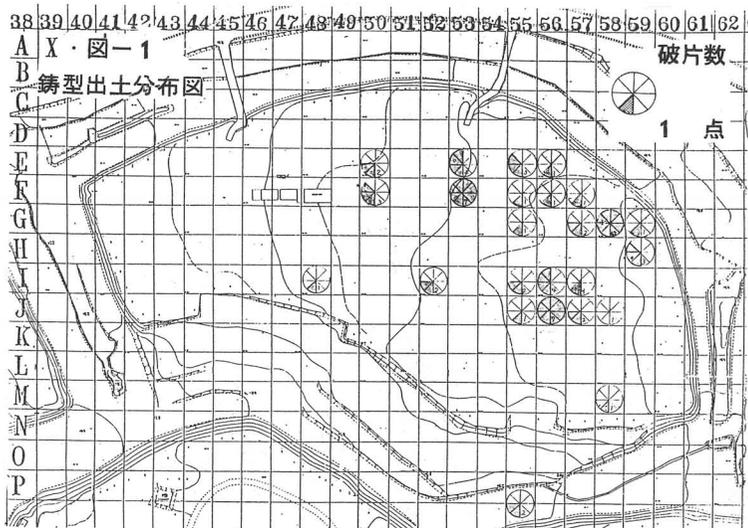
となり、量的には銭貨が圧倒的に多いけれども、個体別の出土では城館および戦闘行為があったという性格上、武具の比率がとても高い。特に、鐔等の刀装具は従来から搬入品のみ使用されていたと考えがちであったが、本城館において鑄造されたと確認できる鑄型・坩堝・鞆羽口が出土しており、鑄造史において新たな局面を向えるに至っている。今回、それら鑄造関係の出土品をまとめ、中世考古学進展の一助となることを期待するものである。

2. 鑄型・坩堝・羽口の出土状態と使用時期

鑄型・坩堝・羽口がどのような地域から出土しているかを示したのが図-1~3である。鑄型については、北館東側に多く西側ではほとんど出土していないことに注目でき、多く出土するグリッドをひろいあげると、F53区・G58区・J56区がある。（図-1）これらのグリッド内で製銅に関連する遺構として考えられるものはF53区がS T 117、G58区がS T 210、J56区がS X 46とそれぞれ竪穴遺構であることが言える。しかし、鑄型の多くは遺構の覆土から出土するもので、床面から出土することはほとんどない。考え方をかえるならば、これらの遺構周辺で作業をし、終了した時点で鑄型等の廃棄場所としてこれらの遺構を使用したとみることもできるが、竪穴遺構廃棄の状況をより適確に把握しないうちは断定的に結論づける事は時期早尚である。

また、坩堝の出土状況は発掘区全域に広がりを見せるものの、E50区、F53区、I52区、F57区、G58区、J56・57区、を中心とする区域に多くの出土をみている（図-2）。さらに羽口については、総数が少ないながらも、F53区、H55区、G58区周辺に分布がみられる（図-3）。

このような、鑄型・坩堝・羽口をセット関係として出土するグリッドは、F53区、G58区であり、



前述した遺構に伴うことが多い。F53区S T 117では鋳型・坩堝・羽口その他、青磁・染付白磁・美濃灰釉・瓦器・播鉢等の陶磁器類、鉄釘・火箸・小札・かすがい等の鉄製品、切羽・鉾・装飾品等の銅製品および銅滓、銭貨、石鉢・臼・火打石等の石製品、漆器が出土しており遺構の廃棄時期は16世紀後半以前であると推定される。G58区S T 210では、青磁・白磁・染付美濃灰釉、播鉢、瓦器等の陶磁器類、釘・小刀・小札・鉾・火箸・芋引金・鍋の鉾等の鉄製品、切羽・装飾品等の銅製品および銅滓、銭貨、硯・砥石等の石製品、漆器、

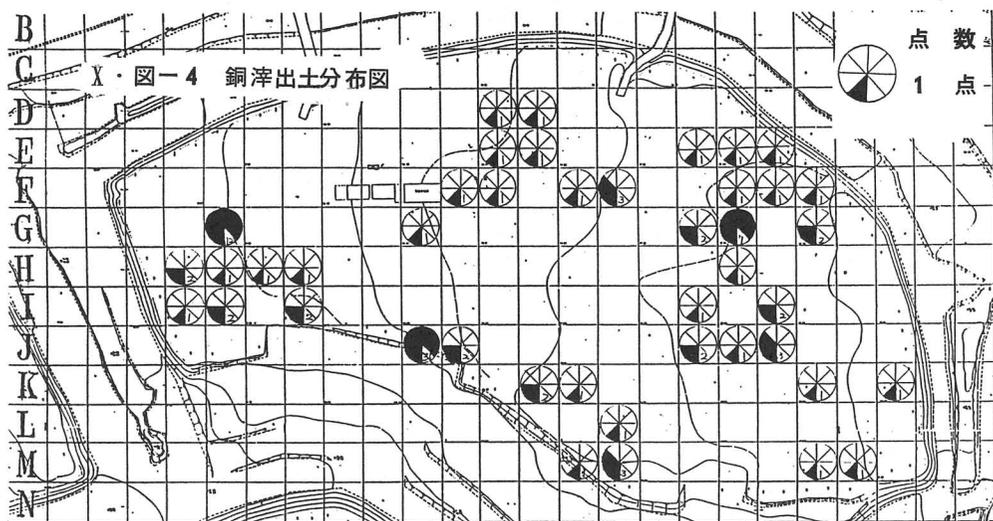
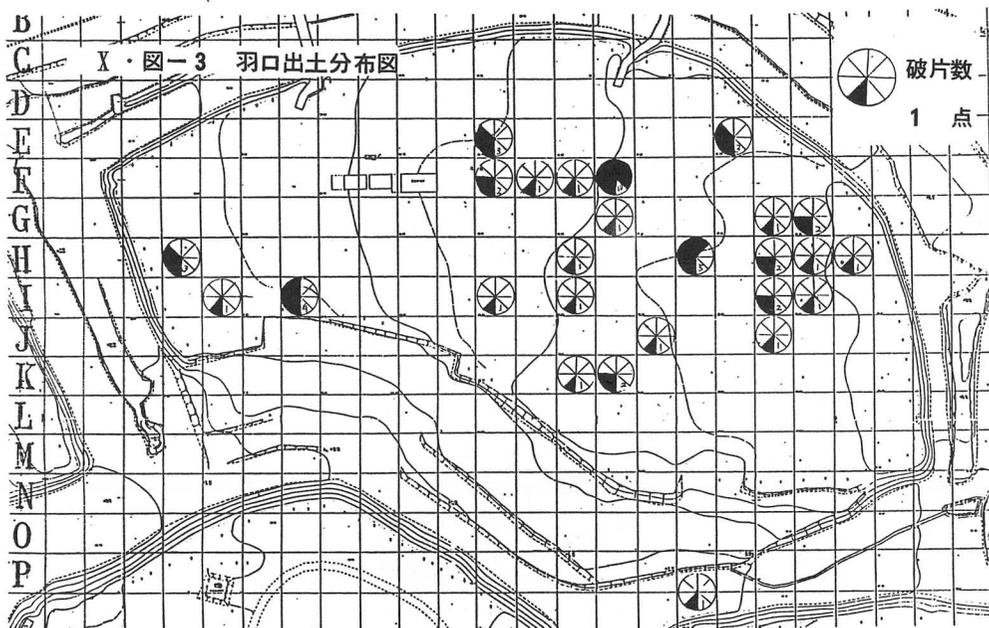
くるみなどが出土しており、S T 117と同じく廃棄時期は16世紀後半以前と思われる。

鋳型・坩堝・羽口の使用時期が16世紀後半以前とすれば、浪岡城が最盛期であった16世紀前半から中頃にかけて、さかんに鋳銅作業をしていたことになり浪岡城内は単なる生活の場だけでなく生産作業の場でもあったことになる。

特に、鋳型の出土頻度の高い地区は比較的大形の掘立柱建物跡の東側部分に集中していることも注目できる。城館跡は夏は南西から北東にぬける風向、冬は北西から南東に抜ける季節風が多い場所であり、製銅に関して亜硫酸ガスが発生し悪臭をはなつ条件を考えるならば、屋敷の東側で作業をしたという推測は妥当性を有しないであろうか？。ちなみに出土頻度の高いF53区はS B 12、G58区はS B 30、J56区はS B 02が比定できる。

ただ、出土分布図の中で注意しなければならない点は、鋳型・坩堝・羽口とも堀跡からの出土もみられる点である。これらの遺物は、使用後に一括して廃棄される可能性が高く、その捨て場として堀

跡が選ばれることは、平場内だけの調査で鑄銅関係の生産方法を把握するのは不充分と言わざるを得ない。また、鑄銅に際して出る銅滓の出土分布をみると(図4)、鑄型・坩堝・羽口の出土分布とは明確な対応をみせず、出土量・出土分布からのみ考える場合の限界があることを認めざるを得ない。



3. 鑄型の特徴と製作方法

鑄型と推定できる破片は総数で96片出土しているが、同一破片と思われるものも少なからず存在するため個体数にした場合は、20～30個ぐらいと考えられる。(ただし、湯口の部分が5個体分しか出土していないためさらに少なくなる可能性もある。)これらの中で、大部分は鑿ないしは切羽の類の鑄型であり、若干製作品不明のもの(図5-16)も存在するが現在までに鑿・切羽以外の鑄型は出土していない。

鑿の形としては、いわゆる丸形鑿と木瓜鑿があり、前者は全体を12分割した透し鑿(図5-1)と14分割した透し鑿(図5-2)、猪目および変形巴文の透しを施した鑿(図5-4～9)、後者は文様を付けない平鑿(図5-3)と扇状の透しを入れる鑿(図5-10・11)がある。これらの中で箆櫃が認められるものは丸形透し鑿(図5-1)だけであり、他の破片には認められない。

鑄型の破片を観察した限りでは、大きく四ヶ所の部位に分類できる。

- I 鑄型の雌型。深い彫り込みで銅を流し込む原形。
- II 鑄型の雄型。雌型の上に覆いかぶせる方で彫り込みは浅くしか付けられない。
- III 鑄型の縁。雌型と雄型を合わせた後で縁にすき間なくするよう貼り付けた部分。この部分は、しばしば雌型あるいは雄型の縁を伸ばして覆いかぶせるものもみられる。
- IV 鑄型の湯口あるいは鑄口部分。

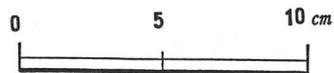
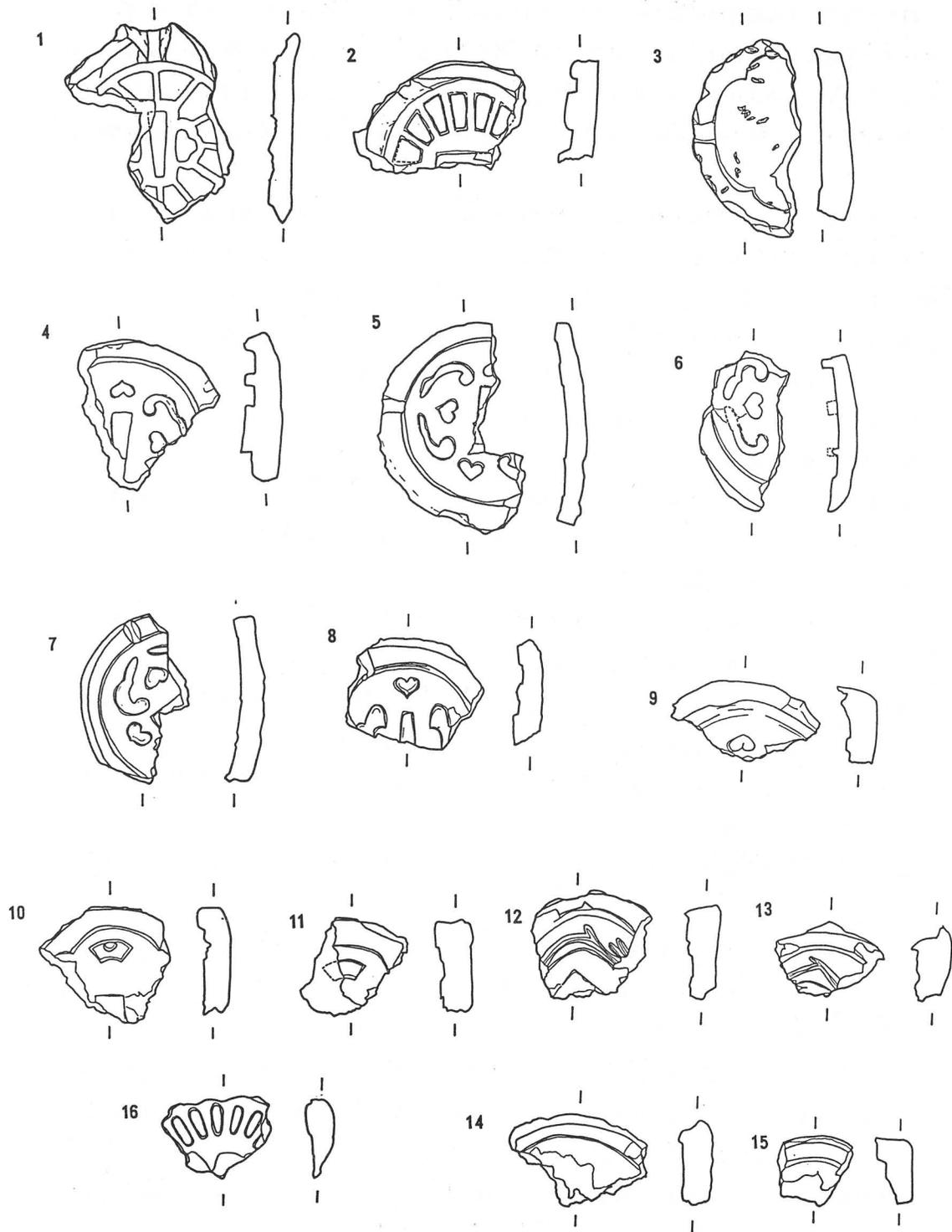
これは型どり成形時の合わせ方法と、製品を取り出す時の破壊方法によっていろいろな破片状態となるはずであるが、いずれの場合でも上記の四ヶ所の部位に割られているものが多い。

鑄型自体は内面が暗灰色に低火度のなま焼け状態で製品面は比較的滑かなのに対し、外面は褐色から灰色の色調で瞬間的に高温度の鑄流物がかった部分は表面が焼けただれた状態で無数の細い気泡と光沢面だけが残っている。胎土には、植物質遺物(大部分が靱と思われる)と小石が多量に含まれ、割れ目にその痕跡が明瞭なものも多い。

さて、これらの鑄型の製作方法はいかなるものであろう。未熟な観察からではあるが以下の試案を考えてみた。

- (1) 鑄造する原型を用意する。この場合、原型となるものは金属製・土製・石製・木製のいずれでもかまわないと思われ、比較的単純に整形できるものと考えられる。(現在まで、この原型と思われる遺物は出土していない。)
- (2) 粘土に靱等の植物質のものと小石を混ぜ、ある程度形を整えた後に原型の一面に強く押圧する。(これを雌型とする。)この時原型の表面には細かい砂を付着させるらしく、鑄型と原型が接する面には石英質の細片が多くみられる。しかし、この押圧の過程で図5-2の雌型は透し部分にあたる内面の突起を、滑面の上に貼り付けた後に押圧しているらしく、その痕跡が明瞭に認められることから、単純に押圧(型押し)作業だけだったかという点は疑問もある。
- (3) 雌型の上(原型のもう一面)に雌型と同様の粘土を押圧ぎみに貼り合わせる。(これを雄型と

X·图-5 铸型实测图



する)この場合の押圧は雌型に比較すれば輪郭と透し部分が識別できる程度である。

- (4) 貼り合わせた雌型と雄型の側面に合口と思われるきぎみを1~2ヶ所に入れる。
- (5) 雌型・雄型がある程度乾燥した段階で相方を取りはずし、原型を抜いた状態で再度貼り合わせる。そして、一ヶ所に湯口部分を取りつけ、側面のすき間と全体を別の粘土で覆ってしまう。取りはずす時、粘土が柔かすぎると原型との接する面が平らにならずやや歪んだ状態になることもあるようだ。(図5-5・6・7)
- (6) 以上、製作した鑄型を低火度で焼く。
- (7) 鑄型に坩堝で調合した湯を流し込み、冷却するのを待つ。
- (8) 鑄型を破壊し製品を取り出す。

以上であるが、(5)の段階で雌型・雄型を取りはずす方法が今ひとつ理解できない。たとえば図5-4と図5-5は合口の一致から同一製品の雌型と雄型と考えられるが、実際に貼り合わせてみると側面の接合面はかなりのすき間があり、本当に鑄造できるのかという不安におそわれるのである。

今後、類例の増加を待って再検討したいと考えている。

4. 鑄型とそれに関連する遺物の発掘事例

銅製品の鑄型が出土する例としては、弥生時代の銅鐸や奈良時代の和銅銭等が有名であるが、中世以降の事例は少なかった。しかし、近年の中世遺跡発掘調査事例の増加にともなって鑄造関係品が出土する事例も多くなり、鑄型、坩堝、羽口などが遺跡内における生産構造と結びつけ報告されるようになった。主な事例を述べると、

- ① 浪岡城跡(青森県浪岡町) 鐸の鑄型、坩堝、羽口、銅滓が出土。16世紀主体。
- ② 根城跡(青森県八戸市)(注1) 不明鑄型、坩堝、羽口が出土。16~17世紀主体。
- ③ 後城遺跡(秋田県秋田市)(注2) 坩堝、羽口が出土。15世紀主体。
- ④ 小枝指七館(秋田県鹿角市)(注3) 坩堝が出土。16世紀主体。
- ⑤ 柳田館跡(岩手県紫波町)(注4) 坩堝、羽口、鑄型(報告書に記述)が出土。16世紀主体。
- ⑥ 一戸城跡(岩手県一戸町)(注5) 坩堝が出土。16世紀主体。
- ⑦ 大谷口城跡(千葉県松戸市)(注6) 銅銭を溶融した坩堝が出土。16世紀主体。
- ⑧ 八王子城跡(東京都八王子市)(注7) 羽口、坩堝、鉄砲玉の鑄型が出土。16世紀主体。
- ⑨ 勝沼氏館跡(山梨県勝沼町)(注8) 坩堝(溶融物付着土器という名称)が出土。16世紀主体。
- ⑩ 塩田城跡(長野県上田市)(注9) 羽口、坩堝が出土。16世紀主体。
- ⑪ 本覚寺遺跡(神奈川県鎌倉市)(注10) 羽口、取瓶、坩堝、鑄型が出土。14世紀前半主体。
- ⑫ 平安京左京八條三坊二町(京都市下京区)(注11) 刀装具の鑄型、仏具の鑄型、羽口、坩堝が出土。13世紀主体。

などの遺跡があり、鎌倉市と京都市の例を除けばいずれも15・16世紀を主体とする城館跡で出土していることが注目できる。鋳型は、現在まで6遺跡で出土し、具体的に製作品名がわかるものは浪岡城跡、八王子城跡、平安京左京八條三坊二町の3遺跡だけである。坩堝は、上記12遺跡の他、草戸千軒町遺跡（広島県）、浜の館遺跡（熊本県）でも出土しているらしく、ほぼ全国的広がりをもって確認されるようである。特に鎌倉の場合は本覚寺遺跡だけでなく、蔵屋敷遺跡、長勝寺遺跡、二ノ鳥居西遺跡、光明寺裏遺跡、スイミングスクール遺跡、鶴岡八幡宮境内遺跡など、市内各所から鋳銅に関連する遺物が出土しているという（注12）。また、京都の平安京左京八條三坊二町の場合は、刀装金具の鋳型として兜金6個、鞘尻2個、兜金あるいは鞘尻と推定されるものが2個、足金物8個、櫓金5個、縁金物7個、責金6個、座金物4個と刀装具に用いる金具すべてにわたって検出されたという（注13）。鎌倉と京都の場合は遺物の対応する年代が鎌倉時代（13世紀が主体）ということもあり、①から⑩までの遺跡とは性格が異なり、いわゆる都市における遺物と理解してよいと思う。

このように鋳銅に関連する遺物は、中世全般を通じてしかも全国的な分布を呈して発見されており、今後さらに資料は増加するものとみられる。

5. 考 察

以上、浪岡城跡出土の鋳銅関連遺物と類例を述べたが、これらの遺物は16世紀後半の城館跡から出土する例が多く、戦国時代という歴史背景を考え若干の問題点を述べてみたい。

鋳銅関連の遺物の中で坩堝を最初に取り上げたのは、昭和30年に発掘調査された小枝指七館遺跡の報告書である。報告書は、土製するつぼの出土と近くから検出された炉跡と関連づけ、青銅鑄造に使用したものであり、同遺跡から多数出土した無銘銭も鑄造したのではないかという見解を出している。昭和37年に調査された大谷口城跡では、かわらけに銅銭が溶融状態で付着しており、同じく出土した鉄砲玉の色調と類似することから銃弾作りとの関連に注目している。以上の2例は、鋳銅の際に銭貨あるいは銭貨と鉄砲玉に言及した点で興味深く、勝沼氏館跡を調査した萩原・八巻氏は「武田氏悪銭供出令書」の悪銭を集めて鉄砲玉をつくらうとした事柄に触れ、城館内の小鍛冶的遺構および坩堝との関連を示唆している（注14）。しかしながら八王子城で出土している鉄砲玉の鋳型は、鉄玉の鋳型であろうと推測しており、柳田館跡から出土した坩堝附着滓の成分分析では鑄鉄の鋳物滓という結果が得られるなど、鋳型や坩堝がすべて鋳銅に使用したものではなく、鑄鉄・鋳銅の二面性があることも注意しておかなければならないと考えられる。

浪岡城跡から出土した鐔の鋳型についても、表面観察からすれば緑青の付着など鋳銅に関連した遺物と見れるが、鍛造した鉄鐔の地金に銅をメッキした可能性も、鐔本来の機能からすれば考えられる事であり、今後は化学分析による資料検討も必要になるであろう。ところで、浪岡城の鐔はどのような目的でどのような人々によって製作されたのであろう。前述したように、坩堝の出土状態が発掘区全域にわたってみられることは、鑄造作業がある限られた期間・場所だけでおこなわれていたもので

なく、城館期全期において継続されていたと考えることができる。その事は、渡り職人的な鋳物師の存在というより、城館内において定住する鋳物師の存在を想定でき鎌倉におけるあり方(注15)と違うような印象を受ける。つまり、中世前半の様相と戦国期に近く在地領主が覇権を争う時期の様相の相違であり、鋳物師など戦略上必要な職人を領主の支配下にとどめておくようになるのではないだろうか。

また鐺の製作目的も、単に自分達が使用するためだけでなく、部下への恩賞としてさずけたり(透し鐺などが多いことから)、北海道などの銅製品稀少地域、あるいは多量に搬入されている陶磁器等のみかえりとして、城館から搬出する交易品としての位置づけも考慮しなければならないであろう。

注1 八戸市教育委員会 史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ 1983

注2 秋田市教育委員会 後城遺跡発掘調査報告書 1981

注3 江上波夫他「秋田県鹿角郡柴平村小枝指七館遺跡」『館址』所収 1958

注4 岩手県教育委員会 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ(柳田館遺跡) 1980

注5 一戸町教育委員会 一戸城跡・昭和57年度発掘調査概報 1983

注6 松戸市教育委員会 大谷口・松戸市大谷口小金城跡発掘調査報告 1970

注7 八王子市教育委員会 八王子城 1983

注8 勝沼町教育委員会 勝沼氏館跡調査概報Ⅱ 1977、同Ⅲ 1978

注9 上田市教育委員会 塩田城跡第1次発掘調査概報 1976

注10 大三輪龍彦編 中世鎌倉の発掘 1983

注11 原田一敏 「平安京左京八條三坊二町」平安京跡研究調査報告書第6輯 第6章1節・第7章4節 1983 財団法人古代学協会

注12 a) 注10と同じ

b) 鎌倉駅舎改築にかかわる遺跡調査会 蔵屋敷遺跡 1984

c) 鎌倉市鶴岡八幡宮研修道場用地発掘調査団 研修道場用地発掘調査報告書 1983

注13 注11と同じ

注14 萩原三雄・八巻与志夫「甲斐の中世城館址研究—勝沼氏館跡の調査を中心に」『季刊どるめんNo.18』所収 1983

注15 注10と同じ

注16 図示した鋳型の出土区等は表1の通りである。

Y・表-1 鑄型觀察表

No.	遺物 No.	出土区(遺構)	層位	器形	釉調・色調	胎	土	計測値	特徴	備考
5-1	80P 7529	I 55	Ⅱ	鑄型	浅黄橙色・灰褐色	浅黄橙色・暗灰色		8.16 × 6.23 × 1.17	銅付着	
5-2	82P 1467	E 50 S T 165	7ク土	"	灰褐色・黒褐色	黒褐色	色	7.27 × 4.84 × 1.33		
5-3	80P 7788	G 55 S X 37	7ク土	"	灰白色・黒灰色	黒色	色	8.33 × 4.40 × 1.42	もみから付着	
5-4	83P 498	G 58	Ⅱ下	"	明黄橙色・灰色	灰色	色	6.23 × 5.53 × 1.70		
5-5	83P 1915	G 58 S T 210	7ク土	"	灰色・黒褐色	灰色・黒色	色	8.60 × 6.04 × 1.17		
5-6	83P 1770	G 58 S T 210	7ク土	"	明黄橙色・灰色	灰白色・灰褐色	色	6.58 × 3.38 × 1.30		
5-7	83P 1691	G 58 S T 210	"	"	灰白色・灰褐色	灰白色・灰褐色	色	7.04 × 4.56 × 1.18	銅付着	
5-8	83P 1781	G 58 S T 210	"	"	黄橙色・灰褐色	黄橙色・黒色	色	5.75 × 5.04 × 1.21		
5-9	83P 1790	"	"	"	灰色・黒色	黒色	色	6.06 × 3.24 × 1.67	銅付着	
5-10	83P 1944	G 57 S X 164	7ク土	"	浅黄橙色・灰褐色	灰褐色・黒灰色	色	5.08 × 5.04 × 1.45		
5-11	83P 1724	G 58 S T 210	7ク土	"	明黄橙色・黒灰色	黒色	色	4.90 × 3.72 × 1.70		
5-12	83P 1765	"	"	"	灰白色・灰褐色	黒色	色	5.23 × 4.52 × 1.77		
5-13	83P 1642	G 59 "	"	"	灰白色・灰褐色	黒色	色	4.45 × 3.10 × 1.91		
5-14	83P 1767	G 58 S T 210	"	"	灰黄色・灰褐色	灰色	色	5.66 × 3.84 × 1.52		
5-15	80P 301	I 56 S T 63	7ク土	"	灰黄色・灰色	灰色	色	3.38 × 2.92 × 1.50		
5-16	80P 1567	P Q 55 S H 05	7ク土	"	-	-	色	4.60 × 3.40 × 1.20		

XI 浪岡城跡出土の木製具について

葛西善一

1. はじめに

出土する木材には、どんな小型の物でもそれぞれに歴史をもつものと解して見るのだが、さて、それが何に使用されたかと、判断に困るものもある。

今回は、木製具のうち2～3品目に絞って観察記録してみることにした。

2. 井戸枠

城址の中には随分井戸が多く出る。こんなにも多くの井戸を掘りあげたものかと思う程井戸の数が多し。井戸の中には、水を汲みあげる為のものでなく貯蔵庫として使用したものもあるだろうし、既に老朽して埋立てたものもあろう。それらも同じ条件で発掘するので井戸数が多くなるものと思っている。

さて、天正の落城の際、どれだけの井戸を使用していたか、それを裏付けるものはないが、井戸枠のあるものは当時使用中のものとして解しても差支えないものと思う。

2-a 焦げ跡のある側板

今まで出土した井戸枠には円も楕円形もなく、皆方形のものであった。枠は4～8本の枠骨で固められ、骨には^{ほぞ}柄が彫られて横に押え木(ぬき)で側板をしっかりと押えを利しているが、この枠組みの中には明白に焦げ跡の見られるのがある。

記号(83S E73M24)で、この側板の巾は44.5センチ、長さ165センチ、厚さ3.5センチで多くの側板の中では巾広の方である。

件の痕跡は、板の下部から計ってみて約50センチで、面積は大人の掌一つ半位もある。いったいこの焦げ跡はどうして出来たのだろうか、そこに焦点をあててみた。

まず、井戸を掘る際、まだ土中におろさぬ前に火の不始末で焦げ跡をつくったかと途方もないことを考えてみたが、とどのつまりは落城の際、城中の建物に火を放たれその燃え残りが井戸に放り込まれてくすぶった時にできたものではあるまいか。

そうとなれば、城中の井戸は大体水が溜れていて、水深は50センチ程度であったらうか、元より河岸段丘に構築された城郭で、周りに水濠があるものの、井戸水は不十分であったかも知れない。落城も夏場の7月、旱天続きであれば水不足を来していたとしても当然である。

井戸の発掘の場合、落城以前に埋立てられていた井戸は論外であるが、使用中のものは木炭やら灰などが多く詰っている。

2-b 枠骨

一つの井戸に枠を入れる時、柁目の割板が何枚位を使用しているか、その井戸の大小にもよるが、8枚～10枚前後である。隅々には枠骨がありその枠を固めているが、その骨は4本は大部分であるが、

中には8本のものもあった。その中から2例を引いて書いてみよう。

Ⅱ・図-1



SE73隅柱

Ⅱ・図-2



SE61隅柱

出土した杵骨で最も長いのは211 cm、そして11~10.5 cmの角張ったものであったらしいが(図1)水を汲みあげているうちに、上部の方が摺りへり、更に落城後の長い年月は腐敗も加えて槍の様な形になった。

こゝで(図2)と比較してみるに、老朽化して使用済となった場合、再び掘りあげで更に使用したものと、もう耐用度が無いものとしてそのまま埋め潰したのものもあるに違いないと思った。

節くれだった図2を見ると、長い年月の使用期間が感じられ、節は目の様に見え何か秘めるものを語りかけてくるみたいである。一本の樹のどの辺を使用したかも相分り、尚杵穴を作る時難儀をするので無節の部をえらんでいることもわかる。それにしても木材を切断する時、鉋の様なものを使用したらしく断面に苦勞の跡がありありと分る。

尚、杵骨で判断するに、側板よりも骨の方が若干出ている。杵から考えると下部だけにあったようになる。図1は鉋の様なもの^{ちような}で木肌を滑にしたが図2は摩耗の中にも鉋か手斧で削って均した痕跡を残している。

2-c 杵と板押え(ぬき)と楔

図1・2共に一方に杵が彫られている。そこには側板を押えるためのぬきがある。そのぬき板(棒といった方がよいが)はまちまちで弓状に曲ったものの中にはある。材質は板も骨もぬきもヒバ材と見るが、ぬきの中には皮質が残っているのが1本あって、それはナラ材とも見られる。

次に^{くさび}楔の大きいには杵の大小からみて驚く。現在、私の考えからすれば可能な限り杵は大きく彫り、結果は楔をもって杵に合せて堅固にしたのだと考えられる。その方が細工師としては楽で結果もよいとなれば、甚だ素人臭いとも思われるし、曲ったどんな木材でもやりとげる腕もあると思えば逆に唯の素人とも思われない。この楔の出過ぎを切るのに^{のこぎり}鋸の使用もあったというが、それを見つげずになっている。ついでであるから、この鋸の使用についてこの項を終りたい。

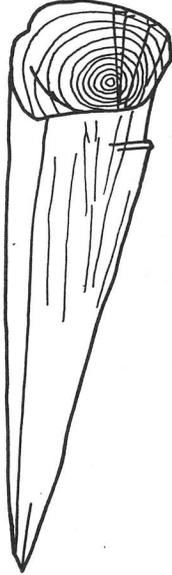
2-d 鋸の使用した例

普通材木を切断する場合、誰しも鋸でというのが現代人であるが、当時はそれが珍しかった。

工具を論ずるのは私の分野ではないが、木製具を見ているうちにどうしても避けて通れないものがある。さてこの材をどんなもので作ったかを考えるのは常識でもある。

図3(鋸を使った木片)を見て貰いたい。

XI・図-3



鋸を使った木片

この木片は木製具を作る時、余分な所なので不用でありそれを切り捨る部分であつたらしく、梢の部分であることが判る。材質は杉と思う。

木片は直径で5.5 cm、たかの知れた小片であるが、それを切断するために大変苦勞の跡が見られる。2~3回も回して断片に疵の段をつけている。これでは小学生3年生位の子供がきればこうなる。

どうして鋸の使用が発達しなかったかが問題になるが、それを簡単に云うと現在の様にアサリ(目揃り)が不十分で、工具としては甚だ難点があつたらしい。鋸をタテ・ヨコびきとして自由に使えるのは未だ時間を要するようである。

2-e 工具や工具の柄や鞘は

井戸杵を作るにもそれぞれの工具を使用した例をあげてきた。その工具の出土や工具の機能を発揮させるには附属する木製具がある筈である。木材の保存はその環境に支配されることは誰でも領けるが、出土木製具の中にはそれらしい物がないので、いざ記録する際に事を欠く。堀の調査では出土の可能性が充分であるからそれに期待したい。

3. 曲物

曲物・曲輪というのは一般的な名称であるが、此の地方では^{せいろう}蒸籠が訛つて「へろ」と言っていた。へろにコ^{さいもつ}の愛称をもって「へろコ」と呼び、それが御飯入れの「ワッパ」も^{さいもつ}菜物(副食物)を入れる。小型ワッパもへろで通つていたらしい。

それがだんだんに、語り物にもある「秋田名物^{まげわ}曲輪ッパ」が一般化し、戦時中は金属器の払底と共に、この曲輪ッパが必ず食事用の什器の中に顔を出すようになったが、戦後の復興と共にだんだんその面影もなくなり、現在は特別の民芸什器に斜陽化して今日に至っている。

3-a 出土した曲物

これは曲物の類だと判定される木製具は少なくないが、それが完全に近いものは至って珍しい。それ程、この種の出土品は形体や製作過程に手を施すので、余程よい環境にない限り保守は困難をもっているものと思う。

出土した物は極一部であるが、当時城中で使用していたものは小は神域で使用する口すゝぎ用柄物をはじめ、大は水溜用に^{こしきせいろう}する罎伽桶、蒸器の甑や蒸籠、そのほか多種多様の大きさのものを使用していたと思つて差支えあるまい。

そうはいふものの、城址で出土したものは限られ、小さな破片でどの部分であるか見当のつかない

ものは省略し、図に書いた蒸籠を紹介しよう。

蒸籠 A

図4は完全形に近い。見て判る通り土圧のため三角形になっている。中型の蒸籠である。上下2枚の鉢を巻いているのは蒸器の形だというのが、手ごろなところからお鉢に使ったかも知れぬ。若し蒸籠であれば附随した框や籠が出土すると元気づけられるのだが、今のところ未だそのものを見てない。底板と思われる厚板はよく出土するが、どれを見ても当の蒸籠のものと断定するものはない。

この蒸籠の形は前述のように崩れていて計測しにくかったが高さ24.3 cm、直径は27.5 cm位あった。鉢巻にした巻板の巾は4.3 cmでその厚さは0.5 cm、板の綴り用は桜の皮である。桜の皮のことをこの地方では樺^{かば}と呼び、樺皮で締めたともいう。(一部にコゲ跡あり甚だ印象的)

蒸籠 B

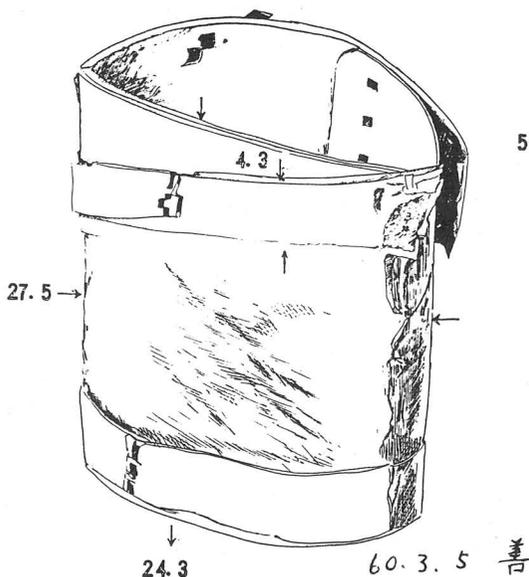
図5は出土中、形としては最大級である。しかしスケッチに見られるように甚だ無残な形骸とも思われる姿で現われたので、原形は想像の域で我慢して貰わなければならぬ。

まずは計測するに最も高い所で40.5 cm、直径はほぐれて正確さを欠くが59 cmを見る。2枚綴りか3枚綴りかは分らぬが、現物は2枚で出土した。柾目を割った剥板の厚さも一定はしてなく、大体0.5センチでそれ以上は見られない。

この蒸籠で発見したことは、大型のものの曲面を作る方法として年輪に対して直角になるよう、鋭利な小刀で切り込んでいることである。切り込み疵の間は1.5 cm位で全体についている。

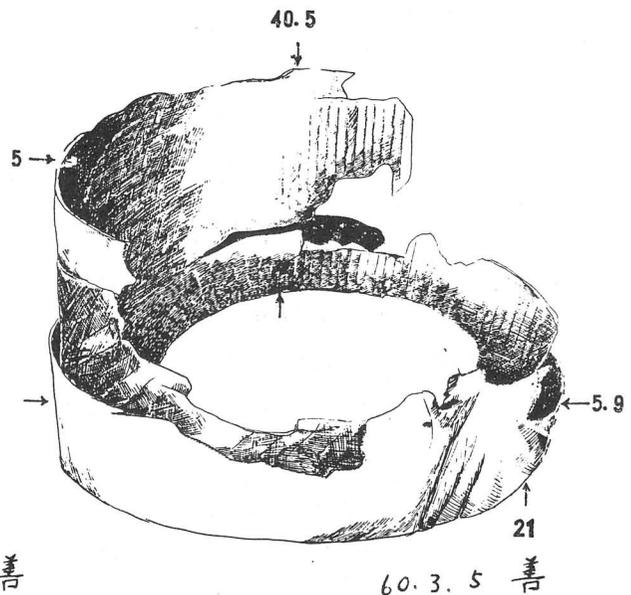
Ⅺ・図-4

蒸籠 A



Ⅺ・図-5

蒸籠 B



ところが、調査者にとって有難いことは、重ねた剥板が分離したお蔭で更に斜線のうすい疵跡が図の様に見られることである。これで大型物を形良く曲面をつくるには、こんな方法でやったのかが判明した。材質はヒバである。ヒバ材であるから長い年月を冥府の中に生きつづけ、再度出現して歴史の証言者になったのかも知れぬ

3-b 百見より技術師との対談

S60年1月佳日、出土品の一部を持参して、実際の製作過程の見学のため曲物屋を訪問した。南津軽郡藤崎町の木挽町に住む境さん宅へである。その時の対談を要約すれば

出土品の一部を見て

「これはヒバ材ですね。曲物はヒバ材に限ったものでなくスギ・サワラ・ヒノキを使います」

土中に入ってから450年位になるが

「スギ材なら既に腐っていたでしょう。そこがヒバ材の良いところ、この実物は水に流されていますよ。ふちが丸くなっている」

境さんの細工場の作品を見て、今使用の材料はどこ産ですか。

「大鰐の奥山には未だ良質のスギ・ヒバがあります。ヒバの方が安い。先日せの競りで直径70センチ、長さ5メートルで160万円で落札され買った人は秋田の人です」

今まで手がけたものにはどんなものがありますか。

「何んでも注文次第でね、甕や蒸籠は勿論、下肥柄杓・水通し・鉢物(櫃物)大輪ッパ小輪ッパ、祭祀神事用など、未だあるが数えきれないね」

境さんの周囲には例の楕円形をした昔なつかしい便器が山程積んでいた。

「結構注文がありますよ。こうして纏めて作ってますがね」

次に細工には是非ともなければならぬ工具をあげて貰った。前記の様に工具の分野ではないが、工具には柄や鞘等の附属物がある。その為にも捨ておく訳には参らぬ。その工具をスケッチしておいた。

工具は切れるでしょう。

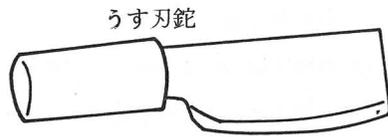
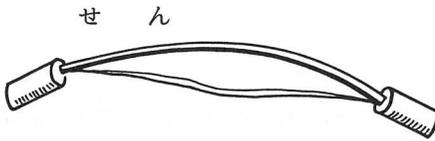
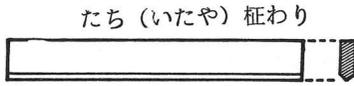
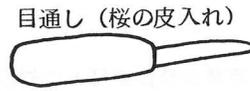
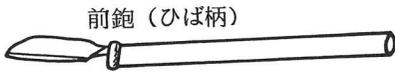
「市販の物は用に立ちませんね、そこで名のある刀工に作らせています」

曲輪物は作る形からして限度がある。現在の様に金属やポリエチレンの鑄形作りには競り合うとかなうまい。そういう意味で曲輪物の形体は北畠時代から現在まで大した変化もなかったと思われる。

境さんの工具を見ても判る通り(図6)、さして複雑な機械とて一切なく、曲物師は全くの手細工であり古代・中世から引きつがれた古典であると思った。

60.3.5

XI・図-6 曲物に使用の工具



木ばさみ (ひば材)



木槌

その他

けびき (省略)

大鍋 (省略)

ゴロ (曲面をつくるためのローラ)

(省略)

XII 浪岡城跡北館出土の須恵器・土師器について ——特に坏形土器の形態分類を中心に——

奈良岡 洋 一

1. はじめに

浪岡城跡北館から出土する須恵器・土師器の量はダンボール箱にして30箱以上にものぼるが、完形品は稀少で、全形・器種を判定する事が不可能な小破片がほとんどであった。これは、築城時の地表の掘削、その後の住居の建替え、近年の農地化によって土砂の攪乱からくる事でやむをえぬ事である。須恵器・土師器が城館期以前の所産であることは、遺構の出土状態からみても知れるところであるが、製作年代・使用年代については県内において今だ不明確な点が多い。今回、昭和58年度までに出土した須恵器・土師器について概略を述べ、特に坏形土器については製作技法・法量等から数形態に分類し、資料提示するものである。

2. 須恵器

器形としては、坏形、壺形（図Ⅰ-1・2・3・4・5）、甕形がある。甕形に関しては特に小破片が多く、全形を把握する事は困難な状況にある。しかし、これら須恵器の供給窯元としては出土遺物の特徴（口縁部の特徴、同一へら書き記号の検出例）と地理的に近い事から五所川原市前田野目窯跡群であろうと考えていた。これをさらに確定的にしたのは、昭和57年度調査報告書における奈良教育大学三辻利一氏の須恵器片と珠洲系片の胎土分析の結果であった。以下、項目別に記述する。

2-a 甕形（中・大型）

胎土は不均一性の砂粒を含み、焼成が良く色調も青灰色を呈する器片と器厚内部が赤銅色を呈するものもみられる。器表面に黒色の光沢を有するものと白色の付着物がみられる器とが有る。大型の甕は肩部まで叩目を有し（図Ⅰ-6）、器片によっては櫛目状の文様も一定せず格子目状に交差したり、深さ・幅等もまちまちである。中型甕では叩き目を半分位埋め戻している器片もある。

2-b へら書き記号を有する器片

刻まれている箇所は坏形では胴部下位と底部、甕形・壺形ではすべて肩部から頸部にかけてである。今まで確認されている記号で、欠落している部位に刻まれて判読できない器片も相当数ある。

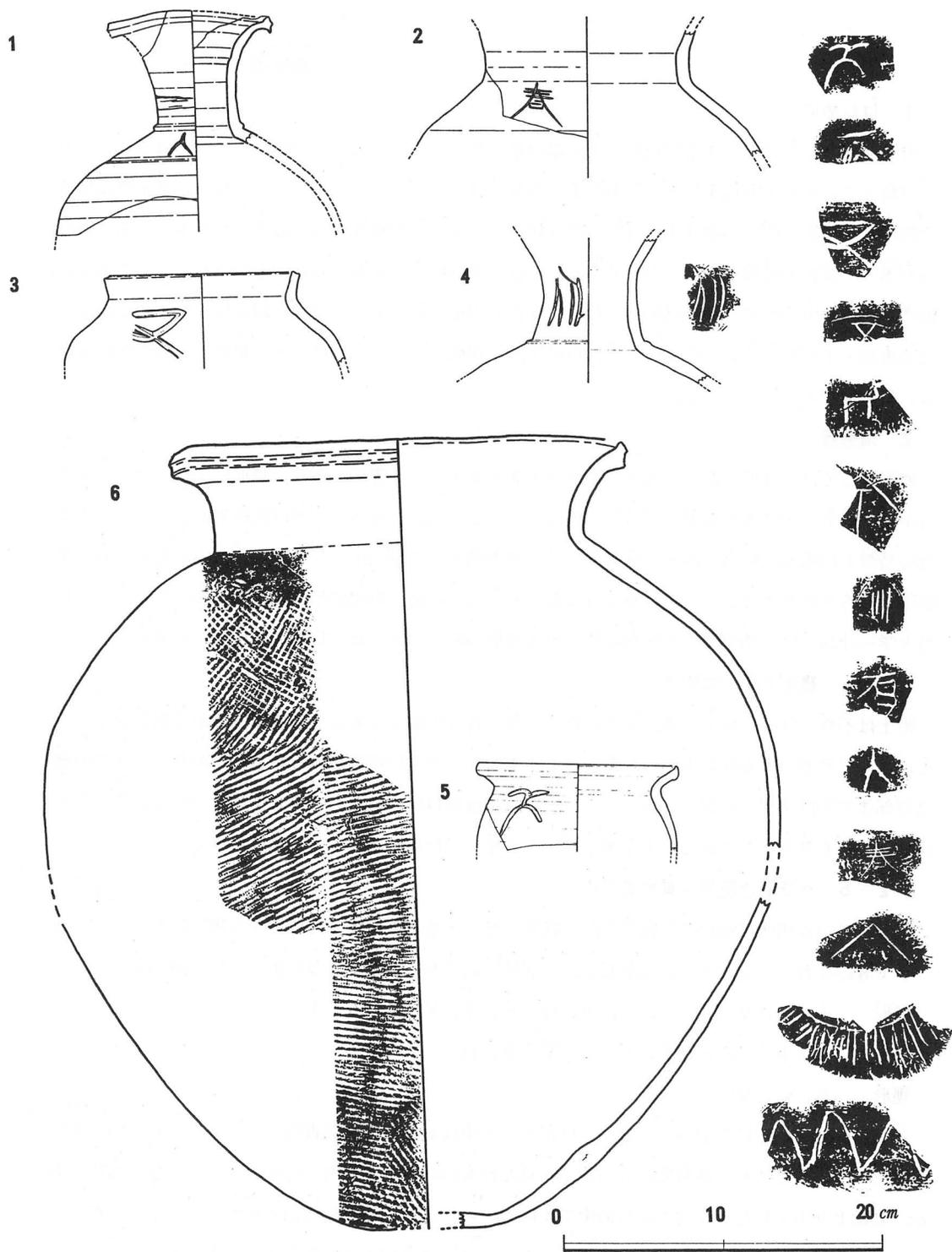
坏形 止、M、V、X、ハ、ハ、川、ら、Ⅳ、Ⅴ、ヤ、#、リ、十

壺形 大、小、又、州、ト、く、Ⅴ、Ⅴ、春、有

甕形 ハ、フ、文

以上が確認されている記号であるが、特記すべき事は昭和57年度調査時に文字（春、有）の刻まれた壺形が出土しており、供給先からの要請で刻んだものか今まで県内では検出されていない器片である。北館より出土したへら書き記号の中で4例（川、州、ハ、X）が昭和50年五所川原市前田野目砂田窯跡発掘調査報告書、中の27例中にみられる。今後の調査でさらに数はふえると思われる。

XII • 图一 1 须惠器实测图



2-c 火ダスキを有する环形器片

胎土は均一的な砂粒を含み、土こしが充分なのか器厚内の剥離・中空・亀裂が見られず器厚も一定の厚みを持っている。色調は個々の完成品までの燃焼温度の相違、時間等からくるのか一定せず、青灰色から灰色、明褐色と変化に富んでいる。硬度も完全に焼き締まっている器片からソフトで土師器と区別つけ難いものまでである。へら書き記号は胴部下位、底部に刻まれているが特別の記号はみられない。焼成時に重ね積みをして窯面積の有効的活用をはかったと思われるが、窯内の場所によって還元焼成の恩恵を受けない場所に置いて、比較的低温度で焼かれている。別に考えるとすれば、大型の器類とは燃焼時間の相違、高火度に対して耐える胎土、完成出荷率等から器類にあった比較的小型の窯で焼いていたと思われる。

2-d 酸化須恵器の环形器片

須恵器と土師器の中間に位置する器類で分類上問題のある器類である。胎土は微砂を含み全体的に器表面に砂粒の為にザラザラした感がある。色調は胎土中の鉄分が高温の為に変色して明褐色、赤褐色を呈する。硬度は土師器より硬く叩くと金属音を発する。器形は环形である。大型の器形の検出例がなく小形の环形である事、須恵器としての特徴的なへら書き記号が刻まれていない事、などから日常生活の要求度により、須恵器生産と平行して比較的高度な技術を必要としないで誰にでも作れる器類ではなかろうか。登り窯的な煙道、天井を持たないで直接酸化焼成する野窯式の方法で同じ器だけを大量に焼いたのではないだろうか。

注) 酸化須恵器 — 分類上まだ正式な名称・位置付けがなされていないために本報告書で便宜上使用した過渡的用語である。

3. 土師器

器形は甕形と环形があり、甕形は復元可能な個体は無く詳細な把握が出来ないので記述を省き环形のみ記述する。出土状態も層序・遺構と関係有るものは少ない。量的には底部と胴部片が多く全体的に焼成、胎土組成は良好なものが多い。残存部の特徴のあるものを抽出して記述する。

3-a 内黒坏

ロクロ台使用で器内面を炭化している。カーボンの付着に差がみられ、表面に墨液を塗ったようにうすくなっている器。タール状の付着物が認められる器。使用時間が長かったのか、技法としてミガキを施しているのか、光沢のある器。器形は深みを持ち底部からの湾曲度が少く、直立状態の器から底部より外側に湾曲し丸みを持つ器。整形痕の有る器は内面底部より放射状の暗文を有する器などがある。

3-b ロクロ不使用の器

器形はすべて环形である。製作技法としては、手づくね法、輪積み法、で全体に器厚は厚く、外面をへら削りによる整形痕がみられるものもあり底部痕は砂礫、菰編の圧痕を有するもの又は木葉痕を刻んだ器などがある。色調は灰褐色を呈するもの、焼成時の斑からくると思われる器体の一部が黒く

く変色している器もみられる。器に統一的制約を持たず製作者の意志にまかせて自由に製作されているものを見ていると素朴さの中に暖かさを感じる器類である。

3-c ロクロ使用の器

ロクロ台使用の坏形は、須恵器の坏、酸化須恵器の坏と整形上の相違点はみられないので一括して形状から大別する。

3-c-1 皿状坏型 器高が低く底より直線的に外反して全体に器厚が薄くてそのまま口縁部までのびている。

3-c-2 浅鉢状坏形 器高が若干高くなり、外反する角度が胴部中央部位から丸みを持ってさらに外側に角度を変えて反り口縁部の広い器。

3-c-3 碗状坏形 器高が高く低部よりの立ち上がりが強くと胴部丸くそのまま口縁部まで続き口縁部が薄くなる。

これらの中には中間的器もみられるが、日常生活からの要求以外に、工人の好み、技術度が多分に影響しているのであろう。他に砂粒の多少、底部内面に出来る小突起、外面の指による横方向へのゆるい波状の起伏なども分類上の特徴となろう。

4. 浪岡城跡北館出土の坏形土器

上述した須恵器・土師器の中で饗膳具の主体となる坏形土器を、器形・成形・焼成・整形・胎土等からまとめてみる。この場合、器形的には前述したように皿状、浅鉢状、碗状と3形態に分類可能であるがそれを数値の面からみると、器高に対する口径の比率が、

$$(\text{皿}) 2.7 > (\text{浅鉢}) 2.4 > \text{碗}$$

となり、この数値が一応の目安となる。しかし、器の大小によっては数値に若干の変動がみられ、

2-c 火ダスキを有する坏

2-d 酸化須恵器の坏

3-a 内黒坏

と分類しているが、この他にいわゆる須恵器坏、土師器坏を加え5分類できる。さらに製作技法からは、

3-b ロクロ不使用の器

3-c ロクロ使用の器

の二つに分類でき、底部の切り離し技法とともに分類上のメルクマールとなりえる。

このように、坏形土器を分類する場合どこに重点を置くか問題となる所であるが、浪岡城跡の場合は出土層位、出土遺構による相違は顕著に認められず、時間差による分類は実際上不可能である。さらに、前述した酸化須恵器という用語にも表われた通り、通常の土師器・須恵器という分類も妥当性は薄い。そのため、筆者は整形および器体表面の特徴を中心に以下のように分類してみた。

A類 いわゆる内黒の坏。器内面に意図して黒色処理を施しているもの。ロクロ使用。

B類 皿状坏。器高に対する口径の比率が2.7以上のもの。ロクロ使用。

C類 器体表面に火ダスキおよび酸化斑文がみられぬ、いわゆる土師器坏。ロクロ使用。

D類 器体表面に酸化斑文と環元部分はみられるものの火ダスキがみられない、いわゆる酸化須恵器坏。ロクロ使用。

E類 器体表面に火ダスキを有するもの。ロクロ使用。

F類 ロクロを使用しない坏

G類 いわゆる耳皿。

H類 その他の坏。

4-a A類の坏(図2-1~6)

本類はロクロを使用し、器内面をカーボン附着によって黒色処理している。器形的には碗状のものが多い中で直線的立ち上がりを呈するもの(3)もある。内面処理の面では、光沢の著しいもの(4・5)と薄く色あせているもの(2)があり、内面底から放射状に暗文を有するもの(1・5)は技法的特徴である。焼成状態は、すべて土師器質である。

4-b B類の坏(図2-7~14)

本類はロクロを使用し、器高に対する口径の比率が2.7以上の、いわゆる皿状坏である。器形上の特徴としては、底部立ち上がりを肉厚に整形し直線的に口縁が開くものが多いのに対し、(10)は明確に立ち上がり部を形成せず胴部が内湾きみに立ち上がった後口縁が外反する例である。焼成状態では、土師器質の焼き上がりを呈するもの(13・14)からいわゆる酸化須恵器質の焼き上がりを呈するもの(7~12)まであり、後者の胎土には小石を含有して器面に露呈する特色がある。

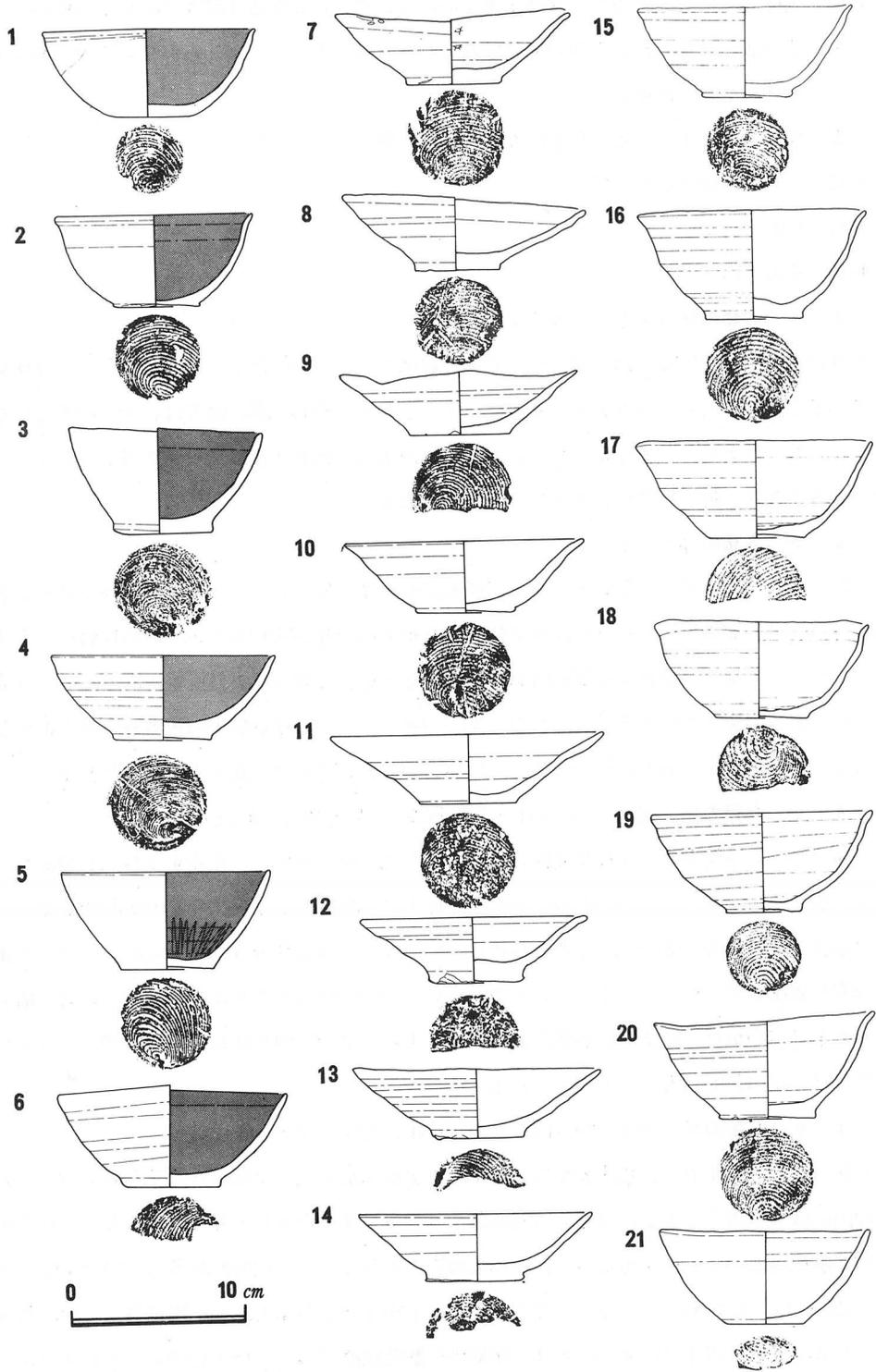
4-c C類の坏(図2-15~19・21、図3-22~29、図4-49)

本類はロクロを使用し、全般に赤味の少ない黄白色の色調を呈し、後述するD・E類よりは軟質な焼き上がりを呈する土師器質のものである。器形上の特徴としては碗状のものが多い中で、口縁が外反する浅鉢状のもの(25~28)もみられる。胎土は、比較的精選されたものが多いが、多量の小石を含有し器面がザラザラしたもの(15・24~26・29・49)もあり、すべて同一素材(粘土)で製作したとは言いがたい。また、器体内面にタールあるいは炭化物が付したもの(23~26)もあり、饗膳以外の使用目的があったと考えられる。

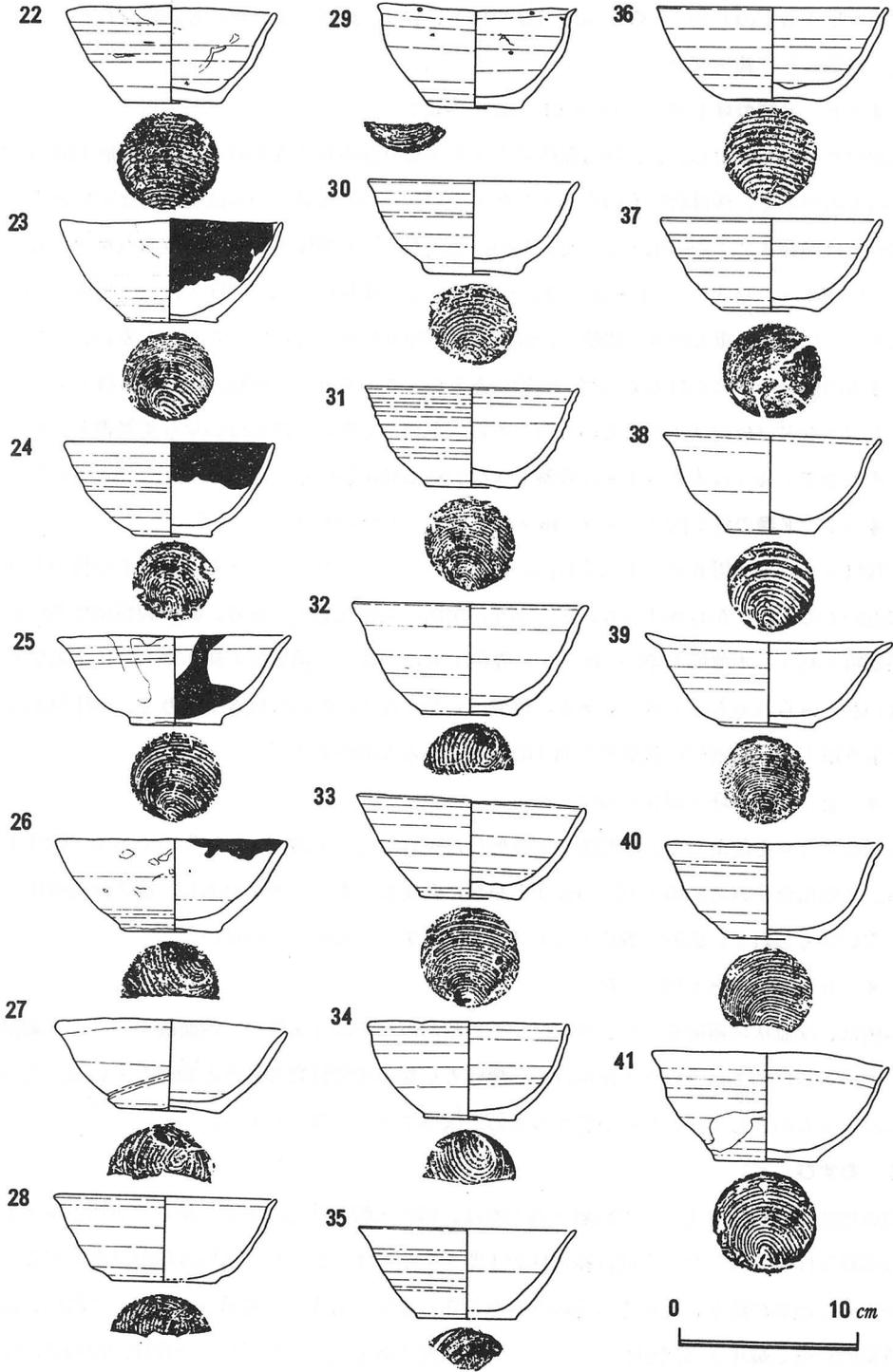
4-d D類の坏(図2-20、図3-30~41、図4-42~44)

本類はロクロを使用し、器体表面の一部または全般に酸化斑文を認められるものである。また、本類の中には酸化斑文とともに須恵器特有の還元状態を呈する焼き上がりをみせるもの(40)があるため酸化須恵器という名称を使用した。器形上の特徴としては、碗状の形が多く、口縁が広く外反する例(39・43)は特徴的である。またこの二例は(34)とともに表面を丁寧に調整し他の器体とは相違が認められる。器体の色調としては、赤褐色(酸化状態)のものが多い中で、(20)は黄白色、(30・35・42)などは暗灰色を呈する部分が多く、焼成条件が一律でなかったことを示すと思われる。

XII·图-2 环形土器实测图(1)



Ⅺ·图一3 坏形土器实测图(2)



また、整形上の特徴として、内面見込み部分にロクロの巻き上げ痕がそのまま残ったり、中央部が小突起状を呈するもの（31・33・36・38・44）があり、後述するE類にも認められることから製作技法の特色として興味深い。

4-e E類の坏（図4-51～61、図5-62）

本類はロクロを使用し、いわゆる器体に火ダスキの痕跡を有するものである。器形上の特徴として碗状のものが多く、浅鉢状のものも若干存在するが前述した数値上からは明確に比定できず、さらに皿状の器は現在まで1点の出土もみられない。焼成温度とも関係あるが、色調の点を述べると、黄白色（52・54）、暗灰色（51・56・57・59・60）、黄灰色（53・55・61）、黒灰色（62）とバラエティーに富み、重ね焼きの影響で口縁部だけが還元状態になっているものも多い。火ダスキは、1～3本の紐を十字にかけるものが一般的であるが、きっちり十字に組み合わせるほどではないらしい。（61）などは放射状にかけている例である。本類で完形のものにはかならず篋書き記号が認められ、その点で（58）は火ダスキ痕は観察できないが本類に包括してさしつかえないと考えた。

4-f F類の坏（図4-45～48・50、図5-63～65）

本類はロクロを使用せず、手づくね法、輪積み法で成形したものである。器形上の特徴としては皿状に近いもの（48）から碗状のものまであり、全体に肉厚な成形である。底の調整に特徴があり、静止糸切痕（45）、木葉痕（46・48）、砂礫痕（63～65）、菰編痕（50）やヘラによる切り離してはないかとみられるもの（47）もある。焼成はC類に近く、軟質な焼き上がりで、器体外面に縦位のヘラ削り痕（48）や縦位の調整痕（63）の認められるものがある。

4-g G類の坏（図5-66～69）

本類はロクロを使用して、小型皿状に成形した後耳皿として再成形したものである。焼成上の特徴から、C類に含まれるもの（66～68）とD類に含まれるもの（69）があり、後者は明確に耳皿とはいえないかもしれないが、成形・焼成上のミスによって生じた器かもしれない。

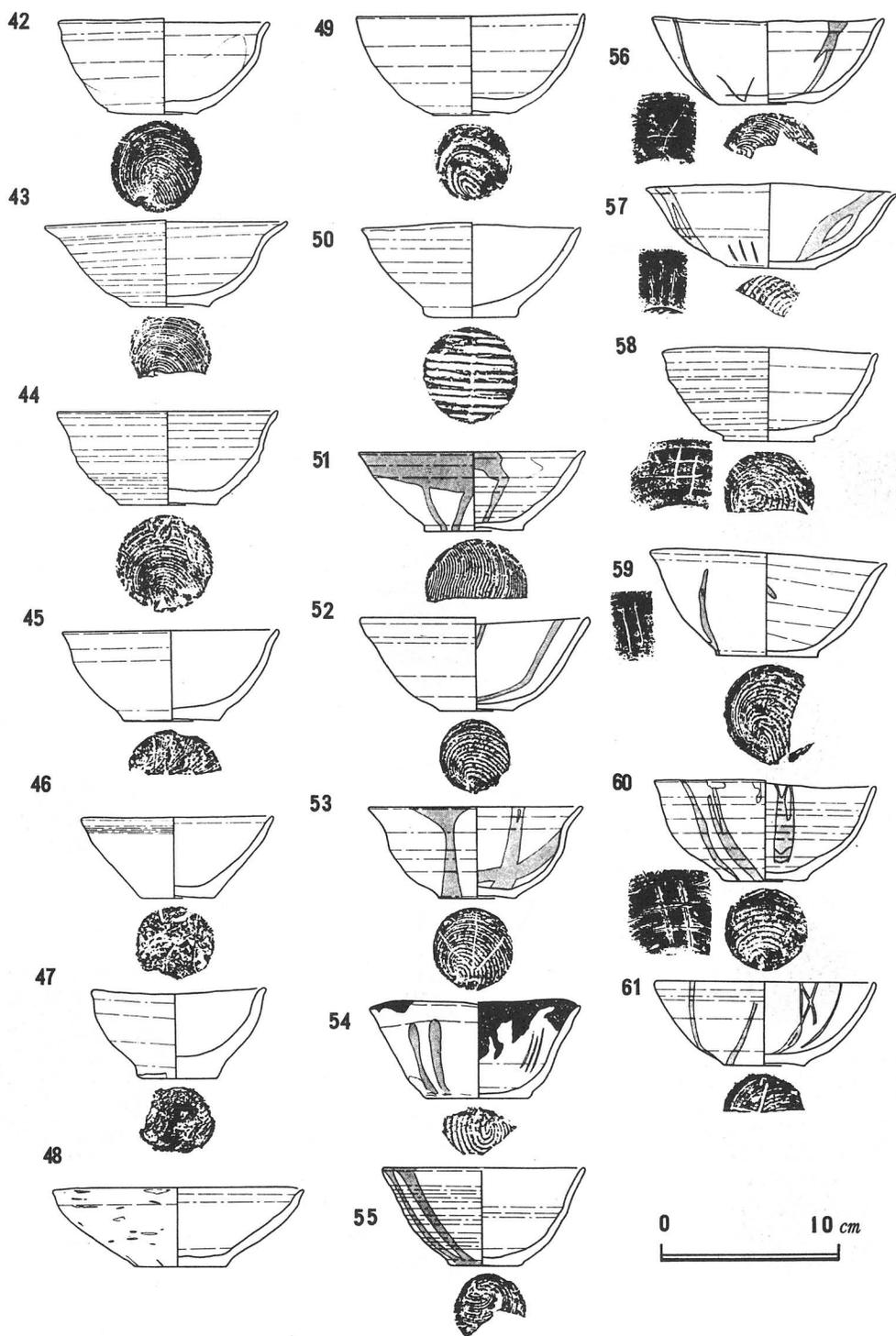
4-h H類の坏（図5-70）

本例は、深皿状の器形を呈し、外面はロクロ整形痕をそのまま残し、内面はナデによる調整がなされた器である。胎土は小石を多量に含み、焼成もC類の中で良質なものと類似している。この他に、H類に入るものとしては、高台を有するもの（図示できず）などがある。

5. むすび

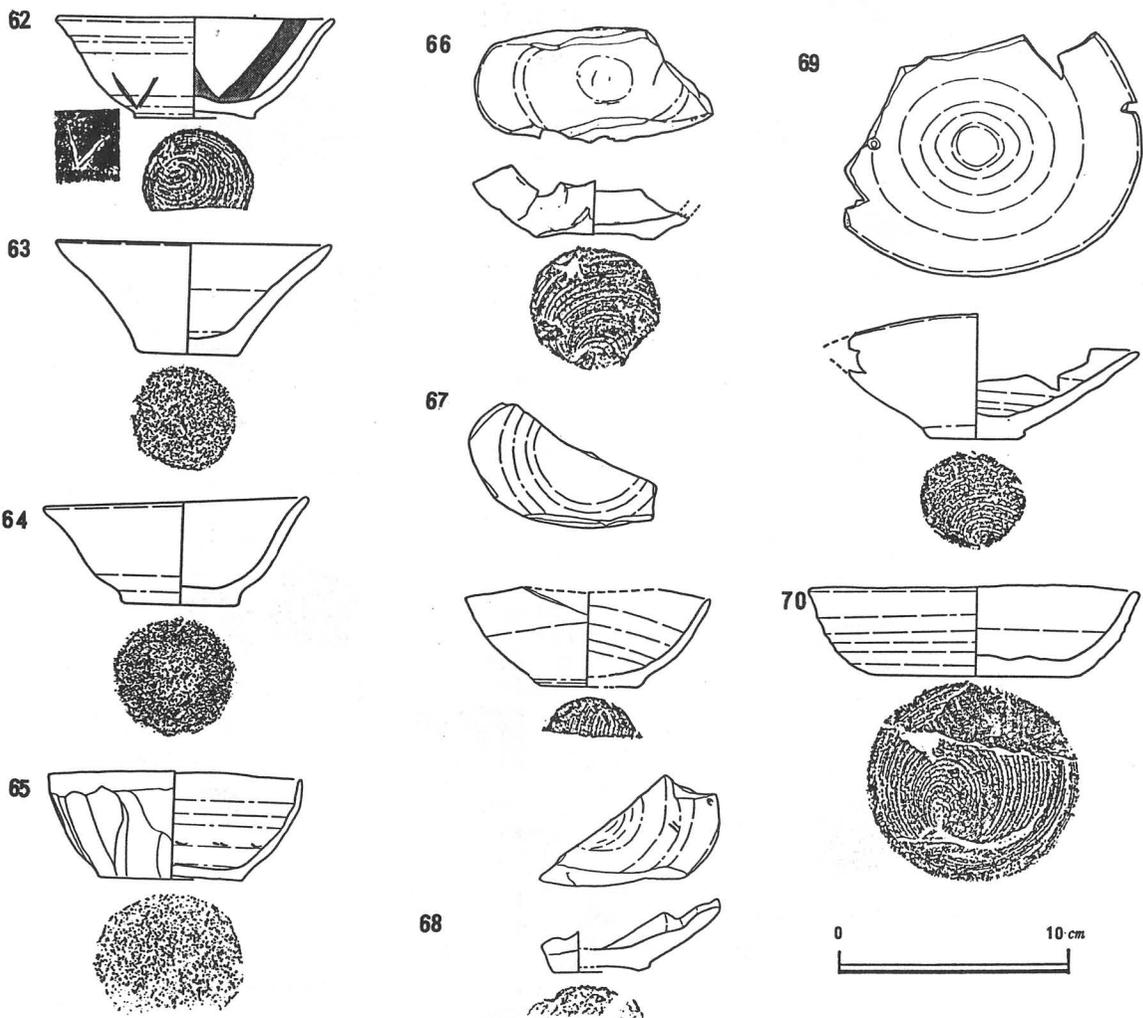
浪岡城跡北館から出土した土師器・須恵器は、器形・製作技法の多様性からその特色をまとめることは困難な作業であった。今回は特に坏形土器を中心にまとめたが、形態分類の基準をどこに設定するかで試行錯誤が続き、今後も本稿の内容を吟味してゆく必要性を痛感している。それは、形態分類と時間的変遷（編年）の問題がアンバランスな状況であることに起因し、今後は浪岡城跡出土品以外のものと比較検討することが重要な課題である。現状では本稿に提示した資料は13世紀以前に製作した資料であるということしか言えない。

XII · 图-4 环形土器实测图(3)



今までは、須恵器、土師器とに大別してきたが、今後さらに新しい位置づけが必要であると思われ、そのためには今までの推察の域から脱出し、正確な窯跡の発見、化学的に胎土分析することも一方法と思われる。一例として器体に含まれる鉄分の高温による酸化第二鉄への移行度合い(鉄分の溶解度)、硬度を数字的に標示、他は色調、叩き音等を加味することによって多少の線を引けるのではないかと考えている。

XII・図-5 环形土器実測図(4)



ⅩⅩ・表-1 坏形土器計測表

№	遺物 №	出土 グリッド	遺構名	層位	口径	底径	器高	口径/ 器高	底径/ 器高	口径/ 底径	器高 格差	底調整	特 徴
1	82P 2557	J 51	S X 81	フク土	12.2 ^{cm}	4.1 ^{cm}	5.3 ^{cm}	2.3	0.8	3.0	0.3 ^{cm}	右回転糸切	内黒調整
2	81P 639	〃	〃	〃	11.4	5.1	5.4	2.1	0.9	2.2	0	〃	〃
3	83P 2655	F 45	S D 75	フク土	11.1	5.8	6.3	1.8	0.9	1.9	0.5	〃	〃
4	80P 2103	G 54	S X 23	フク土	12.7	5.7	5.1	2.5	1.1	2.2	0.3	〃	〃
5	82P 542	J 51	S X 81	フク土	11.9	5.3	5.9	2.0	0.9	2.2	0.2	〃	〃
6	81P 2644	H・I 50	S D 32	フク土	13.2	5.2	5.8	2.3	0.9	2.5	0.3	〃	〃
7	82P 2207	G 50	ピット内	フク土	13.6	5.3	4.4	3.1	1.2	2.6	0.2	静止糸切	皿状
8	82P 2558	〃	S X 107	〃	14.0	4.9	4.5	3.1	1.1	2.9	1.2	静止糸切	〃
9	82P 638	J 51	S X 81	〃	13.7	5.8	3.7	3.7	1.6	2.4	0.4	右回転糸切	〃
10	80P 1516	H 55	-	Ⅲ	13.5	5.4	4.2	3.2	1.3	2.5	0.4	〃	〃
11	82P 2436	H 42	-	Ⅱ	15.7	5.5	4.1	3.8	1.3	2.9	0	〃	〃
12	82P 1850	H 43	S X 130	フク土	13.1	4.8	4.8	2.7	1.0	2.7	0	?	〃
13	80P 5450	L 54	S D 16	フク土	14.3	5.3	4.3	3.3	1.2	2.7	0.4	右回転糸切	〃
14	78P 1434	H 47	S T 08	フク土	13.5	5.7	4.1	3.3	1.4	2.4	0.5	〃	〃
15	80P 1480	H 54	S X 20	フク土	12.2	5.2	5.4	2.3	1.0	2.3	0.4	〃	土師器
16	82P 2353	D 51	S T 160	フク土	13.2	5.6	5.8	2.3	1.0	2.4	0.1	〃	〃
17	79P 4273	J 58	S T 40	フク土	13.6	5.5	5.6	2.4	1.0	2.5	0.1	〃	〃
18	81P 2075	L 53	S X 16	フク土	12.4	5.2	5.7	2.2	0.9	2.4	0.3	〃	〃
19	81P 2452	L 53	-	-	12.8	4.3	5.7	2.2	0.8	3.0	-	〃	〃
20	83P 2654	F 44	S D 75	フク土	12.7	5.5	6.2	2.0	0.9	2.3	0.7	〃	酸化須恵器
21	81P 2641	G 51	-	Ⅳ	12.1	4.5	5.8	2.1	0.8	2.7	0.4	〃	土師器
22	82P 2357	D 50	S T 167	フク土	11.8	5.5	5.4	2.2	1.0	2.1	0.3	静止糸切	〃
23	82P 2350	E 51	S T 159	フク土	12.5	5.3	5.8	2.2	0.9	2.4	0.2	右回転糸切	〃
24	82P 2559	D 51	S T 159	フク土	11.8	4.3	5.3	2.2	0.8	2.7	-	〃	〃
25	82P 2423	D 51	S T 159	フク土	13.1	5.0	5.0	2.6	1.0	2.6	0.2	〃	〃
26	79P 4391	J 58	S X 05	フク土	13.0	5.5	5.3	2.5	1.0	2.4	0.1	〃	〃
27	81P 238	G 51	S T 151	フク土	13.0	5.8	5.1	2.5	1.1	2.2	0.4	〃	〃
28	80P 1481	H 54	S X 20	フク土	12.2	5.8	5.0	2.4	1.2	2.1	0.4	〃	〃
29	81P 2072	L 53	-	Ⅲ	11.1	5.2	5.7	1.9	0.9	2.1	-	〃	〃
30	80P 557	H 54	-	Ⅱ	11.6	4.8	5.5	2.1	0.9	2.4	0.4	〃	酸化須恵器
31	82P 1851	H 43	S X 130	フク土	11.9	5.1	5.7	2.1	0.9	2.3	0.3	〃	〃
32	78P 538	L69~O68	S D 01	フク土	13.2	5.4	6.2	2.1	0.9	2.4	0.1	〃	〃
33	81P 2304	K 52	S X 81	フク土	12.8	5.6	5.8	2.2	1.0	2.3	0.8	〃	〃
34	81P 2476	H 49	-	-	11.3	5.1	5.6	2.0	0.9	2.2	0.2	〃	〃

No	遺物 No	出土 グリッド	遺構名	層位	口径	底径	器高	口径/ 器高	底径/ 器高	口径/ 底径	器高 格差	底調整	特 徴
35	80 P 1393	F 54	S D 09	フク土	12.2 ^{cm}	5.6 ^{cm}	5.5 ^{cm}	2.2	1.0	2.2	0.3 ^{cm}	右回転糸切	酸化須恵器
36	79 P 4274	J 58	S X 05	フク土	12.9	5.4	5.1	2.5	1.1	2.4	0.3	〃	〃
37	79 P 896	J 59	—	Ⅰ	12.4	5.5	5.2	2.4	1.1	2.3	0.2	〃	〃
38	81 P 2100	H 50	S D 32	フク土	12.2	5.0	5.7	2.1	0.9	2.4	—	〃	〃
39	82 P 2454	G 50	S X 107	フク土	13.8	5.4	5.2	2.7	1.0	2.6	0.4	〃	〃
40	82 P 440	G 50	—	Ⅰ	11.7	5.2	5.4	2.2	1.0	2.3	0.1	〃	〃
41	79 P 4280	J 58	S X 05	フク土	13.2	5.7	6.2	2.1	0.9	2.3	0.8	〃	〃
42	81 P 2032	H 50	S D 32	フク土	12.2	5.2	5.6	2.2	0.9	2.3	0.4	〃	〃
43	81 P 2299	G 51	S T 151	フク土	14.0	5.2	5.2	2.7	1.0	2.7	0.2	〃	〃
44	82 P 1852	H 43	S X 130	フク土	12.7	5.6	5.8	2.2	1.0	2.3	0.4	〃	〃
45	80 P 251	L 54	—	Ⅰ	12.3	5.6	5.4	2.3	1.0	2.2	0.1	静止糸切	ロクロ不使用
46	81 P 10865	L 56	S D 15	フク土	11.2	4.2	4.8	2.3	0.9	2.7	—	木葉痕	〃
47	82 P 2360	G 50	S D 64	フク土	10.1	4.8	5.4	1.9	0.9	2.1	0.2	ヘラ?	〃
48	81 P 2467	I 52	S T 102	フク土	14.5	5.3	4.6	3.2	1.2	2.7	—	木葉痕	ヘラ削り
49	79 P 4275	J 58	S T 39	フク土	13.1	4.6	5.7	2.3	0.8	2.8	0.2	右回転糸切	土師器
50	80 P 1220	K 54	S D 16	フク土	12.4	5.4	5.4	2.3	1.0	2.3	0.3	菰編圧痕	輪積み ロクロ不使用
51	80 P 1209	L 54	S D 16	フク土	13.1	5.8	5.0	2.6	1.2	2.3	0.5	静止糸切	火ダスキ
52	80 P 659	G 55	S D 11	フク土	13.2	4.2	5.6	2.4	0.8	3.1	0.6	右回転糸切	〃
53	80 P 1199	K 54	S D 16	フク土	12.4	4.4	5.4	2.3	0.8	2.8	0.2	〃	〃
54	82 P 2477	D 51	S T 159	フク土	12.1	5.8	5.8	2.1	1.0	2.1	0.4	〃	〃
55	82 P 2431	D 49	S D 61	フク土	11.7	4.3	5.8	2.0	0.7	2.7	—	〃	〃
56	81 P 2275	H 50	—	Ⅲ	13.2	5.5	5.2	2.5	1.1	2.4	0.4	〃	〃
57	82 P 2356	D 50	S T 167	フク土	14.2	5.0	5.0	2.8	1.0	2.8	0.7	〃	〃
58	82 P 2389	E 50	S X 150	フク土	12.1	5.2	5.5	2.2	0.9	2.3	0.3	〃	〃
59	82 P 2351	D 51	S T 159	フク土	13.4	5.8	6.2	2.2	0.9	2.3	0.7	〃	〃
60	82 P 2157	H 42	S X 132	床面	12.5	4.8	6.0	2.1	0.8	2.6	0.5	〃	〃
61	80 P 160	E 55	S D 10	床面	12.6	4.6	5.0	2.5	0.9	2.7	0.1	〃	〃
62	80 P 1452	G 54	S X 20	フク土	12.3	5.4	4.8	2.6	1.1	2.3	0.2	〃	〃
63	82 P 1966	H 46	S T 186	フク土	12.2	4.6	5.0	2.4	0.9	2.7	0.1	砂圧痕	ロクロ不使用
64	82 P 2424	D 51	S T 159	フク土	11.7	5.3	5.0	2.3	1.1	2.2	0.9	〃	〃
65	81 P 2306	K 52	S X 81	フク土	11.2	6.3	4.9	2.3	1.3	1.8	0.4	〃	〃
66	83 P 1463	E 48	—	Ⅲ上	—	—	—	—	—	—	—	右回転糸切	耳皿
67	82 P 2453	G 50	S X 107	フク土	—	—	—	—	—	—	—	〃	〃
68	79 P 4010	Q 55	—	Ⅰ	—	—	—	—	—	—	—	〃	〃
69	80 P 819	E 54	—	Ⅰ	—	—	—	—	—	—	—	〃	〃
70	78 P 1000	J 47	—	黒色 流土	14.5	9.1	4.1	3.5	2.2	1.6	—	〃	〃

XIII まとめ

村越 潔・工藤 清泰

1. はじめに

浪岡城跡の発掘調査は、昭和52年から始まり昭和59年をもって、主館と推定した北館の平場調査における遺構および遺物の概略を把握するに至った。この間に、全国的にみても中世遺跡の調査は増加の一步をたどり、「中世考古学」なる言葉が定着しつつある。こと青森県においても、継続調査中の浪岡城跡、根城跡をはじめ、尻八館跡、堀越城跡、浜通遺跡、独孤遺跡、境関館跡等、続々と中世資料を呈示している。それらの中で、浪岡城跡は天正年間に落城という考古学的には検出遺構、出土遺物を把握しやすい歴史事実があったため、出土遺物に関しては東北北半部でも屈指の資料価値を有している。

今回、昭和58年度調査の報告とともに、北館内における遺構・遺物を一度総括してみようとする調査員の声があり、各項目について分担執筆をお願いした次第である。そのため、本報告書は、単なる事実記載にとどまらず、現状で把握できる浪岡城跡の実体を掘り下げた論文集の意味もあり、今後の中世考古学研究にあたっての敲台タタキダイであることをおこたわりする。なお、各項目から導びかれる問題点を提示し、まとめにかえたいと思う。

2. 検出遺構の問題点

検出遺構には防禦遺構と生活遺構がある。前者には堀跡、土塁・土居跡、柵跡、門跡、櫓形遺構等があり、後者には掘立柱建物跡、竪穴遺構（竪穴建物跡）、井戸跡、溝跡、焼土遺構、土塚墓等がある。

2-a 遺構の構築時期と配置の問題

2-b 遺構間に機能分担があったか？ 特に掘立柱建物跡と竪穴建物跡の関係

2-c 遺構の地域的特色の問題

- 掘立柱建物跡は二面併列の部屋割で根城跡と対照的であり、間取りが京都市的である。
- 竪穴建物跡は従来東北北半の城館に多いと考えてきたが、鎌倉市街地の調査や関西にてても検出されるようになり、絵巻物に表われる民家も竪穴建物があることから、中世全般において一般的な住居形態であったことが知られる。
- 2-bの部分で、掘立柱建物跡と併存して竪穴建物跡が存在している事実は、階級の差異による住居の相違なのか、機能（倉庫・作業場・兵事の簡易住居・集会場・季節的住居・他）による相違なのか、結論を出すには時期早尚の段階である。

2-d 炊事遺構は囲炉裏が主体であった？

- 鉄鍋の出土とかまど遺構の稀少性から、炊事は囲炉裏や火鉢を使っていたらしい。

3. 出土遺物の問題点

出土遺物の一覧はⅦ-2に示してある。

3-a 陶磁器の搬入と交易の問題

- 出土陶磁器の50%以上が舶載品であり、地元産のものはほとんどない。
- 経済活動の活性化と、中世における日本海交易（それ以前からの系譜）の発達。

3-b 鉄・銅製品の豊富さと生産活動の問題

- 城館という遺跡の性格、戦闘があったという歴史事実から武器の出土が多い。
- 特に銅製鐔の鋳型およびそれと関連する遺物の出土は、城館内における工業活動の実態という面から問題は大きい。
- 銅製品の中で、仏具関係の遺物（金剛盤・六器・香炉）は当時の宗教的・文化的程度を知るために重要である。
- 鉄鍋（吊耳・内耳両方併存）の使用頻度、火箸、多量の釘の出土から、自給的生产形態があったのではないだろうか？

3-c 茶臼と天目茶碗の出土から「茶の湯」がおこなわれていたと考えられる。

3-d 出土遺物が破片等で出土する場合、器種同定さえも困難な状況にあり、Ⅸ三浦論文にてみられる民俗資料等からの比較検討が必要である。（特に木製品・鉄製品等）

3-e 備蓄銭行為および地鎮的銭貨出土の問題点

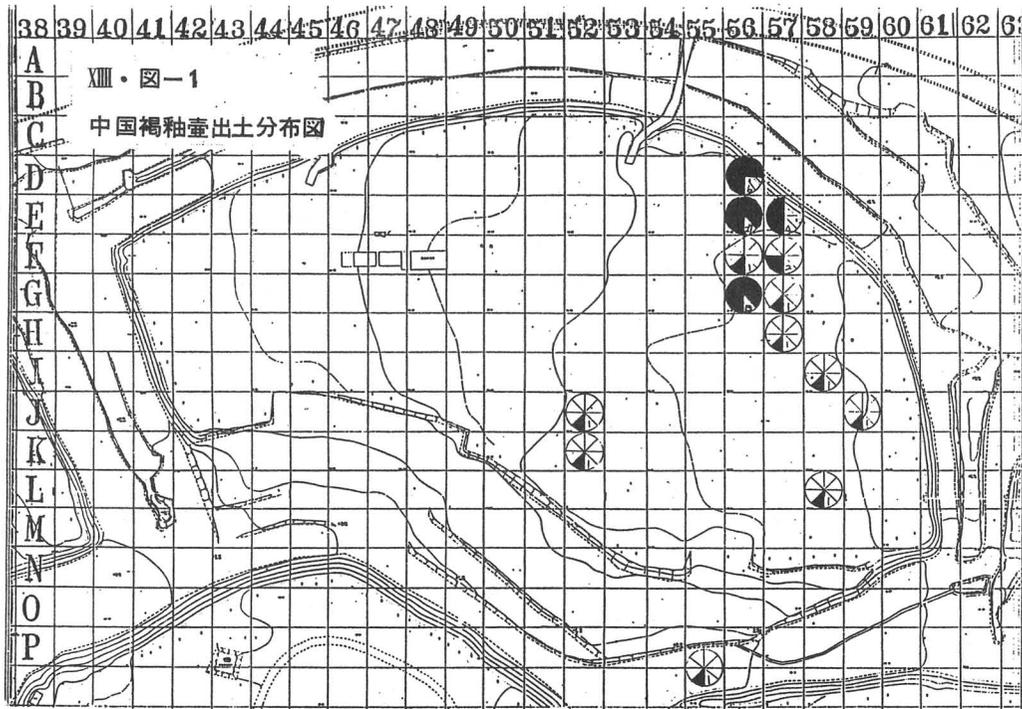
- 備蓄銭は銭貨を紐に通した状態で出土し、柱穴等に10～30枚まとめて埋めるのは地鎮的な行為と推定される。

3-f 遺物の出土状態をみると、陶磁器の同一個体片でも130m離れた地点から出土したものが接合することもあり、一部の遺構を除けば出土遺物は廃棄された場所から後世の攪乱によって移動しているものが多い。この事は、遺物の原位置から層位的に年代や使用時間差を把握することは非常に困難な状況と言わざるをえない。（図-1）

4. 遺構と遺物の問題

4-a 遺構の構築時期および廃棄時期を決定するメルクマールとして出土遺物があり浪岡城跡の場合は陶磁器を利用する機会が多い。しかし、浪岡城の存続時期は130年前後と推定され、時期の細分は難しい。陶磁器も、破壊・廃棄されないうちは伝世することが多く、遺構出土の陶磁器をもって（床面等）遺構の廃絶時期を決定することには不安がともなう。陶磁器の場合は、あくまでセット関係（器種別による量的把握）から、概括的決定しか不可能である。たとえば、唐津焼が搬入する16世紀後半のものとそれ以前というように、全国的な陶磁器搬入の時期と対照しながら時期決定してゆく必要がある。

4-b 遺構の性格決定には出土遺物が重要である。しかし、竪穴建物跡のように遺物の出土が破片だけとか、床面出土のものがなく覆土からのみ出土する場合は、明確に竪穴建物跡



が住居であるとか、倉庫であるとかは断言できない状況にある。

- 4-c 掘立柱建物跡のように、残存する下部構造が柱穴だけの様な場合、遺構の範囲およびその周辺から出土する遺物を精査する必要がある。

○浪岡城跡の調査は10mグリッドで実施しているが、各器種の出土分布を整理する(平面的に)ことによって関連すると思われる建物跡の機能を透視できるのではないかという仮説をもって、その作業を進めている。たとえば、北館内における唐津皿の出土分布をみると(図-2)、ほぼ全般的に出土する傾向とともに、特に多く出土する区域があることに注目できる。E・F・G-49・50・51区の付近は特に分布の濃厚な部分であり、掘立柱建物跡S B12(高島論文第Ⅲ期に位置づけられる)の周辺であるという好対照を示している。おそらく、16世紀後半から17世紀前半にかけては、この地区が生活の中心地域として位置づけられていた、と思われるのである。

5. むすび

浪岡城跡における発掘調査は、今後北館以外の館を中心におこなわれることとなる。我々がここ7年あまり、北館を中心とした調査を実施してきた背景には、平場が7~8館存在する城館における各館の有機的構成がどのようなものであったか、ということを理解するためでありそのためには拠点となる一平場の全域を調査する必要性を痛感していたからに他ならない。北館における種々の問題点は、

付 表 (c h .)

Ch. 1 → (Fig. 3 対応) SB-30 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	方	31 × 27	34	
a-2	方	50 × 48	50	
a-3	不	47 × 46	36	
a-4	方	67 × 59	62	
a-5	方	39 × 33	75	
a-6	方	52 × 46	58	
a-7	方	62 × 59	66	
b-1	不	80 × 55	35	
b-2	方	52 × 48	85	
b-3	方	51 × 39	59	
b-4	不	57 × 54	64	
b-5	方	74 × 54	61	
b-6	方	62 × 60	74	
b-7	方	61 × 56	105	
b-8	方	60 × 54	57	
b-9	方	28 × 28	63	
b-10	方	42 × 34	21	
c-1	方	42 × 36	46	
c-2	不	45 × 40	78	
c-5	不	61 × 50	70	
c-10	方	27 × 25	56	
c-11	方	41 × 33	18	
d-1	方	53 × 44	26	
d-2	方	65 × 65	49	
d-5	不	50 × 48	62	
d-6	不	52 × 43	59	
d-7	方	51 × 40	87	
d-9	円	47 × 46	38	
d-10	不	53 × 35	62	
d-11	方	40 × 37	33	
e-1	方	50 × 40	48	
e-2	方	60 × 58	65	
e-3	方	72 × 72	63	
e-4	方	91 × 78	51	
e-5	方	85 × 72	44	
e-6	方	79 × 66	65	
e-7	方	71 × 69	103	
e-8	方	52 × 39	82	
e-9	不	30 × 25	60	
e-10	方	39 × 34	56	
e-11	方	33 × 31	39	
f-2	方	38 × 34	42	
f-4	方	47 × 46	14	
f-5	方	51 × 49	20	
f-6	方	45 × 39	58	
f-7	方	71 × 56	60	
f-8	方	69 × 51	57	

Ch. 2 → (Fig. 4 対応) SB-32 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	不	65 × 59	77	
a-2	不	71 × 62	80	
a-3	方	68 × 65	69	
a-4	方	44 × 33	125	
a-5	方	48 × 45	76	
a-6	方	54 × 41	60	
a-7	方	42 × 40	54	
b-1	不	60 × 58	84	
b-2	不	56 × 56	68	
b-3	方	55 × 48	67	
b-4	方	52 × 33	77	
b-5	方	49 × 48	70	
b-6	方	44 × 36	64	
b-7	方	56 × 50	43	
c-6	不	51 × 47	78	
c-7	方	48 × 44	70	

Ch. 3 → (Fig. 4 対応) SB-58 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-2	方	52 × 44	46	
a-3	不	50 × 39	63	
a-4	方	56 × 48	60	
a-5	方	35 × 25	69	
a-6	不	45 × 37	45	
b-1	方	57 × 46	47	
b-2	方	60 × 47	60	
b-3	方	57 × 45	62	
b-4	方	43 × 34	62	
b-5	不	74 × 60	54	
b-6	方	49 × 41	42	
c-5	方	58 × 42	48	
c-6	方	41 × 30	54	

Ch. 4 → (Fig. 5 対応) SB-54 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	不	43 × 32	40	
a-2	方	54 × 46	16	
a-3	方	61 × 52	64	
a-4	方	58 × 56	30	
a-5	方	47 × 44	45	
a-6	方	53 × 50	31	
a-7	不	51 × 48	69	
a-8	不	44 × 36	83	
b-1	方	48 × 46	79	
b-2	不	64 × 50	29	
b-5	方	60 × 59	29	
b-8	不	35 × 26	67	
c-1	不	52 × 32	50	
c-2	不	57 × 43	37	
c-3	不	48 × 40	28	
c-4	不	41 × 41	22	
c-5	方	51 × 44	59	
c-6	方	52 × 50	56	
c-8	円	37 × 34	45	

Ch.5→(Fig.5対応) SB-56 柱穴計測表

PitNo.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	方	41×34	22	
a-2	不	37×31	63	
a-3	不	42×42	62	
a-4	方	35×34	52	
a-5	方	40×33	67	
a-7	方	35×30	47	
b-1	方	53×45	43	
b-2	方	41×40	25	
b-3	方	46×32	66	
b-4	方	41×39	20	
b-5	方	43×38	14	
b-6	方	49×44	22	
b-7	方	41×38	55	

Ch.6→(Fig.6対応) SB-55 柱穴計測表

PitNo.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	方	41×38	47	
a-2	方	28×27	84	
a-3	不	52×38	54	
b-3	方	40×39	53	
c-1	不	53×43	31	
c-1'	方	44×40	36	
c-2	方	41×30	61	
c-3	不	69×55	52	

Ch.7→(Fig.6対応) SB-29 柱穴計測表

PitNo.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	方	48×35	48	
a-3	不	61×55	59	
b-1	不	65×54	46	
b-3	方	34×33	38	
c-1	方	42×36	53	
c-2	方	58×50	34	
c-3	方	39×38	48	
d-3	不	41×30	43	
e-1	不	34×33	78	
e-2	方	51×49	50	
e-3	方	54×52	42	

Ch.8→(Fig.6対応) SB-50 柱穴計測表

PitNo.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	方	38×32	65	
a-2	方	39×38	63	
a-3	方	46×39	55	
b-1	方	34×33	63	
b-2	不	34×31	36	
b-3	方	35×33	41	
c-1	不	34×23	53	
d-1	方	30×27	21	
d-2	方	32×30	28	
d-3	方	33×31	36	
d-4	方	32×26	55	
e-1	方	30×26	20	
e-2	方	38×36	43	
e-3	円	26×25	20	
e-4	方	35×34	59	

Ch.9→(Fig.7対応) SB-11 柱穴計測表

PitNo.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	円	43×41	64	
a-2	不	42×41	65	
a-3	方	45×41	64	
b-1	方	37×37	63	
b-2	不	71×63	22	
b-3	不	44×40	24	
c-1	方	41×38	58	
c-2	不	48×47	52	
d-1	方	39×36	67	
d-2	方	39×33	56	
d-3	不	61×49	67	
e-1	方	39×38	84	
e-2	不	64×45	64	
e-3	方	44×35	40	
f-1	方	46×30	42	
f-2	不	43×39	44	
f-3	方	39×37	53	
g-1'	不	32×27	35	
g-1	不	35×29	37	
g-2	方	39×33	35	
g-3	方	41×37	36	
g-3'	方	39×38	18	

Ch.10→(Fig.8 対応) SB-22 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
a-1	不	41 × 33	21	
a-2	不	49 × 44	13	
a-3	方	50 × 43	47	
b-1	方	33 × 31	37	
b-2	不	34 × 29	42	
b-3	不	42 × 31	33	
c-1	方	52 × 47	35	
c-2	方	43 × 31	42	
c-3	方	39 × 35	37	
d-1	方	31 × 28	47	
d-3	不	43 × 31	60	
e-1	方	57 × 53	49	
e-2	方	46 × 38	57	
e-3	方	41 × 35	40	
f-1	方	47 × 46	37	
f-2	方	52 × 47	36	
f-2'	方	48 × 47	67	
f-3	不	39 × 35	30	

Ch.11→(Fig.8 対応) SB-16 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
a-1	方	42 × 38	36	
a-2	方	57 × 42	38	
a-3	方	42 × 38	38	
a-4	方	48 × 48	45	
b-1	方	67 × 60	48	
b-4	方	49 × 45	13	
c-1	方	52 × 51	45	
c-3	方	39 × 38	22	
c-4	方	47 × 42	7	
d-1	方	53 × 52	51	
d-3	方	49 × 47	14	

Ch. 12→(Fig.8 対応) SB-28 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
a-1	円	37 × 37	42	
a-2	不	43 × 35	34	
a-3	円	38 × 36	32	
b-1	不	27 × 23	71	
b-3	方	29 × 26	52	
c-1	不	34 × 32	42	
c-3	方	46 × 30	54	
d-1	不	49 × 39	54	
d-3	方	44 × 39	54	

Ch.13→(Fig.9 対応) SB-31 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
a-1	方	45 × 44	69	
a-2	方	50 × 48	68	
a-3	方	54 × 44	32	
a-4	方	42 × 37	45	
a-5	方	37 × 32	35	
a-6	方	47 × 43	—	
b-1	方	54 × 48	68	
b-2	方	42 × 39	43	
b-3	方	54 × 44	24	
b-6	方	72 × 59	20	
b-6'	不	80 × 73	16	
c-1	方	73 × 49	72	
c-2	方	55 × 48	—	
c-3	方	47 × 35	—	
c-4	不	47 × 39	49	
c-6	不	47 × 47	26	
d-1	方	45 × 44	63	
d-2	方	79 × 69	74	
d-4	方	49 × 32	60	
d-4'	不	40 × 33	59	
e-1	方	45 × 41	20	
e-4	不	39 × 27	23	
e-6	方	39 × 34	22	
f-1	方	48 × 41	47	
f-1'	方	45 × 43	34	
f-2	方	61 × 55	99	
f-4	方	45 × 43	63	
f-6	方	46 × 38	8	
g-1	不	54 × 47	77	
g-1'	方	57 × 51	47	
g-4	方	61 × 54	79	
g-6	不	60 × 49	30	
h-1	不	37 × 31	32	
h-1'	方	53 × 53	48	
h-2	方	45 × 32	26	
h-3	方	61 × 49	34	
h-4	不	44 × 43	27	
h-6	方	51 × 36	35	

Ch.14→(Fig.10対応) SB-51 柱穴計測表

PitNo.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
a-1	方	38×34	71	
a-2	方	56×54	71	
b-1	方	33×25	69	
b-2	方	43×34	82	
b-3	方	28×24	51	
b-4	方	30×29	81	
b-5	方	24×20	51	
c-1	方	51×46	46	
c-2	方	34×29	37	
c-3	方	30×29	47	
c-5	方	48×47	56	
c-5'	不	37×34	41	
d-1	方	43×39	24	
d-2	方	34×33	15	
d-3	方	37×34	53	
d-5	不	35×31	57	
e-1	方	36×32	20	
e-2	方	33×31	37	
e-3	方	37×34	45	
e-5	方	36×34	65	

Ch.15→(Fig.11対応) SB-52 柱穴計測表

PitNo.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
a-2	不	53×52	44	
a-3	方	39×35	43	
a-4	方	51×36	37	
a-5	方	49×42	46	
b-2	方	37×36	43	
b-3	方	48×41	48	
b-4	方	40×36	41	
b-5	方	35×30	15	
b-6	方	35×31	28	
b-7	不	35×33	39	
c-1	方	44×39	29	
c-2	不	72×69	36	
c-3	方	27×27	61	
c-4	方	39×32	67	
c-6	方	40×38	41	
c-7	方	49×39	20	
d-1	方	34×34	57	
d-3	方	52×41	65	
d-4	方	47×41	56	
d-4'	方	43×41	48	
d-5	方	46×46	44	
d-6	方	47×39	55	
e-4	不	40×29	48	
e-5	方	34×34	51	
e-6	不	37×36	34	
f-1	不	43×37	56	
f-2	方	45×39	52	
f-3	方	37×32	68	
f-4	不	25×24	27	
f-5	方	39×34	14	
f-6	不	31×29	47	

Ch.16→(Fig.12対応) SB-53 柱穴計測表

PitNo.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
a-1	方	32×28	44	
a-3	方	40×22	49	
a-4	方	29×28	49	
a-5	不	35×28	38	
b-5	方	33×29	38	
c-1	方	28×27	28	
c-5	不	68×35	56	
d-1	方	45×39	69	
d-2	方	44×44	30	
d-3	不	57×40	55	
d-4	方	49×46	81	
d-5	方	50×40	66	

Ch.17→(Fig.13対応)

(a) ST-192 柱穴計測表

PitNo.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	45×44	78	
2	方	39×34	63	
3	方	42×37	63	
4	方	40×35	73	
5	方	48×42	68	
6	方	33×31	42	
7	方	33×31	79	
8	方	44×41	81	
9	方	40×31	86	抜き取り痕
10	方	43×32	73	
11	方	38×30	69	
12	方	38×35	56	
13	方	36×32	37	
14	方	32×31	50	
15	方	32×32	45	抜き取り痕
16	方	32×29	58	

(b) ST-192 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	暗褐色土(10 YR3/3)。
2	黒褐色土(10 YR3/2)に褐色砂質土(10 YR4/6)を2%と明黄褐色砂質土(10 YR7/6)を1%と微量の炭化物を含む混層(攪乱層)。
3	暗褐色土(10 YR3/3)に中ブロック状の褐色砂質土(10 YR4/6)を20%と中ブロック状の明黄褐色砂質土(10 YR7/6)を2%含む。
4	褐色砂質土(10 YR4/6)に暗褐色土(10 YR3/3)を30%含む。
5	黒褐色土(10 YR3/2)に中ブロック状の褐色砂質土(10 YR4/6)を10%と中ブロック状の明黄褐色砂質土(10 YR7/6)を2%、にぶい黄橙色粘土(10 YR6/3)と炭化物を微量含む。
6	暗褐色土(10 YR3/3)に褐色砂質土(10 YR4/6)を2%と若干の炭化物と少量の黒色灰(10 YR2/1)を含む。
7	黒褐色土(10 YR3/2)に褐色砂質土(10 YR4/6)と炭化物を含み黒色灰(10 YR2/1)も一部見られる。

Ch. 18 → (Fig. 14 対応)

(a) S T - 200 柱穴計測表

8	黒色灰 (10YR 2/1)。
9	明黄褐色砂質土 (10YR 6/8)。 (ピット内覆土)
10	暗褐色土 (10YR 3/3) に灰白色灰 (10YR 7/1) を 30% と炭化物を微量含む。
11	暗褐色土 (10YR 3/3) に黒色土 (7.5YR 1.7/1) を 30% 含む混層に中ブロック状の黄褐色砂質土 (10YR 7/8) を 70% 含む。
12	黒褐色土 (10YR 2/2)、しまりなし。
13	灰白色灰 (10YR 7/1)。
14	にぶい橙色灰 (7.5YR 7/3) に灰黄色灰 (2.5Y 7/2) を極厚い板状に含む。
15	地山、明黄褐色砂質土 (10YR 7/6)。

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	方	30 × 27	68	
2	方	26 × 26	88	
3	方	42 × 33	42	
4	方	60 × 25	53	
5	方	40 × 28	70	
6	方	39 × 35	62	
7	方	27 × 23	64	
8	不	30 × 29	65	

(b) S T - 200 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	暗褐色土 (7.5YR 3/4) に明褐色土 (7.5YR 5/6) が小粒状に 7% 混入。
2	暗褐色土 (7.5YR 3/3) と灰白色土 (5Y 7/1) との混層に 1% の炭化物を含む。
3	黒褐色土 (10YR 3/1) と灰 (5) との混層に 1% の炭化物を含む。
4	灰 (7.5Y 8/1)。
5	暗褐色土 (10YR 3/3) と明黄褐色土 (10YR 6/6) との混層に黒色土 (10YR 1.7/1) を 1% 含む。
6	にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) と黄褐色砂質土 (10YR 5/6) との混層に中粒状の石を 3% 含む。
7	暗褐色土 (10YR 3/4)。
8	黒色土 (10YR 1.7/1)。
9	砂質土 (磁鉄鉱が含まれる)。
10	地山 (粘土 10YR 7/4 を含む)。粘土を張ってある。(張床)

Ch. 19 → (Fig. 15 対応)

(a) S T - 201、206 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	円	41 × 47	93	
2	方	36 × 31	76	
3	方	47 × 40	85	
4	方	41 × 36	71	
5	方	52 × 40	84	
6	方	42 × 32	71	
7	方	53 × 45	80	
8	方	53 × 40	78	
9	方	37 × 36	80	
10	方	66 × 45	79	
11	円	28 × 32	76	
12	円	32 × 32	72	
13	方	20 × 19	45	
14	方	18 × 18	25	
15	方	29 × 29	30	
16	円	20 × 20	37	
17	方	25 × 20	36	
18	方	35 × 29	46	
19	円	30 × 23	22	
20	円	33 × 29	78	

(b) S T - 201、206 覆土層序注記表
S X - 153

層序No	特 徴
1	極暗赤褐色土 (5YR 2/3) に 1% の炭化物と粒子状の橙色砂質土 (7.5YR 7/8) が 1% 含まれる。
2	暗褐色土 (7.5YR 3/3) に粒子状の黄褐色砂質土 (7.5YR 7/8) が 50% 含まれる。しまりなし
3	暗褐色土 (10YR 3/4) に明黄褐色砂質土 (10YR 6/8) が 7% 含まれる。
4	暗褐色土 (10YR 3/4) に灰白色灰 (7.5Y 8/2) が全体に含まれる。
5	暗赤褐色土 (5YR 3/3) に粒子状の橙色砂質土 (7.5YR 6/8) を 2% と小ブロック状の黄褐色粘土 (10YR 8/8) を 1% 含む。しまりなし。
6	極暗赤褐色土 (5YR 2/3) に 1% の炭化物と粒子状の橙色砂質土 (7.5YR 6/8) が 7% 含まれる。
7	暗褐色土 (7.5YR 3/3) と黄褐色砂質土 (10YR 7/8) の混層。
8	暗褐色土 (7.5YR 3/3) に暗灰色灰 (N 3/0) が多量に含まれる。

9	暗赤褐色土 (5YR3/3) に橙色砂質土 (7.5YR6/8) が小ブロック状に10%、炭化物が1%含まれる。
10	明黄褐色砂質土 (2.5Y7/6) と橙色砂質土 (7.5YR6/8) の50%の混層。
11	黒褐色土 (10YR2/3) に灰白色灰 (7.5Y8/2) が細い帯状に入っている。
12	黒褐色土 (10YR2/3) に、橙色砂質土 (7.5YR6/8) が3%含まれ炭化物1%、淡黄色灰 (7.5Y8/3) が帯状に含まれる。
13	浅黄橙色砂質土 (10YR8/4) と明褐色砂質土 (7.5YR5/8) が層を呈する。
14	黒色土 (10YR2/1)。
15	明黄褐色砂質土 (10YR6/8) に黄橙色パミス (10YR8/8) を1%含む。
16	暗褐色土 (10YR3/4) に明褐色土 (7.5YR5/8) が粒子状に10%含まれる混層、黄褐色粘土 (10YR8/8) が含まれる。
17	暗褐色土 (7.5YR3/3) に暗灰色灰 (N3/0) が多量に含まれる。
18	暗褐色土 (7.5YR3/3) で粘性を持つ。
19	黄橙色砂質土 (10YR7/8) と暗褐色砂質土 (7.5YR3/4) との混層。
20	黒色土 (10YR2/1)。
21	暗褐色土 (7.5YR3/3)、湿性あり。
22	明褐色粘土 (7.5YR5/8) に淡黄色パミス (7.5YR8/3) が1%含まれる。

23	黄色砂質土 (2.5Y8/8) と黄褐色土 (7.5YR3/3) との混層。
24	極暗褐色土 (7.5YR2/3)。
25	黒色土 (10YR1.7/1)。
26	黒褐色土 (10YR2/3) に黒色土 (10YR2/1) が30%、淡黄色灰 (2.5Y8/3) が薄い板状に入っている。
27	黒褐色土 (10YR2/3) に淡黄色灰 (2.5Y8/3) の50%の混層。
28	極暗褐色土 (5YR2/3) ににぶい黄色灰 (2.5Y6/3) が一部分、明黄褐色灰 (2.5Y7/6) が極厚い板状に入っている。
29	黒褐色土 (7.5YR3/2) に黄色粘土 (2.5Y8/6) が小ブロック状に3%含まれる層と黄色砂質土 (2.5Y8/8) の層がサンドイッチ状になっている。
30	炭化物。
31	暗褐色土 (7.5YR3/3) と黄褐色砂質土 (10YR7/8) の混層。
32	暗褐色土 (7.5YR3/3) と黄褐色砂質土 (10YR7/8) のブロック状の混層、黄褐色砂質土 (10YR6/8) を1%含む。しまりあり。
33	黒色土 (10YR2/1) と暗褐色土 (7.5YR3/3) のブロック状の混層。
34	明黄褐色砂質土塊 (10YR6/8)。
35	暗褐色土 (7.5YR3/3) と黄褐色砂質土 (10YR7/8) の混層。
36	地山 黄褐色砂質土 (10YR5/6)。

Ch. 20→(Fig. 16 対応)

(a) S T-202 柱穴計測表

PitNo.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	24 × 23	58	
2	方	27 × 26	30	
3	不	28 × 22	48	
4	方	26 × 26	76	
5	円	26 × 24	39	
6	方	23 × 23	23	
7	方	25 × 21	36	
8	不	26 × 24	48	
9	不	28 × 27	62	
10	円	27 × 27	38	
11	方	26 × 22	48	

S X-160

(b) S T-202、212 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	浅黄色砂質土 (2.5Y7/4) に黒褐色土 (10YR2/2) を10%含む混層に黄褐色土 (10YR7/8) が極小～中塊を2%、炭化物を1%含む。
2	黒褐色土 (10YR2/2) に浅黄色砂質土 (2.5Y7/4) を5%含む混層に淡黄色土 (2.5Y8/4) と明黄褐色土 (2.5Y7/6) の小～大塊を30%含む、黄褐色土 (10YR7/8) と灰色灰 (7.5Y6/1) と炭化物をそれぞれ2%含む。しまりあり。

3	黒褐色土 (10YR3/2) と褐色砂質土 (10YR4/4) の50%ずつの混層に、淡黄色土 (10YR7/8) の極小塊と炭化物をそれぞれ1%ずつ含む。
4	褐色土 (10YR4/4) と浅黄褐色砂質土 (10YR8/4) の50%ずつの混層。しまりなし
5	暗褐色土 (10YR3/3) に灰色灰 (7.5Y6/1) と灰白灰 (2.5Y8/2) を50%含む、炭化物を10%含む。しまりあり。
6	褐色土 (10YR4/4) に黒褐色土 (10YR2/2) の中塊を2%、明褐色砂質土 (7.5YR5/8) の小～中塊を25%、浅黄褐色土 (10YR8/3) の小塊を5%含む。
7	褐色土 (10YR4/4) に明黄褐色砂質土 (7.5YR5/8) の小塊を5%含んだものに灰色灰 (7.5Y5/1) を60%含む。
8	褐色土 (10YR4/4) に明黄褐色砂質土 (7.5YR5/8) の小塊と浅黄褐色土 (10YR8/3) の小塊をそれぞれ8%と黒褐色土 (10YR2/2) の極大塊を2%、炭化物を1%含む。
9	暗褐色土 (10YR3/4) に明黄褐色砂質土 (7.5YR5/8) と浅黄褐色土 (10YR8/3) と黒褐色土 (10YR2/2) の小塊をそれぞれ10%ずつ含む。
10	地山、明黄褐色土 (10YR7/6)。

Ch. 21→(Fig. 17 対応)

(a) S T-203 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	円	48 × 28	94	抜き取り痕
2	方	30 × 23	60	〃
3	円	30 × 30	84	〃
4	円	20 × 30	75	
5	方	34 × 23	85	抜き取り痕
6	円	30 × 24	60	〃
7	円	26 × 24	80	〃
8	円	30 × 30	106	
9	円	30 × 24	60	抜き取り痕
10	方	30 × 24	80	
11	円	30 × 23	74	抜き取り痕
12	円	35 × 29	88	
13	円	27 × 26	74	抜き取り痕
14	円	30 × 24	60	
15	円	26 × 26	80	
16	円	35 × 34	70	

Ch. 22→(Fig. 18 対応)

(a) S T-204 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	方	21 × 19	28	
2	方	20 × 18	44	
3	方	16 × 16	39	
4	方	35 × 25	27	
5	方	39 × 31	28	
6	方	22 × 18	42	

Ch. 23→(Fig. 18 対応)

(a) S T-205 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	方	20 × 19	39	
2	方	28 × 22	49	
3	方	16 × 16	41	
4	方	21 × 21	36	
5	方	22 × 21	48	
6	方	23 × 22	36	
7	方	21 × 20	31	

(b) S T-205 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10 YR 3/2) に黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) と明赤褐色砂質土 (5 YR 5/8) の極小～中粒を 3～5%、炭化物を 1% 含む。
2	黒色土 (10 YR 2/1) に明黄褐色砂質土 (10 YR 7/6) の小粒と灰白色灰 (10 YR 7/1) と炭化物をそれぞれ 1% ずつ含む。
3	黒色土 (7.5 YR 2/1) に、にぶい黄褐色灰 (10 YR 7/3) を 10% 含む。しまりあり。
4	黒褐色土 (10 YR 3/2) に、にぶい黄褐色灰 (10 YR 7/3) を 40%、橙色灰 (5 YR 7/6) を 15%、黒色土 (7.5 YR 2/1) を 5% 含む。
5	黒色土 (7.5 YR 2/1) に灰白色灰 (10 YR 8/2) と炭化物をそれぞれ 10% ずつ含む。

(b) S T-203 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10 YR 2/2) に明褐色砂質土 (7.5 YR 5/8) の極小粒と黒褐色土 (7.5 YR 3/1) の中粒を 10% 含む。しまり強し。
2	黒褐色土 (10 YR 3/2) に淡黄色土 (2.5 YR 8/4) の中粒と明黄褐色土 (10 YR 6/8) の極小粒を 1%、下層部に黒色土 (10 YR 1.7/1) と褐色砂質土 (10 YR 4/6) が混入。
3	暗褐色土 (10 YR 3/4) に明黄褐色砂質土 (10 YR 6/8) の極小～中粒を 2% 含む。
4	淡黄色砂質土 (2.5 Y 8/4) に明黄褐色土 (10 YR 6/8) の極小～中粒を 2% 含む。しまりなし。
5	明黄褐色砂質土 (10 YR 7/6) に淡黄色砂質土 (5 Y 8/4) と黒色土 (7.5 YR 2/1) が混在している。
6	黒色土 (10 YR 1.7/1)。
7	黒褐色土 (10 YR 2/2) に明黄褐色砂質土 (10 YR 7/6) が 40% 混入。しまりなし。
8	褐色砂質土 (10 YR 4/6) に赤褐色 (5 YR 4/8) の中塊の酸化鉄を 1% 含む。しまりなし。
9	暗褐色土 (10 YR 3/3) に明オリープ灰 (2.5 G Y 7/1) を 45% 含む。しまりなし。
10	地山、褐色砂質土 (7.5 YR 4/6) と明黄褐色砂質土 (2.5 Y 7/6) の 50% の混層。

(b) S T-204 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (7.5 YR 2/2) に明赤褐色砂質土 (2.5 YR 5/8) の大塊を 1%、黄褐色砂質土 (10 YR 5/7) を大粒状に 5～8%、黒灰 (N 1.5/0) を大粒状に 1% 含む。
2	黒褐色土 (10 YR 2/2) に明赤褐色砂質土 (2.5 YR 5/8) を中～大粒状に 10%、黄褐色砂質土 (10 YR 5/7) を大粒状に 7%、黒灰 (N 1.5/0) を大粒状に 1% 含む。しまりあり。
3	黒色土 (7.5 YR 2/1) に明赤褐色砂質土 (2.5 YR 5/8) の中塊を 1%、褐色砂質土 (10 YR 4/5) が混入。
4	地山、褐色砂質土 (10 YR 4/5) に赤褐色砂質土 (2.5 YR 4/8) が中～大塊状に 35% 混在する。

6	黒褐色土 (10 YR 2/2) に灰白色灰 (10 YR 8/2) と明黄褐色砂質土 (10 YR 7/6) の極小粒をそれぞれ 20% ずつ含む。
7	黒色土 (10 YR 2/1) に灰白色灰 (10 YR 8/2) と明黄褐色砂質土 (10 YR 7/6) の極小粒をそれぞれ 20% ずつ含む。
8	黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) に黒色土 (10 YR 2/1) の極小粒が 30% と灰白色灰 (10 YR 8/2) を 2～3% 含む。
9	黒色土 (10 YR 1.7/1) しまりあり。
10	地山、黄褐色砂質土 (10 YR 5/6)、明黄褐色砂質土 (10 YR 7/6) との 50% の混層。

Ch. 21→(Fig. 19 対応)

(a) S T-207 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	方	28 × 20	48	
2	円	30 × 25	11	
3	円	20 × 20	23	
4	円	23 × 22	33	
5	方	27 × 26	38	
6	方	22 × 22	50	
7	方	21 × 19	27	
8	円	28 × 22	43	
9	方	22 × 21	38	
10	方	25 × 25	35	
11	方	22 × 22	31	
12	円	32 × 27	66	
13	方	35 × 30	7	
14	円	33 × 32	93	

(b) S T-207 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10 YR 2/2) に褐色砂質土 (10 YR 4/5) と黒色土 (7.5 YR 2/1) が混入したものに、赤褐色砂質土 (5 YR 4/8) の中塊を 2%、灰白 (7.5 Y 8/2) を 1% 含む、しまりあり。
2	黒褐色土 (10 YR 2/2) に黄褐色砂質土 (10 YR 5/8) と赤褐色砂質土 (5 YR 4/8) の極小～中塊を 2～5% 含む、炭化物を 1% 含む、しまりあり。
3	地山、黄褐色砂質土 (10 YR 5/8) に赤褐色砂質土 (5 YR 4/8) が中～大塊状に 40% 混在する。

Ch. 25→(Fig. 20 対応)

(a) S T-208 柱穴計測表

PitNo	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	方	27 × 24	89	
2	円	34 × 30	42	
3	方	40 × 31	78	
4	不	40 × 30	65	
5	方	27 × 24	65	
6	円	26 × 24	40	
7	方	23 × 22	57	
8	方	35 × 27	35	
9	円	42 × 40	37	
10	方	26 × 25	41	
11	方	25 × 23	36	

(b) S T-208 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10 YR 2/3) に黄褐色砂質土 (10 YR 6/8) を 1% 含む。
2	極暗褐色土 (7.5 YR 2/3) に黄褐色砂質土 (10 YR 6/8) を 1% 含む。
3	黒褐色土 (10 YR 2/3) に黄褐色土 (10 YR 5/8) と明赤褐色土 (5 YR 5/8) を小ブロック状に 3% 含む。
4	黒褐色土 (10 YR 2/1) に明褐色土 (7.5 YR 5/8) を若干含む。しまりなし。
5	黒褐色土 (7.5 YR 2/2) に黄褐色土 (10 YR 5/8) を 2% 含む。
6	黒褐色土 (7.5 YR 2/2) に黄褐色砂質土 (10 YR 6/8) を 40% 含む。
7	黒褐色土 (7.5 YR 2/2) に黄褐色土 (10 YR 5/8) を 20% 含む、緑色土 (10GY 5/1) を 3% 含む。
8	黒色土 (10 YR 2/1) に黄褐色土 (10 YR 5/8) を 5% 含む。
9	明黄褐色砂質土 (10 YR 6/8) と暗褐色土 (7.5 YR 3/3) の混層。
10	暗褐色土 (7.5 YR 3/3) に明褐色土 (7.5 YR 5/8) と黄褐色土 (10 YR 5/6) を 3% 含む。
11	黒褐色土 (10 YR 3/2) と明褐色土 (7.5 YR 5/8) の混層に黒色土 (7.5 YR 2/1) を 1% 含む、灰を帯状に 30% 含む。
12	黒褐色土 (10 YR 2/3) に明褐色土 (7.5 YR 5/8)、赤褐色土 (5 YR 5/8)、黄褐色土 (10 YR 5/8) を若干含む。
13	黒褐色土 (5 YR 2/1) と暗褐色土 (7.5 YR 3/3) の混層に橙色土 (7.5 YR 6/8) と黄褐色土 (10 YR 5/8) をブロック状に 7% 含む。
14	地山、黄褐色砂質土 (10 YR 6/8)。

(c) S T-208 出土遺物観察表

PLNo	FigNo	遺物No	出土区 (遺構)	層 位	器形	釉調、色調	胎 土	文 様	特 徴	備 考
	20-1	P1598	F58 ST-208	フク土	香炉	黒 色	暗灰色	上部 雷文 下部 巴文のスタンプ	口縁部 黒色研磨	

PLNo	FigNo	遺物No	出土区 (遺構)	層 位	名 称	計測値 (長×幅×厚) cm	特 徴	備 考
	20-2	F 684	G58 ST-208	フク土	筭	7.90 × 1.33 × 0.22		

Ch. 26→(Fig. 21 対応)

(a) ST-210 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	29 × 28	42	
2	方	29 × 26	49	
3	方	21 × 20	73	抜き取り痕
4	円	32 × 27	49	
5	円	20 × 20	40	
6	方	31 × 30	64	
7	方	30 × 21	57	
8	方	37 × 36	54	
9	方	22 × 20	48	
10	方	32 × 22	44	抜き取り痕
11	方	29 × 22	7	
12	円	29 × 25	56	

(b) ST-210 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土(5YR2/2)に炭化物を2%と褐灰色灰(7.5YR6/1)を30%含む。
2	黒褐色土(5YR2/2)に褐灰色灰(7.5YR6/1)を70%、炭化物を5%含む。
3	黒褐色土(5YR2/2)に粒子状の黄褐色砂質土(7.5YR7/8)を1%、炭化物を5%含む。
4	暗赤褐色土(5YR3/2)に黄褐色土を1%と炭化物を含む。
5	橙色焼土(5YR6/8)。
6	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を10%と炭化物を3%含む。
7	暗褐色土(10YR3/3)に明黄褐色土(10YR6/8)をブロック状に20%と炭化物を10%と黒褐色土(5YR3/1)を7%と赤褐色土(5YR5/8)を3%含む。
8	極暗褐色土(7.5YR2/3)に黄褐色砂質土(5YR5/8)を小ブロック状に30%、炭化物を15%含む、しまりあり。
9	黒褐色土(7.5YR3/2)と橙色砂質土(7.5YR6/8)の50%の混層。
10	凝灰質浮石層、浅黄褐色土(10YR8/4)。
11	地山、黄褐色砂質土(10YR6/8)。

Ch. 27→(Fig. 22 対応)

(a) ST-213 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	33 × 28	29	
2	方	27 × 25	40	
3	方	21 × 21	30	
4	方	35 × 33	67	
5	方	37 × 29	52	
6	方	39 × 34	73	
7	方	37 × 27	51	
8	方	30 × 25	69	

(b) ST213、ST222、SX152
SX154、SX195、SK01 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土(10YR3/2)、中央に灰白色土(7.5YR8/2)を若干含み、中粒状の石を3%含む。
2	暗褐色土(10YR3/3)と明褐色砂質土(7.5YR5/6)との混層。
3	2より明褐色砂質土(7.5YR5/6)が若干多い。
4	2より暗褐色土(10YR3/3)が若干多い。
5	明褐色砂質土(7.5YR5/6)。
6	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)を1%、炭化物を中央に3%、全体に1%含む。
7	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)を1%含む。
8	黒褐色土(7.5YR3/2)と褐色砂質土(7.5YR4/6)との混層に炭化物を1%含む。
9	暗褐色土(10YR3/4)に若干の黄褐色砂質土(10YR5/8)を含む。
10	暗褐色土(10YR3/3)と褐色砂質土(10YR4/6)との混層、中央に焼米と炭化物を1%含む。
11	黒褐色土(7.5YR3/2) 褐灰色土(10YR4/1)、焼米、50%以上の炭化物を含む。
12	明褐色砂質土(7.5YR5/6)と褐色砂質土(7.5YR4/4)との混層に黒色土(7.5YR1.7/1)を1%含む。
13	黒褐色土(10YR3/2)と褐色砂質土(10YR4/4)との混層に褐灰色灰(10YR4/1)と1%の炭化物を含む。
14	黒褐色土(10YR2/2)に1%の褐灰色灰(10YR4/1)と炭化物を含む。
15	褐色土(7.5YR4/4)と褐色砂質土(7.5YR4/6)との混層に炭化物を1%と小粒状の石を含む。
16	暗褐色土(7.5YR3/3)と明褐色砂質土(7.5YR5/6)との混層。
17	灰黄褐色土(10YR6/2)。
18	17に若干、明褐色土(7.5YR5/6)を含む。
19	黒褐色土(10YR2/2)に炭化物を1%含む。
20	黒褐色土(10YR3/2)に褐色砂質土(10YR4/6)を5%と炭化物を1%含む。
21	褐色土(7.5YR4/3)と褐色砂質土(7.5YR4/6)との混層に褐灰色灰(10YR4/1)と1%の炭化物を含む。
22	黒褐色土(10YR2/2)。
23	黒褐色土(7.5YR3/2)と明褐色砂質土(7.5YR5/8)との混層に黒色土(7.5YR1.7/1)を1%含む。
24	褐色砂質土(7.5YR4/6)。
25	黒色灰(7.5YR2/1)と褐色砂質土(7.5YR4/6)との混層。
26	黒色灰(7.5YR2/1)。

27	黒褐色土 (10YR3/2) に若干の黒色灰 (7.5 YR2/1) と褐色砂質土 (7.5YR4/6) を含む。
28	褐色砂質土 (10YR4/4)。
29	暗褐色土 (10YR3/4) と明褐色砂質土 (7.5 YR5/6) との混層に黒色土 (7.5YR1.7/1) と1%の炭化物を含む。
30	明褐色砂質土 (7.5YR5/8)。
31	黒色土 (10YR1.7/1) と明褐色砂質土 (7.5 YR5/8) との混層。
32	褐色砂質土 (7.5YR4/6)。
33	黒色土 (7.5YR1.7/1)。
34	黒色土 (7.5YR1.7/1) と褐色砂質土 (7.5YR4/6) との混層。
35	地山。
36	黄色砂質土 (2.5Y8/6) と暗褐色土 (10YR3/3) の混層。
37	暗褐色土 (10YR3/3) に小ブロック状の黄褐色砂質土 (10YR8/8) を30% 礫を多量に含む。
38	暗褐色土 (10YR3/3) に小ブロック状の黄褐色砂質土 (10YR8/8) を50%、礫を多量に含む。
39	黒色土 (10YR2/1)。
40	黒褐色土 (10YR3/2) と黒色土 (10YR2/1) の混層に黄褐色砂質土 (10YR8/8) を5%含む。
42	暗褐色土 (10YR3/3) と黄褐色砂質土 (10YR7/8) の混層。
43	褐色土 (7.5YR4/4) に粒子状の明黄褐色土 (10YR7/6) を15%、礫を多量に含む。
44	黒褐色土 (7.5YR2/2) に小ブロック状の黄褐色砂質土 (10YR8/8) を1%含む。
45	明褐色土 (10YR6/6) に黒褐色土 (7.5YR2/2) を1%、淡黄色パミス (2.5Y8/3) を2%、礫を5%含む。
46	褐灰色灰 (7.5YR4/1) と褐灰色灰 (7.5YR6/1) と黒色灰 (10YR1.7/1) の混層。
47	明黄褐色砂質土 (10YR7/6) に淡黄色パミス (2.5Y8/3) と礫を3%含む。
48	黒褐色粘土 (10YR3/2) と黄褐色砂質土 (10YR5/6) の混層。
49	褐色砂質土 (10YR4/6) に黒褐色粘土 (10YR3/2) を1%含む。

Ch. 28→(Fig. 23 対応)

(a) ST-215 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	32 × 23	43	
2	方	29 × 27	42	
3	方	25 × 25	49	
4	方	30 × 26	46	
5	方	30 × 30	38	
6	円	24 × 22	38	
7	方	25 × 24	16	
8	方	39 × 25	27	

(b) ST-215 覆土層序注記表
SX-178

層序No.	特徴
1	暗褐色土 (10YR3/3) に黄褐色砂質土 (10YR7/8) をブロック状に20% 含み、炭化物、礫、にぶい黄褐色粘土 (10YR7/3) を2% 含む。
2	暗褐色土 (10YR3/3) とにぶい黄褐色粘土 (10YR7/3) の混層に礫と炭化物を1% 含む。
3	暗褐色土 (10YR3/3)。

SX-178 覆土層序注記表

4	黒褐色土 (10YR2/2) に明褐色砂質土 (7.5YR5/8) の粒子を若干含む。
5	黒褐色土 (10YR2/2) に黄褐色砂質土 (10YR5/8) の極小～小塊を30%、灰黄褐色灰 (10YR4/2) を若干含む。
6	黒褐色土 (10YR2/2) に灰黄褐色灰 (10YR4/2) と黒色土 (10YR1.7/1) の混層。
7	灰黄褐色灰 (10YR4/2) に黒褐色土 (10YR2/2) を10%、明黄褐色砂質土 (10YR7/6) と灰白色灰 (10YR7/1) を若干含む。
8	灰黄褐色灰 (10YR4/2) と黒褐色土 (10YR2/2) とにぶい黄褐色灰 (10YR5/4) と灰白色灰 (10YR7/1) の混層。
9	橙色焼土 (10YR6/6) とにぶい橙色焼土 (7.5YR6/4) の混層に黒褐色土 (10YR2/2) を5% 含む、しまりなし。
10	黒色土 (10YR1.7/1) に炭化物を若干含む。
11	黒褐色土 (10YR2/2) に灰白色灰 (10YR7/1) を10%、にぶい黄褐色灰 (10YR5/4) を5%、炭化物を若干含む、しまりなし。
12	黒褐色土 (10YR2/2)、しまりあり。
13	黒色土 (10YR2/1) に黄褐色砂質土 (10YR5/6) の極小塊を10% 含む、しまりあり。
14	黒色土 (10YR1.7/1)。しまりあり。
15	地山、黄褐色砂質土 (10YR5/6)。

Ch. 29→(Fig. 24 対応)

(a) ST-216、230 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	30 × 30	40	ST-216柱穴
2	方	33 × 30	30	〃
3	方	32 × 30	40	〃
4	方	32 × 32	49	〃
5	方	28 × 25	30	〃
6	方	35 × 34	49	〃
7	方	32 × 28	40	ST-230柱穴
8	方	36 × 33	49	〃
9	方	23 × 21	44	〃
10	方	28 × 28	46	〃
11	方	32 × 26	52	〃
12	方	26 × 23	49	〃

(b) ST-216、230 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	極暗褐色土 (7.5YR2/3) と明褐色砂質土 (7.5YR5/6) との混層に若干の黒色灰 (7.5YR2/1) と 5% の炭化物が混入。
2	暗褐色土 (7.5YR3/3) に 3% の明褐色砂質土 (7.5YR5/8) と若干の炭化物を含む。
3	灰 (10YR6/1)。
4	黒色灰 (10YR2/1) と炭化物。
5	黒褐色土 (10YR3/2) に明黄褐色土 (10YR6/6) を小ブロック状に 1% 含む。
6	地山、黄褐色砂質土 (10YR5/6)。

Ch. 30→(Fig. 25 対応)

(a) ST-217 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	方	22×22	13	
2	方	26×25	8	
3	方	24×20	8	
4	方	37×29	14	
5	方	26×25	39	
6	方	28×26	12	
7	方	28×25	20	
8	方	27×22	21	
9	方	29×28	47	
10	方	25×21	14	
11	方	23×22	39	
12	方	28×26	24	
13	方	37×27	35	
14	方	26×23	45	
15	方	23×20	40	
16	方	33×24	45	
17	方	29×27	13	
18	方	23×22	43	
19	方	27×24	16	
20	方	34×30	13	

(b) ST-217 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	極暗褐色土 (7.5YR2/3) しまりなし。
2	黒褐色土 (5YR2/1) と暗褐色土 (7.5YR3/3) との混層、しまりあり。
3	地山、明黄褐色砂質土 (10YR6/6)。

Ch. 31→(Fig. 26 対応)

(a) ST-218 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	方	34×24	45	
2	方	26×24	50	
3	方	30×28	50	
4	方	30×30	52	
5	方	32×30	66	
6	方	30×28	50	
7	方	28×21	42	
8	方	20×16	14	

(b) ST-218、226
SX-187 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土 (10YR3/2) に褐色灰 (10YR4/1) を 30%、炭化物と橙土 (5YR7/6) を若干含む、しまりあり。
2	暗褐色土 (10YR3/3) に黄褐色砂質土 (10YR5/6) の小粒の混層、炭化物を若干含む。
3	暗褐色土 (10YR3/3)。
4	黄褐色砂質土 (10YR5/6) に赤褐色土 (2.5YR4/8) の小粒を若干含む、しまりなし。
5	にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) に炭化物を 10% 含む、しまりあり。
6	黒色土 (10YR2/1) と明褐色焼土 (7.5YR5/6) と大塊状の炭化物の混層。
7	黒色土 (10YR2/1) と黄褐色砂質土 (10YR5/6) の小粒とにぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) と大塊状の炭化物の混層。
8	黒色灰 (10YR2/1) と小粒の炭化物の混層。
9	黄褐色砂質土 (10YR5/6)。
10	灰黄褐色土 (10YR4/2)。
11	黒褐色土 (10YR2/2) に黄褐色砂質土 (10YR5/6) の小粒を若干含む。
12	黒褐色土 (10YR2/2) と灰白色灰 (10YR8/2) の混層、しまりあり。
13	黒褐色土 (10YR3/2) に明黄褐色砂質土 (10YR7/6) の極小～中塊を 30%、褐色灰 (10YR5/1) を 5% 含む。
14	黒褐色土 (10YR3/2) と黒色土 (10YR1.7/1) と褐色砂質土 (10YR4/4) の混層。
15	黒褐色土 (10YR2/2) と黒色土 (10YR1.7/1) と褐色砂質土 (10YR4/4) の混層に炭化物を若干含む、しまりややあり。
16	明黄褐色土 (10YR6/4) と黒褐色土 (10YR2/3) の混層、しまりあり。
17	黒色土 (10YR1.7/1) と黒褐色土 (10YR2/3) の混層、しまりあり。
18	にぶい黄褐色粘土 (10YR5/3)。
19	黄褐色砂質土 (10YR5/6)。
20	地山、黄褐色砂質土 (10YR5/6)。

Ch. 32→(Fig. 27 対応)

(a) SX-155 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	方	48×46	68	
2	方	24×22	51	
3	不	46×42	48	
4	方	40×36	58	
5	方	37×33	74	抜き取り痕
6	方	48×39	67	"
7	方	42×35	78	
8	不	36×35	48	抜き取り痕
9	方	48×46	48	
10	方	57×48	66	
11	方	47×37	66	抜き取り痕
12	方	44×39	80	"

(b) S T - 221、S X - 155 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	極暗赤褐色土(5YR2/3)に1%の炭化物と粒子状の橙色砂質土(7.5YR7/8)が50%含まれる。
2	暗赤褐色土(5YR3/3)に粒子状の橙色砂質土(7.5YR6/8)を2%と小ブロック状の黄褐色粘土(10YR8/8)を1%含む、しまりなし。
3	暗褐色土(7.5YR3/3)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)が5%の混層に灰白色パミス(7.5YR8/2)が1%含まれている。
4	暗褐色土(7.5YR3/3)が30%、明褐色砂質土(7.5YR5/8)が70%の混層に灰白色パミス(7.5YR8/2)、橙色砂質土(7.5YR1/8)が1%ずつ含まれる。
5	極暗赤褐色土(5YR2/3)に1%の炭化物と粒子状の橙色砂質土(7.5YR6/8)が7%含まれる。
6	暗黄褐色砂質土(10YR6/8)に粒子状の橙色砂質土(7.5YR7/8)が10%と黄褐色粘土(10YR7/8)が1%含まれる。
7	暗褐色土(10YR3/4)。
8	黒褐色土(7.5YR3/2)と褐色土(7.5YR4/6)の50%の混層。
9	暗赤褐色土(5YR3/3)に小ブロック状の橙色砂質土(7.5YR6/8)が10%と炭化物が1%含まれる。
10	黄褐色砂質土(10YR5/8)。
11	極暗赤褐色土(5YR2/3)に黒色土(7.5YR2/1)が30%含まれる。
12	黄褐色砂質土(10YR8/8)。
13	黒褐色土(10YR2/3)に灰白色灰(7.5YR8/2)が細かい帯状に混入。
14	浅黄褐色砂質土(10YR8/4)と明褐色砂質土(7.5YR5/8)が層を呈する。
15	黒色土(10YR2/1)。
16	明褐色粘土(7.5YR5/8)に淡黄色パミス(7.5YR8/3)が1%含まれる。
17	暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を粒子状に含む。
18	暗褐色土(10YR3/4)の中に黒色土(10YR2/1)が多量に含まれる、部分的に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を含む。
19	黄褐色砂質土(10YR7/8)と暗褐色土(7.5YR3/4)の混層で黄褐色に伴う礫を多量に含む。
20	黄色砂質土(2.5Y7/8)。
21	黄色砂質土(2.5Y7/8)に部分的に暗褐色砂質土(7.5YR3/4)、黒色土(10YR2/1)を含む。
22	淡黄色砂質土(2.5Y8/4)に黄褐色砂質土(10YR8/8)が30%含まれる混層に暗褐色土(10YR3/4)が2%含まれる。
23	淡黄色粘土(2.5Y8/4)。
24	地山、黄褐色砂質土(10YR5/6)。

Ch.33→(Fig. 28対応)

(a) S T - 224 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備 考
1	円	40×30	50	
2	円	30×30	43	
3	円	30×25	45	
4	円	25×23	40	
5	円	27×24	32	
6	円	30×23	32	
7	円	30×20	34	

(b) S T - 224 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土(10YR2/2)と褐色砂質土(10YR6/4)の混層に若干の炭化物を含む。
2	地山

Ch. 34→(Fig. 28対応)

(a) S T - 228 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備 考
1	方	21×20	37	
2	方	15×14	28	
3	方	18×17	28	
4	方	16×16	31	
5	円	16×12	38	
6	方	19×18	34	
7	方	21×21	40	
8	方	22×22	38	
9	方	20×17	33	

(b) S T - 228 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土(10YR2/2)に粒子状の明褐色砂質土(10YR6/6)を5%、橙色焼土(7.5YR6/6)を5%、炭化物を若干含む、しまりなし。
2	黒褐色土(10YR2/2)に極小～小塊の明褐色砂質土(7.5YR5/8)を5%、炭化物と褐灰色灰(10YR4/1)を若干含む。
3	黒褐色土(10YR2/3)に極小～中塊の明黄褐色砂質土(10YR6/8)を10%、炭化物を若干含む。
4	黒褐色土(10YR2/3)に小塊の明黄褐色砂質土を若干、炭化物を10%、橙色焼土(7.5YR6/6)を若干含む、しまりなし。
5	橙色焼土(7.5YR6/6)と暗赤褐色焼土(5YR3/6)と褐灰色灰(10YR4/1)と黒色土(10YR1.7/1)の混層、しまりなし。
6	黒褐色土(10YR2/2)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)の中塊2個とにぶい黄褐色粘土を5%炭化物を若干含む。
7	にぶい黄褐色粘土(10YR6/3)、しまりあり。
8	黒色土(10YR2/1)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)の極小塊を3%、炭化物とにぶい黄褐色粘土(10YR6/3)と灰白色灰(10YR8/1)を若干含む、しまりあり。

9	黒褐色土(10YR2/2)と黒色土(10YR1.7/1)の混層。
10	黄褐色砂質土(10YR5/6)。(地山)

Ch. 35→(Fig. 28 対応)

S T-232 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土(5YR2/1)にしじみ貝、ナイロン、卵のカラ、アルミハクを多量含む、しまりあり。
2	砂質土の塊。
3	黒褐色土(5YR2/1)に明赤褐色砂質土(5YR5/8)と褐色砂質土(7.5YR4/6)の小〜大塊を15%、黒色土(10YR1.7/1)を1%含む。
4	地山

Ch. 36→(Fig. 29 対応)

(a) S T-234 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備 考
1	方	32 × 28	64	
2	方	34 × 33	64	
3	方	36 × 35	73	抜き取り痕
4	方	44 × 30	74	
5	方	38 × 29	50	
6	方	30 × 30	74	
7	円	26 × 25	74	抜き取り痕
8	方	37 × 30	74	〃
9	方	33 × 25	80	〃
10	円	32 × 30	38	
11	円	30 × 26	52	
12	円	22 × 20	50	

(b) S T-234 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土(10YR2/1)に灰黄褐色粘土(10YR5/2)を30%含む。
2	黒褐色粘土(10YR3/1)、しまりなし。
3	黒色土(10YR2/1)に極小〜小塊の褐色砂質土(10YR4/6)と明褐色砂質土(10YR7/6)と赤褐色砂質土(5YR4/8)を30%含む。
4	黒褐色土(10YR3/2)に極小塊の褐色砂質土(10YR4/6)を3%含む。
5	黒褐色土(10YR3/2)に極小〜小塊の褐色砂質土(10YR4/6)と明黄褐色砂質土(10YR7/6)と赤褐色砂質土(5YR4/8)を3%含むしまりあり。
6	黒色土(10YR2/1)に極小〜小塊の褐色砂質土(10YR4/6)と明黄褐色砂質土(10YR7/6)と赤褐色砂質土(5YR4/8)を20%含む、しまりあり。
7	黒色土(10YR2/1)に小〜中塊の明褐色砂質土(7.5YR5/8)と明黄褐色砂質土(10YR7/6)の極小塊を10%含む、炭化物若干あり。
8	黒褐色土(10YR3/2)と黒色土(10YR1.7/1)と極小〜小塊のにぶい黄褐色粘土(10YR5/3)と明黄褐色砂質土(10YR7/6)と中塊の黄褐色砂質土(10YR5/6)の混層、しまりあり。
9	黒褐色土(10YR2/1)と極小〜中塊の黄褐色砂質土(10YR5/6)と中塊の明褐色砂質土(7.5YR5/8)とにぶい黄褐色粘土(10YR5/4)と褐色砂質土(10YR5/4)と褐色砂質土(10YR4/4)の混層、ただし南壁の右壁ぎわは互層になっている。
10	黒色土(10YR2/1)に小塊のにぶい黄褐色粘土(10YR5/3)と中塊と黄褐色砂質土(10YR5/6)と明褐色砂質土(7.5YR5/8)と極小〜小塊の明褐色砂質土(10YR7/6)を30%含む。
11	黒色土(10YR2/1)と中塊状の褐色砂質土(10YR4/6)と明褐色砂質土(10YR6/6)の混層、しまりあり。
12	明黄褐色砂質土(10YR6/8)。
13	黒色土(10YR2/1)に灰白色灰(10YR7/1)を30%含む、炭化物若干あり。
14	地山、明黄褐色砂質土(10YR6/8)。

(c) S T-234 観察表

PL・No	Fig. No	遺物No	出土区(遺構)	層 位	器形	釉調・色調	胎土	文 様	特 徴	備 考
	29-1	P2608	G43 S T-234	フク土	皿	青 白 色	白色	胸部、外面一文字文 見込 吉祥文	碁笥底	

Ch. 37→(Fig. 30 対応)

S T - 209 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10YR 3/2) に黄褐色土 (10YR 5/8) と明赤褐色土 (5YR 5/8) を小ブロック状に 3% 含む。
2	黒色土 (10YR 2/1) に明褐色土 (7.5YR 5/8) を含む、しまりなし。
3	黒褐色土 (10YR 3/2) と明褐色土 (7.5YR 5/8) の混層に黒色土 (7.5YR 2/1) を 20% 含む、黄褐色砂質土 (10YR 7/8) をブロック状に 10% と炭化物を含む。
4	黒色土 (7.5YR 2/1)。
5	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に黄褐色土 (10YR 5/8) を 2% 含む。
6	地山、黄褐色砂質土 (10YR 5/6)。

Ch. 38→(Fig. 30 対応)

S T - 214 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	明黄褐色砂質土 (10YR 7/6) に暗褐色土 (10YR 3/4) を 40% 含む混層。
2	黒褐色土 (10YR 3/2) に黄褐色砂質土 (10YR 7/8) をブロック状に 30% 含む、褐灰色灰 (10YR 1/5) と炭化物を 1% 含む、礫を 5% 含む。
3	黒褐色土 (10YR 2/3) に礫を 2% 含む。
4	暗褐色土 (10YR 3/3) に黄褐色砂質土 (10YR 7/8) を小ブロック状に 3% 含む、炭化物も微量に含む。
5	暗褐色土 (10YR 3/3) と黄褐色砂質土 (10YR 7/8) を粒子状に 1% 含む、炭化物も微量に含む。
6	暗褐色土 (10YR 3/3) と黄褐色砂質土 (10YR 7/8) の混層に黄褐色砂質土 (7.5YR 7/8) を大ブロック状に 3% 含む、礫を 10% 含む、しまりなし。
7	黒褐色土 (10YR 2/2)。礫 1% と炭化物 1% を含む、湿性あり。
8	地山、黄褐色砂質土 (10YR 5/6)。

Ch. 39→(Fig. 30 対応)

S T - 223 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	暗褐色土 (10YR 3/3) に 1% の黄色砂質土 (2.5YR 7/8) を含む。
2	暗褐色土 (10YR 3/3) に黄褐色砂質土 (7.5YR 7/8) を 30% 含む。
3	黒褐色土 (10YR 3/2) に黄褐色砂質土 (7.5YR 7/8) と炭化物を 1% 含む。
4	黒褐色土 (10YR 3/2) と黒色灰 (10YR 1.7/1) が若干の混層。
5	黒褐色土 (10YR 2/2)。
6	地山、明黄褐色砂質土 (10YR 6/6)。

Ch. 40→(Fig. 30 対応)

S T - 231 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10YR 2/2) に黒色灰 (10YR 1.7/1) を中板状に含む。
2	灰白色灰 (10YR 8/2)、しまりなし。
3	黒褐色土 (10YR 3/2) に灰白色灰 (10YR 8/2) を薄い板状に含む。
4	黒褐色土 (10YR 2/2) に黒色灰 (10YR 1.7/1) を中板状に含む。
5	黒褐色土 (10YR 3/2) に明赤褐色砂質土 (5YR 5/3) の小塊を 3% 含む。
6	明赤褐色焼土 (5YR 5/8)。
7	地山、橙色砂質土 (7.5YR 6/8)。

Ch. 41→(Fig. 30 対応)

S T - 227 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	褐色土 (7.5YR 4/3) に多量の灰 (7.5YR 6/1) と少量の炭化物混入。
2	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に黄褐色砂質土 (7.5YR 5/8) 5% と若干の黒色灰 (7.5YR 1.7/1) が混入。
3	褐色土 (7.5YR 4/3) に 3% の黄褐色砂質土 (7.5YR 6/8) と若干の黒色灰 (7.5YR 1.7/1) が混入。
4	暗褐色土 (7.5YR 3/3) に 3% の大ブロック状の黄褐色砂質土 (7.5YR 6/8) と若干の炭化物混入。
5	暗褐色土 (7.5YR 3/3) に灰 (10Y 4/1) を多量に含む。
6	暗褐色土 (7.5YR 3/3) と若干の黄褐色砂質土 (10YR 5/6) との混層。
7	黒色土 (10YR 2/1)。
8	極暗褐色土 (7.5YR 2/3)。
9	黄褐色砂質土 (7.5YR 6/8)。
10	極暗褐色土 (7.5YR 2/3) に若干の褐灰色灰 (7.5YR 6/1) と (10YR 6/4) が混入。
11	地山、黄褐色砂質土 (7.5YR 6/8)。

Ch. 42→(Fig. 31 対応)

S T - 233 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10YR 2/2) に褐色砂質土 (10YR 4/4) を中～極大状に 5% 含む。
2	黒色土 (10YR 2/1) に明褐色砂質土 (7.5YR 5/8) を極大状に 1% 含む。
3	黒褐色土 (10YR 3/2) と褐色砂質土 (7.5YR 4/6) の混層。
4	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に明褐色砂質土 (7.5YR 4/6) を極小～極大状に 1% 含む。
5	黄褐色砂質土 (10YR 5/8)。(地山)

Ch. 43→(Fig. 31 対応)

SX-170 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土 (5YR 2/1) に暗褐色砂質土 (10Y R 3/4) を含む。
2	黒色土 (7.5YR 2/1)。
3	褐色砂質土 (10YR 4/6)。(地山)

Ch. 44→(Fig. 31 対応)

SX-160、SX-161、SX-162 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土 (10YR 3/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 7/8) を 2% 含む。
2	黒褐色土 (10YR 3/2) と黄褐色砂質土 (10Y R 7/8) の混層。
3	黄褐色砂質土 (10YR 8/3) と明黄褐色砂質土 (10YR 6/8) の混層に若干の暗褐色土 (10Y R 3/3) を含む。
4	暗褐色土 (10YR 3/4)。
5	2 より黒褐色土 (10YR 3/2) が若干多く、炭化物を 1% 含む。
6	明赤褐色砂質土 (5YR 5/8)、下層は酸化鉄分が多く赤褐色砂質土 (5YR 4/8) である。
7	暗褐色土 (7.5YR 3/3) と明褐色砂質土 (7.5YR 5/8) と明褐色砂質土 (7.5YR 5/6) の混層。
8	黒褐色土 (7.5YR 2/2) と黄褐色砂質土 (5YR 5/8) が 1% の混層。
9	浅黄色砂質土 (2.5Y 7/4) と暗褐色土 (7.5YR 3/3) の混層。
10	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に黄褐色砂質土 (7.5Y R 5/8) を 5%、炭化物を 3%、下層に黒色灰 (7.5YR 1.7/1) を含む。
11	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に黄褐色砂質土 (7.5Y R 7/8) を 3%、炭化物を 3% 含む。
12	明褐色砂質土 (7.5YR 5/8) に若干の炭化物を含む。
13	明黄褐色砂質土 (10YR 6/6)。
14	褐色砂質土 (7.5YR 4/6)。
15	明褐色砂質土 (7.5YR 5/8) と酸化鉄分が多い赤褐色砂質土 (5YR 4/8) と明黄褐色砂質土 (10YR 6/6) がブロック状に混層。
16	黒褐色土 (10YR 3/2) に明褐色砂質土 (7.5Y R 5/8) が 20% 混入。
17	黒褐色土 (10YR 3/2) と明褐色砂質土 (7.5Y R 5/8) の混層に若干の炭化物を含む。
18	黒色土 (10YR 2/1) に若干の明褐色砂質土 (7.5YR 5/8) が混入、湿性あり。
19	黄褐色砂質土 (10YR 5/6)。
20	浅黄砂質土 (2.5Y 7/4) に磁鉄鉱を含む。
21	浅黄砂質土 (2.5Y 7/4)。(地山)

Ch. 45→(Fig. 32 対応)

(a) SE-71 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	暗褐色土 (7.5YR 3/3) に暗赤褐色土 (5YR 3/6) と明褐色土 (7.5YR 5/8) が小粒状に 1%、炭化物を 1% 含む、しまり強い。
2	暗褐色土 (7.5YR 3/4) に暗赤褐色土 (5YR 3/6) と明褐色土 (7.5YR 5/8) が小粒状に 1%、炭化物を 1% 含む、しまりなし。
3	暗褐色土 (7.5YR 3/4) に明黄褐色土 (10YR 7/6) が粒子状に 5%、炭化物を 1% 含む。
4	褐色土 (7.5YR 4/3) と褐色土 (10YR 4/4) の混層に炭化物が 2% 混入、しまり強い。
5	暗褐色土 (7.5YR 3/4) に炭化物を 1% 含む、しまりなし。
6	暗褐色土 (10YR 3/3) に明黄褐色土 (10YR 6/8) を 30% 含む。
7	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に小ブロック状の褐色土 (10YR 4/6) が 1% と炭化物を 1% 含む。
8	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に小ブロック状の褐色土 (10YR 4/6) とにぶい黄褐色粘土 (10YR 5/4) が 1%、炭化物を 2% 含む、しまり非常に強い。
9	褐色土 (7.5YR 4/3) と褐色土 (10YR 4/4) の混層に橙色土 (7.5YR 6/8) を 1% と炭化物を 2% 含む。
10	暗褐色土 (7.5YR 3/3) に明褐色土 (7.5YR 5/8) とにぶい黄褐色砂質土 (10YR 7/3) 明黄褐色粘土 (10YR 7/6) と黒色土 (5YR 1.7/1) を 10% 含む、湿性少々あり。
11	小ブロック状の明黄褐色砂質土 (10YR 6/8) に暗褐色土 (10YR 3/3) がまだら状に 20% 混入。
12	黒色土 (7.5YR 2/1)。
13	灰オリーブ色砂質土 (5Y 6/2)。

(b) S E - 71 出土遺物注記表

P L No	Fig No	遺物No	出土区(遺構)	層位	器種	器形	釉調・色別	胎土	文様	特徴	備考
17-1	32-1	P1136	G 56 S E 71	フク土	唐津	皿	灰橙色	橙色	-	口縁が外反している	

P L No	Fig No	遺物No	出土区(遺構)	層位	製品名	形状	色調	木地	文様	特徴	備考
-	32-2	M 30	G 56 S E 71	セクション 内 フク土	曲物						

Ch. 46→(Fig. 33 対応)

S E - 73 覆土層序注記表

層序No	特徴
1	黒色土(7.5YR 2/1) しまりあり。
2	1に浅黄褐色砂質土(10YR 8/3)の小粒子が15%混入、しまりあり。
3	黒褐色土(10YR 3/2)に浅黄褐色砂質土(10YR 8/3)と黄褐色粘質土(10YR 5/8)と明黄褐色砂(10YR 6/8)が50:38:2:10の混層。
4	黒褐色土(10YR 3/2)に浅黄褐色砂質土(10YR 8/3)の灰白色浮石(7.5Y 8/2)が45:40:5:10の混層。
5	浅黄褐色砂質土(10YR 8/3)に黄色砂質土(2.5Y 7/8)を10%混入、しまりあり。
6	明褐色砂質土(10YR 6/8)と明赤褐色砂質土(5YR 5/8)の混層。
7	オリーブ黒色土(7.5Y 2/2)に炭化物を5%含む、しまりあり。
8	オリーブ黒色灰(5GY 2/1)。
9	オリーブ黒色土(7.5Y 2/2)に炭化物を5%含む、しまりあり。
10	暗オリーブ灰色灰(2.5GY 3/1)。
11	オリーブ黒色土(7.5Y 3/2)。
12	灰白色灰(5Y 7/2)。
13	黒色土(10YR 2/1) 20%と赤褐色土(5YR 4/6)の混層。
14	黒色土(10YR 2/1)、しまりあり。
15	黒色土(10YR 2/1)と褐色土(10YR 4/6)の混層。
16	黒褐色土に黄褐色砂質土を薄い凸レンズ状に含む、炭化物小量あり。
17	黄褐色砂質土。
18	黒褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。湿性あり。
19	暗褐色土と黄褐色砂質土の互層。
20	砂質土と泥土の10cmぐらいづつの互層。
21	砂質土と泥土の混層、多量の川原石を含む。

Ch. 47→(Fig. 34 対応)

S E - 72 覆土層序注記表

層序No	特徴
1	赤黒色土(2.5YR 2/1)しまりはあるがもろい。
2	暗赤褐色土(5YR 3/2)に赤褐色土を中粒状に5%含む、粘性がありしまりが強い。
3	黒褐色土(5YR 2/1)、粘性がなくもろい。

4	黒色土(7.5YR 2/1)に極小の赤褐色砂質土を30%含む、しまりなし。
5	暗赤褐色砂質土(5YR 3/2)に黒褐色土を50%、大粒状の石を30%含む、しまりなし。
6	暗褐色砂質土(7.5YR 3/3)に中粒状の石を1%含む。
7	にぶい黄褐色砂質土(10YR 5/4)、しまりがあるがもろい。
8	褐色砂質土(10YR 4/4)に中、小粒状の石を3%含む、しまりはあるがもろい。
9	暗褐色砂質土(7.5YR 3/3)に大粒状の石を2%含む、しまりあり。
10	暗褐色土(5YR 3/2)に極小の浅黄色砂質土(10YR 8/3)を15%含む、多少しまりあり
11	極小粒状の黄褐色砂質土(2.5Y 5/3)、しまりなし。
12	極小粒状のにぶい黄褐色土(10YR 4/3)、しまりなし。
13	黒褐色土(10YR 2/3)に黄褐色土(10YR 5/6)が25%、炭化物を1%含む、多少粘性あり。
14	黒色土(10YR 2/1)に炭化物を10%含む、多少粘性あり。
15	黒褐色土(7.5YR 2/2)、多少粘性あり。
16	黒色土(7.5YR 1.7/1)、多少粘性あり。
17	黒褐色土(7.5YR 3/1)、多少粘性あり。
18	黒褐色粘土(10YR 3/1)。
19	黒色土(7.5YR 2/1)に炭化物を7%含む、粘性あり。
20	明黄褐色土(10YR 6/8)に黒色土(7.5YR 2/1)が10%混入。

Ch. 48→(Fig. 34 対応)

S E - 74 覆土層序注記表

層序No	特徴
1	暗褐色土(7.5YR 3/4)に若干の黒色土(7.5YR 1.7/1)を含む。
2	暗褐色土(7.5YR 3/3)。
3	暗褐色粘質土(7.5YR 4/3)。
4	暗褐色粘質土(7.5YR 4/2)。
5	4に砂質土(10YR 6/4)が薄い板状にあり、その上に若干の褐灰色灰(7.5YR 4/1)がある。
6	黒褐色土(10YR 2/2)に若干の砂質土(10YR 6/4)を含む。
7	暗褐色土(7.5YR 3/4)と砂質土(10YR 6/4)の混層。

8	7より若干砂質土が少ない。
9	砂質土(10YR6/4)に若干の暗褐色土(7.5YR3/4)が混入。
10	砂質土(10YR5/3)。
11	黒褐色土(10YR2/2)、湿性あり。
12	砂質土(10YR5/3)、湿性あり。
13	黄褐色砂質土。
14	青白色パミスと黄白色パミスの混層に凝灰石が若干混入。

Ch. 49→(Fig. 34 対応)

SE-75 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土(10YR2/3)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)の極小〜小塊を5%ほど含む、しまりあり。
2	明黄褐色砂質土(10YR7/6)。(地山)

SE-77 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	鈍橙色土(7.5YR6/4)に灰白色(7.5YR8/1)のシルトを約40%含む、乾性が強く、しまりが非常に強い。
2	黒褐色土(10YR2/2)に赤褐色(5YR4/8)の砂質土小塊を約10%含む。
3	黒色土(10YR2/1)に黒色灰(N1.5/0)を中板状に約20%含む。
4	黒色土(10YR2/1)に黒色灰(N1.5/0)を中板状に約30%、褐色(7.5YR4/3)の砂質土を約5%含む、湿性強し。
5	黒色土(7.5YR2/1)に黒色灰(N1.5/0)を層下部に薄い板状に含む、粘性あり。
6	黒褐色土(5YR3/1)に褐色(7.5YR4/3)の砂質土を約3%含む。
7	明褐色(7.5YR5/7)と灰白色(10Y8/2)の砂質土塊の混層。
8	黒褐色土(10YR2/3)に赤褐色(5YR4/8)の砂質土中塊を約8%含む。
9	黒褐色土(10YR2/3)ははぶい黄褐色土(10YR5/3)が層中部に混入している、共に粘土である。
10	にぶい黄橙色砂(10YR6/4)、しまりなし。
11	黒褐色土(10YR2/2)、湿性あり。
12	黒色土(10YR1.7/1)と暗赤褐色粘質土(5YR3/2)の混層、赤褐色(5YR4/8)と褐色(7.5YR4/3)の砂質土を含む、湿性あり。

Ch. 51→(Fig. 36 対応)

SE-79 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	暗褐色土。
2	暗褐色灰層。
3	暗褐色土に若干の粘質を含む。
4	暗褐色粘質土。
5	暗褐色土に若干の砂質を含む。
6	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
7	黒色灰。
8	5より若干砂質を多く含む。
9	黒色灰に若干の白色灰を含む。
10	暗褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に含む。
11	暗褐色土と黄褐色砂質の混層に黄白色パミス混入。
12	暗褐色泥土。

Ch. 52→(Fig. 37 対応)

S B-57 (門跡)

(a) 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備 考
P-1	方	108 × 82	184	
P-2	方	127 × 107	163	
P-3	方	100 × 94	99	
P-4	方	83 × 73	100	

(b) S B-57 (門跡)

覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土(5YR2/1)。
2	暗褐色土(7.5YR3/4)と灰褐色灰(7.5YR5/2)の混層に、炭化物を若干含む、湿性あり。
3	灰褐色灰(7.5YR5/2)と浅黄褐色灰(7.5YR8/4)との混層、湿性あり。
4	灰褐色灰(7.5YR5/2)と黒色灰(10YR1.7/1)の約1:9の混層、湿性あり。
5	赤褐色砂質土(5YR4/8)と明褐色砂質土(7.5YR5/8)と黒褐色土(10YR2/3)の混層に浅黄褐色灰(7.5YR8/4)を5%、炭化物を若干含む、しまりあり。
6	黒褐色土(5YR2/1)に明赤褐色砂質土(5YR5/8)を中斑点状に約1%含む、しまりあり。
7	黒褐色土(7.5YR2/2)と明褐色砂質土(7.5YR5/8)との混層、しまり強い。
8	黒褐色土(7.5YR2/2)と明褐色砂質土(7.5YR5/8)との混層に黒色土(7.5YR2/1)を若干含む、しまりあり。
9	黒褐色土(5YR2/1)に黄褐色砂質土(10YR5/6)との混層、部分的に単層になっている、しまり強い。
10	黒褐色土(10YR2/2)、しまり非常に強い。
11	黄褐色(10YR5/6)、赤褐色(5YR4/8)の砂質土。(地山)

Ch. 52 → (Fig. 38 対応)

SK-01 出土遺物観察表

PLNo	FigNo	遺物No	出土区(遺構)	層位	器種	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
	38-1	P1176	D 56 SK 01	床面直上	互器	壺	浅黄橙色~黒色	灰黄褐色	—	口縁部に片口	

PLNo	FigNo	遺物No	出土区(遺構)	層位	名称	計測値(長×幅×厚)cm	特徴	備考
	38-2	F 354	D 56 SK 01	フク土	不明鉄製品	(3.78) × (3.46) × 0.24		
	38-3	F 355	D 56 SK 01	フク土	不明鉄製品	(4.50) × 1.80 × 0.18		

PLNo	FigNo	遺物No	出土区(遺物)	層位	名称	外縁	外縁	外縁	内郭	内郭	内郭	重量 (g)	備考
						外径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	外さ(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)		
	38-4	C 120	D 56 SK 01	フク土	無文銭	2.3	0.6	0.08	—	—	—		

Ch. 54 → (Fig. 40 対応) 青磁観察表

PL・No	FigNo	遺物No	出土区(遺構)	層位	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
15-3	40-1	P 646	G56	Ⅲ 上	碗	青緑色	白色	外面胴部: 連弁文の線描		
—	40-2	P2527	E48・Pit	フク土	碗	青緑色	暗灰色	外面胴部: 篋描雷文帶有		
15-1	40-3	P1528	E48・SE74	フク土	碗	青灰色	灰色	見込:蛇の目		
15-5	40-4	P2118	G57・SX168	フク土	碗	青灰色	暗灰色	—	二次加熱	
—	40-5	P1867	G58・ST210	フク土	碗	青緑色	白色	内外面:劃線文		
15-4	40-6	P1975	G58・SX163	フク土	碗	青緑色	灰色	内外面:劃線文 見込:印花文		
15-2	40-7	P1099	F48	I	碗	青緑色	白色	内面:劃線文		
15-9	40-8	P2540	E47・SX181	フク土	皿	暗緑色	暗灰色	内面:劃線文 見込:印花文		
15-10	40-9	P2047	H57・SX166	フク土	皿	青緑色	暗灰色	内面:劃線文 見込:印花文		
15-8	40-10	P2077	G57・SX167	フク土	皿	青・灰色	灰色	内面:印花文 見込:印花文	施釉にバラつき有	
—	40-11	P2093	G57・SX167	フク土	皿	暗緑色	暗灰色	内面:劃線文		
—	40-12	P1617	G58・ST210	フク土	皿	青緑色	灰色	内面:劃線文 見込:印花文		
15-7	40-13	P2074	G57・SX167	フク土	皿	青灰色	暗灰色	内面:劃線文	二次加熱	
—	40-14	P2429	F43	Ⅲ 上	小皿	青緑色	白色	外面:連弁文 内面:劃線		
15-11	40-15	P2365	G43	Ⅲ	小皿	青緑色	灰色	内面:劃線		
15-6	40-16	P2379	G43	Ⅲ 上	碗	青緑色	白色	見込:「壽」 スタンプ		
15-12	40-17	P2349	F43	Ⅱ	盤	青緑色	白色	内面:菊花状文		
15-16	40-18	P1210	E48	Ⅱ	香炉	青白色	白色	—		
15-17	40-18	P2122	G57・SX164	フク土	香炉	青白色	白色	—		PL 15 No.16 と 同一個体
15-13	40-19	P 644	G56	Ⅲ 上	香炉	青緑色	白色	—	口縁部直下に釉止 り有。	
15-14	40-19	P 643	G56	Ⅲ 上	香炉	青緑色	白色	—	高台直上に一つの 穿孔有。	PL 15 No.13 と 同一個体
15-15	40-20	P1953	G57 Pit	フク土	香炉	青緑色	灰色	—		
—	40-20	P2136	G57・SX164	フク土	香炉	青緑色	灰色	—		PL 15 No.15 と 同一個体

Ch. 55→(Fig. 41 対応) 白磁、不明陶器観察表

PL・No	Fig No	遺物No	出土区(遺構)	層位	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
16-2	41-1	P1776	G58・ST210		フク土 皿	白 色	白 色	—		
16-1	41-2	P2557	G45・SX182		フク土 皿	白 色	白 色	—		
16-4	41-3	P 747	D56・SX195		フク土 碗	黄 白 色	黄 色	—	外面八角の刻り有	
16-3	41-4	P2226	F45	II	皿	白 色	白 色	—	高台4ヶ所の刻り有	
16-19	41-	P1985	G57 Pit		フク土 皿	白 緑 色	白 色	—	内面：胴部から見込にかけ刻り有	

Ch. 56→(Fig. 41 対応) 染付 観察表

PL・No	Fig No	遺物No	出土区(遺構)	層位	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
16-17	41-5	P 11	H57	I	皿	青 白 色	青 白 色	—	見込：人物画、高台底部[大明年造]	
16-13	41-6	P1173	E47	II	皿	青 白 色	白 色	内面：雷文帯 外面：牡丹唐草文		
16-9	41-7	P1489	E47・ST216		フク土 碗	暗青灰色	青 白 色	外面：一条の圈線		
—	41-8	P1118	E49・ST166		フク土 皿	青 白 色	白 色	内面：二条の圈線 外面：一条の圈線 唐草文		
16-16	41-9	P 571	G58	II 下	皿	青 白 色	白 色	胴部外面： 牡丹唐草文 見込：玉取獅子文		
16-15	41-10	P1457	F46	I	皿	青 白 色	白 色	胴部外面： 牡丹唐草文 見込：玉取獅子文		
16-11	41-11	P2445	G48・SE77		フク土 皿	青 白 色	白 色	胴部外面：牡丹 牡丹唐草文 見込：羯磨文		
16-5	41-12	P2446	F47・ST213		フク土 皿	暗青灰色	白 色	外面：波瀾文帯 碁笥底、下半に 芭蕉葉文		
16-6	41-13	P2447	F47・ST218		フク土 皿	暗青灰色	灰 白 色	外面：波瀾文帯 碁笥底、下半に 圈線	見込、底部： 無施釉	
16-7	41-14	P2250	F43	I	皿	暗青黄色	黄 灰 色	外面胴部： 芭蕉葉文 見込：捻花文	疊付部分・無施釉	
16-8	41-15	P2608	G43・ST234		フク土 皿	青 白 色	灰 白 色	見込：吉祥文		
16-10	41-16	P 575	H58	II 下	皿	白 色	白 色	内面：四方罽文		
16-14	41-17	P2703	F42	I	皿	青 白 色	白 色	内面：花鳥文		
16-12	41-18	P2751	G40.41 SH10		フク土 皿	青 白 色	白 色	内面：花鳥文		
16-18	41-19	P2242	G45	II	皿	青 白 色	白 色	—		

Ch. 57→(Fig. 42 対応) 中国褐釉壺(呂宋壺)観察表

PL・No	Fig No	遺物No	出土区(遺構)	層位	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
19	42-1	P1469	G56・SE 71		フク土 壺	黄 褐 色	淡 黄 色	—	頸部、耳部	
19	42-1	P2078	G56 Pit		フク土 壺	黄 褐 色	淡 黄 色	—	頸部、耳部	
19	42-1	P 244	J52	II	壺	黄 褐 色	淡 黄 色	—	胴部	1981 出土
19	42-1	P1830	D56・SX195		フク土 壺	黄 褐 色	淡 黄 色	—	胴部	
19	42-1	P1834	E56・SX195		フク土 壺	黄 褐 色	淡 黄 色	—	底部	
19	42-1	P1358	E56・SX195		フク土 壺	黄 褐 色	淡 黄 色	—	底部	

Ch. 58→(PL20 対応) 赤 絵 観察表

PL・No	Fig No	遺物No	出土区(遺構)	層 位	品形	釉調・色調	胎 土	文 様	特 徴	備 考
20-12	—	P1426	H55	Ⅱ 上	皿	灰 白 色	白 色	外面:二条の墨線 牡丹唐草文 内面:二条の墨線 見込:草花文		1980 出土
20-13	—	P1993	G48・SE 77	フク土	皿	灰 白 色	淡 灰 色	外面:一条の墨線 牡丹文 内面:一条の墨線		
20-14	—	P4621	P54	Ⅱ	碗	灰 白 色	淡 灰 色	外面:一条の墨線 牡丹文 内面:二条の墨線		1979 出土
20-15	—	P1842	H47 Pit	フク土	碗	灰 白 色	淡 灰 色	外面:一条の墨線 内面:二条の墨線		1978 出土
20-16	—	P1818	F50 SE 68	フク土	碗	灰 白 色	淡 灰 色	内外面:牡丹文		1982 出土
20-17	—		北館表採		碗	灰 白 色	淡 灰 色	外面:牡丹文		1979 出土
20-18	—	P 498	J57・ST 62	フク土	碗	灰 白 色	白 色			1980 出土
20-19	—	P2206	G50・SX109	フク土	皿	灰 白 色	淡 灰 色	外面高台: 一条の墨線 内面見込: 二~三条の墨線		1982 出土
		P 372	ST13	フク土	皿	灰 白 色	淡 灰 色	内面:四方禪文		

Ch. 59→(Fig. 42 対応) 朝 鮮 観察表

PL・No	Fig No	遺物No	出土区(遺構)	層 位	器形	釉調・色調	胎 土	文 様	特 徴	備 考
20- 1	42-2	P 610	H59	Ⅱ 下	碗	灰 白 色	暗 灰 色	—		83 F 57 ST201C セクション内床 面P 1882と接着
20- 2	—	P1489	I44・SE 67	フク土	皿	灰 白 色	暗 灰 色	—	黄灰色透明釉	
20- 3	—	P 96	J49	I	皿	灰 白 色	暗 灰 色	—	黄灰色透明釉	1982 出土
20- 4	—	—	L47 堀跡	フク土	碗	灰 白 色	暗 灰 色	—	透明釉	1978 出土
20- 5	—	P 222	F45	Ⅱ	碗	灰 白 色	暗 灰 色	—	透明釉	
20- 6	—	P4630	L58	Ⅱ	碗	灰 白 色	暗 灰 色	—	透明釉	1979 出土
20- 7	—	P4631	L58	Ⅱ	碗	灰 白 色	暗 灰 色	—	透明釉	1979 出土
20- 8	—	P1833	E56・SX195	フク土	碗	灰 白 色	暗 灰 色	—	黄灰色透明釉	
20- 9	—	P2722	G43・ST234	フク土	皿	灰 白 色	暗 灰 色	—	黄灰色透明釉 二次加熱	
20-10	—	P 60	L53	I 下	皿	黄 灰 色	褐 色	—		1981 出土
20-11	—	P1087	L47 堀跡	フク土	碗	黄 灰 色	褐 色	—		1979 出土

Ch. 60 → (Fig. 42 対応) 美濃・瀬戸 観察表

PL・No	Fig No	遺物No	出土区(遺構)	層 位	器形	釉調・色調	胎 土	文 様	特 徴	備 考
17- 1	—	P2052	G57・SX167	フク土	浅鉢	暗 緑 色	暗 灰 色	—	胴部で軸止	
17- 2	42- 5	P 596	G56	Ⅱ	壺	暗 緑 色	暗 灰 色	—	二次加熱	
17- 3	42- 4	P 894	F57・ST 201	フク土	壺	淡 緑 色	暗 灰 色	—	二次加熱	
17- 4	42- 3	P 75	HG41・ST201	フク土	水注	暗 緑 色	暗 灰 色	—	胴部で軸止	
17- 5	42- 6	P 861	F57・ST201	フク土	小皿	緑 灰 色	黄 白 色	—		
17- 6	42- 7	P2165	F45	I	小杯	緑 灰 色	黄 白 色	—		
17- 7	—	P 506	H59	Ⅱ	碗	緑 灰 色	黄 白 色	—		
17- 8	42-10	P 653	G56	Ⅱ 上	皿	緑 灰 色	黄 白 色	—	見込と底に輪ドチ痕	
17- 9	42- 8	P1559	F48・SE 79	フク土	皿	緑 黄 色	黄 白 色	—		
17-10	42- 9	P2467	F47・ST218	フク土	皿	緑 橙 色	黄 白 色	—	見込と底に輪ドチ痕	
17-11	42-11	P 77	G41・SH 10	フク土	皿	緑 灰 色	灰 白 色	—	見込:菊花文	
17-12	42-12	P2436	G48・SE 77	フク土	燗台	暗 褐 色	暗 灰 色	—		
17-13	42-13	P2496	F47・ST218	フク土	碗	黒 褐 色	暗 灰 色	—	外面胴部:軸止	
17-14	—	P1985	G57 Pit	フク土	皿	白 緑 色	白 色	—	内面:胴部から見 込にかけ刻り有	

Ch. 61 → (Fig. 43 対応) 唐 津 観 察 表

PL・No	Fig No	遺物No	出土区(遺構)	層 位	器形	釉調・色調	胎 土	文 様	特 徴	備 考
17-1	32-1	P1136	G56・SE71	フク土	皿	灰 橙 色	橙 色	—	胴部：軸止り	
17-2	43-3	P2179	G46	I	皿	灰 緑 色	暗 灰 色	—	胴部：軸止り	
17-3	43-2	P2241	G45	II	皿	灰 橙 色	にぶい 橙 色	—	胴部：軸止り	
17-4	43-1	P1281	G56・SE71	フク土	鉢	暗 灰 色	にぶい 橙 色	—		
17-5	43-5	P2265	G44	I	鉢	暗 灰 色	暗 橙 色	—		
17-6	43-4	P1506	F47・ST218	フク土		暗 緑 色	暗 灰 色	—		

Ch. 52 → (Fig. 43・44 対応) 瓦 器 観 察 表

PL・No	Fig No	遺物No	出土区(遺構)	層 位	器形	釉調・色調	胎 土	文 様	特 徴	備 考
—	43-6	P2083	G56 Pit	フク土	火鉢	黒・橙 色	暗 灰 色	口縁外面： 二条の隆帯 四菱状スタンプ 外面底部： 一条の隆帯	研磨	
—	43-7	P1398	E56・SX195	フク土	火鉢	にぶい 橙 色	暗 灰 褐色	外面胴部： 算木状文、丸に 十字のスタンプ		
—	43-8	P1862	H58・SE 73	フク土	火鉢	黒 色	暗 灰 褐色	外面口縁部、底 部：隆帯 U字の指文状ス タンプ	脚有。研磨	
—	43-9	P1598	F58・ST208	フク土	壺	黒 色	暗 灰 褐色	外面胴部：2列 の雷文スタンプ 三つ巴文スタ ンプ	研磨	
—	43-10	P2044	G58 Pit	フク土	壺	黄 褐 色	淡 黄 灰 色	外面：雷文、ス タンプ、劃線文	研磨	
—	43-11	P 774	E56・ST200	フク土	取手	黒 色	暗 灰 褐色	—	外面胴部：上面横 へのナデ跡、 下面縦への ナデ跡。研磨	
—	44-1	P1306	D56・SX195	フク土	壺	黒・橙 色	暗 灰 色	—		
—	44-2	P 923	H57・ST204	フク土	火鉢	黒 色	暗 灰 色	外面：八菱状ス タンプ	研磨	
—	44-3	P 114	D56・SX195	フク土	火鉢	黒 色	暗 灰 色	外面：口縁部、 胴部中央に波状 形隆帯、貼り付 け、下半に五弁 花状の貼り付け 文		

Ch. 63 → (Fig. 44 対応) 土 鈴 観 察 表

PL・No	Fig No	遺物 No	出土区(遺構)	層 位	器形	釉調・色調	胎 土	文 様	特 徴	備 考
18-7	44-4	83P 983	H58・ST205	床面直上	—	にぶい 黄 橙 色	浅 黄 橙 色	—		

Ch. 64 → (Fig. 44 対応) 埴 塙 観 察 表

PL・No	Fig No	遺物 No	出土区(遺構)	層 位	器形	釉調・色調	胎 土	文 様	特 徴	備 考
—	44-5	84P 176	G41・ST192	床面直上	—	—	—	—		
—	44-6	83P1877	G58・ST210	フク土	—	—	—	—		
—	44-7	83P1909	G58・ST210	フク土	—	—	—	—		
18-8	44-8	80P1385	H54・SE 31	フク土	—	—	—	—		
18-9	44-9	83P2484	G48・SE 77	フク土	—	—	—	—	内面に銅付着	

Ch. 65 → (Fig. 44 対応) 羽 口 観察表

PL・No	Fig No	遺物 No	出土区(遺物)	層 位	器形	釉調・色調	胎 土	文 様	特 徴	備 考
—	44-10	83P2055	G57・SX167	フク土	—	黄橙色～ 暗褐色	橙 色	—		
—	44-11	83P1802	G58・ST210	フク土	—	橙色～ 暗灰色	橙 色	—		

Ch. 66 → (PL21 対応) 伊 万 里 観察表

PL・No	Fig No	遺物 No	出土区(遺物)	層 位	器形	釉調・色調	胎 土	文 様	特 徴	備 考
21-1	—	78P 383	M69	I	皿	緑 灰 色	灰 白 色		高台に砂付着	
21-2	—	78P 699	M70	I	皿	緑 灰 色	灰 白 色		畳付は無釉	
21-3	—	79P 496	北館表採	—	壺	青 白 色	灰 白 色		〃	
21-4	—	81P6	K52	I	皿	青 白 色	灰 白 色		〃	
21-5	—	78P 309	I69・SH01	I	皿	青 灰 色	黄 白 色			
21-6	—	78P 395	L68	—	皿	灰 色	灰 色			
21-7	—	78P 891	K47	I	皿	青 灰 色	灰 色			
21-8	—	79F5376	K55	II	皿	青 灰 色	灰 色			
21-9	—	78P1567	N47	II 下	碗	青 白 色	灰 白 色			
21-10	—	79P4015	O45	II	碗	灰 色	灰 色	外面、網目文		
21-11	—	81P 187	K53	II	碗	青 白 色	灰 白 色	〃		
21-12	—	79F2974	P55	II	碗	青 灰 色	灰 白 色	〃		
21-13	—	81P1	I57	I	鉢	青 白 色	灰 白 色			
21-14	—	78P1236	K69	I	碗	緑 灰 色	灰 白 色	外面、二重 網目文		
21-15	—	81P1768	H49	III	小鉢	青 白 色	灰 白 色		畳付に砂付着	
21-16	—	81P 558	F53	III	皿	青 白 色	灰 白 色		見込蛇ノ目軸ノギ	
21-17	—	79P6132	N55・SH02	フク土	皿	青 白 色	灰 白 色			
21-18	—	78P1312	I47	表土 土壘下端	碗	青 白 色	灰 白 色	四方襷		
21-19	—	81P 257	J53	II	碗	青 白 色	灰 白 色	内面、網目文 外面、二重 網目文		
21-20	—	—	北館表採	—	小鉢	青 白 色	灰 白 色			
21-21	—	81P1904	H48	III	碗	青 白 色	灰 白 色			
21-22	—	79P5437	O54	I	小鉢	青 白 色	灰 白 色		内面に砂付着	
21-23	—	79P2976	P55	II	小鉢	青 白 色	灰 白 色			
21-24	—	79P1488	I58	II	小鉢	青 白 色	灰 白 色			

Ch. 67 → (Fig. 45・46 対応) 鉄 製 品 観察表

PL・No	Fig No	遺物 No	出土区(遺構)	層 位	名 称	計 測 値 (長×幅×厚) cm	特 徴	備 考
—	45-1	83F 669	G58・ST210	フク土	小 刀	(15.99)×柄 ^{1.04×0.29} 刃 ^{1.40×0.39}		
—	45-2	83F 561	E46	III	上打 根	(6.86)×径1.18		
—	45-3	83F 846	H57・Pit	フク土	鯖 尾 鉄	7.36 × 筥被幅 1.27×0.40		
—	45-4	83F 943	F48・ST225	フク土	鉄 鉄	(9.67)× ^筥 0.40×0.35 ^根 1.44×0.52		
—	45-5	83F 174	G58	III	上鉄 鉄	10.16 × 0.69×0.64		
—	45-6	83F 572	F48・ST214	フク土	鉄 鉄	13.39 × 1.06×1.04		
—	45-7	83F 83	E56	II 下	鉄 鉄	14.90 × 1.36×0.51		
—	45-8	83F 301	G59	III	上打 根	(12.53)×外径1.12×内径		
—	45-9	83F 336	E56・ST200	フク土	不明鉄製品	11.44 × 2.02×0.58		
—	45-10	83F 926	E43	II	小 札	6.86 × 2.09×0.24		
—	45-11	83F 537	E56・ST212	フク土	小 札	7.00 × 2.30×0.23		
—	45-12	83F 247	E56・ST200	フク土	小 札	7.26 × 2.90×0.30		
—	45-13	83F 714	F56・ST212	フク土	小 札	7.28 × 2.20×0.26		
—	45-14	83F 768	G58・ST210	フク土	小 札	6.68 × 2.00×0.23		
—	45-15	83F 681	E56・ST200	フク土	小 札	7.30 × 2.74×0.22		
—	45-16	83F 454	F48	II	小 札	6.57 × 2.74×0.23	重さ 16 g	

—	45-17	83F 15	H59	I	三 目 札	(6.59)×3.48×0.29	漆付着	
4-3	45-18	83F 360	F56・ST203	床面直上	鉈 状 刀	35.85 ×4.43×0.62		
—	45-19	83F 324	D56・SX195	フ ク 土	不明鉄製品	(7.77)×1.93×0.70	漆付着	
—	46-1	83F 875	G58・ST210	床 面	鉋	(31.0)×25.58×1.06×(0.57)		
—	46-2	83F 126	G41・ST192	床 面	火 箸	(38.5)×0.78×0.78	重さ約 140 g	
—	46-3	83F 320	F56・ST203	フ ク 土	火 箸	(19.72)× 頭部 1.48×0.60 胴部 0.83×0.76		
—	46-4	83F 338	E56・SX195	フ ク 土	火 箸	21.88×0.65×0.56		
—	46-5	83F 52	F47	II 下	鉄の灯明皿	10.75×5.22×2.72×(0.43)	重さ約 82 g	直径 5.6cm
—	46-6	84F 120	H41・ST192	フ ク 土	不明鉄製品	26.03×4.08×1.06	重さ約 240 g	
—	46-7	82F1138	H42・ST192	フ ク 土	不明鉄製品	26.10×3.94×1.00		
—	46-8	83F 48	E57	■	火 打 金	7.72×2.43×0.28		
—	46-9	83F 47	E57	■	火 打 金	7.95×2.60×0.44		
—	46-10	83F 339	E56・SX195	フ ク 土	苧 引 金	9.54×4.17×0.39		
—	46-11	83F 606	G48・SE 77	フ ク 土	鉋	(14.48)× 柄 0.66×0.40 刃 1.27×0.36		
—	46-12	83F 659	G58・ST210	フ ク 土	鉋	(13.10)× 柄 0.62×0.53 刃 1.44×0.51		
—	46-13	83F 549	H58・SE 73	フ ク 土	か す が い	7.37×2.90×0.74×(0.37)		
—	46-14	84F 116	G41・ST192	床面直上	か す が い	5.10×4.01×0.75×(0.46)		
—	47-1	83F1100	E42	II	角 釘	(14.26)× 頭部 2.08×1.62 胴部 0.96×0.66		
—	47-2	83F1079	E43	■ 下	角 釘	(9.92)×0.76×0.79		
—	47-3	83F1082	G41・SH 10	フ ク 土	鎌	刃長 16.8、刃幅 6.7、柄長 9.34		
—	47-4	83F1081	G46・ST239	フ ク 土	鎌	刃長 15.32、刃幅 5.03、柄長 11.93		
—	47-5	83F 349	H58・ST205	フ ク 土	輪 状 鉄 製 品	3.58 ×2.84×0.37		
—	47-6	83F 583	E47・ST216	フ ク 土	輪 状 鉄 製 品	4.12 ×3.36×0.81		
—	47-7	83F 783	H58・SE 76	フ ク 土	輪 状 鉄 製 品	3.92 ×3.90×0.35		

Ch. 68 → (Fig. 48 対応) 銅 製 品 観 察 表

PL・No	Fig No	遺 物 No	出土区 (遺構)	層 位	名 称		特 徴	備 考
—	48-1	84F 112	G41・ST192	床面直上	香 炉	(12.20)×(7.32)×0.17		
19-1	48-2	83F 381	G56・ST203	フ ク 土	足 金 物	4.52×3.50×0.16		
19-10	48-3	83F 473	F57・ST201	フ ク 土	銅 錘	5.11×1.56×1.56	重量 33g	
19-11	48-4	83F 6	G58	I	銅 錘	5.44×1.49×1.49	重量 26g	
19-13	48-5	84F 110	H41・ST192	フ ク 土	脚	4.60×2.12×0.69		
19-12	48-6	83F 125	G57	■	脚	3.99×1.36×1.02		
19-14	48-7	83F 914	G44	■ 上	六 器	径 6.88×高さ 1.20		
—	48-8	83F 930	G43	■	六 器	(径 8.50)×高さ 1.00		
19-15	48-9	83F 38	E57	■ 上	銅 皿	径 4.18×0.76×0.19	金糸付着	
19-17	48-10	83F 758	E56・ST220	フ ク 土	不明銅製品	(3.42)×0.72×0.72		
19-20	48-11	83F 529	E56・SX155	フ ク 土	不明銅製品	径 1.88×高さ 0.37		
19-7	48-12	83F 478	F57・ST201	フ ク 土	銅 鋳	5.59 頭部 1.05×1.05 胴部 0.38×0.37		
19-6	48-13	83F 54	F58	II	不明銅製品	(6.32)×径 0.38		
19-5	48-14	83F 255	F57・ST201	フ ク 土	不明銅製品	(9.40)×径 0.44		
19-3	48-15	83F 625	E48・ST223	フ ク 土	不明銅製品	6.28×0.53×0.31		
—	48-16	83F 376	E56・ST200	フ ク 土	取手状銅製品	4.19×3.28×0.47		
19-9	48-17	83F 66	F57	II 下	花 瓶 ?	4.53×2.54×0.11		
19-19	48-18	83F 945	G48・SE 77	フ ク 土	耳 か き	9.89×0.38×0.21		
19-8	48-19	83F 766	G59・SX159	フ ク 土	環状銅製品	3.89×2.74×径 0.46		
19-18	48-20	83F 536	F56・ST212	フ ク 土	不明銅製品	7.85×1.72×0.11		
—	48-21	83F 760	H57・SE 73	フ ク 土	斧	8.06×1.14×0.33	重さ約 12g	
19-16	48-22	83F 594	E47・ST216	フ ク 土	鉄 砲 玉	1.21×1.12		
—	48-23	83F 573	F48・ST214	フ ク 土	不明銅製品	1.50×0.65×径 0.20		
19-2	48-24	83F 885	E47・SE 75	フ ク 土	小 柄	(10.75)×1.44×0.38		
—	48-25	83F 596	F47・ST217	フ ク 土	小 柄	(9.54)×1.41×0.55		
—	48-26	83F 440	E47	II	小 柄	(8.47)×1.26×0.54		

—	48-27	83F 886	G46	I	キセル	5.57×径1.14		吸口
—	48-28	83F 888	G46	I	キセル	8.64×径0.94	重さ16g	吸口
—	48-29	83F1050	G42	埋土	キセル	4.91×受口側1.69×吸口側1.05		雁首
19-4	20-2	83F 684	G58・ST208	フク土	斧	(7.90)×1.33×0.22		

Ch. 69 → (Fig. 49 対応) 石製品 観察表

PL・No.	Fig No.	遺物 No.	出土区(遺構)	層位	名称	計測値(長×幅×厚)cm	特徴	備考
—	49-1	83S 125	H57・SE 73	フク土	粉挽き白	(30.80)×(30.80)×12.40		
—	49-2	83S 204	G46・ST240	フク土	〃	28.55×28.80×10.38	逆目の白	
—	49-3	82S 120	J48・SX 96	フク土	〃	27.60×27.20×10.10		
—		82S 125	J48・SX 96	フク土				
—	49-4	80S 93	G53SB03Pit	床面				
—		83S 3	E56	II下				
—		83S 5	F58	II下	茶白(上白)	(17.10)×(17.10)×(7.80)		
—		83S 8	F57	II下				
—		83S 117	F58・ST201	フク土				
—		83S 123	G58・ST210	フク土				
—		80S 31	F55	II	茶白(下白)	(31.40)×(31.40)×8.50		
—		83S 87	F57・ST201	フク土				
—	49-5	83S 112	G58・ST210	フク土	硯	9.00×5.46×2.14	裏に「人映入」の文字あり	
—		83S 128	G58・ST210	フク土				
—	49-6	83S 127	G59・ST210	床面直上	砥石	12.22×3.66×1.70		
—	49-7	83S 100	E47・ST216	フク土	砥石	(11.62)×5.16×4.62		
—	49-8	83S 230	FG40・41 SH10	灰層より上層	砥石	6.04×2.37×(1.52)		
—	49-9	83S 96	H58・SE 73	フク土	環状石製品	(5.29)×1.81×2.23		
—	49-10	83S 186	F47・ST217	フク土	自然石	3.91×3.52×2.04		
—	49-11	83S 78	F56・ST212	フク土	自然石	3.43×2.64×1.99		
—	49-12	83S 76	G56・ST207	フク土	石斧	11.24×3.70×1.80		

Ch. 72 銭貨計測集

No.	C-No.	名称	出土区遺構	外縁 外径(cm)	外縁 内径(cm)	外縁 厚さ(cm)	内郭 外径(cm)	内郭 内径(cm)	内郭 厚さ(cm)	重量 (g)	備考
1	C 1	紹聖元宝	H58 I	2.24	—	0.13	1.74	0.765	0.05		
2	C 2	〇〇〇宝	E56 II下	—	—	0.12	—	—	0.03		
3	C 3	洪武通宝	D56 I	2.325	0.78	0.15	1.74	0.60	0.05		背に「一銭」の字有
4	C 4	無文銭	H56 I	2.14	—	0.09	—	0.74	—		
5	C 5	〃	〃	2.29	—	0.1	—	0.65	—		
6	C 6	〃	H57 I	1.755	—	0.06	—	1.12	—		
7	C 7	〃	G58 I	1.64	—	0.06	—	1.08	—		
8	C 8	〃	〃	1.66	—	0.04	—	0.96	—		
9	C 9	皇宋通宝	E56 I	2.52	—	0.12	2.0	0.78	0.05		
10	C 10	〃	〃	2.25	—	0.08	—	0.57	—		
11	C 11	祥符元宝	F56 I	2.46	0.76	0.15	1.87	0.6	0.05		
12	C 12	紹定通宝	〃	2.37	0.86	0.11	1.98	0.66	0.03		
13	C 13	判読不能	E56 I	—	—	0.13	—	—	0.05		
14	C 14	洪武通宝	E57 II下	2.12	0.62	0.16	1.66	0.5	0.03		
15	C 15	五銭	E56 II	2.06	—	0.2	—	0.4	—		大正九年
16	C 16	皇宋通宝	F57 II上	2.24	0.77	0.14	1.8	0.64	0.03		
17	C 17	永樂通宝	F57 II下	2.46	0.66	0.13	2.13	0.56	0.03		
18	C 18	判読不能	E56 II下	—	—	—	—	—	—		計測不可能、2次焼成
19	C 19	太平通宝	〃	2.36	0.72	0.12	1.8	0.6	0.03		
20	C 20	永〇〇宝	〃	—	—	0.12	—	—	0.03		
21	C 21	〇〇〇宝	〃	2.2	—	0.13	—	0.76	—		
22	C 22	天禧通宝	〃	2.48	0.78	0.1	2.015	0.62	0.06		
23	C 23	一銭	F56 II	2.82	—	0.16	—	—	—		明治13年

24	C 24	無文錢	G57 Ⅲ上	1.83	—	0.06	—	0.84	—		
25	C 25	治平元宝	G59 Ⅲ上	2.38	0.75	0.14	1.77	0.66	0.05		
26	C 26	皇宋通宝	F56 Ⅱ下	2.44	—	0.11	1.94	—	0.03		
27	C 27	"	"	2.43	0.88	0.08	1.955	0.68	0.05		
28	C 28	無文錢	"	2.17	—	0.08	—	0.67	—		
29	C 29	皇宋通宝	"	2.49	0.855	0.11	2.00	0.72	0.04		
30	C 30	開元通宝	"	2.37	0.76	0.1	1.89	0.62	0.03		
31	C 31	○武○宝	G57 Ⅲ上	—	—	0.14	—	—	—		
32	C 32	判読不能	"	2.26	—	0.1	—	0.58	—		
33	C 33	熙寧元宝	"	2.36	0.78	0.12	1.94	0.68	0.06		
34	C 34	皇宋通宝	F56 Ⅲ上	2.42	0.78	0.1	1.95	0.66	0.02		
35	C 35	判読不能	G56 Ⅱ	2.18	—	0.08	1.58	0.67	0.03		
36	C 36	永樂通宝	F56 Ⅲ上	2.67	0.81	0.2	2.15	0.62	0.02		} 伴出
37	C 37	淳熙元宝	"	2.56	0.8	0.19	2.2	0.67	0.07		
38	C 38	無文錢	G56 Ⅱ	—	—	0.055	—	—	—		
39	C 39	洪武通宝	"	2.28	0.68	0.14	1.87	0.56	0.03		
40	C 40	無文錢	H57 Ⅱ	—	—	0.06	—	—	—		
41	C 41	洪武通宝	"	2.1	0.72	0.21	1.56	0.555	0.05		
42	C 42	元豐通宝	G58 Ⅱ下	2.42	0.84	0.12	1.86	0.63	0.06		
43	C 43	判読不能	"	—	—	0.08	—	—	—		
44	C 44	景德元宝	H58 Ⅱ下	2.455	0.66	0.1	1.78	0.59	0.03		
45	C 45	嘉祐通宝	G58 Ⅱ下	2.44	0.98	0.13	1.97	0.70	0.05		
46	C 46	洪武通宝	H59 Ⅱ下	2.36	0.64	0.15	2.08	0.78	0.06		
47	C 47	皇宋○○	"	—	—	0.13	—	—	0.03		
48	C 48	永樂通宝	"	2.53	0.58	0.18	2.06	0.8	0.05		
49	C 49	半 錢	"	2.23	—	0.13	—	—	—		
50	C 50	熙寧元宝	G58 Ⅱ下	2.47	0.98	0.11	2.55	0.70	0.05		
51	C 51	周通元宝	"	2.44	0.78	0.14	1.95	0.64	0.02		
52	C 52	紹聖元宝	"	2.40	0.78	0.11	1.84	0.60	0.02		
53	C 53	洪武通宝	H58 Ⅱ下	2.36	0.73	0.17	2.00	0.54	0.02		
54	C 54	"	"	2.345	0.64	0.16	1.67	0.48	0.03		
55	C 55	"	"	2.31	0.74	0.125	1.77	0.61	0.02		
56	C 56	無文錢	G58 Ⅲ上	1.725	—	0.06	—	0.74	—		
57	C 57	元祐通宝	G59 Ⅲ上	2.36	0.70	0.14	1.86	0.63	0.05		
58	C 58	無文錢	H58 Ⅱ下	—	—	0.1	—	—	—		
59	C 59	"	"	—	—	0.1	—	—	—		計測不可能
60	C 60	判読不能	"	—	—	—	—	—	—		計測不可能
61	C 61	無文錢	"	—	—	—	—	—	—		
62	C 62	元豐通宝	H59 Ⅱ下	2.355	0.81	0.12	1.74	0.62	0.03		
63	C 63	天聖元宝	"	2.42	0.78	0.1	1.96	0.62	0.03		
64	C 64	判読不能	"	—	—	0.1	—	—	—		
65	C 65	天聖元宝	"	2.48	0.80	0.11	2.00	0.7	0.05		
66	C 66	皇宋通宝	"	2.44	0.88	0.1	1.97	0.72	0.06		
67	C 67	判読不能	H58 Ⅱ下	2.40	—	0.1	—	0.68	—		2次焼成
68	C 68	元豐通宝	H59 Ⅱ下	2.24	0.6	0.14	1.82	0.56	0.05		
69	C 69	無文錢	H58 Ⅱ下	1.88	—	0.05	—	0.7	—		
70	C 70	熙寧元宝	"	2.36	0.76	0.15	1.90	0.61	0.03		
71	C 71	判読不能	"	2.25	—	0.08	—	0.62	—		
72	C 72	無文錢	H56 Ⅲ上	1.71	—	0.06	—	1.09	—		
73	C 73	判読不能	G56 Ⅲ上	—	—	0.11	—	—	—		
74	C 74	元祐通宝	G57 Pit 内フク土	2.46	0.82	0.13	1.90	0.66	0.05		
75	C 75	永樂通宝	E56 Pit 内フク土	2.5	0.665	0.17	2.03	0.55	0.06		
76	C 76	"	F57 Ⅲ上	2.395	0.69	0.16	2.05	0.56	0.05		
77	C 77	洪武通宝	E56 S T 200 フク土	2.36	0.67	0.12	2.00	0.58	0.03		
78	C 78	無文錢	F57 S T 201 フク土	1.9	—	0.08	—	0.78	—		
79	C 79	判読不能	"	2.24	—	0.1	—	0.6	—		

80	C 80	洪○通宝	G56 ST207 フク土	—	—	0.14	—	—	—		
81	C 81	無文銭	〃	2.2	—	0.08	—	0.66	—		
82	C 82	開元通宝	F56 ST202 フク土	2.62	0.73	0.12	2.1	0.65	0.05		
83	C 83	無文銭	G56 SE71 フク土	1.54	—	0.06	—	1.02	—		
84	C 84	〃	〃	1.64	—	0.06	—	1.0	—		
85	C 85	判読不能	〃	2.0	—	0.08	—	0.64	—		
86	C 86	元祐通宝	E56 ST200 フク土	2.43	0.8	0.13	1.96	0.77	0.05		
87	C 87	判読不能	F57 ST202 フク土	—	—	0.1	—	—	—		
88	C 88	熙寧元宝	E56 ■上	2.36	0.78	0.11	1.86	0.67	0.04		
89	C 89	政和通宝	F56 ST203 フク土	2.5	0.8	0.12	2.11	0.6	0.08		
90	C 90	永樂通宝	F57 ST201 フク土	2.46	0.7	0.13	2.03	0.52	0.02		
91	C 91	無文銭	H57 ST204 フク土	2.195	—	0.1	—	0.62	—		
92	C 92	祥符通宝	F57 ST201 フク土	2.38	0.77	0.1	1.92	0.62	0.02		
93	C 93	熙寧元宝	H57 ST204 フク土	2.42	0.8	0.16	1.8	0.66	0.07		
94	C 94	判読不能	H58 ST204 フク土	—	—	0.1	—	—	—		
95	C 95	永樂通宝	F56 ST203 フク土	2.5	0.63	0.13	2.05	0.57	0.03		
96	C 96	景祐通宝	D56 SE70 フク土	2.45	0.86	0.1	2.02	0.66	0.05		
97	C 97	永樂通宝	〃	2.47	0.7	0.14	2.1	0.55	0.05		
98	C 98	判読不能	E56 SE70 フク土	2.23	—	0.095	1.93	0.64	0.05		
99	C 99	洪武通宝	G58 ■上	2.095	0.61	0.135	1.70	0.51	0.02		
100	C 100	景祐元宝	〃	2.58	0.88	0.11	1.94	0.66	0.02		
101	C 101	判読不能	F57 ■上	—	—	0.18	—	—	—		
102	C 102	〃	〃	—	—	0.15	—	—	—		
103	C 103	無文銭	H57 ST204 フク土	1.82	—	0.07	—	0.8	—		
104	C 104	淳化元宝	F56 ST203 フク土	2.42	0.7	0.11	1.82	0.57	0.03		
105	C 105	○宋通宝	〃	—	—	0.15	—	—	—		2次焼成
106	C 106	皇宋通宝	〃	2.41	0.62	0.12	1.94	0.65	0.03		
107	C 107	元○〇宝	G56 SE71 フク土	2.22	0.81	0.1	1.91	0.66	0.06		
108	C 108	景德元宝	D56 SE70 フク土	2.46	0.7	0.12	1.8	0.62	0.05		
109	C 109	元符通宝	E56 SE70 フク土	2.39	0.7	0.15	1.75	0.6	0.06		
110	C 110	開元通宝	〃	2.38	0.8	0.09	2.08	0.68	0.05		
111	C 111	判読不能	F57 ST201 フク土	—	—	0.11	—	—	—		
112	C 112	○宋○	〃	—	—	0.13	—	—	0.03		
113	C 113	判読不能	D56 SE70 フク土	—	—	0.13	—	—	0.05		
114	C 114	〃	G56SE71セクション内フク土	—	—	0.1	—	—	—		
115	C 116	〃	〃	—	—	0.1	—	—	—		
116	C 117	永樂通宝	G56 ST207 床面直上	2.51	0.7	0.17	2.03	0.47	0.06		わら付
117	C 118	無文銭	G56 SE71 フク土	—	—	0.1	—	—	—		
118	C 119	元豊通宝	E56 SE70 フク土	2.38	0.84	0.1	1.93	0.7	0.03		
119	C 120	無文銭	D56 SK01 フク土	2.3	—	0.08	—	0.66	—		
120	C 121	洪武通宝	F56 ST202 フク土	2.36	0.73	0.16	1.845	0.6	0.03		
121	C 122	天聖元宝	F57 ST201 フク土	2.37	0.76	0.12	1.96	0.64	0.02		
122	C 123	無文銭	H58 ST205 フク土	2.2	—	0.1	—	0.7	—		
123	C 124	永樂通宝	〃	2.54	0.62	0.12	2.09	0.55	0.02		
124	C 125	無文銭	F56 ST203 フク土	—	—	0.08	—	0.74	—		
125	C 126	天禧通宝	F57 ST201 フク土	2.38	0.82	0.16	1.88	0.63	0.05		
126	C 127	洪武通宝	G56SE71セクション内フク土	2.13	0.63	0.1	1.68	0.5	0.05		
127	C 128	○○○宝	E56 SE70 フク土	2.36	0.8	0.12	1.87	0.66	0.05		
128	C 129	○祐○	F56 ST203 フク土	—	—	0.12	—	—	0.03		
129	C 130	判読不能	F57 ST201 フク土	2.26	—	0.08	—	0.7	—		
130	C 131	洪○○	E56 ST202 フク土	—	—	0.155	—	—	0.02		
131	C 132	元豊通宝	F56 ST203 フク土	2.3	0.85	0.11	1.89	0.62	0.05		
132	C 133	至道元宝	F56 ST202 フク土	2.5	0.71	0.14	1.795	0.58	0.05		
133	C 134	元○○宝	〃	—	—	0.13	—	—	—		
134	C 135	判読不能	E56 ST200 フク土	2.43	—	0.1	1.78	0.6	0.05		
135	C 136	朝鮮通宝	E56 SE70 フク土	2.38	0.7	0.195	1.93	0.56	0.08		

136	C 137	開元通宝	F57 ST201 フク土	2.49	0.75	0.1	2.075	0.66	0.03		
137	C 138	判読不能	"	—	—	—	—	—	—		計測不可能、2次焼成
138	C 139	"	"	2.23	—	—	—	—	—		2次焼成
139	C 140	大平通宝	E56 SE70 フク土	2.43	0.73	0.12	1.88	0.6	0.05		
140	C 141	嘉祐通宝	"	2.36	0.86	0.12	1.97	0.74	0.06		
141	C 142	元豊通宝	F56 ST202 フク土	2.42	0.86	0.1	1.79	0.64	0.03		
142	C 143	判読不能	F58 ST206 フク土	2.32	—	0.1	—	0.6	—		
143	C 144	"	"	2.28	—	0.1	—	—	0.05		
144	C 145	聖宋元宝	F57 ST206 フク土	2.40	0.75	0.16	1.84	0.58	0.05		
145	C 146	無文銭	E56 ST202 フク土	1.755	—	0.08	—	0.82	—		
146	C 147	"	E47 I	2.06	—	0.08	—	0.72	—		
147	C 148	判読不能	F47 I	—	—	0.16	—	—	0.05		
148	C 149	○武通宝	"	2.10	0.7	0.11	1.84	0.59	0.03		
149	C 150	治平元宝	G47 I	2.4	0.66	0.14	1.78	0.56	0.05		
150	C 151	洪武通宝	F47 II	2.26	0.71	0.18	1.78	0.59	0.03		背に「一銭」の字有
151	C 152	"	"	2.30	0.69	0.16	1.88	0.56	0.03		} 伴出
152	C 153	"	"	2.40	0.68	0.14	1.82	0.59	0.05		
153	C 154	判読不能	"	2.28	—	0.1	—	0.6	—		
154	C 155	無文銭	"	1.89	—	0.06	—	0.72	—		
155	C 156	"	"	1.91	—	0.07	—	0.755	—		
156	C 157	○○通宝	"	—	—	0.15	—	—	0.05		
157	C 158	寛水通宝	"	2.5	0.695	0.1	1.94	0.59	0.05		背に「文」の字有
158	C 159	元祐通宝	"	2.37	0.77	0.16	1.83	0.6	0.08		
159	C 160	無文銭	"	1.82	—	—	—	0.81	0.06		
160	C 161	天聖元宝	"	2.49	0.84	0.11	2.00	0.68	0.06		
161	C 162	嘉祐通宝	"	2.39	0.91	0.1	1.9	0.73	—		
162	C 163	元祐通宝	F47 II	2.48	0.74	0.13	1.67	0.62	0.03		
163	C 164	開元通宝	"	2.42	0.795	0.095	2.04	0.68	0.04		
164	C 165	無文銭	"	—	—	0.085	—	—	—		
165	C 166	"	G47 II	—	—	0.06	—	—	—		
166	C 167	洪武通宝	F56 ST202 フク土	2.39	0.71	0.17	2.06	0.55	0.03		
167	C 168	○○○宝	"	—	—	0.14	—	—	0.03		
168	C 169	熙寧元宝	E56 ST200 フク土	2.46	0.8	0.11	1.9	0.62	0.05		
169	C 170	聖宋元宝	D56 SE70 フク土	2.36	0.8	0.14	1.8	0.66	0.06		
170	C 171	祥符通宝	"	2.3	0.76	0.13	1.9	0.63	0.05		
171	C 172	○○○宝	F56 ST202 フク土	—	—	0.095	—	—	0.05		
172	C 173	元祐通宝	F57 ST206 フク土	2.43	0.83	0.14	1.86	0.69	0.03		
173	C 174	開元通宝	F56 ST203 Pit内フク土	2.43	0.7	0.12	1.81	0.69	0.03		
174	C 175	判読不能	E56 SX155 フク土	2.24	—	0.1	1.73	0.65	0.05		
175	C 176	洪武通宝	D56 SE70 フク土	2.26	0.7	0.12	1.81	0.62	0.03		
176	C 177	無文銭	H58 SE73 フク土	—	—	0.06	—	0.7	—		
177	C 178	"	H57 SE73 フク土	1.84	—	0.06	—	0.67	—		
178	C 179	洪武通宝	"	2.2	0.7	0.08	1.93	0.65	0.01		
179	C 180	元祐通宝	D56 SE70 フク土	2.4	0.7	0.11	1.77	0.62	0.03		
180	C 181	皇宋通宝	E56 SE70 フク土	2.46	0.8	0.11	2.00	0.7	0.03		
181	C 182	判読不能	F57 ST201 フク土	2.37	—	0.09	—	0.645	0.02		
182	C 183	無文銭	H56 SE73 フク土	—	—	0.04	—	—	—		
183	C 184	洪武通宝	E56 SE70 フク土	2.31	0.7	0.14	1.94	0.56	0.05		
184	C 185	元祐通宝	F57 ST221 フク土	2.36	0.78	0.1	1.87	0.66	0.02		
185	C 186	皇宋通宝	"	2.4	0.82	0.14	1.96	0.64	0.05		
186	C 187	○○通宝	"	—	—	0.12	—	—	0.03		
187	C 188	永樂通宝	E56 ST222 床面	2.43	—	0.15	—	0.62	0.05		
188	C 189	開元通宝	H58 SE73 フク土	2.34	0.77	0.11	1.94	0.65	0.06		
189	C 190	判読不能	"	—	—	0.1	—	—	—		
190	C 191	"	"	—	—	0.06	—	—	—		
191	C 192	元祐通宝	E46 ■上	2.4	0.84	0.12	1.1	0.66	0.06		

192	C 193	判読不能	F48 ST214 フク土	2.4	—	0.1	—	0.64	—			
193	C 194	元祐通宝	〃	2.44	0.85	0.14	2.0	0.7	0.05			
194	C 195	〇〇〇宝	F47 ST215 フク土	—	—	0.1	—	—	—			
195	C 196	判読不能	〃	—	—	—	—	—	—		計測不可能	
196	C 197	〃	F47 ST215 床面	—	—	0.13	—	—	—		2次焼成	
197	C 198	〃	E47 ST216 フク土	2.18	—	0.1	—	0.67	—			
198	C 199	〃	〃	2.095	—	0.1	—	0.755	—			
199	C 200	政和通宝	〃	2.62	0.85	0.12	2.15	0.6	0.05			
	C201~ C 359		G 56 S T 207 床面より接着して出土のため計測不能									
200	C 360	無文銭	F47 ST217 フク土	—	—	0.06	—	—	—			
201	C 361	判読不能	F47 ST218 フク土	—	—	0.1	—	—	—			
202	C 362	無文銭	〃	—	—	0.06	—	—	—			
203	C 363	判読不能	〃	2.37	—	0.16	—	0.57	—			
204	C 364	至道元宝	F46 ST228 フク土	2.52	0.73	0.16	1.78	0.63	0.05			
205	C 365	無文銭	〃	1.68	—	0.06	—	0.81	—			
206	C 366	開元通宝	〃	2.4	0.79	0.1	2.0	0.68	0.03			
207	C 367	元祐通宝	F46 ST228 床面直上	2.3	0.79	0.09	1.79	0.65	0.03			
208	C 370	洪武通宝	E56 SE70 フク土	2.38	0.755	0.18	1.96	0.56	0.03			
209	C 371	紹聖元宝	〃	2.35	—	0.095	1.93	0.7	0.03			
210	C 372	判読不能	F57 ST201 フク土	2.56	—	0.16	—	—	—			
211	C 373	元祐通宝	F57 Ⅲ上	2.37	0.74	0.13	1.82	0.63	0.03			
212	C 374	判読不能	F58 ST208 フク土	2.3	—	0.1	—	0.655	—			
213	C 375	開元通宝	〃	2.28	—	0.1	—	0.62	—			
214	C 376	無文銭	G58 SE72	1.64	—	0.08	—	1.08	—			
215	C 377	永樂通宝	E57 ST221 床面直上	2.54	0.68	0.15	2.07	0.55	0.05			
216	C 378	〇〇〇宝	F56ST202セクション内フク土	—	—	0.13	—	—	0.05			
217	C 379	無文銭	F58 ST208 フク土	—	—	0.09	—	—	—			
218	C 380	乳元重宝	〃	2.36	—	0.1	1.94	0.7	0.05			
219	C 381	判読不能	G58 ST210 フク土	2.46	—	0.1	—	0.64	—		2次焼成	
220	C 382	朝鮮通宝	〃	2.32	0.69	0.15	1.93	0.54	0.05			
221	C 383	〃	〃	2.43	0.7	0.15	1.96	0.58	0.05			
222	C 384	祥符元宝	〃	2.46	0.7	0.1	1.77	0.6	0.05			
223	C 385	元豊通宝	〃	2.3	0.8	0.1	1.77	0.6	0.05			
224	C 386	皇宋通宝	G59 ST210 フク土	2.3	0.86	0.1	1.89	0.7	0.05			
225	C 387	無文銭	G58 ST210 フク土	—	—	—	—	—	—			
226	C 388	皇〇通〇	F56 ST202 床面直上	—	—	0.1	—	—	0.03			
227	C 389	判読不能	G57 SE72 フク土	—	—	0.1	—	—	0.05			
228	C 390	〃	G58 ST208 フク土	2.3	—	0.115	1.79	0.63	0.06			
229	C 391	至道元宝	F58 ST208 フク土	2.46	0.74	0.1	1.96	0.6	—			
230	C 392	至和元宝	G58 ST210 フク土	2.22	0.82	0.09	1.73	0.68	0.05			
231	C 393	無文銭	〃	—	—	0.04	—	0.7	—			
232	C 394	聖宋元宝	D56SE70セクション内フク土	2.43	0.72	0.11	1.85	0.595	0.03			
233	C 395	判読不能	F56ST202セクション内フク土	—	—	0.1	—	—	—			
234	C 396	淳化元宝	D56 SE70 フク土	2.4	0.76	0.1	1.83	0.62	0.03			
235	C 397	洪武通宝	〃	2.13	0.62	0.15	1.67	0.49	0.02			
236	C 398	元〇通宝	G58 ST210 フク土	2.26	0.79	0.06	1.8	0.66	0.06			
237	C 399	判読不能	G58 SE72 フク土	—	—	—	—	—	—		2次焼成、計測不可能	
238	C 400	開元通宝	D56ST213セクション内フク土	2.26	—	0.1	1.71	0.6	0.05			
239	C 401	洪武通宝	G58 ST210 フク土	—	—	0.1	—	—	—		2次焼成	
240	C 402	判読不能	G58 ST208 フク土	2.295	—	0.13	—	0.62	—			
241	C 403	洪武通宝	G57 SE72 フク土	2.32	0.72	0.13	1.65	0.53	0.03			
242	C 404	〇豊通宝	E56SE70セクション内フク土	—	—	0.13	—	—	0.05			
243	C 405	祥符通宝	G59 ST210 フク土	2.4	0.73	0.11	1.87	0.63	0.03			
244	C 406	至大通宝	G58 ST210 フク土	2.36	0.67	0.14	1.89	0.53	0.05			
245	C 407	無文銭	G57SE72セクション内フク土	1.65	—	0.08	—	0.85	—			

246	C 408	元祐通宝	G58 ST210 床面直上	2.32	0.79	0.12	1.84	0.65	0.05		
247	C 409	永楽通宝	G58 ST210 フク土	2.43	0.68	0.1	1.98	0.54	0.05		
248	C 410	開元通宝	"	2.4	0.84	0.11	1.96	0.6	0.03		
249	C 411	熙寧元宝	E56 SX154 フク土	2.31	0.76	0.1	1.94	0.63	0.05		
250	C 412	〇寧元宝	"	—	—	—	—	0.6	—		2次焼成
251	C 413	至〇通宝	E56 ST220 フク土	—	—	0.17	—	—	0.03		
252	C 414	元〇通宝	G58 ST210 フク土	2.4	0.84	0.1	1.86	0.6	0.05		
253	C 415	永楽通宝	G59 ST210 床面	2.46	0.7	0.14	1.96	0.54	0.06		
254	C 416	"	"	2.43	0.7	0.13	1.98	0.56	0.05		
255	C 417	"	"	2.42	0.64	0.1	1.93	0.53	0.05		
256	C 418	判読不能	G58 ST210 床面直上	—	—	0.2	—	—	—		2次焼成
257	C 419	永楽通宝	"	2.43	0.695	0.14	1.99	0.53	0.05		
258	C 420	元〇〇宝	"	2.4	0.9	0.1	1.98	0.6	0.05		
259	C 421	永楽通宝	"	2.45	0.75	0.13	2.0	0.65	0.03		
260	C 422	"	"	2.44	0.78	0.1	1.96	0.58	0.03		
261	C 423	聖宋元宝	"	—	0.8	0.1	1.88	0.62	0.05		
262	C 424	朝鮮通宝	"	—	0.7	0.14	1.95	0.56	0.03		
263	C 425	至道元宝	G58 ST210 フク土	2.4	0.7	0.1	1.8	0.6	0.05		
264	C 426	〇〇通宝	"	2.4	0.7	0.1	—	0.64	0.05		
265	C 427	永楽通宝	"	2.44	0.72	0.12	1.98	0.6	0.05		
266	C 428	"	"	2.4	0.74	0.1	2.0	0.58	0.05		
267	C 429	皇宋通宝	"	2.4	0.995	0.1	2.02	0.73	0.05		
268	C 430	永楽通宝	E56 SX154 フク土	2.51	0.7	0.16	2.08	0.68	0.05		
269	C 431	"	G58 ST210 フク土	2.42	0.66	0.095	2.02	0.55	0.05		
270	C 432	"	"	2.46	0.68	0.1	2.0	0.53	0.05		
271	C 433	天聖元宝	"	2.4	0.8	0.1	1.98	0.67	0.05		
272	C 434	天禧通宝	"	2.28	0.78	0.08	1.76	0.6	0.05		
273	C 435	永楽通宝	"	2.43	0.68	0.1	1.96	0.54	0.05		
274	C 436	祥符通宝	G58 ST210 床面	2.48	0.74	0.1	1.98	0.66	—		
275	C 437	朝鮮通宝	G58 ST210 フク土	2.36	0.695	0.12	1.94	0.5	0.05		
276	C 438	開元通宝	G58 ST210 床面直上	2.35	0.8	0.13	1.94	0.66	0.05		
277	C 439	永楽通宝	G58 ST210 フク土	2.46	—	0.1	—	0.57	—		
278	C 440	至道元宝	"	2.43	0.7	0.12	1.74	0.54	0.05		
279	C 441	景德元宝	G58 SX157 フク土	2.44	0.69	0.1	2.0	0.59	0.05		
280	C 442	永楽通宝	G58 ST210 床面	—	0.7	0.1	2.0	0.59	0.03		
281	C 443	〇平元宝	G59 SX157 フク土	2.36	0.75	0.1	1.7	0.55	0.02		
282	C 444	永楽通宝	G58 ST210 床面	2.44	0.7	0.1	1.99	0.56	0.05		
283	C 445	"	G58 ST210 床面直上	2.43	0.7	0.1	1.98	0.58	0.05		
284	C 446	淳熙元宝	G59 SX158 床面直上	2.32	0.74	0.12	1.76	0.58	0.03		
285	C 447	朝鮮通宝	G59 SX158 フク土	2.4	0.66	0.14	1.99	0.55	0.03		
286	C 448	"	"	2.36	0.68	0.16	2.0	0.55	0.05		
287	C 449	"	"	2.38	0.7	0.14	1.98	0.57	0.03		
288	C 450	"	"	2.385	0.72	0.17	1.98	0.56	0.06		
289	C 451	天禧通宝	"	2.4	0.8	0.12	1.87	0.63	0.03		同一ポイントより出土
290	C 452	開元通宝	"	2.3	0.82	0.12	1.77	0.66	0.05		
291	C 453	皇宋通宝	"	2.35	0.8	0.12	1.86	0.65	0.03		
292	C 454	"	"	2.36	0.83	0.14	1.92	0.6	0.03		
293	C 455	永楽通宝	"	2.4	0.7	0.13	2.0	0.57	0.02		
294	C 456	至道元宝	"	2.41	0.7	0.14	1.68	0.59	0.05		
295	C 457	淳化元宝	G57 SE72 フク土	—	—	0.12	—	—	0.03		
296	C 458	元豊通宝	"	2.4	0.76	0.13	1.9	0.7	0.05		
297	C 459	治平元宝	F58 ST206 床面	2.5	0.75	0.16	1.96	0.65	0.07		
298	C 460	無文銭	F57 ST201 フク土	2.16	—	0.08	—	0.695	—		
299	C 461	〇〇通宝	E57 SX155セクション内フク土	2.31	0.76	0.08	1.88	0.62	0.03		
300	C 462	熙寧元宝	E56 SX154 フク土	2.45	0.7	0.12	1.94	0.54	0.05		フラ付着
301	C463A	洪武通宝	"	2.24	0.66	0.16	1.63	0.5	0.03		背に「一銭」の文字有

302	C 463 B	聖宋元宝	E56 SX154 フク土	2.5	0.76	0.11	1.9	0.76	0.05		
303	C 464	判読不能	F58ST208セクション内フク土	2.4	0.84	0.14	1.8	0.67	0.02		
304	C 465	淳化元宝	〃	2.26	0.7	0.1	1.83	0.62	0.05		
305	C 466	判読不能	G57 SX164 フク土	—	—	0.06	—	—	—		
306	C 467	洪武通宝	〃	2.22	0.68	0.1	1.83	0.56	0.02		
307	C 468	判読不能	G59 Ⅲ上	—	—	0.14	—	—	—		
308	C 469	洪武通宝	H59 SE76 フク土	2.32	0.7	0.14	1.9	0.59	0.03		
309	C 470	天〇元宝	G57 Pit 内フク土	2.38	0.78	0.14	1.93	0.62	0.03		
310	C 471	無文銭	G57 Pit 内床面	1.82	—	0.06	—	0.74	—		
311	C 472	〃	〃	—	—	0.07	—	—	—		
312	C 473	〃	〃	—	—	0.01	—	—	—		2次焼成
313	C 474	〃	〃	—	—	0.01	—	—	—		
314	C 475	〃	〃	—	—	0.08	—	—	—		
315	C 476	政和通宝	〃	2.34	—	0.1	2.09	0.65	—		
316	C 477	判読不能	G57 SX164 フク土	—	—	0.15	—	—	0.03		2次焼成
317	C 478	大定通宝	G57 Pit 内フク土	2.43	0.69	0.13	2.1	0.59	0.05		
318	C 479	判読不能	G56 Pit 内フク土	—	—	—	—	—	—		計測不可能
319	C 480	〇平元宝	〃	2.4	0.78	0.15	1.89	0.6	0.03		
320	C 481	皇宋通宝	G57 Pit 内フク土	2.44	0.83	0.13	2.04	0.69	0.06		
321	C 482	判読不能	G56 Pit 内フク土	2.2	—	0.1	—	0.64	—		
322	C 483	至〇〇〇	G57 Pit 内フク土	—	—	0.15	—	—	0.02		
323	C 484	開元通宝	G58 Pit 内フク土	2.48	0.83	0.17	2.14	0.69	0.05		
324	C 485	無文銭	G57 SX166 フク土	—	—	0.05	—	—	—		
325	C 486	洪武通宝	H57 SB56	2.14	0.6	0.16	1.67	0.48	0.05		背に文字有
326	C 487	〃	G57 SX167 フク土	1.86	0.76	0.1	—	0.64	0.03		
327	C 488	皇宋通宝	G58 Pit 内 フク土	2.42	—	0.12	2.0	—	0.04		
328	C 489	〃	G57 SX167 フク土	2.5	0.82	0.1	1.8	0.7	0.05		
329	C 490	開元通宝	G56 Pit 内 フク土	2.48	0.8	0.1	2.04	0.65	0.05		
330	C 491	皇宋通宝	G57 SX166 フク土	2.4	0.87	0.12	1.94	0.73	0.05		
331	C 492	〇元〇宝	〃	—	—	0.13	—	—	0.03		
332	C 493	判読不能	G57 SX168 フク土	—	—	0.1	—	—	0.07		
333	C 494	無文銭	〃	1.82	—	0.035	—	0.68	—		
334	C 495	〃	〃	1.78	—	0.06	—	0.77	—		
335	C 496	判読不能	G57 SX164 フク土	—	—	0.1	—	—	—		
336	C 497	元祐通宝	〃	2.48	0.8	0.1	2.08	0.69	0.05		
337	C 498	判読不能	〃	2.76	—	0.11	—	0.63	—		
338	C 499	〇祐〇宝	G57 SX167 フク土	—	—	—	—	—	0.03		
339	C 500	判読不能	G57 SX164 フク土	—	—	—	—	—	—		2次焼成、計測不能
340	C 501	元豊通宝	〃	2.4	—	0.1	1.695	0.6	0.05		
341	C 502	無文銭	G57 Pit 内 フク土	2.04	—	0.1	—	0.68	—		
342	C 503	〃	G57 SX164 フク土	2.29	—	0.1	—	0.62	—		
343	C 504	開元通宝	G57 SX169 フク土	2.45	—	0.11	2.15	—	0.03		
344	C 505	〇〇〇宝	G57 SX169 床面直上	—	—	0.14	—	—	0.05		2次焼成
345	C 506	嘉祐元宝	G57 ST210 フク土	2.4	0.72	0.12	1.86	0.58	0.05		
346	C 507	永楽通宝	G58ST210セクション内フク土	2.4	—	0.1	1.94	0.56	0.05		
347	C 508	元符通宝	G58 ST210 床面	2.3	0.74	0.1	1.8	0.6	0.06		
348	C 509	天聖元宝	G58 ST210 床面直上	2.3	0.76	0.09	1.89	0.66	0.05		
349	C 510	治平元宝	G58ST210セクション内フク土	2.3	0.74	0.1	1.82	0.55	0.05		
350	C 511	朝鮮通宝	G58 ST210 床面直上	2.33	0.62	0.1	1.9	0.52	0.05		
351	C 512	洪武通宝	G58ST210セクション内フク土	2.2	0.7	0.1	1.98	0.58	0.05		
352	C 513	開元通宝	G 5 6 Ⅲ	2.36	—	0.11	—	0.68	0.05		
353	C 514	朝鮮通宝	G58ST210セクション内フク土	2.32	0.7	0.1	1.92	0.56	0.01		
354	C 515	永楽通宝	G58ST210セクション内床面直上	2.43	0.74	0.145	1.93	0.55	0.05		
355	C 516	周通元宝	〃	2.395	0.73	0.1	1.9	0.62	0.05		
356	C 517	永楽通宝	〃	—	0.66	0.1	2.04	0.585	0.05		
357	C 518	判読不能	G 45 I	2.16	—	0.09	—	0.67	—		

358	C 519	元豊通宝	G58 ST210 フク土	2.355	0.84	0.11	1.82	0.7	0.03		
359	C 520	熙寧元宝	G46 I	2.28	0.76	0.11	1.86	0.69	0.03		
360	C 521	淳〇〇宝	F44 I	—	—	0.11	—	—	0.03		
361	C 522	永樂通宝	G44 II	2.45	0.7	0.1	2.0	0.58	0.03		
362	C 523	元符通宝	〃	2.38	0.7	0.1	1.75	0.63	0.03		
363	C 524	判読不能	〃	—	—	0.1	—	—	—		
364	C 525	洪武通宝	〃	2.26	0.66	0.1	1.8	0.56	0.03		
365	C 526	〃	〃	2.35	0.78	0.14	1.92	0.6	—		
366	C 527	皇宋通宝	〃	2.4	0.88	0.14	1.9	0.74	0.05		
367	C 528	無文銭	〃	1.9	—	0.05	—	0.75	—		同一ポイントより出土
368	C 529	判読不能	〃	2.3	0.68	0.12	1.58	0.56	0.02		
369	C 530	無文銭	〃	1.91	—	0.06	—	0.66	—		
370	C 531	洪武通宝	〃	2.3	0.68	0.12	1.86	0.56	0.02		
371	C 532	〃	〃	2.26	0.68	0.12	1.58	0.54	0.03		
372	C 533	元豊通宝	〃	2.4	0.79	0.095	1.78	0.66	0.02		
373	C 534	判読不能	〃	2.2	—	0.1	—	0.65	—		
374	C 535	皇宋通宝	F43 I	2.45	0.8	0.14	1.88	0.68	0.05		
375	C 536	鉄銭	F42 I	2.7	—	—	—	0.74	—		
376	C 537	無文銭	G56ST207Pit内フク土	1.9	—	0.11	—	0.7	—		
377	C 538	熙寧元宝	G43 I	2.41	0.77	0.15	1.92	0.63	0.06		
378	C 539	無文銭	G44 III上	2.16	—	0.11	—	0.8	—		
379	C 540	元豊通宝	E43 II	2.3	—	0.1	—	0.66	—		
380	C 541	天〇〇宝	〃	—	—	0.13	—	—	0.05		
381	C 542	判読不能	E47ST227セクション内フク土	—	—	—	—	—	—		2次焼成、計測不可能
382	C 543	無文銭	〃	1.94	—	0.08	—	0.75	—		
383	C 544	淳化元宝	F42 III上	2.46	0.69	0.13	1.8	0.55	0.03		
384	C 545	祥符通宝	〃	2.43	0.7	0.12	1.9	0.58	0.04		
385	C 546	判読不能	G48 SE77 フク土	—	—	0.12	—	—	—		
386	C 547	宣徳通宝	〃	2.48	0.6	0.1	1.98	0.49	0.03		
387	C 548	判読不能	〃	2.38	—	0.12	—	0.655	—		
388	C 549	宣和通宝	F48 ST225 フク土	2.3	0.78	0.08	1.83	0.58	0.03		
389	C 550	景定元宝	G48 SE77 フク土	2.44	0.68	0.12	1.9	0.56	0.05		
390	C 551	無文銭	G43 III	—	—	0.06	—	—	—		C551~C606まで
391	C 552	〇〇通宝	〃	2.08	0.7	0.1	1.7	0.59	0.01		同一ポイントより出土
392	C 553	至道元宝	〃	2.31	0.69	0.16	1.695	0.55	0.03		
393	C 554	〃	〃	2.26	0.8	0.1	1.89	0.84	0.02		
394	C 555	洪武通宝	〃	2.24	0.66	0.11	1.78	0.54	0.05		
395	C 556	〃	〃	2.17	0.7	0.1	1.795	0.56	0.05		
396	C 557	無文銭	〃	1.88	—	0.04	—	0.71	—		
397	C 558	判読不能	〃	2.27	—	0.08	—	0.62	—		
398	C 559	〃	〃	2.16	—	0.06	—	0.64	—		
399	C 560	無文銭	〃	2.17	—	0.06	—	0.775	—		
400	C 561	元〇〇宝	〃	2.36	0.84	0.1	1.86	0.7	0.02		
401	C 562	天禧通宝	〃	2.4	0.78	0.1	1.92	0.64	0.02		
402	C 563	判読不能	〃	2.22	0.82	0.1	1.76	0.62	0.03		
403	C 564	洪武通宝	〃	2.26	0.72	0.12	1.86	0.57	0.01		
404	C 565	〇〇〇宝	〃	2.32	0.78	0.12	1.92	0.64	0.05		
405	C 566	元豊通宝	〃	2.4	0.8	0.1	1.895	0.64	0.02		
406	C 567	洪武通宝	〃	2.26	0.8	0.1	1.86	0.6	0.01		
407	C 568	無文銭	〃	1.95	—	0.06	—	0.74	—		
408	C 569	〃	〃	2.2	—	0.07	—	0.63	—		
409	C 570	判読不能	〃	2.26	—	0.1	—	0.6	—		
410	C 571	皇宋通宝	〃	2.32	0.8	0.1	1.97	0.6	0.05		
411	C 572	無文銭	〃	2.18	—	0.08	—	0.66	—		
412	C 573	判読不能	〃	2.29	0.8	0.12	1.8	0.7	0.05		
413	C 574	元祐通宝	〃	2.3	0.8	0.1	1.86	0.67	0.03		

414	C 575	天聖元宝	G43 Ⅱ	2.3	0.87	0.1	1.85	0.62	0.05		
415	C 576	熙寧元宝	〃	2.33	0.79	0.13	1.84	0.68	0.03		
416	C 577	無文銭	〃	1.94	—	0.06	—	0.73	—		
417	C 578	判読不能	〃	2.28	0.8	0.1	1.75	0.65	0.03		
418	C 579	〃	〃	2.28	—	0.1	—	0.67	—		
419	C 580	無文銭	〃	2.1	—	0.1	—	0.76	—		
420	C 581	洪武通宝	〃	2.14	0.74	0.1	1.82	0.6	0.01		
421	C 582	祥符通宝	〃	2.195	0.74	0.1	1.76	0.66	0.03		
422	C 583	洪武通宝	〃	2.14	—	0.1	1.835	0.6	0.02		
423	C 584	無文銭	〃	1.9	—	0.06	—	0.68	—		
424	C 585	洪武通宝	〃	2.2	0.795	0.1	1.88	0.66	0.02		
425	C 586	無文銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.7	—		
426	C 587	〃	〃	2.1	—	0.06	—	0.75	—		
427	C 588	洪武通宝	〃	2.1	0.68	0.1	1.78	0.56	0.05		
428	C 589	祥符元宝	〃	2.15	0.76	0.095	1.73	0.62	0.02		
429	C 590	洪武通宝	〃	2.18	—	0.1	1.8	—	0.02		
430	C 591	〃	〃	2.29	0.74	0.1	1.86	0.58	0.03		
431	C 592	無文銭	〃	2.09	—	0.09	—	0.68	—		
432	C 593	判読不能	〃	2.145	—	0.1	—	0.78	—		
433	C 594	洪武通宝	〃	2.225	0.78	0.12	1.885	0.58	0.03		
434	C 595	祥符通宝	〃	2.36	0.78	0.1	1.82	0.67	0.01		
435	C 596	天聖元宝	〃	2.3	—	0.13	2.05	—	0.05		
436	C 597	無文銭	〃	1.95	—	0.06	—	0.69	—		
437	C 598	皇宋通宝	〃	2.34	0.78	0.1	1.72	0.66	0.05		
438	C 599	至和通宝	〃	2.28	—	0.08	—	0.68	—		
439	C 600	判読不能	〃	2.19	—	0.08	—	0.7	—		
440	C 601	洪武通宝	〃	2.195	0.7	0.1	1.81	0.56	0.03		
441	C 602	無文銭	〃	1.895	—	0.06	—	0.66	—		
442	C 603	洪武通宝	〃	2.29	0.7	0.13	1.99	0.58	0.03		
443	C 604	祥符元宝	〃	2.34	0.78	0.1	1.82	0.68	0.04		
444	C 605	皇宋通宝	〃	2.28	0.8	0.1	1.72	0.69	0.05		
445	C 606	無文銭	〃	—	—	0.06	—	0.73	—		
446	C 607	五十銭	F44 Ⅲ上	1.91	—	0.13	—	—	—		
447	C 608	無文銭	G43 Ⅲ上	1.84	—	0.04	—	0.76	—		
448	C 609	皇宋通宝	G48 SE77 フク土	2.43	0.81	0.08	1.75	0.64	0.03		
449	C 610	無文銭	F47 ST218	1.2	—	0.1	—	0.79	—		
450	C 611	〃	〃	1.72	—	0.1	—	1.05	—		2次焼成
451	C 612	〃	〃	1.7	—	0.06	—	0.82	—		
452	C 613	〃	〃	1.795	—	0.1	—	1.13	—		
453	C 614	洪武通宝	E48 SE74 フク土	2.04	0.71	0.18	1.58	0.52	0.05		背に「一銭」の文字有
454	C 615	無文銭	F47ST218セクション内フク土	1.77	—	0.05	—	0.955	—		
455	C 616	〃	〃	1.68	—	0.06	—	0.89	—		
456	C 617	〃	〃	1.6	—	0.1	—	1.1	—		
457	C 618	〃	G47ST218セクション内フク土	1.46	—	0.06	—	1.07	—		
458	C 619	判読不能	G46 ST231 フク土	—	—	—	—	—	—		
459	C 620	熙寧元宝	F48ST231セクション内フク土	2.38	0.77	0.12	1.9	0.62	0.05		
460	C 621	判読不能	G48 ST235 フク土	—	—	0.14	—	—	0.05		
461	C 622	洪武通宝	F47 Pit 内床面	1.96	—	0.06	1.74	0.74	0.02		
462	C 623	無文銭	G48 Pit 内フク土	1.94	—	0.05	—	0.74	—		
463	C 624	〃	E48 Pit 内フク土	2.32	—	0.11	—	0.7	—		
464	C 625	元豊通宝	E46 SB32 フク土	2.48	0.78	0.11	1.8	0.6	0.05		
465	C 626	宣和通宝	〃	2.4	0.74	0.1	2.06	0.6	0.05		
466	C 627	至和元宝	〃	2.39	0.7	0.1	1.8	0.6	0.05		
467	C 628	天聖元宝	〃	2.5	0.815	0.115	1.99	0.68	0.05		
468	C 629	祥符通宝	〃	2.4	0.7	0.1	1.92	0.61	0.05		
469	C 630	永樂通宝	〃	2.4	0.695	0.12	2.08	0.58	0.05		

470	C 631	皇宋通宝	E46 SB32 フク土	2.48	0.72	0.1	1.65	0.6	0.05		
471	C 632	至道元宝	"	2.4	0.69	0.1	1.64	0.6	0.03		
472	C 633	正隆元宝	"	2.4	0.74	0.1	2.0	0.66	0.05		
473	C 634	判読不能	G58 ST237 フク土	—	—	0.12	—	—	—		
474	C 635	天聖元宝	F59 SD74 フク土	2.4	0.81	0.12	1.97	0.68	0.03		
475	C 636	淳熙元宝	F59 SX158 フク土	2.37	0.82	0.15	1.74	0.65	0.05		
476	C 637	熙寧元宝	F6ST228セクション内フク土	2.35	0.8	0.1	1.84	0.69	0.05		
477	C 638	無文銭	G45 Pit内フク土	1.36	—	0.05	—	0.86	—		
478	C 639	開元通宝	G44 SX185 フク土	—	—	0.14	—	0.66	0.06		
479	C 640	熙寧元宝	F42SX184(81SX145)埋土	2.36	0.77	0.12	1.74	0.67	0.05		
480	C 641	無文銭	E47 SX179 フク土	—	—	0.06	—	—	—		
481	C 642	"	F47 SX179 フク土	—	—	—	—	—	—		計測不可能
482	C 643	判読不能	G43 ST234 フク土	2.42	—	0.1	—	0.62	—		
483	C 644	永樂通宝	G45 SX176 フク土	2.54	—	0.1	—	0.54	—		
484	C 645	無文銭	G42 ST234床面直上	2.16	—	0.095	—	0.64	—		
485	C 646	判読不能	G43 ST234 フク土	2.25	—	0.095	—	0.58	—		
486	C 647	無文銭	G45 Pit内フク土	1.7	—	0.06	—	0.89	—		
487	C 648	判読不能	G45 Ⅲ上	2.295	—	0.11	—	0.6	—		
488	C 649	"	G44 Pit内フク土	—	—	0.14	—	—	0.03		
489	C 650	皇宋通宝	E57 ST201床面	—	—	—	—	—	—		計測不可能
490	C 651	永樂通宝	G45 SX193 フク土	2.51	0.7	0.14	2.12	0.59	0.03		
491	C 652	"	G45 Ⅲ下	2.56	0.66	0.16	2.08	0.54	0.05		
492	C 653	〇〇〇宝	G45 SX192 フク土	—	—	0.1	—	—	0.01		
493	C 654	洪武通宝	E43 Ⅲ下	2.28	0.7	0.14	1.88	0.59	0.03		
494	C 655	判読不能	"	2.3	—	—	—	0.64	—		同一ポイントより出土
495	C 656	"	"	2.28	—	0.11	—	0.63	—		C655とC657は布付着
496	C 657	"	"	2.18	—	0.12	—	0.58	—		
497	C 658	元祐通宝	G46 ST239 フク土	2.58	0.86	0.12	1.92	0.69	0.05		
498	C 659	〇〇〇宝	G46 Ⅲ	—	—	0.15	—	—	—		
499	C 660	無文銭	G45 ST240 フク土	—	—	0.06	—	0.98	—		
500	C 661	開元通宝	"	2.28	0.75	0.11	1.95	0.64	0.03		
501	C 662	洪武通宝	G41SH10セクション内フク土	2.04	0.62	0.1	1.6	0.46	0.05		背に文字有
502	C 663	判読不能	"	2.41	—	0.12	1.84	0.51	0.05		
503	C 664	寛永通宝	北館表採	2.3	0.8	0.1	1.9	0.55	0.05		背に「小」の文字有
504	C 665	無文銭	"	2.28	—	0.09	—	0.6	—		
505	C 666	"	" B区	1.18	—	0.08	—	0.7	—		
506	C 667	〇聖〇〇	G58 ST209 フク土	—	—	0.1	—	—	—		
507	C 668	無文銭	F43 Ⅲ	1.82	—	0.08	—	0.7	—		
508	C 701	洪武通宝	G45 SP10 フク土	2.2	0.75	0.1	1.8	0.6	0.02		
509	C 702	無文銭	"	2.12	—	0.12	—	0.84	—		
510	C 703	"	"	2.2	—	0.095	—	0.66	—		
511	C 704	淳熙元宝	"	2.2	0.79	0.1	1.66	0.65	0.03		
512	C 705	判読不能	"	2.28	—	0.12	1.92	0.7	0.05		
513	C 706	無文銭	"	2.2	—	0.1	—	0.7	—		
514	C 707	元豊通宝	"	2.44	0.74	0.08	1.14	0.65	0.01		
515	C 708	無文銭	"	2.2	—	0.1	—	0.68	—		
516	C 709	洪武通宝	"	2.16	0.74	0.1	1.84	0.62	0.02		
517	C 710	"	"	2.16	0.77	0.11	1.86	0.68	0.02		
518	C 711	開元通宝	"	2.35	0.8	0.12	1.86	0.66	0.03		
519	C 712	無文銭	"	2.17	—	0.1	—	0.8	—		
520	C 713	洪武通宝	"	2.2	0.74	0.1	1.9	0.64	0.03		
521	C 714	元豊通宝	"	2.4	0.82	0.1	1.98	0.73	0.03		
522	C 715	紹聖元宝	"	2.36	—	0.1	1.84	0.755	0.02		
523	C 716	無文銭	"	2.2	—	0.1	—	0.56	—		
524	C 717	天聖元宝	"	2.4	—	0.08	1.94	0.7	—		
525	C 718	祥符通宝	"	2.32	0.8	0.12	1.77	0.7	0.02		

526	C 719	無文錢	G45 SP10 フク土	2.16	—	0.09	—	0.7	0.03		
527	C 720	〃	〃	2.17	—	0.1	—	0.82	—		
528	C 721	〃	〃	2.25	—	0.09	—	0.74	—		
529	C 722	〃	〃	2.2	—	0.1	—	0.69	—		
530	C 723	〃	〃	2.25	—	0.1	—	0.7	—		
531	C 724	祥符元宝	〃	2.26	—	0.1	1.84	0.72	0.03		
532	C 725	開元通宝	〃	2.36	0.68	0.1	1.84	0.66	0.03		
533	C 726	洪武通宝	〃	2.19	0.74	0.12	1.88	0.6	0.02		
534	C 727	政和通宝	〃	2.43	0.8	0.1	2.1	0.68	0.02		
535	C 728	祥符通宝	〃	2.24	0.74	0.1	1.7	0.62	0.03		
536	C 729	開元通宝	〃	2.2	0.8	0.09	1.8	0.74	0.02		
537	C 730	天聖元宝	〃	2.25	0.8	0.1	1.76	0.7	0.03		
538	C 731	淳祐元宝	〃	2.3	0.86	0.1	2.0	0.68	0.02		
539	C 732	洪武通宝	〃	2.1	0.73	0.1	1.8	0.58	0.02		
540	C 733	無文錢	〃	2.13	—	0.1	—	0.65	—		
541	C 734	〃	〃	2.2	—	0.1	—	0.6	—		
542	C 735	洪武通宝	〃	2.2	0.74	0.1	1.83	0.65	0.02		
543	C 736	咸平元宝	〃	2.4	0.7	0.1	1.78	0.56	0.02		
544	C 737	祥符元宝	〃	2.43	0.68	0.12	1.84	0.58	0.02		
545	C 738	皇宋元宝	〃	2.4	0.87	0.12	2.0	0.67	0.05		
546	C 739	天禧通宝	〃	2.5	0.8	0.1	2.06	0.7	0.03		
547	C 740	開元通宝	〃	2.44	0.78	0.12	1.96	0.68	0.05		
548	C 741	元豐通宝	〃	2.46	0.8	0.1	1.8	0.67	0.02		
549	C 742	咸平元宝	〃	2.46	0.76	0.1	1.82	0.64	0.02		
550	C 743	天聖元宝	〃	2.5	0.77	0.14	2.0	0.7	0.02		
551	C 744	嘉祐通宝	〃	2.5	0.87	0.1	1.9	0.74	0.05		
552	C 745	元祐通宝	〃	2.42	0.82	0.12	1.94	0.7	0.02		
553	C 746	開元通宝	〃	2.46	0.75	0.13	2.05	0.7	0.02		
554	C 747	皇宋通宝	〃	2.46	0.85	0.13	1.92	0.74	0.03		
555	C 748	紹聖元宝	〃	2.43	0.77	0.1	1.82	0.68	0.02		
556	C 749	洪武通宝	〃	2.14	0.72	0.1	1.86	0.62	0.02		
557	C 750	開元通宝	〃	2.26	0.7	0.1	1.86	0.6	0.03		
558	C 751	無文錢	〃	2.1	—	0.1	—	0.73	—		
559	C 752	天禧通宝	〃	2.43	0.7	0.14	1.88	0.62	0.05		
560	C 753	元〇通宝	〃	2.16	—	0.08	—	0.72	0.03		
561	C 754	淳祐元宝	〃	2.3	0.83	0.1	1.895	0.69	0.02		
562	C 755	熙寧元宝	〃	2.29	0.72	0.1	1.88	0.58	0.03		
563	C 756	嘉祐通宝	〃	2.34	0.8	0.1	1.89	0.68	0.03		
564	C 757	元祐通宝	〃	2.3	0.82	0.1	1.84	0.7	0.05		
565	C 758	洪武通宝	〃	2.06	0.76	0.1	—	0.6	0.02		
566	C 759	無文錢	〃	2.2	—	0.1	1.86	0.7	—		
567	C 760	元祐通宝	〃	2.32	0.89	0.12	1.89	0.65	0.05		
568	C 761	洪武通宝	〃	2.2	0.8	0.08	—	0.66	0.01		
569	C 762	〇〇〇宝	〃	2.22	—	0.12	—	0.67	—		
570	C 763	無文錢	〃	2.2	—	0.07	—	0.7	—		
571	C 764	〃	〃	2.15	—	0.08	—	0.79	—		
572	C 765	元祐通宝	〃	2.2	—	0.09	1.69	0.64	0.05		
573	C 766	無文錢	〃	2.16	—	0.1	—	0.75	—		
574	C 767	洪武通宝	〃	2.17	0.74	0.1	1.79	0.58	0.03		
575	C 768	開元通宝	〃	2.22	0.81	0.1	1.9	0.69	0.02		
576	C 769	洪武通宝	〃	2.28	0.7	0.18	1.84	0.5	0.05		
577	C 770	無文錢	〃	2.1	—	0.1	—	0.79	—		
578	C 771	開元通宝	〃	2.32	0.78	0.1	1.9	0.65	0.05		
579	C 772	〇〇通宝	〃	2.16	0.83	0.1	1.72	0.6	0.03		
580	C 773	天禧通宝	〃	2.34	0.76	0.1	1.8	0.62	0.03		
581	C 774	判読不能	〃	2.28	—	0.1	—	0.66	0.05		

582	C 775	無文銭	G45 SP 10 フク士	2.22	—	0.08	—	0.58	—		
583	C 776	〃	〃	2.2	—	0.09	—	0.78	—		
584	C 777	〃	〃	2.18	—	0.08	—	0.7	—		
585	C 778	〃	〃	2.1	—	0.1	—	0.66	—		
586	C 779	〃	〃	2.28	—	0.1	—	0.6	—		
587	C 780	元祐通宝	〃	2.29	0.84	0.1	1.8	0.64	0.02		
588	C 781	〇〇〇宝	〃	2.16	0.8	0.08	1.67	0.76	0.01		
589	C 782	無文銭	〃	2.19	0.89	0.1	1.84	0.7	—		
590	C 783	熙寧元宝	〃	2.3	0.76	0.1	1.84	0.7	0.03		
591	C 784	元豐通宝	〃	2.24	0.83	0.08	1.9	0.6	0.01		
592	C 785	〃	〃	2.25	—	0.09	—	0.56	0.02		
593	C 786	無文銭	〃	2.15	0.76	0.1	1.7	0.7	—		
594	C 787	判読不能	〃	2.16	—	0.06	—	0.6	0.01		
595	C 788	洪武通宝	〃	2.16	0.76	0.1	1.76	0.6	—		
596	C 789	祥符通宝	〃	2.4	—	0.1	—	0.6	0.02		
597	C 790	無文銭	〃	2.2	0.72	0.12	1.88	0.64	—		
598	C 791	洪武通宝	〃	2.28	—	0.13	—	0.56	0.03		
599	C 792	無文銭	〃	2.12	—	0.1	—	0.78	—		
600	C 793	〇〇通〇	〃	2.32	—	0.1	1.9	0.6	0.03		
601	C 794	開元通宝	〃	2.13	—	0.08	1.83	0.54	0.03		
602	C 795	洪武通宝	〃	2.32	0.72	0.12	2.0	0.58	0.05		
603	C 796	祥符元宝	〃	2.2	—	0.09	1.67	0.6	0.02		
604	C 797	洪武通宝	〃	2.28	0.74	0.1	1.87	0.56	0.05		
605	C 798	皇宋通宝	〃	2.29	0.79	0.1	1.76	0.66	0.03		
606	C 799	無文銭	〃	2.1	—	0.1	—	0.7	—		
607	C 800	皇宋通宝	〃	2.2	0.86	0.08	1.77	0.66	0.05		
608	C 801	判読不能	〃	2.1	—	0.09	—	0.65	0.05		
609	C 802	開元通宝	〃	2.23	0.86	0.06	1.86	0.63	0.03		
610	C 803	洪武通宝	〃	2.2	0.76	0.1	1.82	0.6	0.01		
611	C 804	無文銭	〃	2.2	—	0.095	—	0.68	—		
612	C 805	洪武通宝	〃	2.25	0.8	0.1	1.86	0.6	0.05		
613	C 806	皇宋通宝	〃	2.26	0.86	0.1	1.74	0.68	0.05		
614	C 807	無文銭	〃	2.2	—	0.08	—	0.65	—		
615	C 808	洪武通宝	〃	2.08	0.76	0.08	1.8	0.64	0.05		
616	C 809	〃	〃	2.29	0.8	0.1	1.89	0.6	0.03		
617	C 810	無文銭	〃	2.22	—	0.1	—	0.67	—		
618	C 811	熙寧通宝	〃	2.4	0.88	0.1	1.97	0.7	0.05		
619	C 812	無文銭	〃	2.3	—	0.08	—	0.66	—		
620	C 813	元祐通宝	〃	2.46	0.82	0.1	2.04	0.67	0.05		
621	C 814	洪武通宝	〃	2.16	0.7	0.1	1.8	0.58	0.02		
622	C 815	無文銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.63	—		
623	C 816	太平通宝	〃	2.34	0.7	0.07	2.0	0.6	0.03		
624	C 817	洪武通宝	〃	2.16	0.75	0.1	1.75	0.56	0.05		
625	C 818	開元通宝	〃	2.4	0.78	0.12	2.04	0.65	0.05		
626	C 819	元豐通宝	〃	2.3	0.89	0.1	1.98	0.7	0.05		
627	C 820	洪武通宝	〃	2.28	0.7	0.13	1.86	0.56	0.05		
628	C 821	無文銭	〃	2.16	—	0.1	—	0.7	—		
629	C 822	元豐通宝	〃	2.2	—	0.08	—	0.69	—		
630	C 823	天聖元宝	〃	2.22	—	0.06	—	0.68	—		
631	C 824	無文銭	〃	2.2	0.7	0.12	1.82	0.56	0.02		
632	C 825	〃	〃	2.18	—	0.08	—	—	—		
633	C 826	洪武通宝	〃	2.24	—	0.08	—	0.72	—		
634	C 827	判読不能	〃	—	—	0.12	—	0.64	—		
635	C 828	無文銭	〃	2.16	0.78	0.1	1.88	0.63	0.05		
636	C 829	〃	〃	2.2	—	0.1	—	0.68	—		
637	C 830	元祐通宝	〃	2.36	0.66	0.1	1.76	0.56	0.02		

638	C 831	無文銭	G 45 SP 10 フク土	2.22	—	0.1	—	0.68	—		
639	C 832	洪武通宝	〃	2.16	0.66	0.1	1.76	0.56	0.02		
640	C 833	祥符元宝	〃	2.12	—	0.08	1.7	0.59	0.03		
641	C 834	洪武通宝	〃	2.22	0.7	0.13	1.8	0.57	0.03		
642	C 835	無文銭	〃	2.24	—	0.12	—	0.64	—		
643	C 836	熙寧元宝	〃	2.34	0.89	0.1	1.88	0.68	0.03		
644	C 837	無文銭	〃	2.22	—	0.12	—	0.74	—		
645	C 838	天禧通宝	〃	2.34	0.82	0.09	1.88	0.7	0.03		
646	C 839	洪武通宝	〃	2.16	0.7	0.1	1.82	0.57	0.02		
647	C 840	判読不能	〃	2.26	—	0.1	1.8	0.64	—		
648	C 841	無文銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.64	—		
649	C 842	洪武通宝	〃	2.23	0.68	0.125	1.82	0.54	0.03		
650	C 843	無文銭	〃	2.16	—	0.1	—	0.7	—		
651	C 844	紹聖元宝	〃	2.3	0.78	0.1	1.83	0.62	0.02		
652	C 845	洪武通宝	〃	2.2	0.7	0.12	1.84	0.56	0.03		
653	C 846	無文銭	〃	2.1	—	0.07	—	0.74	—		
654	C 847	皇宋通宝	〃	2.27	0.76	0.09	1.8	0.59	0.01		
655	C 848	祥符元宝	〃	2.16	0.7	0.1	1.66	0.59	0.02		
656	C 849	無文銭	〃	2.28	—	0.12	—	0.6	—		
657	C 850	〃	〃	2.22	—	0.1	—	0.7	—		
658	C 851	洪武通宝	〃	2.24	0.74	0.1	1.87	0.55	0.01		
659	C 852	〃	〃	2.24	0.74	0.08	1.8	0.62	0.01		
660	C 853	元豊通宝	〃	2.3	0.83	0.1	1.82	0.7	0.03		
661	C 854	無文銭	〃	2.18	—	0.1	—	0.7	—		
662	C 855	〃	〃	2.16	—	0.08	—	0.76	—		
663	C 856	皇宋通宝	〃	2.3	0.84	0.08	1.84	0.68	0.05		
664	C 857	慶元通宝	〃	2.36	0.82	0.1	1.87	0.64	0.03		
665	C 858	無文銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.69	—		
666	C 859	洪武通宝	〃	2.26	0.76	0.14	1.9	0.56	0.03		
667	C 860	無文銭	〃	2.16	—	0.06	—	0.7	—		
668	C 861	〃	〃	2.16	—	0.1	—	0.7	—		
669	C 862	元祐通宝	〃	2.24	0.8	0.1	1.82	0.67	0.02		
670	C 863	洪武通宝	〃	2.1	0.74	0.1	1.78	0.6	0.01		
671	C 864	熙寧元宝	〃	2.3	0.885	0.08	1.86	0.7	0.05		
672	C 865	無文銭	〃	2.28	—	0.06	—	0.68	—		
673	C 866	軋元重宝	〃	2.35	0.74	0.12	1.83	0.64	0.05		
674	C 867	無文銭	〃	2.24	—	0.1	—	0.66	—		
675	C 868	〃	〃	2.24	—	0.07	—	0.6	—		
676	C 869	元祐通宝	〃	2.34	0.84	0.1	1.82	0.68	0.02		
677	C 870	皇宋通宝	〃	2.24	0.82	0.08	1.76	0.82	0.03		
678	C 871	無文銭	〃	2.15	—	0.09	—	0.68	—		
679	C 872	洪武通宝	〃	2.26	0.74	0.13	1.82	0.55	0.02		
680	C 873	無文銭	〃	2.16	—	0.09	—	0.67	—		
681	C 874	祥符通宝	〃	2.2	0.77	0.1	1.79	0.65	0.05		
682	C 875	元祐通宝	〃	2.3	0.86	0.1	1.8	0.67	0.03		
683	C 876	元豊通宝	〃	2.34	0.77	0.1	1.73	0.68	0.01		
684	C 877	洪武通宝	〃	2.19	0.7	0.13	1.84	0.56	0.03		
685	C 878	祥符元宝	〃	2.3	0.7	0.08	1.76	0.6	0.01		
686	C 879	皇宋通宝	〃	2.36	0.86	0.1	1.8	0.6	0.03		
687	C 880	元祐通宝	〃	2.11	0.84	0.07	1.7	0.59	0.01		
688	C 881	無文銭	〃	2.15	—	0.1	—	0.75	—		
689	C 882	洪武通宝	〃	2.27	0.8	0.13	1.88	0.64	0.05		
690	C 883	〃	〃	2.18	0.72	0.12	1.84	0.57	0.01		
691	C 884	祥符元宝	〃	2.41	0.74	0.1	1.76	0.62	0.03		
692	C 885	洪武通宝	〃	2.25	0.7	0.14	1.81	0.56	0.02		
693	C 886	〃	〃	2.14	0.7	0.12	1.8	0.56	0.03		

694	C 887	無文錢	G45 SP10 フク土	2.08	—	0.1	—	0.7	—		
695	C 888	〃	〃	2.26	—	0.1	—	0.66	—		
696	C 889	明道元宝	〃	2.46	0.86	0.1	1.98	0.67	0.05		
697	C 890	咸平元宝	〃	2.43	0.74	0.1	1.7	0.6	0.02		
698	C 891	元祐通宝	〃	2.1	0.8	0.06	1.65	0.73	0.03		
699	C 892	開元通宝	〃	2.3	0.8	0.1	1.8	0.63	0.03		
700	C 893	無文錢	〃	2.16	—	0.09	—	0.67	—		
701	C 894	洪武通宝	〃	2.23	0.7	0.14	1.86	0.55	0.03		
702	C 895	皇宋通宝	〃	2.2	0.88	0.1	1.86	0.72	0.05		
703	C 896	洪武通宝	〃	2.26	0.75	0.12	1.87	0.57	0.02		
704	C 897	無文錢	〃	2.2	—	0.08	—	0.68	—		
705	C 898	祥符元宝	〃	2.1	0.75	0.1	1.55	0.64	0.02		
706	C 899	無文錢	〃	2.18	—	0.1	—	0.74	—		
707	C 900	〃	〃	2.18	—	0.1	—	0.69	—		
708	C 901	元〇通宝	〃	2.2	0.9	0.1	1.74	0.63	0.05		
709	C 902	祥符元宝	〃	2.26	0.77	0.1	1.74	0.63	0.02		
710	C 903	元符通宝	〃	2.38	0.86	0.1	1.75	0.67	0.03		
711	C 904	洪武通宝	〃	2.22	0.72	0.1	1.84	0.58	0.03		
712	C 905	景德元宝	〃	2.4	0.7	0.1	1.94	0.6	0.02		
713	C 906	無文錢	〃	2.1	—	0.06	—	0.69	—		
714	C 907	洪武通宝	〃	2.3	0.74	0.12	1.9	0.6	0.03		
715	C 908	無文錢	〃	2.16	—	0.06	—	0.78	—		
716	C 909	皇宋通宝	〃	2.26	0.8	0.08	1.83	0.65	0.02		
717	C 910	無文錢	〃	2.96	—	0.05	—	0.63	—		
718	C 911	洪武通宝	〃	2.23	—	0.11	1.9	0.63	0.05		
719	C 912	無文錢	〃	2.08	—	0.08	—	0.67	—		
720	C 913	洪武通宝	〃	2.09	0.72	0.1	1.78	0.59	0.01		
721	C 914	無文錢	〃	2.14	—	0.08	—	0.7	—		
722	C 915	〃	〃	2.16	—	0.08	—	0.87	—		
723	C 916	淳化元宝	〃	2.2	0.89	0.08	1.85	0.67	0.01		
724	C 917	無文錢	〃	2.3	—	0.08	—	0.66	—		
725	C 918	洪武通宝	〃	2.2	0.76	0.1	1.86	0.66	0.02		
726	C 919	〃	〃	2.18	0.6	0.18	1.83	0.6	0.03		
727	C 920	元豐通宝	〃	2.32	0.82	0.1	1.74	0.62	0.05		
728	C 921	開元通宝	〃	2.15	0.84	0.08	1.78	0.65	0.02		
729	C 922	洪武通宝	〃	2.08	0.7	0.1	1.82	0.575	0.05		
730	C 923	〃	〃	2.13	0.76	0.1	1.8	0.56	0.02		
731	C 924	無文錢	〃	2.14	—	0.09	—	0.64	—		
732	C 925	洪武通宝	〃	2.16	0.79	0.1	1.86	0.77	0.01		
733	C 926	太平通宝	〃	2.34	0.79	0.09	1.88	0.66	0.01		
734	C 927	開元通宝	〃	2.1	0.72	0.08	1.68	0.58	0.02		
735	C 928	洪武通宝	〃	2.28	0.75	0.1	1.68	0.6	0.03		
736	C 929	開元通宝	〃	2.3	0.81	0.08	1.86	0.62	0.01		
737	C 930	無文錢	〃	2.2	—	0.1	—	0.68	—		
738	C 931	〃	〃	1.88	—	0.05	—	0.65	—		
739	C 932	洪武通宝	〃	2.08	0.74	0.05	1.8	0.66	0.01		
740	C 933	景德元宝	〃	2.46	0.87	0.1	2.1	0.7	0.03		
741	C 934	洪武通宝	〃	2.1	0.78	0.1	1.8	0.7	0.01		
742	C 935	祥符通宝	〃	2.27	0.7	0.09	1.95	0.7	0.02		
743	C 936	無文錢	〃	2.2	—	0.08	—	0.63	—		
744	C 937	皇宋元宝	〃	2.2	—	0.09	1.8	0.63	0.03		
745	C 938	祥符通宝	〃	2.16	0.84	0.08	1.74	0.62	0.03		
746	C 939	洪武通宝	〃	2.18	0.77	0.1	1.83	0.64	0.02		
747	C 940	熙寧元宝	〃	2.39	0.88	0.1	1.87	0.66	0.05		
748	C 941	無文錢	〃	2.2	—	0.07	—	0.67	—		
749	C 942	熙寧元宝	〃	2.34	0.82	0.15	1.9	0.62	0.06		

750	C 943	無文銭	G45 SP10 フク土	2.26	—	0.08	—	0.62	—		
751	C 944	〃	〃	2.07	—	0.06	—	0.7	—		
752	C 945	〃	〃	2.18	—	0.1	—	0.7	—		
753	C 946	洪武通宝	〃	2.29	0.7	0.1	1.8	0.62	0.02		
754	C 947	祥符元宝	〃	2.36	—	0.1	1.84	0.63	0.03		
755	C 948	無文銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.7	—		
756	C 949	熙寧元宝	〃	2.3	0.84	0.08	1.9	0.7	0.03		
757	C 950	洪武通宝	〃	2.04	0.69	0.1	1.68	0.54	0.03		
758	C 951	無文銭	〃	2.11	—	0.08	—	0.74	—		
759	C 952	〃	〃	2.12	—	0.06	—	0.72	—		
760	C 953	〃	〃	2.08	—	0.06	—	0.7	—		
761	C 954	元祐通宝	〃	2.25	0.87	0.1	1.8	0.66	0.03		
762	C 955	熙寧〇〇	〃	2.34	0.79	0.08	1.96	0.6	0.03		
763	C 956	洪武通宝	〃	2.2	0.78	0.1	1.87	0.64	0.02		
764	C 957	無文銭	〃	2.09	—	0.1	—	0.7	—		
765	C 958	〃	〃	2.32	—	0.1	—	0.72	—		
766	C 959	〃	〃	2.0	—	0.1	—	0.64	—		
767	C 960	洪武通宝	〃	2.2	0.74	0.1	1.9	0.67	0.01		
768	C 961	無文銭	〃	2.13	—	0.09	—	0.77	—		
769	C 962	〃	〃	2.23	—	0.1	—	0.6	—		
770	C 963	洪武通宝	〃	2.18	0.74	0.09	1.93	0.56	0.01		
771	C 964	天聖元宝	〃	2.36	0.695	0.1	1.8	0.64	0.03		
772	C 965	無文銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.74	—		
773	C 966	元祐通宝	〃	2.48	0.82	0.12	1.9	0.6	0.03		
774	C 967	無文銭	〃	2.16	—	0.11	—	0.8	—		
775	C 968	開元通宝	〃	2.34	0.84	0.09	2.0	0.69	0.02		
776	C 969	無文銭	〃	2.12	—	0.08	—	0.62	—		
777	C 970	景定元宝	〃	2.4	0.66	0.1	1.8	0.64	0.05		
778	C 971	祥符通宝	〃	2.43	0.74	0.11	1.82	0.62	0.03		
779	C 972	皇宋通宝	〃	2.47	0.84	0.12	1.96	0.67	0.02		
780	C 973	開元通宝	〃	2.42	0.78	0.095	1.98	0.72	0.08		
781	C 974	祥符通宝	〃	2.4	0.72	0.11	1.85	0.62	0.03		
782	C 975	政和通宝	〃	2.45	0.855	0.12	2.05	0.67	0.02		
783	C 976	天禧通宝	〃	2.43	0.74	0.1	1.9	0.64	0.05		
784	C 977	紹聖元宝	〃	2.37	0.79	0.14	1.84	0.66	0.03		
785	C 978	皇宋通宝	〃	2.4	0.84	0.12	2.0	0.62	0.02		
786	C 979	〃	〃	2.44	0.94	0.11	2.0	0.75	0.03		
787	C 980	至道元宝	〃	2.42	0.69	0.1	1.8	0.6	0.03		
788	C 981	開元通宝	〃	2.45	0.77	0.14	1.97	0.66	0.05		
789	C 982	天禧通宝	〃	2.45	0.7	0.12	1.87	0.64	0.03		
790	C 983	紹聖元宝	〃	2.48	0.74	0.12	1.74	0.6	0.03		
791	C 984	皇宋通宝	〃	2.5	0.9	0.12	2.0	0.73	0.06		
792	C 985	開元通宝	〃	2.43	0.76	0.1	1.83	0.67	0.01		
793	C 986	政和通宝	〃	2.38	0.76	0.12	1.93	0.6	0.02		
794	C 987	祥符元宝	〃	2.43	0.76	0.1	1.97	0.65	0.02		
795	C 988	聖宋元宝	〃	2.38	0.8	0.12	1.955	0.62	0.03		
796	C 989	天聖元宝	〃	2.53	0.9	0.1	2.17	0.73	0.02		
797	C 990	紹聖元宝	〃	2.33	0.83	0.1	1.8	0.58	0.03		
798	C 991	皇宋通宝	〃	2.36	0.8	0.09	1.87	0.69	0.02		
799	C 992	正隆元宝	〃	2.44	0.76	0.12	2.12	0.62	0.02		
800	C 993	天聖元宝	〃	2.5	0.87	0.12	2.1	0.7	0.05		
801	C 994	永樂通宝	〃	2.48	0.7	0.16	2.08	0.58	0.02		
802	C 995	元符通宝	〃	2.36	0.76	0.12	1.8	0.6	0.05		
803	C 996	元豐通宝	〃	2.47	0.8	0.13	1.86	0.68	0.03		
804	C 997	天禧通宝	〃	2.4	0.7	0.11	1.86	0.56	0.03		
805	C 998	祥符元宝	〃	2.38	0.74	0.1	1.86	0.62	0.03		

806	C 999	熙寧元宝	G45 SP10 フク土	2.36	0.79	0.13	1.84	0.67	0.02		
807	C 1000	聖宋元宝	〃	2.5	0.77	0.12	1.95	0.63	0.02		
808	C 1001	元豐通宝	〃	2.4	0.8	0.14	1.86	0.65	0.05		
809	C 1002	開元通宝	〃	2.42	0.76	0.14	2.06	0.66	0.05		
810	C 1003	天聖通宝	〃	2.53	0.87	0.12	2.2	0.75	0.01		
811	C 1004	元豐通宝	〃	2.42	0.83	0.1	1.795	0.7	0.03		
812	C 1005	治平元宝	〃	2.44	0.77	0.095	1.92	0.69	0.02		
813	C 1006	宋通元宝	〃	2.4	0.75	0.1	1.86	0.63	0.01		
814	C 1007	嘉祐通宝	〃	2.37	0.8	0.1	1.9	0.7	0.02		
815	C 1008	聖宋元宝	〃	2.36	0.7	0.13	1.79	0.6	0.02		
816	C 1009	洪武通宝	〃	2.3	0.72	0.14	1.94	0.6	0.05		
817	C 1010	元祐通宝	〃	2.4	0.8	0.13	1.83	0.68	0.03		
818	C 1011	洪武通宝	〃	2.28	0.7	0.15	1.94	0.56	0.02		
819	C 1012	元祐通宝	〃	2.36	0.83	0.12	1.9	0.75	0.03		
820	C 1013	洪武通宝	〃	2.34	0.73	0.13	1.95	0.6	0.02		
821	C 1014	無文錢	〃	2.24	—	0.1	—	0.7	—		
822	C 1015	洪武通宝	〃	2.23	0.78	0.1	1.9	0.7	0.02		
823	C 1016	無文錢	〃	2.2	—	0.1	—	0.72	—		
824	C 1017	洪武通宝	〃	2.3	0.78	0.12	1.95	0.65	0.03		
825	C 1018	太平通宝	〃	2.42	0.77	0.1	1.86	0.62	0.02		
826	C 1019	皇宋通宝	〃	2.32	0.92	0.1	1.9	0.76	0.02		
827	C 1020	天禧通宝	〃	2.3	0.78	0.1	1.9	0.66	0.02		
828	C 1021	元豐通宝	〃	2.42	0.8	0.13	1.87	0.7	0.03		
829	C 1022	〇〇元宝	〃	2.3	0.83	0.1	1.86	0.7	0.02		
830	C 1023	無文錢	〃	2.2	—	0.1	—	0.6	—		
831	C 1024	洪武通宝	〃	2.14	0.6	0.14	1.66	0.5	0.02		
832	C 1025	〃	〃	2.16	0.7	0.1	1.86	0.6	0.02		
833	C 1026	〃	〃	2.25	0.7	0.13	1.82	0.58	0.03		
834	C 1027	皇宋通宝	〃	2.38	0.95	0.1	1.96	0.8	0.02		
835	C 1028	洪武通宝	〃	2.22	0.7	0.13	1.9	0.6	0.02		
836	C 1029	熙寧元宝	〃	2.38	0.8	0.13	1.85	0.7	0.03		
837	C 1030	天聖元宝	〃	2.46	0.8	0.12	2.0	0.76	0.04		
838	C 1031	無文錢	〃	2.34	—	0.1	—	0.64	—		
839	C 1032	洪武通宝	〃	2.3	0.7	0.12	1.8	0.57	0.03		
840	C 1033	皇宋通宝	〃	2.26	0.74	0.1	1.67	0.6	0.02		
841	C 1034	洪武通宝	〃	2.4	0.75	0.14	1.96	0.56	0.03		
842	C 1035	紹聖元宝	〃	2.4	—	0.12	1.95	0.68	0.02		
843	C 1036	洪武通宝	〃	2.26	0.7	0.13	1.86	0.58	0.03		
844	C 1037	開元通宝	〃	2.37	0.82	0.1	2.04	0.65	0.03		
845	C 1038	皇宋通宝	〃	2.42	0.8	0.12	1.86	0.7	0.02		
846	C 1039	洪武通宝	〃	2.24	0.68	0.14	1.8	0.68	0.02		
847	C 1040	〃	〃	2.2	0.7	0.14	1.9	0.58	0.02		
848	C 1041	〃	〃	2.2	0.7	0.1	1.83	0.6	0.02		
849	C 1042	洪武通宝	〃	2.24	0.7	0.13	1.96	0.6	0.03		
850	C 1043	〃	〃	2.2	0.74	0.12	1.9	0.58	0.03		
851	C 1044	無文錢	〃	2.3	—	0.12	—	0.58	—		
852	C 1045	洪武通宝	〃	2.2	0.73	0.12	1.84	0.6	0.02		
853	C 1046	天禧通宝	〃	2.48	0.7	0.12	2.0	0.64	0.02		
854	C 1047	元祐通宝	〃	2.33	0.7	0.1	1.74	0.67	0.03		
855	C 1048	洪武通宝	〃	2.4	0.72	0.13	1.86	0.6	0.03		
856	C 1049	祥符通宝	〃	2.34	0.8	0.12	1.8	0.62	0.02		
857	C 1050	洪武通宝	〃	2.29	0.7	0.13	1.9	0.58	0.03		
858	C 1051	〃	〃	2.24	0.73	0.13	1.825	0.55	0.03		
859	C 1052	熙寧元宝	〃	2.25	0.8	0.13	1.96	0.7	0.02		
860	C 1053	景德元宝	〃	2.4	0.7	0.12	2.0	0.6	0.03		
861	C 1054	洪武通宝	〃	2.23	0.7	0.13	1.86	0.5	0.03		

862	C1055	洪武通宝	G45 SP10 フク土	2.23	0.67	0.13	1.84	0.595	0.03		
863	C1056	紹聖元宝	"	2.33	0.7	0.13	1.77	0.65	0.02		
864	C1057	無文錢	"	2.24	—	0.1	—	0.64	—		
865	C1058	紹聖元宝	"	2.46	0.76	0.1	1.79	0.7	0.02		
866	C1059	皇宋通宝	"	2.38	0.88	0.1	1.95	0.73	0.05		
867	C1060	洪武通宝	"	2.44	0.7	0.15	1.9	0.58	0.02		
868	C1061	政和通宝	"	2.46	0.73	0.13	1.96	0.67	0.05		
869	C1062	治平元宝	"	2.3	0.77	0.13	1.9	0.65	0.03		
870	C1063	洪武通宝	"	2.23	0.7	0.13	1.84	0.58	0.02		
871	C1064	"	"	2.3	0.7	0.14	1.86	0.61	0.03		
872	C1065	"	"	2.18	0.74	0.14	1.82	0.56	0.02		
873	C1066	"	"	2.25	0.73	0.1	1.8	0.6	0.02		
874	C1067	無文錢	"	2.26	—	0.11	—	0.62	—		
875	C1068	洪武通宝	"	2.2	0.72	0.1	1.8	0.6	0.02		
876	C1069	皇宋通宝	"	2.5	0.87	0.13	2.0	0.7	0.02		
877	C1070	祥符元宝	"	2.3	0.72	0.1	1.8	0.6	0.03		
878	C1071	洪武通宝	"	2.24	0.7	0.12	1.9	0.57	0.03		
879	C1072	"	"	2.28	0.75	0.12	1.9	0.6	0.03		
880	C1073	元符通宝	"	2.44	0.8	0.12	1.95	0.6	0.05		
881	C1074	天禧通宝	"	2.34	0.74	0.14	1.97	0.65	0.03		
882	C1075	祥符元宝	"	2.17	0.7	0.1	1.74	0.6	0.02		
883	C1076	元豊通宝	"	2.37	0.78	0.14	1.86	0.19	0.05		
884	C1077	洪武通宝	"	2.3	0.68	0.12	1.9	0.58	0.03		
885	C1078	"	"	2.16	0.73	0.14	1.9	0.6	0.02		
886	C1079	無文錢	"	2.25	—	0.08	—	0.6	—		
887	C1080	元祐通宝	"	2.44	0.86	0.12	1.92	0.69	0.05		
888	C1081	洪武通宝	"	2.13	0.67	0.1	1.8	0.54	0.02		
889	C1082	判読不能	"	2.24	0.8	0.1	1.8	0.62	0.05		
890	C1083	洪武通宝	"	2.24	0.7	0.13	1.9	0.55	0.05		
891	C1084	天禧通宝	"	2.28	0.74	0.06	1.8	0.6	0.01		
892	C1085	紹聖元宝	"	2.28	0.76	0.1	1.7	0.58	0.05		
893	C1086	洪武通宝	"	2.29	0.7	0.12	1.84	0.57	0.03		
894	C1087	"	"	2.2	0.7	0.1	1.84	0.56	0.02		
895	C1088	"	"	2.29	0.76	0.12	1.8	0.6	0.05		
896	C1089	"	"	2.20	0.79	0.1	1.84	0.6	0.05		
897	C1090	"	"	2.06	0.76	0.1	1.82	0.62	0.02		
898	C1091	祥符通宝	"	2.17	0.8	0.08	1.76	0.6	0.05		
899	C1092	無文錢	"	2.2	—	0.12	—	0.6	—		
900	C1093	"	"	2.09	—	0.08	—	0.69	—		
801	C1094	紹聖元宝	"	2.195	0.8	0.14	1.88	0.66	0.05		
802	C1095	無文錢	"	2.28	—	0.1	—	0.6	—		
803	C1096	"	"	2.1	—	0.1	—	0.56	—		
804	C1097	"	"	2.18	—	0.1	—	0.74	—		
805	C1098	元祐通宝	"	2.24	0.8	0.1	1.8	0.65	0.06		
806	C1099	正隆元宝	"	2.3	0.76	0.1	2.05	0.58	0.05		
807	C1100	慶元通宝	"	2.12	—	0.07	—	0.67	—		
808	C1101	開元通宝	"	2.3	0.84	0.1	1.94	0.65	0.05		
809	C1102	熙寧元宝	"	2.34	0.9	0.14	2.0	0.7	0.05		
810	C1103	無文錢	"	2.2	—	0.1	—	0.6	—		
811	C1104	祥符元宝	"	2.34	0.8	0.1	1.78	0.7	0.03		
812	C1105	洪武通宝	"	2.2	0.74	0.14	1.79	0.56	0.04		
813	C1106	開元通宝	"	2.24	0.84	0.06	1.79	0.75	0.05		
814	C1107	洪武通宝	"	2.28	0.7	0.1	1.89	0.59	0.06		
815	C1108	無文錢	"	2.22	—	0.1	—	0.62	—		
816	C1109	"	"	2.06	—	0.1	—	0.7	—		
817	C1110	洪武通宝	"	2.14	0.7	0.1	1.79	0.58	0.03		

918	C1111	無文銭	G45 SP10 フク土	2.16	—	0.1	—	0.6	—		
919	C1112	〃	〃	2.2	—	0.1	—	0.62	—		
920	C1113	元祐通宝	〃	2.2	0.78	0.1	1.76	0.66	0.05		
921	C1114	洪武通宝	〃	2.27	0.7	0.1	1.86	0.55	0.05		
922	C1115	〃	〃	2.19	0.7	0.08	1.78	0.575	0.05		
923	C1116	判読不能	〃	2.14	0.8	0.08	1.7	0.68	0.05		
924	C1117	朝鮮通宝	〃	2.39	0.7	0.1	1.98	0.56	0.05		
925	C1118	洪武通宝	〃	2.2	0.68	0.1	1.82	0.56	0.05		
926	C1119	無文銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.67	—		
927	C1120	祥符元宝	〃	2.3	0.78	0.08	1.86	0.62	0.03		
928	C1121	祥符通宝	〃	2.22	0.78	0.1	1.795	0.6	0.05		
929	C1122	祥符元宝	〃	2.32	0.78	0.1	1.86	0.595	0.05		
930	C1123	天禧通宝	〃	2.32	0.795	0.08	1.96	0.65	0.05		
931	C1124	皇宋通宝	〃	2.3	0.86	0.1	1.9	0.68	0.06		
932	C1125	無文銭	〃	2.25	—	0.1	—	0.58	—		
933	C1126	洪武通宝	〃	2.2	0.73	0.1	1.87	0.58	0.02		
934	C1127	無文銭	〃	2.14	—	0.08	—	0.68	—		
935	C1128	〃	〃	2.25	—	0.1	—	0.56	—		
936	C1129	〃	〃	2.16	—	0.06	—	0.65	—		
937	C1130	洪武通宝	〃	2.1	0.75	0.08	1.87	0.58	0.03		
938	C1131	〃	〃	2.22	0.7	0.1	1.82	0.56	0.05		
939	C1132	無文銭	〃	2.12	—	0.09	—	0.68	—		
940	C1133	洪武通宝	〃	2.28	0.74	0.1	1.88	0.58	0.05		
941	C1134	〃	〃	2.24	0.8	0.1	1.89	0.64	0.03		
942	C1135	元豊通宝	〃	2.295	0.76	0.1	1.78	0.6	0.06		
943	C1136	無文銭	〃	2.22	—	0.08	—	0.62	—		
944	C1137	咸平元宝	〃	2.2	0.8	0.06	1.8	0.6	0.03		
945	C1138	祥符通宝	〃	2.2	0.8	0.1	1.8	0.66	0.03		
946	C1139	〃	〃	2.38	0.8	0.1	1.8	0.63	0.05		
947	C1140	洪武通宝	〃	2.19	0.7	0.14	1.83	0.54	0.05		
948	C1141	祥符元宝	〃	2.37	0.82	0.1	1.86	0.62	0.05		
949	C1142	元豊通宝	〃	2.4	0.75	0.1	1.84	0.62	0.05		
950	C1143	判読不能	〃	2.16	—	0.04	—	0.64	—		
951	C1144	無文銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.6	—		
952	C1145	天聖元宝	〃	2.26	—	0.1	1.8	0.75	0.05		
953	C1146	無文銭	〃	2.22	—	0.1	—	0.66	—		
954	C1147	〇〇〇宝	〃	2.2	0.87	0.1	1.76	0.65	0.03		
955	C1148	洪武通宝	〃	2.26	—	0.1	—	0.74	—		
956	C1149	〃	〃	2.14	0.7	0.1	1.79	0.56	0.03		
957	C1150	〃	〃	2.2	0.7	0.1	1.84	0.59	0.02		
958	C1151	〃	〃	2.15	0.74	0.1	1.86	0.6	0.02		
959	C1152	〃	〃	2.04	0.7	0.1	1.7	0.52	0.03		
960	C1153	〃	〃	2.2	0.76	0.1	1.9	0.57	0.05		
961	C1154	祥符通宝	〃	2.39	0.8	0.1	1.84	0.64	0.02		
962	C1155	景祐元宝	〃	2.32	0.8	0.1	1.93	0.64	0.05		
963	C1156	洪武通宝	〃	2.1	0.715	0.08	1.76	0.6	0.03		
964	C1157	〃	〃	2.18	0.7	0.1	1.8	0.58	0.05		
965	C1158	無文銭	〃	2.18	—	0.06	—	0.72	—		
966	C1159	〃	〃	2.19	—	0.1	—	0.68	—		
967	C1160	天禧通宝	〃	2.33	0.76	0.1	1.85	0.62	0.05		
968	C1161	洪武通宝	〃	2.28	0.76	0.1	1.98	0.62	0.05		
969	C1162	祥符元宝	〃	2.2	0.73	0.1	1.78	0.63	0.03		
970	C1163	祥符通宝	〃	2.3	0.76	0.08	1.83	0.6	0.05		
971	C1164	洪武通宝	〃	2.22	0.7	0.13	1.81	0.55	0.03		
972	C1165	無文銭	〃	2.26	—	0.08	—	0.76	—		
973	C1166	開元通宝	〃	2.3	0.8	0.08	1.95	0.64	0.02		

974	C 1167	洪武通宝	G45 SP 10 フク土	2.2	0.68	0.1	1.84	0.56	0.03		
975	C 1168	皇宋通宝	"	2.26	0.8	0.1	1.92	0.66	0.06		
976	C 1169	洪武通宝	"	2.26	0.7	0.16	1.9	0.54	0.05		
977	C 1170	無文銭	"	2.18	—	0.08	—	0.62	—		
978	C 1171	祥符通宝	"	2.3	0.82	0.1	1.7	0.6	0.03		
979	C 1172	洪武通宝	"	2.32	0.74	0.18	2.0	0.55	0.05		
980	C 1173	判読不宝	"	2.2	0.78	0.1	1.76	0.63	0.05		
981	C 1174	洪武通宝	"	2.25	0.7	0.1	1.88	0.6	0.05		
982	C 1175	〇〇元宝	"	2.2	0.8	0.06	1.8	0.67	0.05		
983	C 1176	洪武通宝	"	2.24	0.695	0.1	1.86	0.58	0.02		
984	C 1177	"	"	2.2	0.68	0.1	1.8	0.55	0.02		
985	C 1178	皇宋通宝	"	2.2	0.84	0.1	1.88	0.62	0.02		
986	C 1179	治平元宝	"	2.26	0.78	0.1	1.73	0.54	0.03		
987	C 1180	元祐通宝	"	2.31	0.78	0.09	1.76	0.62	0.05		
988	C 1181	政和通宝	"	2.495	0.76	0.1	1.95	0.58	0.05		
989	C 1182	洪武通宝	"	2.24	0.74	0.1	1.81	0.56	0.02		
990	C 1183	元豊通宝	"	2.4	0.74	0.1	1.84	0.61	0.05		
991	C 1184	紹聖元宝	"	2.4	0.76	0.1	1.62	0.6	0.05		
992	C 1185	無文銭	"	2.17	—	0.08	—	0.785	—		
993	C 1186	洪武通宝	"	2.26	0.74	0.12	1.88	0.57	0.05		
994	C 1187	祥符通宝	"	2.32	0.78	0.1	1.82	0.66	0.05		
995	C 1188	"	"	2.28	0.7	0.08	1.67	0.575	0.05		
996	C 1189	洪武通宝	"	2.26	0.82	0.1	1.86	0.64	0.05		
997	C 1190	"	"	2.18	0.72	0.13	1.84	0.54	0.05		
998	C 1191	淳祐元宝	"	2.25	0.84	0.1	1.86	0.72	0.05		
999	C 1192	天禧通宝	"	2.3	0.79	0.08	1.89	0.64	0.05		
1000	C 1193	無文銭	"	2.13	—	0.08	—	0.74	—		
1001	C 1194	洪武通宝	"	2.24	0.8	0.1	1.98	0.68	0.05		
1002	C 1195	無文銭	"	2.19	—	0.08	—	0.7	—		
1003	C 1196	判読不能	"	2.3	0.88	0.1	1.96	0.66	0.05		
1004	C 1197	無文銭	"	2.38	—	0.12	—	0.5	—		
1005	C 1198	洪武通宝	"	2.18	0.7	0.1	1.84	0.58	0.02		
1006	C 1199	祥符元宝	"	2.28	0.76	0.08	1.86	0.64	0.02		
1007	C 1200	洪武通宝	"	2.19	0.76	0.08	1.78	0.59	0.02		
1008	C 1201	治平元宝	"	2.3	0.8	0.09	1.89	0.7	0.03		
1009	C 1202	洪武〇宝	"	2.28	0.79	0.1	1.88	0.6	0.03		
1010	C 1203	洪武通宝	"	2.18	0.69	0.1	1.8	0.6	0.05		
1011	C 1204	"	"	2.24	0.8	0.1	1.8	0.58	0.03		
1012	C 1205	判読不能	"	2.2	—	0.08	1.7	0.79	0.05		
1013	C 1206	洪武通宝	"	2.12	0.83	0.1	1.8	0.6	0.05		
1014	C 1207	"	"	2.3	0.76	0.14	1.95	0.6	0.05		
1015	C 1208	無文銭	"	2.2	—	0.1	—	0.6	—		
1016	C 1209	洪武通宝	"	2.19	—	0.09	1.78	0.66	0.03		
1017	C 1210	無文銭	"	2.22	—	0.1	—	0.6	—		
1018	C 1211	天禧通宝	"	2.28	0.76	0.1	1.86	0.64	0.05		
1019	C 1212	無文銭	"	2.33	—	0.1	—	0.7	—		
1020	C 1213	祥符元宝	"	2.26	—	0.1	1.9	—	0.02		
1021	C 1214	至道元宝	"	2.3	0.72	0.1	1.74	0.56	0.03		
1022	C 1215	祥符元宝	"	2.36	0.8	0.06	1.86	0.67	0.02		
1023	C 1216	〇〇通宝	"	2.34	0.7	0.08	1.8	0.56	0.03		
1024	C 1217	祥符通宝	"	2.26	0.76	0.1	1.78	0.64	0.05		
1025	C 1218	"	"	2.23	0.74	0.1	1.74	0.62	0.03		
1026	C 1219	"	"	2.5	0.7	0.14	1.8	0.59	0.09		
1027	C 1220	洪武通宝	"	2.28	0.73	0.1	1.88	0.58	0.05		
1028	C 1221	判読不能	"	2.2		0.08	1.74	0.68	0.02		
1029	C 1222	洪武通宝	"	2.2	0.74	0.1	1.87	0.62	0.02		

1030	C 1223	祥符通宝	G45 SP 10 フク土	2.3	0.78	0.1	1.8	0.67	0.05		
1031	C 1224	洪武通宝	"	2.2	—	0.1	1.78	0.63	0.05		
1032	C 1225	無文銭	"	2.2	—	0.1	—	0.58	—		
1033	C 1226	皇宋通宝	"	2.16	0.77	0.1	1.7	0.56	0.03		
1034	C 1227	無文銭	"	2.09	—	0.1	—	0.7	—		
1035	C 1228	洪武通宝	"	2.19	0.74	0.1	1.84	0.6	0.05		
1036	C 1229	"	"	2.22	0.74	0.1	1.82	0.58	0.03		
1037	C 1230	祥符通宝	"	2.18	0.69	0.08	1.7	0.58	0.05		
1038	C 1231	元豊通宝	"	2.3	0.84	0.1	1.82	0.6	0.05		
1039	C 1232	皇宋通宝	"	2.32	0.76	0.1	1.8	0.6	0.03		
1040	C 1233	判読不能	"	2.24	0.78	0.08	1.78	0.6	0.05		
1041	C 1234	無文銭	"	2.18	—	0.06	—	0.6	—		
1042	C 1235	紹聖元宝	"	2.18	0.76	0.1	1.7	0.6	0.05		
1043	C 1236	判読不能	"	2.18	—	0.1	1.7	0.78	0.05		
1044	C 1237	紹聖元宝	"	2.3	0.75	0.095	1.87	0.6	0.03		
1045	C 1238	洪武通宝	"	2.14	0.7	0.1	1.78	0.6	0.03		
1046	C 1239	"	"	2.2	0.73	0.12	1.72	0.64	0.05		
1047	C 1240	"	"	2.2	0.7	0.1	1.9	0.6	0.02		
1048	C 1241	無文銭	"	2.28	—	0.12	—	0.6	—		
1049	C 1242	"	"	2.18	—	0.1	—	0.8	—		
1050	C 1243	"	"	2.34	—	0.08	—	0.695	—		
1051	C 1244	洪武通宝	"	2.23	0.69	0.15	1.9	0.6	0.03		
1052	C 1245	無文銭	"	2.27	—	0.08	—	0.64	—		
1053	C 1246	洪武通宝	"	2.29	0.7	0.14	1.88	0.62	0.03		
1054	C 1247	"	"	2.18	0.78	0.1	1.87	0.7	0.02		
1055	C 1248	無文銭	"	2.17	—	0.09	—	0.67	—		
1056	C 1249	"	"	2.14	—	0.1	—	0.59	—		
1057	C 1250	"	"	2.34	—	0.13	—	0.75	—		
1058	C 1251	洪武通宝	"	2.2	0.72	0.1	1.89	0.67	0.02		
1059	C 1252	"	"	2.33	0.77	0.13	1.9	0.55	0.03		
1060	C 1253	"	"	2.13	0.7	0.11	1.8	0.6	0.01		
1061	C 1254	無文銭	"	2.25	—	0.08	—	0.66	—		
1062	C 1255	"	"	2.2	—	0.1	—	0.67	—		
1063	C 1256	"	"	2.14	—	0.08	—	0.75	—		
1064	C 1257	天禧通宝	"	2.25	0.75	0.12	1.8	0.57	0.06		
1065	C 1258	開元通宝	"	2.25	—	0.09	1.93	0.74	0.02		
1066	C 1259	無文銭	"	2.13	—	0.1	—	0.68	—		
1067	C 1260	"	"	2.17	—	0.09	—	0.74	—		
1068	C 1261	"	"	2.2	—	0.1	—	0.65	—		
1069	C 1262	〇〇〇宝	"	2.3	0.86	0.11	2.0	0.63	0.03		
1070	C 1263	無文銭	"	2.2	—	0.08	—	0.64	—		
1071	C 1264	洪武通宝	"	2.09	0.73	0.12	1.75	0.08	0.05		
1072	C 1265	無文銭	"	2.2	—	0.07	—	0.65	—		
1073	C 1266	判読不能	"	2.2	—	0.1	1.8	0.66	0.03		
1074	C 1267	無文銭	"	2.15	—	0.1	—	0.67	—		
1075	C 1268	洪武通宝	"	2.22	0.7	0.16	1.87	0.6	0.03		
1076	C 1269	皇宋通宝	"	2.17	0.8	0.1	1.7	0.63	0.02		
1077	C 1270	淳祐元宝	"	2.25	0.72	0.2	1.87	0.86	—		
1078	C 1271	無文銭	"	2.28	—	0.08	—	0.74	—		
1079	C 1272	開元通宝	"	2.38	—	0.12	2.0	0.1	0.02		
1080	C 1273	洪武通宝	"	2.2	0.76	0.1	1.93	0.7	0.01		
1081	C 1274	"	"	2.2	0.7	0.1	1.88	0.62	0.01		
1082	C 1275	皇宋通宝	"	2.28	0.9	0.13	1.77	0.72	0.02		
1083	C 1276	祥符通宝	"	2.32	0.76	0.1	1.85	0.65	0.02		
1084	C 1277	天聖元宝	"	2.34	0.8	0.1	1.88	0.65	0.02		
1085	C 1278	洪武通宝	"	2.24	0.695	0.12	1.77	0.58	0.01		

1086	C 1279	天聖元宝	G45 SP10 フク土	2.28	0.82	0.1	1.92	0.61	0.03		
1087	C 1280	無文銭	"	2.16	—	0.1	—	0.695	—		
1088	C 1281	熙寧元宝	"	2.38	0.79	0.1	1.92	0.73	0.03		
1089	C 1282	判読不能	"	2.37	—	0.1	—	0.63	—		} 伴出
1090	C 1283	無文銭	"	—	—	—	—	—	—		
1091	C 1284	"	"	—	—	—	—	—	—		
1092	C 1285	皇宋通宝	"	2.36	0.88	0.1	1.9	0.68	0.03		
1093	C 1286	嘉祐元宝	"	2.5	0.96	0.14	2.0	0.76	0.05		
1094	C 1287	無文銭	"	2.15	—	0.08	—	0.74	—		
1095	C 1288	開元通宝	"	2.2	—	0.08	1.8	0.6	0.02		
1096	C 1289	無文銭	"	2.16	—	0.08	—	0.64	—		
1097	C 1290	元豊通宝	"	2.32	0.74	0.1	1.69	0.84	0.03		
1098	C 1291	聖宋元宝	"	2.26	0.77	0.1	1.87	0.65	0.03		
1099	C 1292	永樂通宝	"	2.43	—	0.1	2.07	—	0.02		
1100	C 1293	無文銭	"	2.25	—	0.08	—	0.6	—		
1101	C 1294	洪武通宝	"	2.16	0.7	0.1	1.76	0.62	0.02		
1102	C 1295	宣和通宝	"	2.43	0.7	0.14	1.97	0.6	0.03		
1103	C 1296	元祐通宝	"	2.16	0.83	0.1	1.78	0.68	0.03		
1104	C 1297	洪武通宝	"	2.13	0.78	0.1	1.84	0.62	0.01		
1105	C 1298	無文銭	"	2.17	—	0.08	—	0.7	—		
1106	C 1299	嘉祐通宝	"	2.37	0.8	0.11	2.0	0.68	0.03		
1107	C 1300	熙寧元宝	"	2.44	0.86	0.13	1.98	0.7	0.03		
1108	C 1301	咸淳元宝	"	2.4	0.9	0.12	1.94	0.695	0.05		背に「元」の文字有
1109	C1302A	洪武通宝	"	2.24	—	0.11	1.1	0.1	0.03		
1110	B	"	"	2.29	0.73	0.16	1.9	0.6	0.05		
1111	C 1303	祥符通宝	"	2.4	0.78	0.1	1.82	0.63	0.03		
1112	C 1304	元豊通宝	"	2.2	0.79	0.8	1.8	0.68	0.05		
1113	C 1305	天禧通宝	"	2.3	—	0.1	1.9	0.1	0.03		
1114	C 1306	皇宋通宝	"	2.43	—	0.12	1.98	0.1	0.06		
1115	C 1307	洪武通宝	"	2.26	0.7	0.13	1.84	0.58	0.03		
1116	C 1308	無文銭	"	2.2	—	0.08	—	0.7	—		
1117	C 1309	熙寧元宝	"	2.38	0.87	0.14	1.93	0.64	0.05		
1118	C 1310	宣和通宝	"	2.46	0.74	0.13	2.06	0.62	0.03		
1119	C 1311	洪武通宝	"	2.17	0.74	0.1	1.8	0.64	0.02		
1120	C 1312	"	"	2.22	0.77	0.1	1.9	0.63	0.01		
1121	C 1313	"	"	2.28	0.72	0.15	1.88	0.59	0.02		
1122	C 1314	"	"	2.16	0.73	0.1	1.83	0.57	0.02		
1123	C 1315	元祐通宝	"	2.2	0.76	0.12	1.68	0.67	0.05		
1124	C 1316	洪武通宝	"	2.32	0.73	0.12	1.95	0.6	0.03		
1125	C 1317	無文銭	"	2.14	—	0.095	—	0.7	—		
1126	C 1318	治平元宝	"	2.23	0.75	0.07	1.78	0.66	0.02		
1127	C 1319	無文銭	"	2.18	—	0.08	—	0.7	—		
1128	C 1320	洪武通宝	"	2.26	0.7	0.1	1.98	0.57	0.03		
1129	C 1321	無文銭	"	2.22	—	0.06	—	0.69	—		
1130	C 1322	祥符元宝	"	2.3	0.74	0.09	1.86	0.62	0.05		
1131	C 1323	開元通宝	"	2.38	0.8	0.1	1.92	0.66	0.05		
1132	C 1324	無文銭	"	2.18	—	0.1	—	0.74	—		
1133	C 1325	洪武通宝	"	2.24	0.7	0.1	1.86	0.6	0.03		
1134	C 1326	祥符元宝	"	2.4	0.72	0.1	1.8	0.6	0.02		
1135	C 1327	開元通宝	"	2.19	—	0.1	1.79	0.6	0.05		
1136	C 1328	洪武通宝	"	2.05	0.7	0.1	1.7	0.56	0.03		
1137	C 1329	太平通宝	"	2.22	0.7	0.1	1.7	0.5	0.02		
1138	C 1330	洪武通宝	"	2.18	0.76	0.09	1.8	0.58	0.05		
1139	C 1331	"	"	2.2	0.7	0.1	1.94	0.55	0.05		
1140	C 1332	"	"	2.25	0.74	0.13	1.87	0.58	0.05		
1141	C 1333	"	"	2.12	0.69	0.1	1.78	0.58	0.03		

1142	C 1334	洪武通宝	G45 SP10 フク土	2.2	0.7	0.1	1.8	0.58	0.03		
1143	C 1335	元豊通宝	〃	2.28	0.8	0.1	1.83	0.66	0.03		
1144	C 1336	洪武通宝	〃	2.3	0.7	0.14	1.8	0.56	0.05		
1145	C 1337	紹聖元宝	〃	2.3	0.8	0.1	1.74	0.64	0.03		
1146	C 1338	元祐通宝	〃	2.36	0.87	0.1	1.88	0.66	0.05		
1147	C 1339	熙寧元宝	〃	2.34	0.8	0.1	1.8	0.7	0.05		
1148	C 1340	元祐通宝	〃	2.34	0.8	0.1	1.87	0.68	0.05		
1149	C 1341	洪武通宝	〃	2.18	0.7	0.1	1.8	0.58	0.02		
1150	C 1342	判読不能	〃	2.24	0.8	0.1	1.8	0.6	0.07		
1151	C 1343	祥符元宝	〃	2.2	0.76	0.1	1.74	0.56	0.05		
1152	C 1344	判読不能	〃	2.3	0.8	0.1	1.7	0.6	0.05		
1153	C 1345	洪武通宝	〃	2.2	0.73	0.1	1.8	0.56	0.01		
1154	C 1346	〃	〃	2.22	0.72	0.1	1.96	0.6	0.02		
1155	C 1347	紹聖元宝	〃	2.3	0.8	0.1	1.84	0.66	0.05		
1156	C 1348	無文銭	〃	2.24	—	0.1	—	0.66	—		
1157	C 1349	〃	〃	2.22	—	0.08	—	0.6	—		
1158	C 1350	大観通宝	〃	2.43	0.8	0.12	2.17	0.67	0.05		
1159	C 1351	無文銭	〃	2.27	—	0.12	—	0.66	—		
1160	C 1352	〇〇〇宝	〃	2.16	—	0.08	—	0.8	—		
1161	C 1353	無文銭	〃	2.2	—	0.08	—	0.7	—		
1162	C 1354	洪武通宝	〃	2.3	0.7	0.13	1.88	0.6	0.03		
1163	C 1356	嘉祐通宝	〃	2.29	0.8	0.1	1.9	0.64	0.05		
1164	C 1357	洪武通宝	〃	2.22	0.7	0.1	1.84	0.56	0.05		
1165	C 1358	判読不能	〃	2.26	0.89	0.08	1.9	0.66	0.03		
1166	C 1359	洪武通宝	〃	2.19	0.78	0.08	1.8	0.6	0.05		
1167	C 1360	無文銭	〃	2.3	—	0.1	—	0.6	—		
1168	C 1361	祥符元宝	〃	2.38	0.85	0.1	2.0	0.66	0.03		
1169	C 1362	無文銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.54	—		
1170	C 1363	洪武通宝	〃	2.28	0.7	0.13	1.93	0.63	0.05		
1171	C 1364	〃	〃	2.26	0.75	0.1	1.84	0.6	0.05		
1172	C 1365	判読不能	〃	2.3	—	0.1	—	0.66	—		
1173	C 1366	皇宋通宝	〃	2.4	0.8	0.1	1.84	0.74	0.03		
1174	C 1367	洪武通宝	〃	2.16	0.7	0.12	1.9	0.6	0.02		
1175	C 1368	祥符元宝	〃	2.4	0.68	0.1	1.83	0.64	0.05		
1176	C 1369	元豊通宝	〃	2.48	0.85	0.1	1.9	0.65	0.08		
1177	C 1370	太平通宝	〃	2.4	0.7	0.12	1.86	0.62	0.03		
1178	C 1371	洪武通宝	〃	2.26	0.66	0.14	1.8	0.6	0.03		
1179	C 1372	無文銭	〃	2.1	—	0.1	—	0.74	—		
1180	C 1373	開元通宝	〃	2.4	0.83	0.1	2.0	0.7	0.03		背に「一」の文字有
1181	C 1374	〃	〃	2.29	0.8	0.1	1.96	0.7	0.05		
1182	C 1375	無文銭	〃	2.27	—	0.08	—	0.67	—		
1183	C 1376	〃	〃	2.2	—	0.1	—	0.72	—		
1184	C 1377	政和通宝	〃	2.38	0.7	0.1	2.08	0.62	0.03		
1185	C 1378	無文銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.7	—		
1186	C 1379	紹聖元宝	〃	2.38	0.79	0.1	1.86	0.7	0.05		
1187	C 1380	熙寧元宝	〃	2.26	0.86	0.16	1.8	0.66	0.02		
1188	C 1381	無文銭	〃	2.08	—	0.07	—	0.77	—		
1189	C 1382	祥符通宝	〃	2.3	0.7	0.1	1.86	0.64	0.03		
1190	C 1383	判読不能	〃	2.25	—	0.09	1.87	0.64	0.05		
1191	C 1384	祥符元宝	〃	2.3	0.79	0.1	1.8	0.6	0.03		
1192	C 1385	洪武通宝	〃	2.2	0.74	0.1	1.82	0.6	0.03		
1193	C 1386	無文銭	〃	2.33	—	0.1	—	0.68	—		
1194	C 1387	元祐通宝	〃	2.4	0.9	0.09	1.9	0.68	0.05		
1195	C 1388	洪武通宝	〃	2.17	0.76	0.1	1.83	0.6	0.02		
1196	C 1389	祥符元宝	〃	2.32	0.8	0.08	1.8	0.64	0.02		
1197	C 1390	判読不能	〃	2.26	—	0.12	—	0.67	—		

1198	C 1391	無文銭	G45 SP10 フク土	2.22	—	0.1	—	0.595	—		
1199	C 1392	〃	〃	2.24	—	0.095	—	0.72	—		
1200	C 1393	洪武通宝	〃	2.08	0.74	0.16	1.84	0.58	0.05		
1201	C 1394	〃	〃	2.18	0.68	0.14	1.8	0.59	0.05		
1202	C 1395	無文銭	〃	2.26	—	0.1	—	0.63	—		
1203	C 1396	洪武通宝	〃	2.2	0.7	0.1	1.82	0.68	0.02		
1204	C 1397	〃	〃	2.22	0.7	0.1	1.9	0.63	0.03		
1205	C 1398	判読不能	〃	—	—	—	—	—	—		C1399と接着のため計測不可能
1206	C 1399	〃	〃	2.43	0.82	0.14	2.0	0.66	0.05		
1207	C 1400	洪武通宝	〃	2.2	0.77	0.1	1.9	0.6	0.02		
1208	C 1401	紹平通宝	〃	2.36	—	0.1	1.82	0.75	0.02		
1209	C 1402	洪武通宝	〃	2.2	0.74	0.1	1.94	0.64	0.05		
1210	C 1403	熙寧元宝	〃	2.34	0.8	0.1	1.77	0.6	0.07		
1211	C 1404	元豊通宝	〃	2.48	0.74	0.1	1.8	0.68	0.03		
1212	C 1405	無文銭	〃	2.23	—	0.1	—	0.72	—		
1213	C 1406	〃	〃	2.18	—	0.12	—	0.74	—		
1214	C 1407	判読不能	〃	2.24	—	0.07	—	0.7	—		
1215	C 1408	元豊通宝	〃	2.45	0.79	0.12	1.82	0.66	0.05		
1216	C 1409	治平元宝	〃	2.32	0.8	0.1	1.8	0.7	0.01		
1217	C 1410	無文銭	〃	2.2	—	0.08	—	0.76	—		
1218	C 1411	洪武通宝	〃	2.4	—	0.1	1.9	—	0.03		
1219	C 1412	祥符元宝	〃	2.2	0.76	0.08	1.77	0.6	0.09		
1220	C 1413	天禧通宝	〃	2.46	0.8	0.1	2.06	0.66	0.03		
1221	C 1414	無文銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.67	—		
1222	C 1415	聖宋元宝	〃	2.39	0.84	0.1	1.98	0.69	0.05		
1223	C 1416	無文銭	〃	2.22	—	0.1	—	0.64	—		
1224	C 1417	判読不能	〃	2.3	—	0.1	1.83	0.6	0.03		
1225	C 1418	無文銭	〃	2.15	—	0.1	—	0.64	—		
1226	C 1419	〃	〃	2.27	—	0.1	—	0.64	—		
1227	C 1420	〃	〃	2.17	—	0.1	—	0.68	—		
1228	C 1421	〃	〃	2.16	—	0.09	—	0.79	—		
1229	C 1422	政和通宝	〃	2.34	0.78	0.08	1.84	0.7	0.03		
1230	C 1423	無文銭	〃	2.18	—	0.08	—	0.65	—		
1231	C 1424	淳〇元宝	〃	2.28	0.8	0.1	1.8	0.62	0.03		
1232	C 1425	紹聖元宝	〃	2.3	0.78	0.09	1.86	0.66	0.03		
1233	C 1426	祥符通宝	〃	2.22	0.7	0.1	1.8	0.62	0.03		
1234	C 1427	洪武通宝	〃	2.07	0.7	0.1	1.7	0.6	0.03		
1235	C 1428	宣和通宝	〃	2.36	0.77	0.13	1.97	0.65	0.05		
1236	C 1429	洪武通宝	〃	2.25	0.7	0.1	1.6	0.56	0.03		背に「一銭」の文字有
1237	C 1430	祥符元宝	〃	2.16	—	0.09	1.7	—	0.03		
1238	C 1431	元祐通宝	〃	2.5	0.86	0.1	1.8	0.64	0.03		
1239	C 1432	無文銭	〃	2.1	—	0.1	—	0.7	—		
1240	C 1433	太平通宝	〃	2.4	0.7	0.1	1.96	0.62	0.03		
1241	C 1434	天禧通宝	〃	2.3	0.77	0.1	1.89	0.67	0.03		
1242	C 1435	洪武通宝	〃	2.2	0.74	0.1	1.8	0.56	0.03		
1243	C 1436	治平元宝	〃	2.36	0.76	0.1	1.94	0.68	0.03		
1244	C 1437	判読不能	〃	2.25	—	0.09	—	0.67	—		
1245	C 1438	祥符元宝	〃	2.32	—	0.1	1.8	—	0.01		
1246	C 1439	聖宋元宝	〃	2.2	0.8	0.08	2.0	0.6	0.02		
1247	C 1440	天聖元宝	〃	2.25	0.83	0.1	1.86	0.62	0.03		
1248	C 1441	無文銭	〃	2.16	—	0.1	—	0.66	—		
1249	C 1442	洪武通宝	〃	2.34	0.78	0.12	1.8	0.59	0.05		
1250	C 1443	〃	〃	2.26	0.74	0.1	1.88	0.6	0.02		
1251	C 1444	〃	〃	2.17	0.78	0.1	1.8	0.62	0.03		
1252	C 1445	判読不能	〃	2.18	0.9	0.08	1.82	0.6	0.03		
1253	C 1446	無文銭	〃	2.16	—	0.07	—	0.64	—		

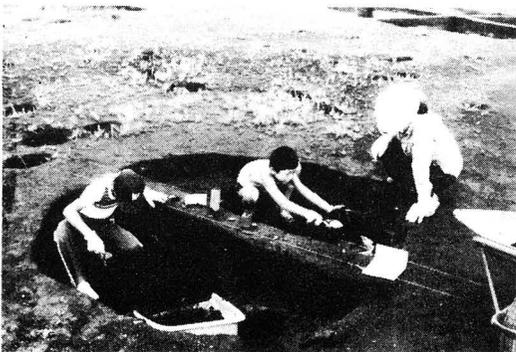
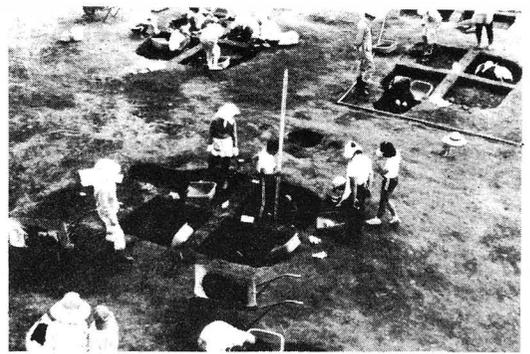
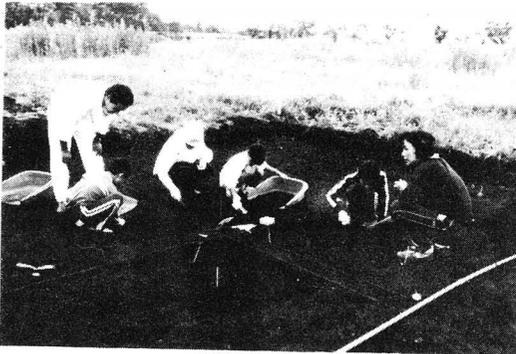
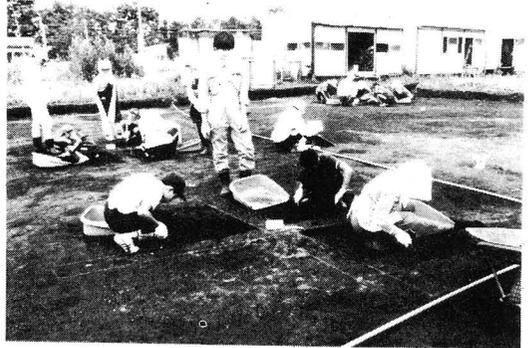
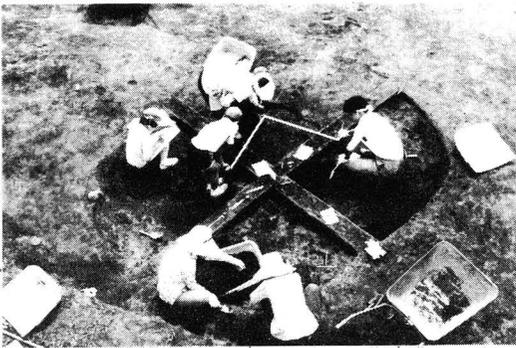
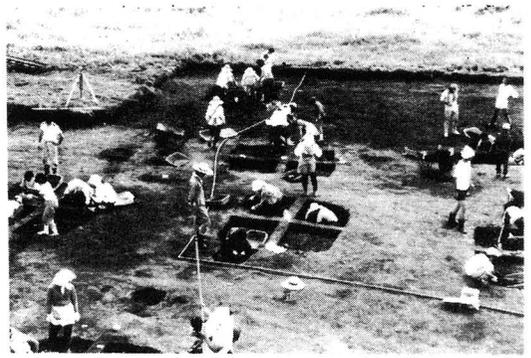
1254	C 1447	開元通宝	G45 SP10 フク土	2.18	—	0.06	0.69	0.6	0.02		
1255	C 1448	無文銭	〃	2.2	—	0.095	—	0.6	—		
1256	C 1449	洪武通宝	〃	2.19	0.76	0.09	1.8	0.58	0.04		
1257	C 1450	〃	〃	2.28	0.7	0.13	1.9	0.6	0.05		
1258	C 1451	開元通宝	〃	2.16	—	0.08	1.78	0.6	0.05		
1259	C 1452	洪武通宝	〃	2.15	0.72	0.1	1.81	0.6	0.01		
1260	C 1453	〃	〃	2.14	0.755	0.1	1.84	0.58	0.03		
1261	C 1454	祥符元宝	〃	2.18	—	0.08	1.74	0.68	0.02		
1262	C 1455	無文銭	〃	2.34	—	0.05	—	0.64	—		
1263	C 1456	洪武通宝	〃	2.3	0.7	0.12	1.88	0.58	0.05		
1264	C 1457	無文銭	〃	2.16	—	0.09	—	0.7	—		
1265	C 1458	判読不能	〃	2.22	0.9	0.1	1.8	0.68	0.05		
1266	C 1459	皇宋通宝	〃	2.33	0.85	0.09	1.86	0.6	0.05		
1267	C 1460	洪武通宝	〃	2.36	0.78	0.13	1.9	0.6	0.04		
1268	C 1461	〃	〃	2.3	0.7	0.12	1.88	0.58	0.02		
1269	C 1462	祥符通宝	〃	2.45	0.76	0.12	1.93	0.62	0.05		
1270	C 1463	元祐通宝	〃	2.32	0.88	0.12	1.86	0.67	0.05		
1271	C 1464	洪武通宝	〃	2.1	0.78	0.08	1.77	0.6	0.02		
1272	C 1465	〃	〃	2.39	0.7	0.1	1.9	0.56	0.03		
1273	C 1466	〃	〃	2.26	0.74	0.1	1.82	0.58	0.03		
1274	C 1467	無文銭	〃	2.215	—	0.1	—	0.67	—		
1275	C 1468	洪武通宝	〃	2.2	0.76	0.13	1.86	0.56	0.03		
1276	C 1469	大観通宝	〃	2.3	0.81	0.09	1.82	0.64	0.05		
1277	C 1470	元祐通宝	〃	2.24	0.86	0.09	1.8	0.66	0.05		
1278	C 1471	〃	〃	2.48	0.76	0.13	1.78	0.6	0.03		
1279	C 1472	祥符元宝	〃	2.48	0.74	0.1	1.76	0.58	0.05		
1280	C 1473	無文銭	〃	2.2	—	0.08	—	0.7	—		
1281	C 1474	洪武通宝	〃	2.28	0.715	0.14	1.89	0.56	0.05		
1282	C 1475	〃	〃	2.24	0.72	0.13	1.9	0.57	0.05		
1283	C 1476	開元通宝	〃	2.24	—	0.1	1.9	0.64	0.05		
1284	C 1477	祥符元宝	〃	2.3	0.74	0.09	1.68	0.58	0.05		
1285	C 1478	洪武通宝	〃	2.24	0.73	0.14	1.86	0.56	0.05		
1286	C 1479	〃	〃	2.14	0.73	0.1	1.76	0.55	0.03		
1287	C 1480	天聖元宝	〃	2.2	0.87	0.06	1.84	0.66	0.05		
1288	C 1481	洪武通宝	〃	2.24	0.7	0.1	1.84	0.57	0.03		
1289	C 1482	〇〇〇宝	〃	2.17	0.93	0.08	1.78	0.73	0.05		
1290	C 1483	熙寧元宝	〃	2.2	0.92	0.08	1.86	0.7	0.05		
1291	C 1484	判読不能	〃	—	—	—	—	—	—		計測不可能
1292	C 1485	至道元宝	〃	2.4	0.74	0.1	1.68	0.54	0.03		
1293	C 1486	洪武通宝	〃	2.22	0.7	0.12	1.86	0.56	0.05		
1294	C 1487	元祐通宝	〃	2.38	0.85	0.12	1.89	0.695	0.05		
1295	C 1488	無文銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.75	—		
1296	C 1489	天禧通宝	〃	2.23	0.78	0.07	2.0	0.74	0.03		
1297	C 1490	無文銭	〃	2.3	—	0.06	—	0.68	—		
1298	C 1491	祥符元宝	〃	2.2	—	0.1	1.8	—	0.05		
1299	C 1492	紹熙元宝	〃	2.38	0.8	0.12	1.9	0.64	0.03		背に「四」の文字有
1300	C 1493	洪武通宝	〃	2.23	0.7	0.13	1.85	0.58	0.03		
1301	C 1494	〃	〃	2.2	0.76	0.1	1.78	0.58	0.02		
1302	C 1495	〃	〃	2.22	0.7	0.14	1.9	0.6	0.03		
1303	C 1496	無文銭	〃	2.16	—	0.08	—	0.64	—		
1304	C 1497	〃	〃	2.2	—	0.09	—	0.59	—		
1305	C 1498	祥符元宝	〃	2.14	0.79	0.07	1.58	0.63	0.03		
1306	C 1499	洪武通宝	〃	2.24	0.7	0.13	1.87	0.58	0.03		
1307	C 1500	無文銭	〃	2.15	—	0.1	—	0.8	—		
1308	C 1501	洪武通宝	〃	2.2	0.67	0.15	1.86	0.57	0.03		
1309	C 1502	無文銭	〃	2.24	—	0.1	—	0.68	—		

1310	C 1503	皇宋通宝	G45 SP 10 フク土	2.2	0.85	0.08	1.83	0.68	0.05		
1311	C 1504	洪武通宝	〃	2.26	0.71	0.13	1.86	0.68	0.02		
1312	C 1505	〃	〃	2.2	0.76	0.1	1.84	0.6	0.03		
1313	C 1506	無文銭	〃	2.27	—	0.08	—	0.66	—		
1314	C 1507	開元通宝	〃	2.36	0.8	0.1	1.98	0.7	0.03		
1315	C 1508	無文銭	〃	2.34	—	0.09	—	0.74	—		
1316	C 1509	〃	〃	2.2	—	0.07	—	0.66	—		
1317	C 1510	〃	〃	2.24	—	0.1	—	0.64	—		
1318	C 1511	判読不能	〃	2.3	0.8	0.1	1.74	0.68	0.03		
1319	C 1512	無文銭	〃	2.14	—	0.08	—	0.68	—		
1320	C 1513	洪武通宝	〃	2.17	0.7	0.12	1.84	0.54	0.02		
1321	C 1514	無文銭	〃	2.24	—	0.095	—	0.62	—		
1322	C 1515	判読不能	〃	2.25	—	0.13	1.84	0.6	0.06		
1323	C 1516	洪武通宝	〃	2.26	0.7	0.11	1.85	0.6	0.01		
1324	C 1517	紹聖元宝	〃	2.3	0.78	0.08	1.85	0.6	0.05		
1325	C 1518	元祐通宝	〃	2.2	0.86	0.1	1.78	0.65	0.03		
1326	C 1519	無文銭	〃	2.3	—	0.1	—	0.6	—		
1327	C 1520	洪武通宝	〃	2.18	0.74	0.1	1.93	0.64	0.03		
1328	C 1521	皇宋通宝	〃	2.44	0.82	0.1	1.96	0.66	0.03		
1329	C 1522	無文銭	〃	2.2	—	0.095	—	0.67	—		
1330	C 1523	〃	〃	2.24	—	0.1	—	0.7	—		
1331	C 1524	洪武通宝	〃	2.26	0.76	0.1	1.88	0.58	0.02		
1332	C 1525	無文銭	〃	2.3	—	0.08	—	0.6	—		
1333	C 1526	洪武通宝	〃	2.2	0.76	0.14	1.8	0.6	0.03		
1334	C 1527	〃	〃	2.26	0.78	0.14	1.83	0.6	0.01		
1335	C 1528	〃	〃	2.2	0.7	0.1	1.84	0.56	0.03		
1336	C 1529	〃	〃	2.25	0.7	0.1	1.8	0.6	0.03		
1337	C 1530	〃	〃	2.17	0.76	0.1	1.85	0.6	0.03		
1338	C 1531	無文銭	〃	2.16	—	0.08	—	0.62	—		
1339	C 1532	祥符通宝	〃	2.2	0.73	0.07	1.64	0.58	0.02		
1340	C 1533	元祐通宝	〃	2.3	0.77	0.12	1.8	0.64	0.03		
1341	C 1534	無文銭	〃	2.1	—	0.08	—	0.8	—		
1342	C 1535	〃	〃	2.33	—	0.1	—	0.6	—		
1343	C 1536	祥符元宝	〃	2.27	0.78	0.1	1.8	0.7	0.03		
1344	C 1537	無文銭	〃	2.15	—	0.1	—	0.65	—		
1345	C 1538	祥符通宝	〃	2.33	0.79	0.08	1.85	0.65	0.02		
1346	C 1539	洪武通宝	〃	2.27	0.7	0.14	1.88	0.6	0.03		
1347	C 1540	開元通宝	〃	2.4	0.8	0.1	2.07	0.66	0.03		
1348	C 1541	洪武通宝	〃	2.26	0.65	0.1	1.83	0.56	0.03		
1349	C 1542	無文銭	〃	2.25	—	0.08	—	0.57	—		
1350	C 1543	洪武通宝	〃	2.17	0.71	0.1	1.83	0.6	0.02		
1351	C 1544	熙寧元宝	〃	2.34	0.8	0.1	1.87	0.64	0.05		
1352	C 1545	洪武通宝	〃	2.2	0.74	0.1	1.8	0.6	0.01		
1353	C 1546	開元通宝	〃	2.36	0.8	0.1	2.06	0.68	0.02		
1354	C 1547	判読不能	〃	2.21	0.78	0.06	1.77	0.6	0.08		
1355	C 1548	嘉祐元宝	〃	2.4	0.9	0.1	1.93	0.72	0.05		
1356	C 1549	洪武通宝	〃	2.14	0.78	0.1	1.8	0.64	0.02		
1357	C 1550	開元通宝	〃	2.34	0.78	0.1	1.9	0.7	0.03		
1358	C 1551	洪武通宝	〃	2.18	0.74	0.1	1.86	0.6	0.02		
1359	C 1552	祥符元宝	〃	2.24	0.74	0.085	1.75	0.64	0.02		
1360	C 1553	〇〇〇宝	〃	2.26	0.76	0.1	1.85	0.64	0.03		
1361	C 1554	洪武通宝	〃	2.22	0.7	0.12	1.75	0.55	0.01		
1362	C 1555	判読不能	〃	2.3	0.9	0.08	1.88	0.61	0.03		
1363	C 1556	咸平元宝	〃	2.36	0.73	0.09	1.8	0.6	0.02		
1364	C 1557	洪武通宝	〃	2.3	0.7	0.13	1.93	0.6	0.03		
1365	C 1558	〃	〃	2.1	0.7	0.1	1.8	0.65	0.02		

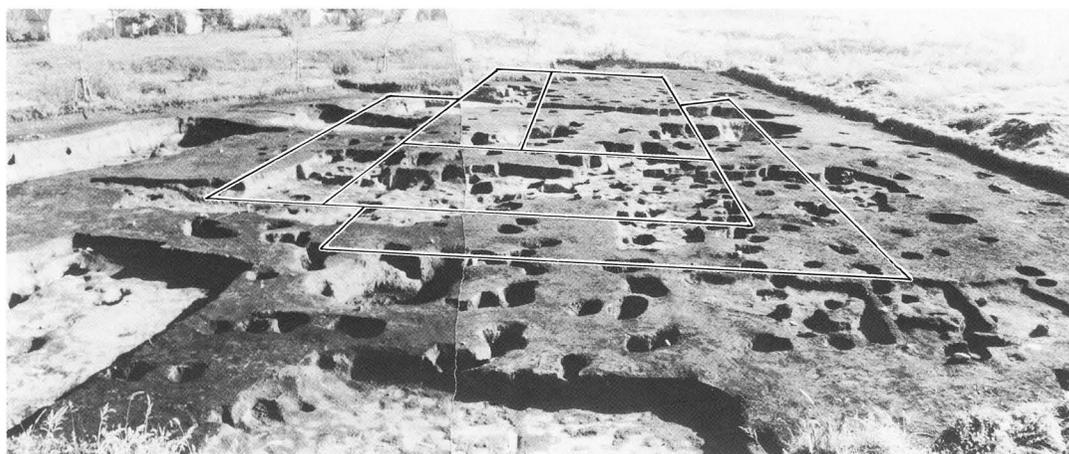
1366	C 1559	洪武通宝	G45 SP10 フク土	2.15	0.7	0.14	1.8	0.59	0.02		
1367	C 1560	"	"	2.13	0.74	0.1	1.83	0.59	0.03		
1368	C 1561	"	"	2.17	0.74	0.08	1.76	0.6	0.02		
1369	C 1562	皇宋通宝	"	2.36	0.8	0.09	2.0	0.64	0.01		
1370	C 1563	祥符元宝	"	2.24	0.76	0.1	1.9	0.63	0.02		
1371	C 1564	洪武通宝	"	2.18	0.79	0.1	1.84	0.6	0.02		
1372	C 1565	"	"	2.22	0.74	0.13	1.94	0.58	0.01		
1373	C 1566	"	"	2.2	0.74	0.13	1.9	0.58	0.02		
1374	C 1567	"	"	2.15	0.7	0.12	1.83	0.6	0.03		
1375	C 1568	"	"	2.2	0.76	0.1	1.82	0.6	0.01		
1376	C 1569	無文銭	"	2.2	—	0.1	—	0.6	—		
1377	C 1570	祥符元宝	"	2.39	0.75	0.11	1.86	0.64	0.03		
1378	C 1571	天禧通宝	"	2.25	0.78	0.09	1.84	0.68	0.03		
1379	C 1572	紹聖元宝	"	2.4	0.73	0.1	1.87	0.6	0.03		
1380	C 1573	無文銭	"	2.15	—	0.08	—	0.6	—		
1381	C 1574	大觀通宝	"	2.38	0.74	0.09	2.0	0.6	0.03		
1382	C 1575	朝鮮通宝	"	2.36	0.7	0.1	2.0	0.6	0.03		
1383	C 1576	〇〇元宝	"	2.2	0.77	0.1	1.73	0.63	0.03		
1384	C 1577	洪武通宝	"	2.3	0.74	0.14	1.97	0.67	0.03		
1385	C 1578	紹聖元宝	"	2.19	0.8	0.1	1.75	0.7	0.03		
1386	C 1579	洪武通宝	"	2.2	0.75	0.12	1.9	0.6	0.01		
1387	C 1580	"	"	2.2	—	0.1	1.87	—	0.02		
1388	C 1581	"	"	2.18	0.7	0.13	1.84	0.6	0.01		
1389	C 1582	祥符元宝	"	2.38	0.77	0.1	1.9	0.63	0.03		
1390	C 1583	開元通宝	"	2.2	0.75	0.1	1.9	0.6	0.02		
1391	C 1584	洪武通宝	"	2.2	0.76	0.12	1.8	0.58	0.03		
1392	C 1585	朝鮮通宝	"	2.28	0.7	0.16	2.0	0.54	0.05		
1393	C 1586	洪武通宝	"	2.16	0.8	0.1	1.85	0.63	0.03		
1394	C 1587	"	"	2.14	0.75	0.08	1.77	0.6	0.03		
1395	C 1588	熙寧元宝	"	2.36	0.74	0.08	1.72	0.6	0.03		
1396	C 1589	洪武通宝	"	2.19	0.74	0.1	1.82	0.58	0.03		
1397	C 1590	祥符元宝	"	2.3	0.8	0.1	1.86	0.68	0.03		
1398	C 1591	天聖元宝	"	2.42	0.86	0.12	2.0	0.74	0.02		
1399	C 1592	皇宋通宝	"	2.35	0.83	0.1	1.97	0.7	0.02		
1400	C 1593	洪武通宝	"	2.12	0.7	0.1	1.74	0.58	0.02		
1401	C 1594	無文銭	"	2.2	—	0.1	—	0.7	—		
1402	C 1595	淳祐元宝	"	2.2	0.8	0.12	1.94	0.67	0.02		
1403	C 1596	洪武通宝	"	2.23	0.7	0.12	1.8	0.6	0.03		
1404	C 1597	"	"	2.18	0.76	0.12	1.8	0.6	0.03		
1405	C 1598	政和通宝	"	2.44	0.74	0.13	2.03	0.62	0.05		
1406	C 1599	洪武通宝	"	2.3	0.74	0.1	1.93	0.6	0.02		
1407	C 1600	"	"	2.24	0.72	0.12	1.87	0.62	0.03		
1408	C 1601	大觀通宝	"	2.37	0.82	0.14	2.06	0.63	0.05		
1409	C 1602	洪武通宝	"	2.2	0.74	0.1	1.84	0.6	0.03		
1410	C 1603	無文銭	"	2.26	—	0.1	—	0.66	—		
昭和59年度北館出土銭貨計測集計表											
1411	C 5	無文銭	G41 ■上	2.33	—	0.1	—	0.61	—		
1412	C 6	元豊通宝	G41 ST192 フク土	2.20	0.83	0.13	1.88	0.64	0.05		
1413	C 7	元〇通宝	"	2.23	0.715	0.09	1.835	0.63	0.05		
1414	C 12	嘉祐元宝	"	2.46	0.9	0.1	2.01	0.765	0.05		
1415	C 13	洪武通宝	H41 ST192 フク土	2.12	0.56	0.14	1.7	0.58	0.03		
1416	C 14	永樂通宝	"	2.44	0.74	0.115	2.0	0.565	0.03		
1417	C 15	洪武〇〇	G41 SH10 フク土	—	—	0.12	—	—	—		
1418	C 16	祥符通宝	H41 ST192 フク土	2.48	0.75	0.13	1.99	0.66	0.05		
1419	C 17	祥符元宝	"	2.49	0.71	0.11	1.8	0.585	0.05		
1420	C 18	無文銭	F40 SH10 フク土	1.58	—	0.055	—	0.79	—		

写 真 图 版 (P L .)

P.L.1 児童の発掘調査教室



PL. 2 発掘区と掘立柱建物跡



(1) A区全景 (W→E)と
SB30全景 (W→E)

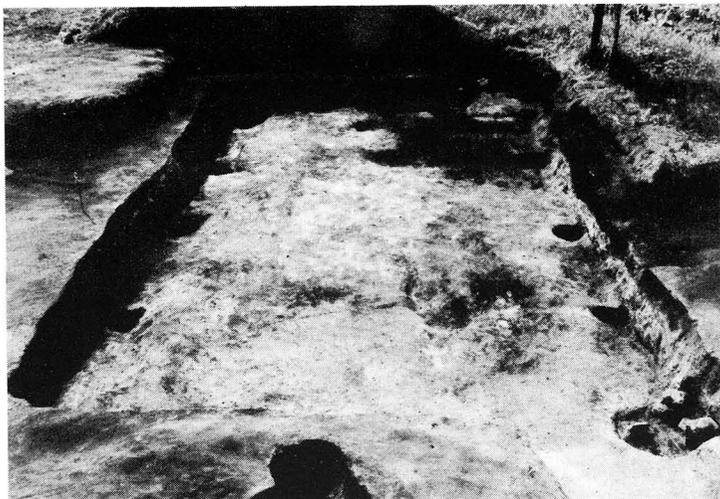


(2) B区全景 (E→W)



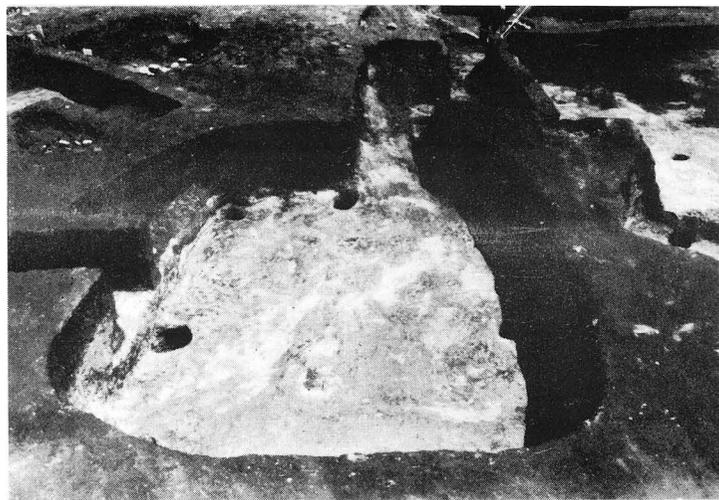
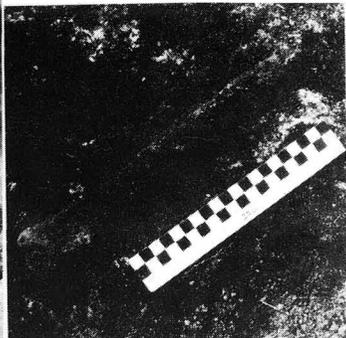
(3) SB32・SB58 (W→E)

P L.3 竪穴遺構(1)



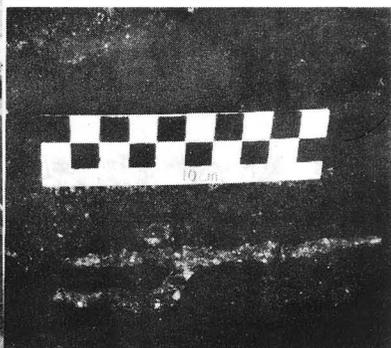
(1) S T 192 (N → S)

(2) S T 192 出土鉄製品



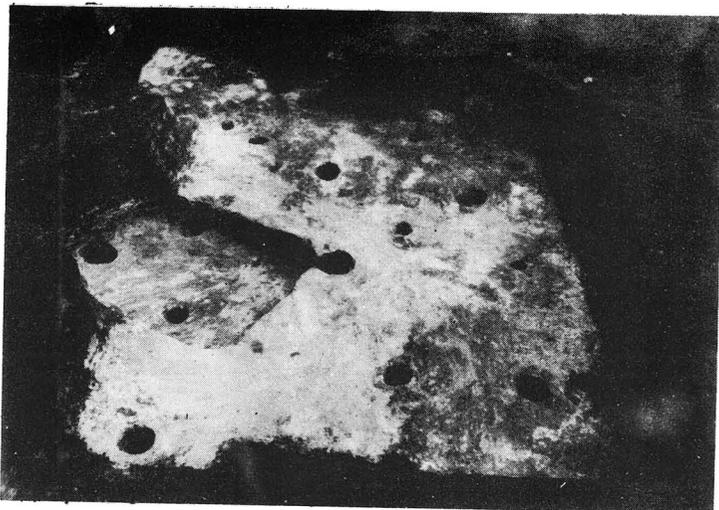
(3) S T 200 (W → E)

(4) S T 200 出土鉄製品

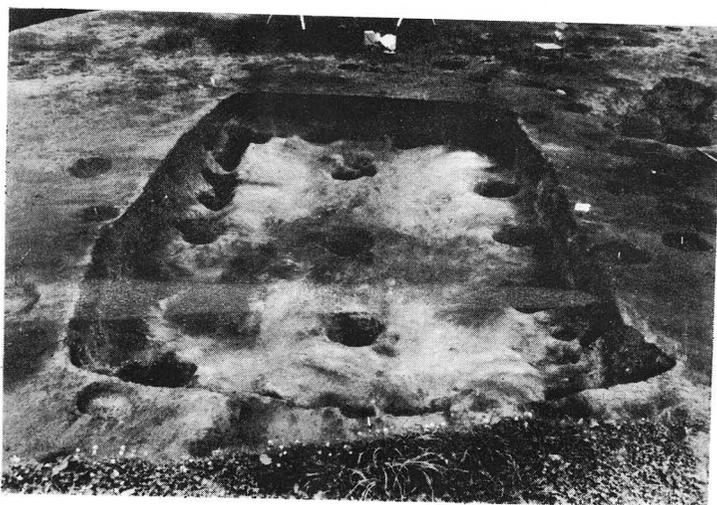


(5) S T 201 (W → E)

PL.4 竖穴遺構(Ⅱ)



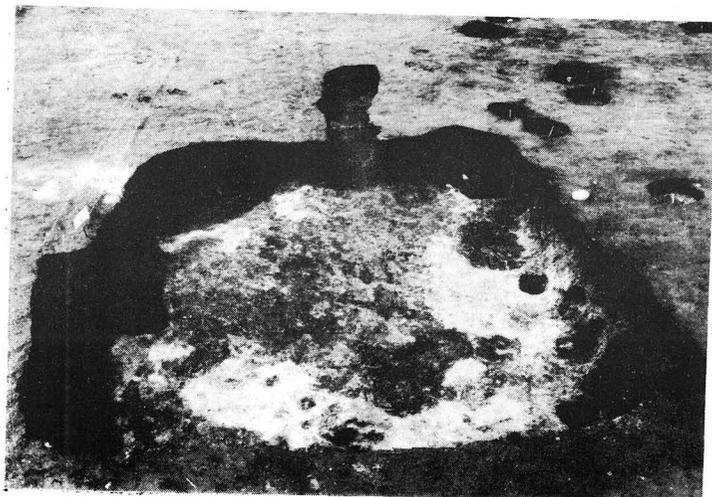
(1) S T 202 (W → E)



(2) S T 203 (W → E)

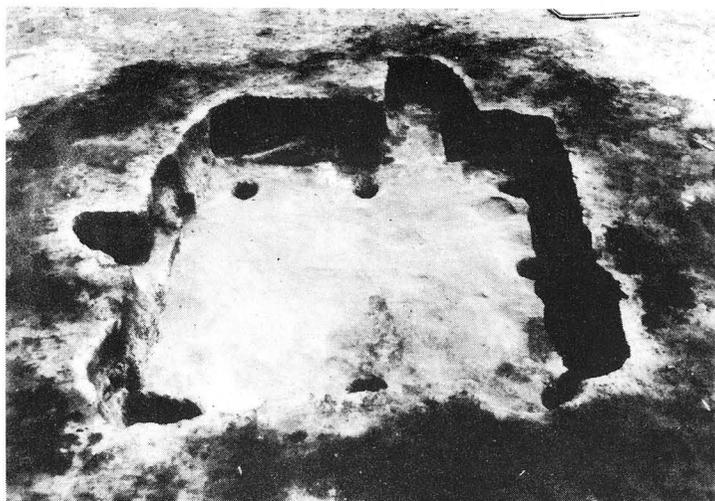


(3) S T 203 出土鉄製品

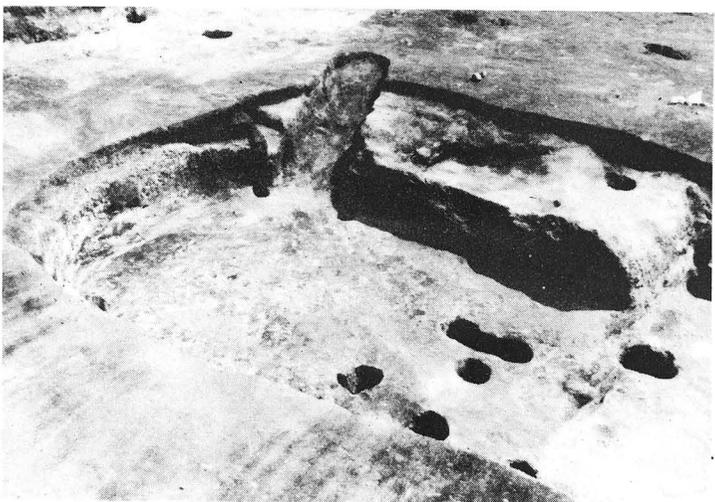


(4) S T 204 (S → N)

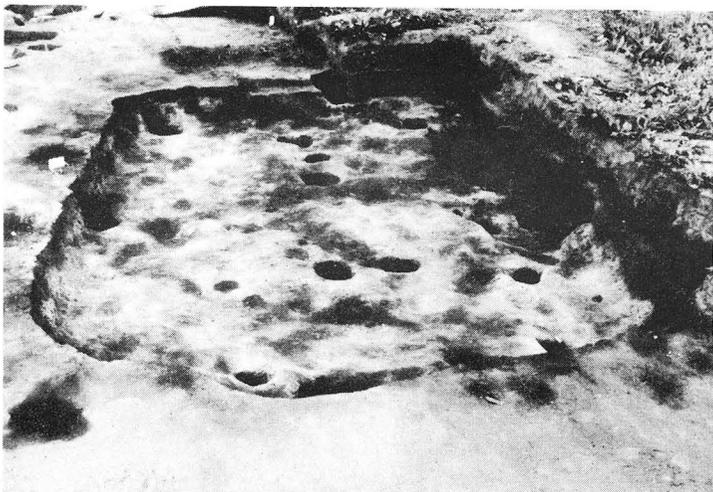
PL.5 豎穴遺構(Ⅲ)



(1) S T 205 (N → S)



(2) S T 206 (N → S)

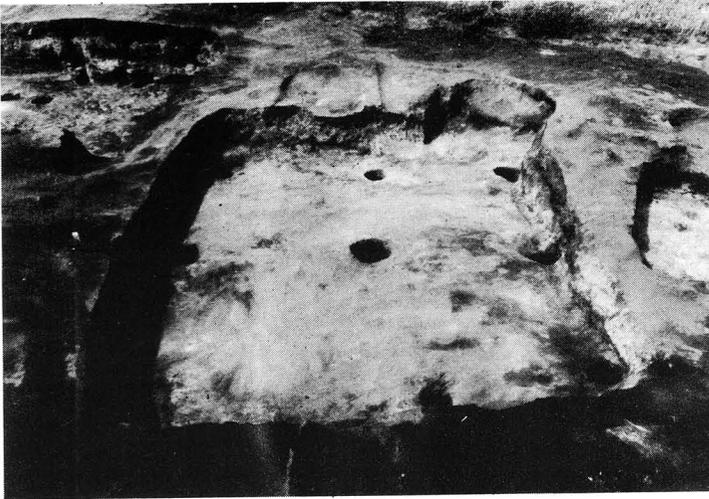


(3) S T 207 (N → S)

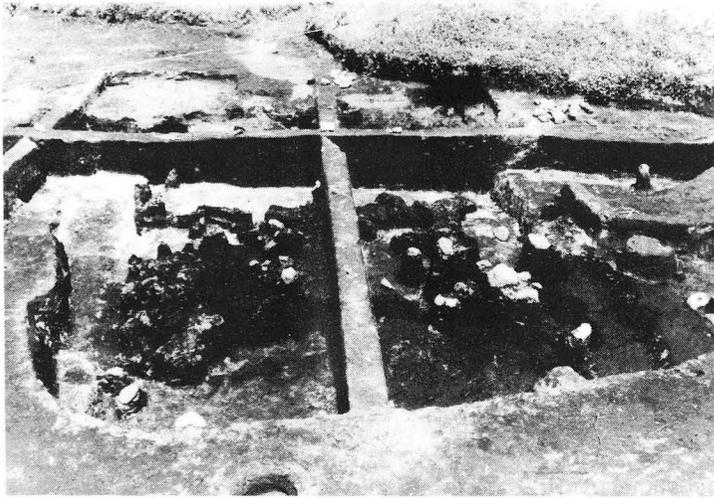
(4) S T 207 出土錢貨



PL.6 竖穴遺構(Ⅳ)



(1) S T 208 (S → N)



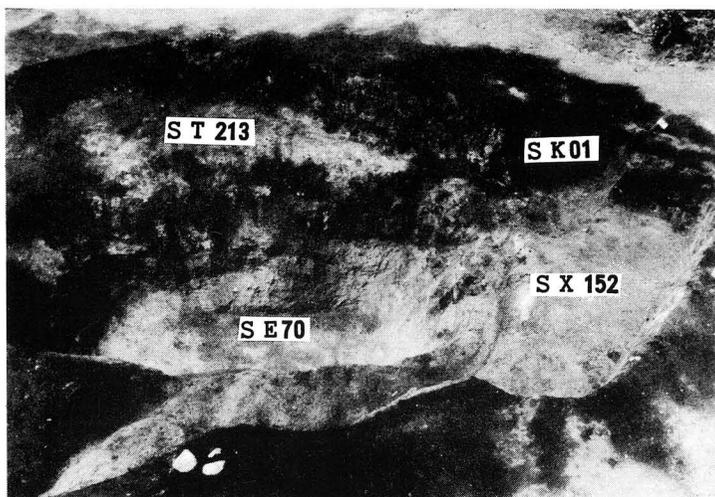
(2) S T 210 遺物出土狀態

(3) S T 210 出土鑄型

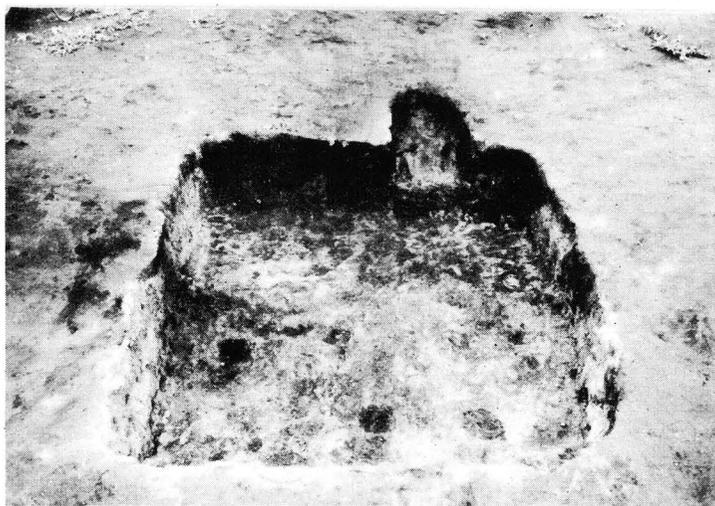


(4) S T 210 (S → N)

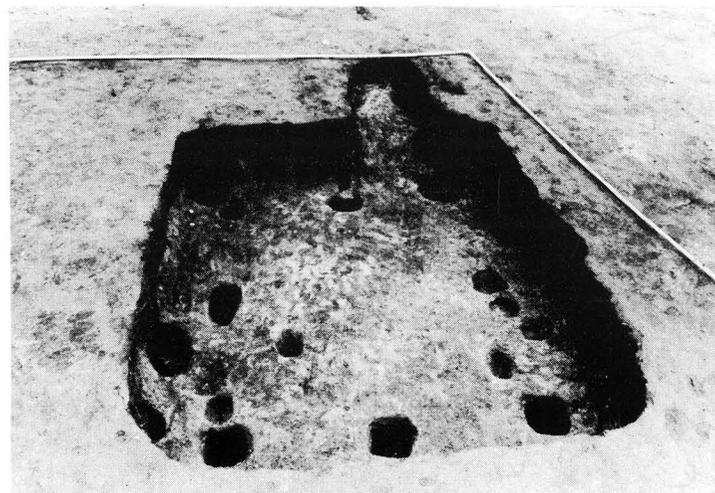
PL.7 竖穴遺構(V)・他



(1) S T 213・S X 152
S E 70・S K 01等
(E→W)

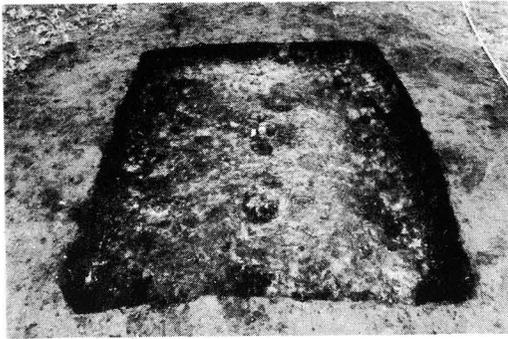


(2) S T 214 (N→S)

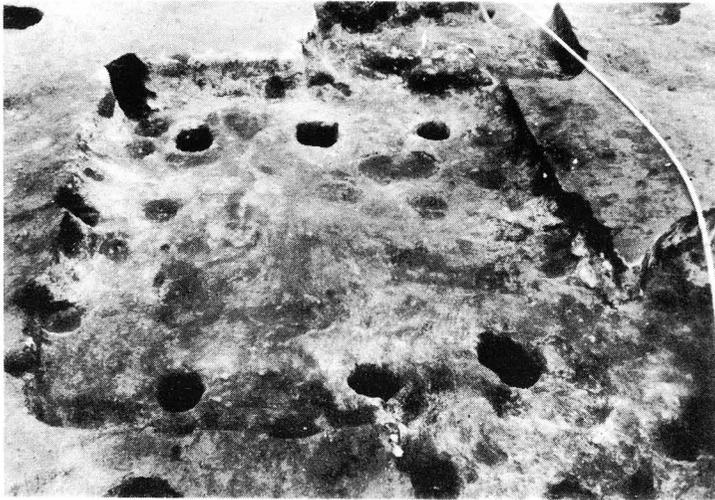


(3) S T 215 (W→E)

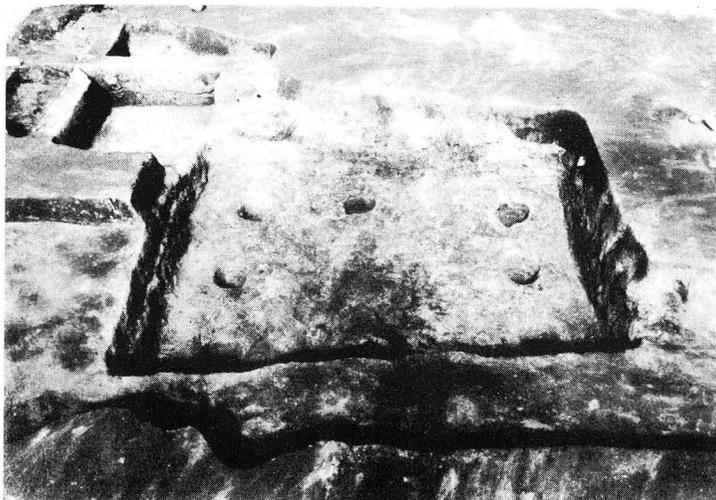
PL.8 竖穴遺構(V)



(1) S T 216 (S → N)
柱穴掘り下げ前

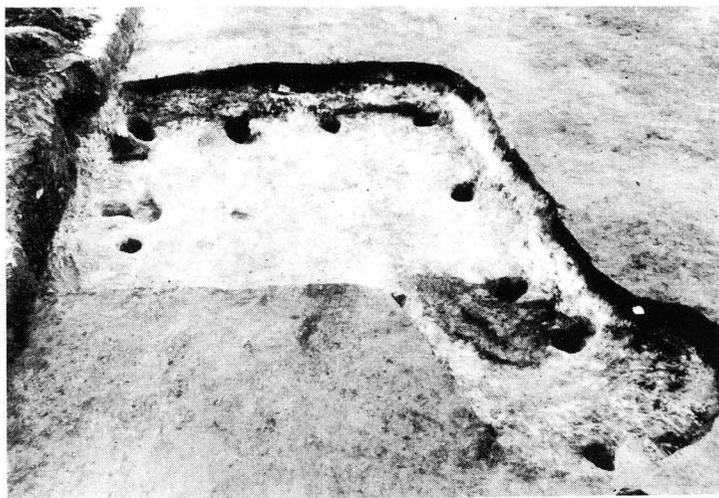


(2) S T 217 (W → E)

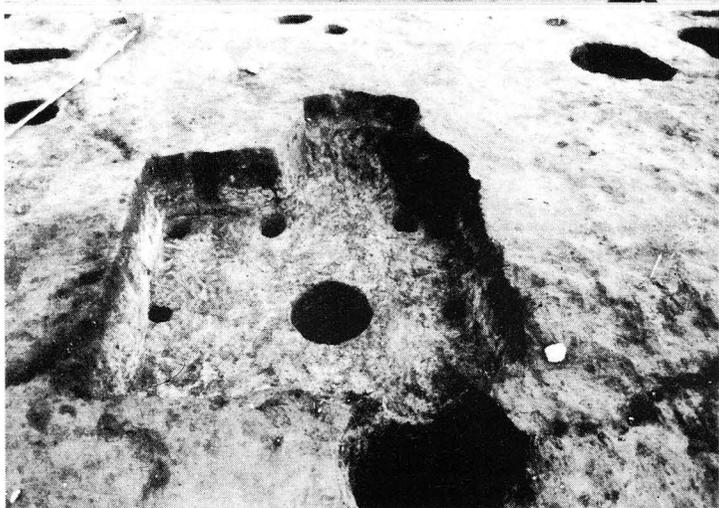


(3) S T 218 (S → N)

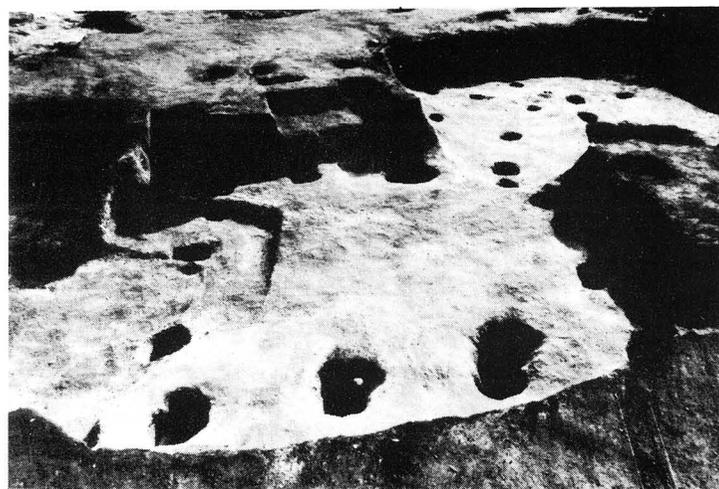
PL.9 豎穴遺構(VI)



(1) ST 234 (E→W)

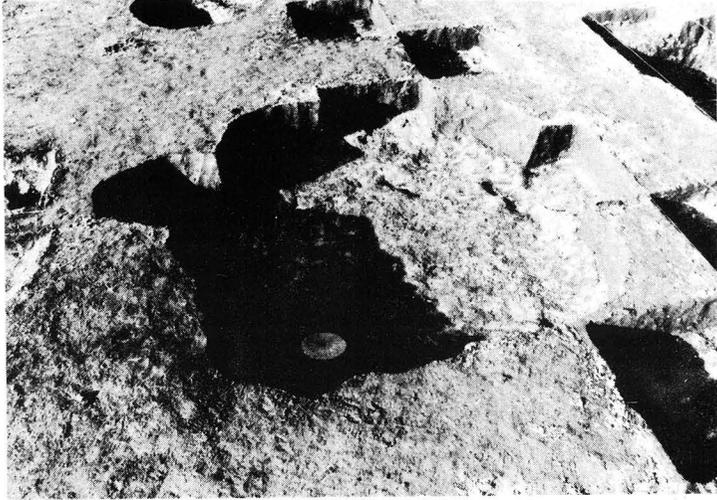


(2) ST 228 (W→E)



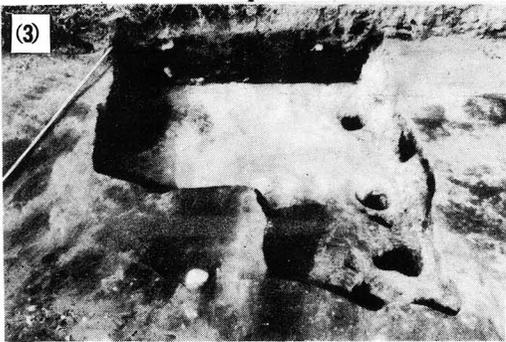
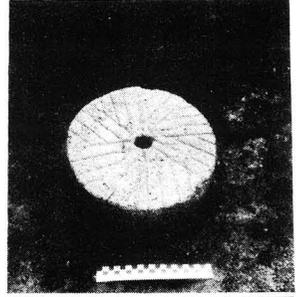
(3) SX 155 • ST 221
(N→S)

PL.10 竖穴遺構(VII)

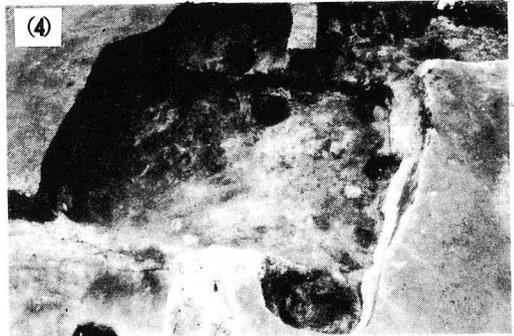


(1) ST 240 (S→N)

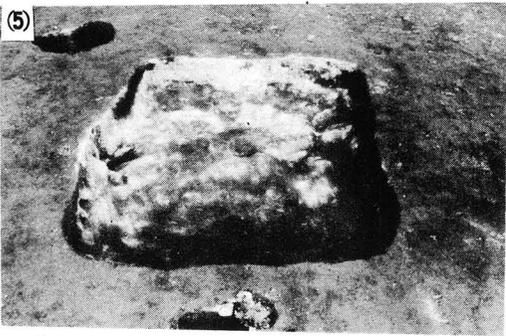
(2) ST 240 出土石臼



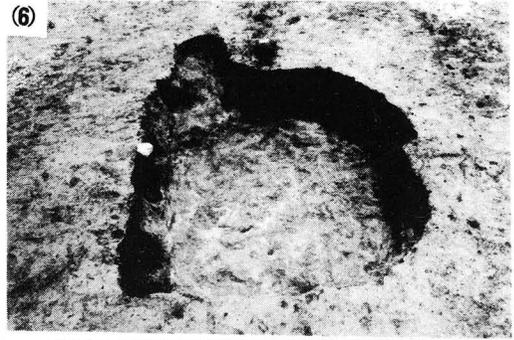
(3)



(4)



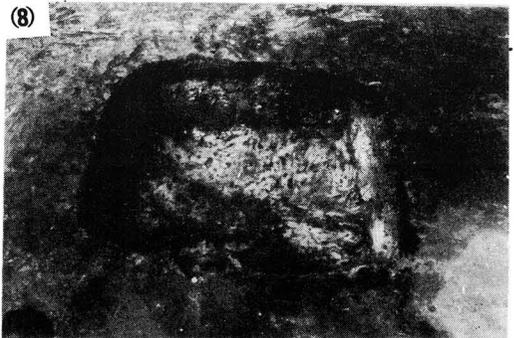
(5)



(6)



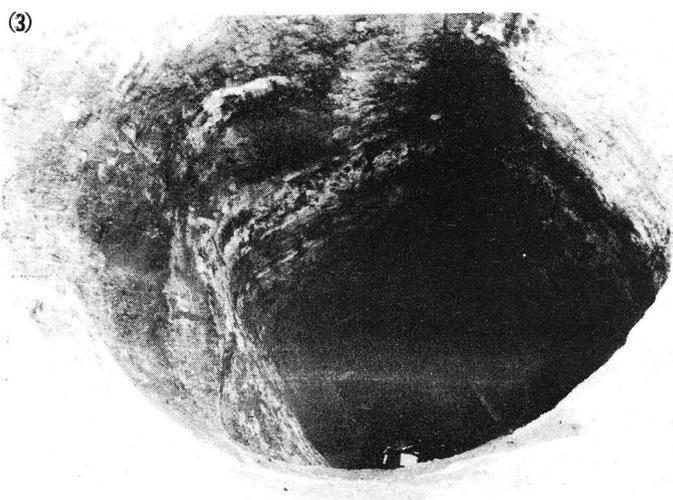
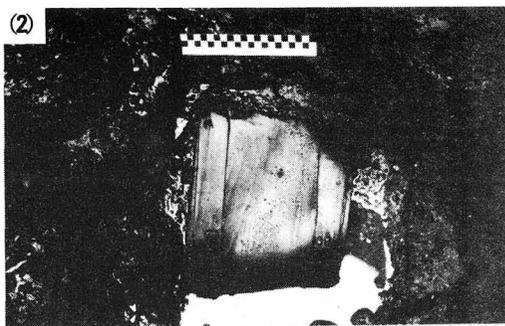
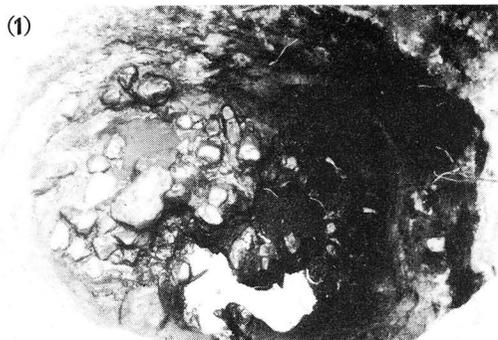
(7)



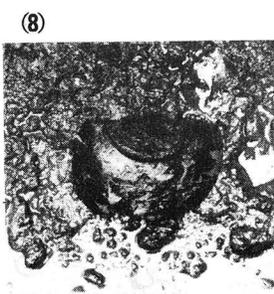
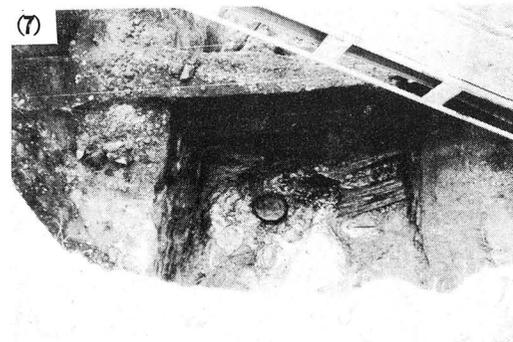
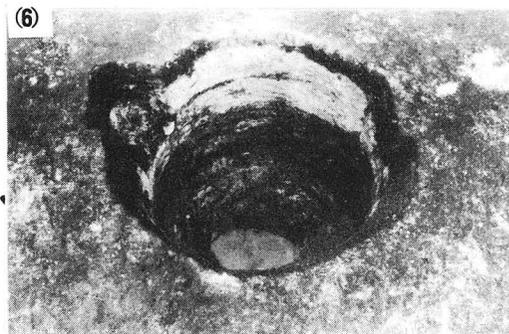
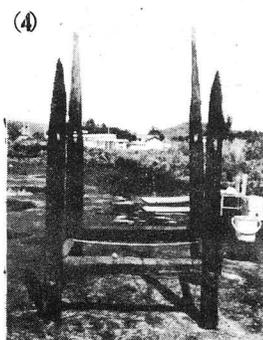
(8)

(3) ST 224 (S→N) (4) ST 226 (E→W) (5) ST 231 (W→E)
 (6) ST 227 (N→S) (7) ST 232 A・ST 232 B (N→S) (8) ST 223 (N→S)

PL.11 井戸跡①



- (1) S E71集石状態
- (2) S E71出土遺物
- (3) S E72完掘
- (4) S E72隅柱・横棧



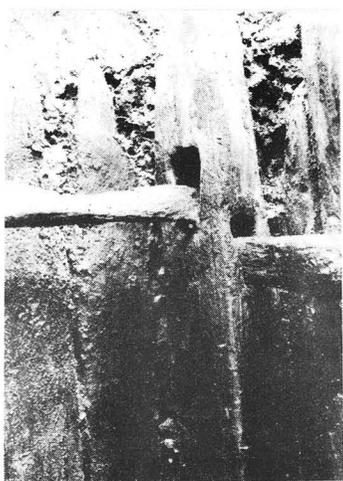
- (5) S E74完掘
- (6) S E77完掘
- (7) S E79木製品出土状態
- (8) S E79出土漆器椀

P.L.12 井戸跡(Ⅰ)

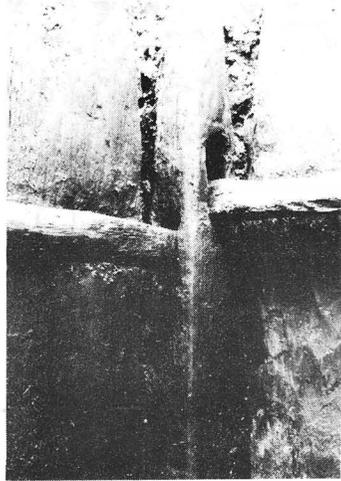


(1) S E 73木枠出土状況

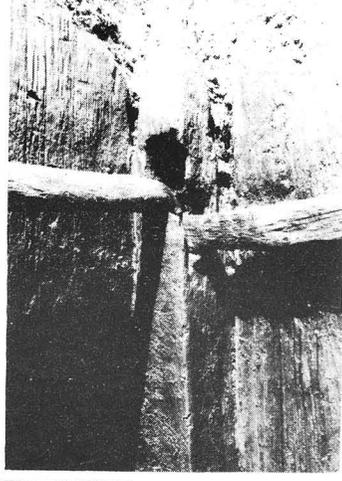
(2) S E 73隅柱(南東)

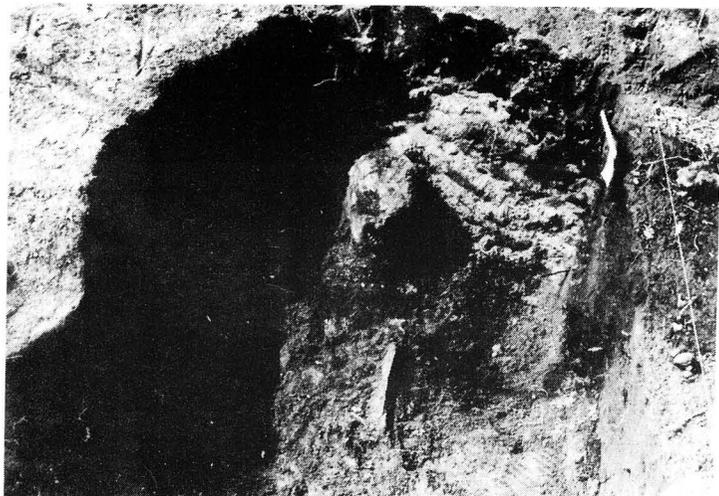


(3) S E 73隅柱(南西)



(4) S E 73隅柱(北西)





(1) SK01全景

(2) SK01人骨



(3) 人骨の取り上げ(森本先生)

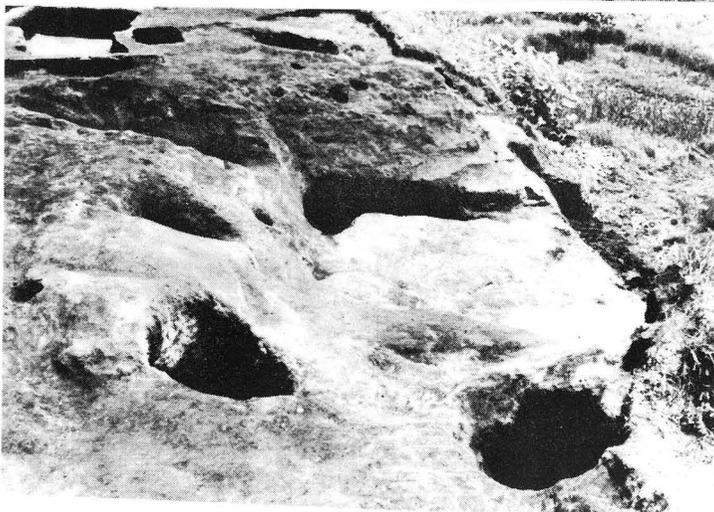


(4) 取り上げた人骨頭部

PL.14 樹形遺構



(1) 樹形遺構から西館を眺む

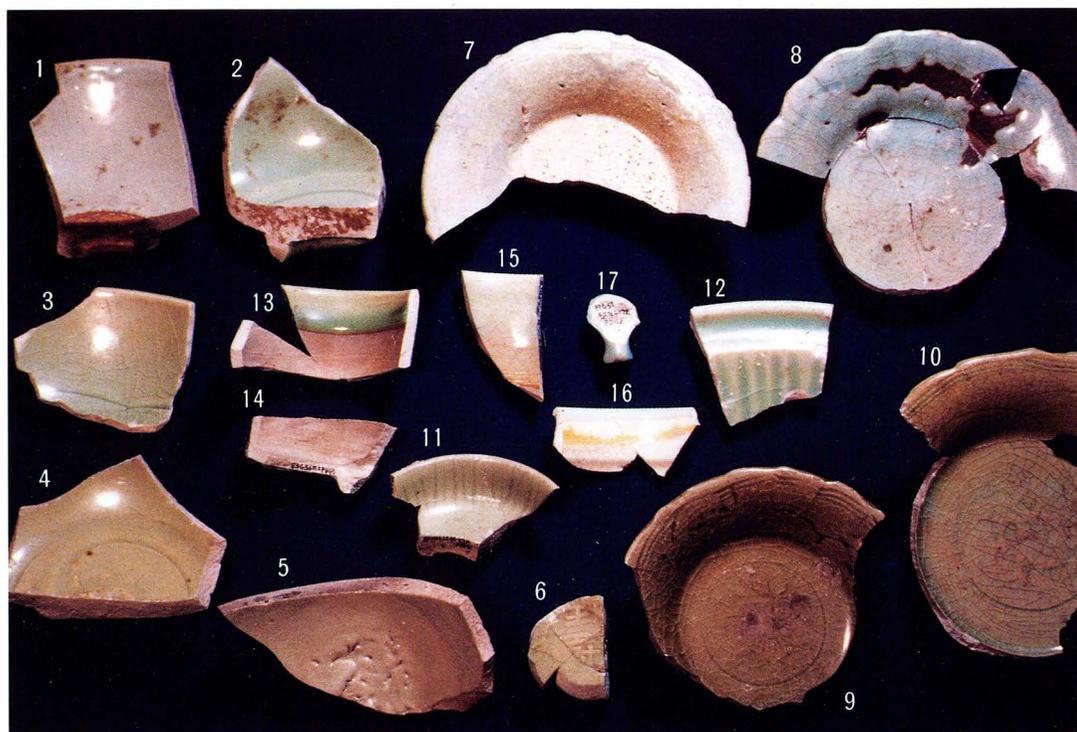


(2) S B 57門跡
(N → S)



(3) 樹形遺構
堀から北館方向を眺む

PL.15 青磁



PL.16 白磁・染付





PL.18 唐津・土鈴・埴埴





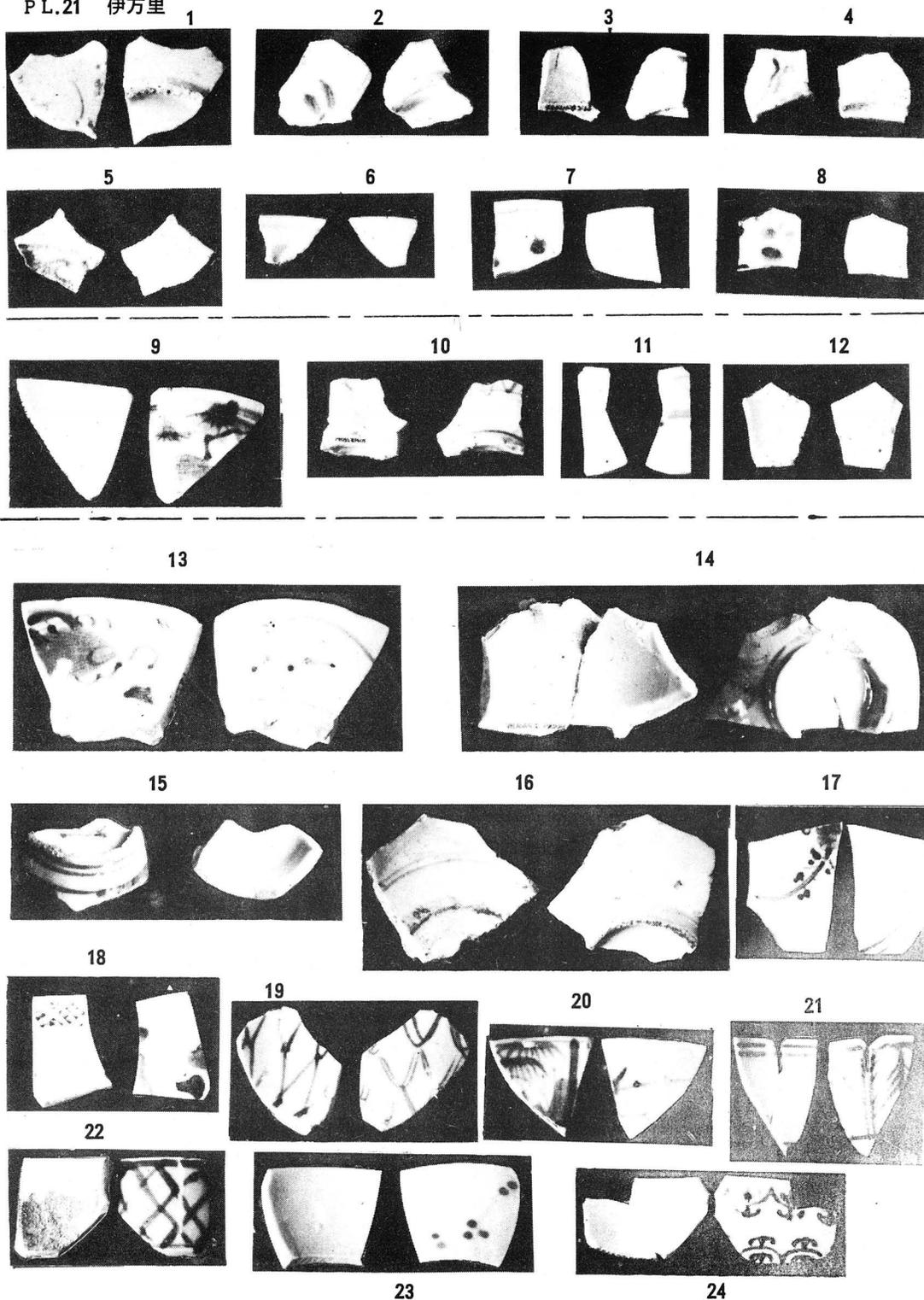
PL.19
中国褐釉壺
(呂宋壺)

銅製品





PL.21 伊万里

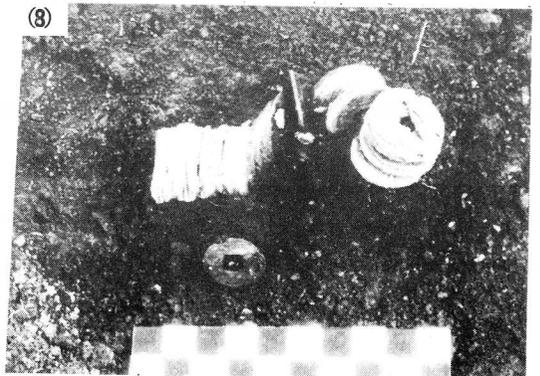
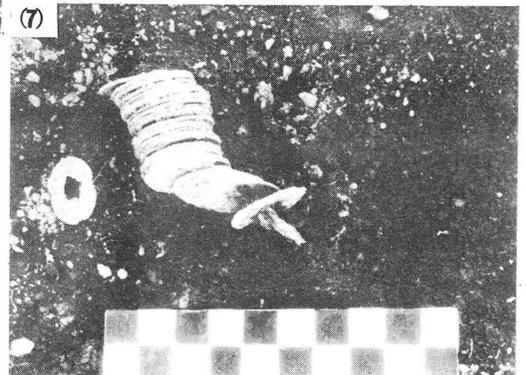
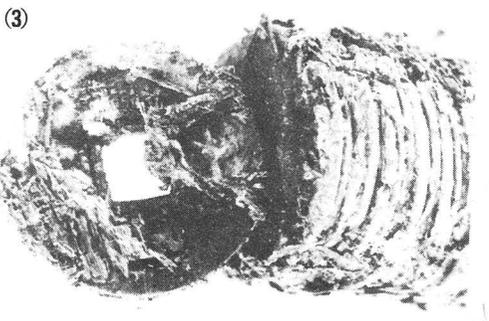
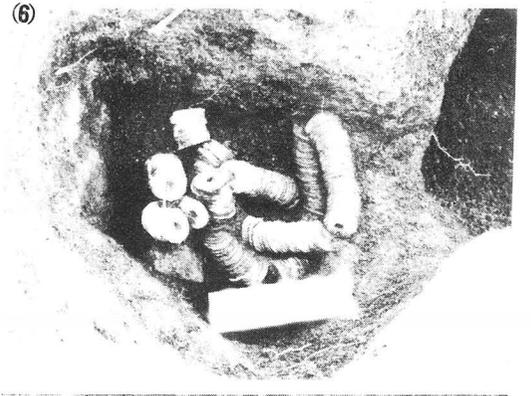
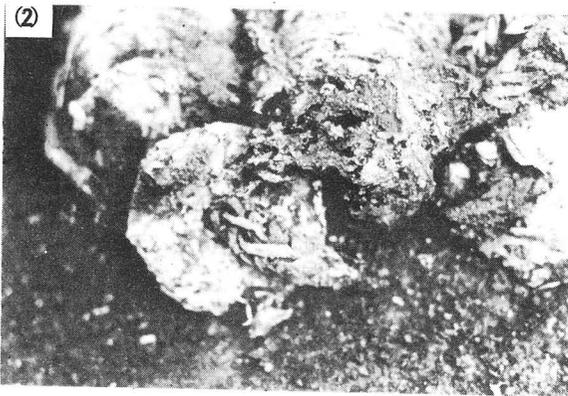
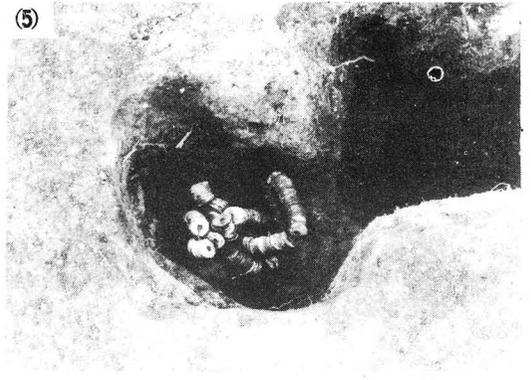
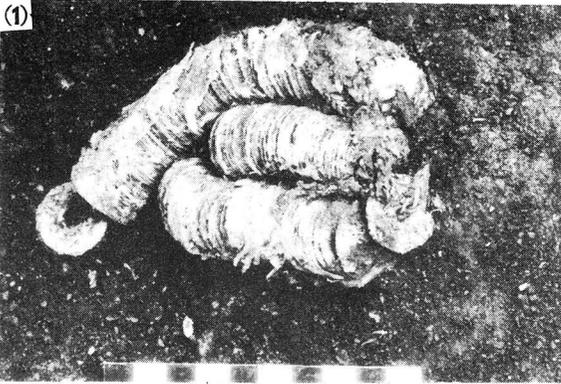


上段：17世紀前半

中段：17世紀後半

下段：18世紀

PL.22 錢貨出土狀況



(1)~(4) S T 207 出土錢貨・麻紐

(5)・(6) S P 10 出土錢貨

(7)・(8) G 43区第Ⅲ層出土錢貨

昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書

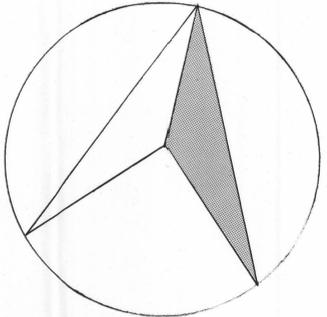
「浪岡城跡Ⅶ」

昭和60年3月25日印刷

昭和60年3月30日発行

発行 浪岡町教育委員会

印刷 鎌田綜合印刷





付 図 の (4)



